



凡例

一、今卷依用の底本は經集、天宮事經の二經とともに巴利聖典出版協會(Pali Text Society)本なり。

一、本文行頭に羅馬數字を以て底本の頁數を附し、彼此參看に便じたり。

一、文中「」印を以て括せる語又は句は譯者の挿入にして六號活字、「」印を以て括せるは譯者の註記なり。

一、文中：乃至：又は⋮⋮⋮とあるは、底本に然く省略せるものなり。

一、文字の右肩に附せる白拔羅馬數字は註の對照番號にして註の文は各經末に之を出したり。

一、固有名詞の中、音譯の漢譯經典に存するものは可及的に之を探り、巴利原音の假名を附せり。但し漢譯は主にサンスクリットよりの翻譯なれば、その音譯は必しも巴利語のそれと對應すとは言ふべからず。

一、假名字を以て表せる發音も亦巴利語の正確なる音を寫せるものとは言ひ難し。従つて漢字假名兩者いづれの表音もその巴利原音を知るためには、卷末索隱中の原語に依るを要す。

一、索隱は發音索隱と漢字索隱の二種とし、前者は假名字、原語羅馬字、漢字の順に、後者は漢字、原語羅馬字の順に配し、總て五十音順に列位す。而して漢字索隱中には固有名詞の他に術語をも合入したり。

一、經集の註記及び對照表に引用せる巴利文獻の略字表は左の如し。

A. = Āṅguttara-Nikāya

DhpA. = Dhammapadaṭṭhakathā

A.A. = Manoratha-pūrāṇi

DhsA. = Athasālinī

AP. = Apadāna

It. = Itivuttaka

CNd. = Cūla-Niddeśa

J. = Jātaka

D. = Dīgha-Nikāya

Khp. = Khuddaka-pāṭha

DA. = Sumanāgala-vilāśinī

KhpA. = Paramattha-jotikā I

Dhp. = Dhammapada

M. = Majjhima-Nikāya

M.A. = Papañca-sūdanī	Sn. = Suttanipāta
Mil. = Miliñda-pañha	SnA. = Paramatthajotikā II
MNd. = Mahā-Niddeśa	Thag. = Theragāthā
MNdA. = Saddhammappajotikā	Thīg. = Therigāthā
Netti. = Nettippakarana	Ud. = Udāna
P̄s. = Patisambhidā-magga	UdA. = Udānatthakathā
P̄sA. = Saddhammappakāśinī	V. = Vinaya
PV. = Peta-vatthu	V.A. = Samantapāsādikā
S. = Sañyutta-Nikāya	VibhA. = Sammohavinodanī
SA = Sarathappakāśinī	Vm. = Visuddhi-magga
Kv. = Kathā-vatthu	

凡

例

四

大 小部經典二 目 集

經

集

水野弘元譯

本集は五品七十經(第五品の序偈と結偈とを加ふれば七十二經)千百四十九偈(一六三偈が三つあるから實際は千百五十一偈)から成る比較的少量の偈經である。然し、偈經と言つても法句經や長老偈等の如く偈のみの集成ではなく第一品中の四經第二品中の五經、第三品中の八經、都合十七經には偈の他に長行(散文)をも含み其等は經首に如是我聞を有して一般の經と同一形式を保つてゐる。爾餘の五十五經は全く偈のみから成つて居るが其等は法句經に見る如く、德目に隨つて諸經中から一偈一偈を集録して出來上つたものは割合に尠く多くは一經中の各偈が聯絡を有し、一つの場合に說法せられたるものなることを示してゐる。

巴利三藏中には幾千といふ經が存するのに、本集のみを何故に「經集」と呼ぶであらうかと言ふに、他の經の集成にはそれぞれ特定の名を附すべき特徴があるけれども本集には斯る特徴がない爲に單に「經集」と名づけられたらしい。現に本書の註釋書の序偈に佛音三藏は他に特別なる名稱の相なきが故に「經集」といふ斯る名稱を得た

りと言つてゐるのである。

本集は斯く特別な名稱が附せられない雑多な經の集成であつて、經集といふ名は他の部派の雜藏中には絶対に存しないものと思へる。即ち經集は南方上座部獨特のものであつて、その集成は部派分裂以後に屬するやうである。それは本集の第四品第五品及び第一品第三經の各偈の語句的註釋たる義釋(ニッヂーハ)が巴利藏獨特のものであり、本集の集成は義釋の作製以後であることによつても知られ得る。即ち義釋が既に部派分裂後の作品と思はれる上に本集は義釋より後に集成されたと考へなければならぬからである。何となれば若し義釋が作られた時に既に現在の經集が存在したとすれば義釋は本集の第一品第一經の註釋から始むべき筈であるのに實際には本集の一部のみを本集による順序にも従はずして註釋されて居るからである。

斯く經集の現在の形への集成といふことになれば相當に後の時代に屬するけれどもその内容をなす諸經に至つてはその淵源は極めて古く、殆んど總ての經が部派分裂以前にその原形を有したものと思はれる。それは本集の各經各偈と梵文や漢譯等の他部派の文獻とを比較することによつて知られる。姉騎博士やオットー・ランケの絶大なる努力(M. Anesaki, The Sutta-Nipāta in Chinese, J.P.T.S. 1907; M. Anesaki, The Four Buddhist Āgamas in Chinese 1908, P. off; R. O. Franke, Die Suttanipāta-Gāthas mit ihnen Paralleln., ZDMG. 1909; 1910; 1912) の跡を承けて譯者が新に探し求め得たものを合して、附錄として掲げた對照表によつて知られたる如く、本集と關係ある他派の經や偈は

極めて多いのである。即ち本集七十經の中には他の部派の經と殆ど合致するものが三十一經、明かに同源に屬し又は何等かの類似關係があるものが三十經に上り重複を除けば兩者で五十七經となるのである。又本集七十經の中でその經中に他部派の文獻の相當偈が一偈も發見されない經は——明かに他派と關係ある彼岸道(波羅延)品中の相當偈が一偈も發見されない經は——明かに他派と關係ある彼岸道(波羅延)品中の相當偈のない九經を除き——僅かに一ノ八慈經、二ノ二臭穢經、二ノ八船經、二ノ一三正普行經の四經に過ぎない。又他派の文獻に於ける本集の偈との相當偈を見るに、

義足經	二三六偈	瑜伽師地論	三三偈
雜阿含經	中阿含經	三十偈	
Mahāvastu	一一偈	二八偈	
佛本行集經	八〇偈	立世阿毘曇論	
有部律類	四九偈	四分律	
法集要頌經	四六偈	二六偈	
出曜經	四四偈	一七偈	
法句經	四二偈	一五偈	

等であり、それ以下のは對照表に就いて見られたい。此等はすべて重複を除いた數であり、此等全體を合して重複を除く時は、本集の偈と相當するものが實に五百七十餘偈に上つて、本集全體千百五十偈の半數に及ぶのである。更に未發見のものを加へ、他派の文獻の現存しないものを想像する時は、恐らく本集の各經各偈は多く

他部派との關係を有するのではないかと思はれる。斯く考へる時、本集の内容自身は部派分裂以前に既にその原形を有したものと見なければならぬ。殊に本集の義品波岸道(波羅延)品の如きは、その中の偈や經名や義品波羅延の名が相應部(S.II,P.47; P.49; III, P.9; P.12) 増支部(A.I, P.133; P.134; II, P.45; III, P.399; P.401; IV, P.63f) 律藏等(V, I, P.196; U, d, P.59)に引用されて居り漢譯諸文獻にも其等の相當個所が存するから、恐らくその原形は佛在世中までも遡ることが出来るのではないかと思はれる。

更に、本集が古い淵源を有することは、本集の偈文中には普通の巴利語文法に合致しない古代吠陀語の文法が屢々使用されて居り、且う本集の思想内容や本集に現はるゝ比丘の日常生活が佛教が固定化された以前の極めて素朴的なものである點などからも知られ得るのである。

本集の諸經は斯く純朴な佛教思想を盛つたものが多い爲に、後世に至るまで法句經と並んで本集中の偈が佛教徒に愛好されたことは、註釋書類に本集中の偈がいかに屢々引用されて居るかを見ても知られ得るし、又阿育王がバブラーの勅文中に、その讀誦普及を一般の人々に懇意した七種の經典中の三種(Munigathā, Moneyasūte, Upatissa^u pasine)が本集中(一ノ一二三ノ一一四ノ一六)に存する事實を見ても、本集の諸經が珍重せられ廣く行はれたことを知り得るであらう。

本集の羅馬字本はファウスベルの校訂によつて PTS から一八八五年に出版、一八九三年に再版せられ、更にアンデルゼンの新版が一九一三年に PTS から刊行せ

され本國譯に際しては後者を底本とした。歐米語への翻譯としては英譯 V.Fausböll: The Sutta-nipāta. SBE,X,part 2,1881,2nd ed.1898,New ed.1924. 獨譯 K.E.Neumann: Die Reden Gotamo Buddhos' aus der Sammlung der Bruchstücke Suttanipāto des Pālikanons, Leipzig 1905,2 A.: ufl.1911 (後に Reden Gotamo Buddho's の第四卷とす其他英譯からの獨譯部分的の英譯獨譯等も存する。我國に於ては立花俊道師國譯大藏經經部第十三卷(大正七年)、荻原雲來博士(釋迦牟尼聖訓集大東出版社昭和十年)による國譯があり、本集の國譯に際しては上述の歐和諸譯を參照した。

本集の註釋書には西紀第五世紀の佛音三藏の第一義明 (Paramatthajotikā) があり、Suttanipāta Commentary,ed. by H. Smith 2vols. PTS.1916-1917 として出版せられ、本集の讀解には不可缺のものである。更に本集を讀むに参考すべしものは小誦の註釋書 (The Khuddaka-pātha together with its Commentary Paramatthajotikā I ed. by H. Smith PTS.1915) 及び本集第四品第五品及び第一品第三經の註釋書たる大小の義釋であり、本國譯に於ては義釋の國譯と連絡を保つて譯出することに留意した。

一 蛇品	一	四 耕田婆羅墮闇經	二六
一 蛇經		五 淳陀經	三二
一 陀尼耶經	一	六 敗亡經	三五
三 犀角經	七	七 賤民經	四二
	一三	八 慈經	五一

九 雪山〔夜叉〕經	五五
一〇 曠野〔夜叉〕經	六五
一一 征勝經	七一
一二 牟尼經	七六
二 小品	八一
一 賀經	八一
一 懈經	八九
二 臭穢經	八九
三 大吉祥經	九四
四 針毛〔夜叉〕經	九六
五 法行經	一〇〇
六 婆羅門法經	一〇三
七 船經	一〇六
八 何戒經	一一七
九 起立經	一二〇
一 羅駁羅經	一二四
二 鵬耆舍經	一二七

一三 正普行經	一三三
一四 備彌迦經	一三八
一五 精勤經	一五四
一六 善說經	一六一
一七 摩伽經	一六四
一八 薩毘耶經	一七八
一九 施羅經	二〇三
二〇 箭經	二一九
二一 婆私吒經	二二六
二〇 拘迦利耶經	二四七
二二 二種隨觀經	二七二
四 義品	一九五

一	欲經	二九五
二	窟八偈經	三〇一
三	瞋怒八偈經	三〇四
四	淨八偈經	三〇七
五	第一八偈經	三一〇
六	老經	三一三
七	帝須彌勒經	三一六
八	波須羅經	三二〇
九	摩訶地耶經	三二四
一〇	死前經	三二九
一一	翻譯經	三三四
一二	小集積經	三三九
一三	大集積經	三四四
一四	迅速經	三五一
一五	執杖經	三五七
一六	舍利弗經	三六三
一七	彼岸道品	三七〇

一	序偈	三七〇
二	阿耆多學童所問	三八八
三	富那迦學童所問	三九二
四	帝須彌勒學童所問	三九七
五	彌多求學童所問	四〇四
六	度多迦學童所問	四〇七
七	優波私婆學童所問	四〇四
八	難陀學童所問	四〇七
九	醯摩迦學童所問	四一一
一〇	刀提耶學童所問	四一二
一一	劫波學童所問	四一四
一二	闍都乾耳學童所問	四一六
一三	跋陀羅浮陀學童所問	四一七
一四	優陀耶學童所問	四一九
一五	跋陀羅學童所問	四二二
一六	莫伽羅闍學童所問	四二四
一七	賓祇耶學童所問	四二五
一八	十六學童所問の結語	四二七

天宮事經

宮田 菱道譯

本書は七品、八十五天宮より成り、すべて偈頌であつて形式内容ともに餓鬼事經と對應し、姊妹篇をなすものである。餓鬼事經が地獄の苦患に悩む餓鬼の形相を叙述するのに對して、これは天界に生まれて優れた容色、幸福を得た女神、天神に就いて述べたものである。全説話の基底をなすものは善因によりて善果が得られるといふ因果説で、生天の果報は前世でなした福業によりて招致せられたものであると説く。女神、天神が各自前世でなした福業として述べて居るものは、佛比丘、僧伽、塔婆、舍利に対する供養戒を守り、布薩を行ふこと、三寶に對する淨信、聞法歡喜、佛に對する合掌禮拜である。此等が出家佛教の解脱道に對して在家佛教の生天道であることを示してゐる。

本書の八十五説話の中、第三十三のグッティラ天宮は本生經(第二四三)、第五十二のレーヴティ天宮の最初の二偈は法句經第二一九偈(第二二〇偈)、第八十三の煌輝耳環天宮は本生經(第四四九)に相當偈が見出される。

本和譯は E.R.Gooneratne 校訂本(1886)を底本としたが、護法の註釋(Paramatthadipani)を参考し譯出に便を得た。

第一 椅子品	四三七
一 椅子天宮	四三七
二 椅子天宮	四三八
三 椅子天宮	四三九
四 椅子天宮	四四〇
五 象天宮	四四一
六 船天宮	四四二
七 船天宮	四四四
八 船天宮	四五五
九 燈火天宮	四四七
一〇 胡麻供養天宮	四四八
一一 貞淑女天宮	四四九
一二 第二貞淑女天宮	四五一
一三 嫁婦天宮	四五二
一四 嫁婦天宮	四五三
一五 鬱多羅女天宮	四五四
一六 師利摩女天宮	四五五
一七 髮結女天宮	四五七

第二 チツタラターラ品	四五九
一八 下婢天宮	四五九
一九 ラクマ一女天宮	四六一
二〇 飯泡施者天宮	四六二
二一 旃陀羅女天宮	四六四
二二 バッディイツティカ一女天宮	四六五
二三 ソーナディンナ一女天宮	四六六
二四 ウボーサタ一女天宮	四六八
二五 スニッダ一女天宮	四六九
二六 スディンナ一女天宮	四七〇
二七 食施女天宮	四七一
二八 第二食施女天宮	四七二
第三 畫度樹品	四七二
二九 優天宮	四七二
三〇 甘蔗天宮	四七四
三一 臥臺天宮	四七五
三二 ラタ一女天宮	四七七

三三	ダッティラ天宮	四七八
三四	光輝天宮	四八三
三五	セーナブティイー女天宮	四八七
三六	マツリカー女天宮	四八九
三七	廣目天宮	四九〇
三八	畫度樹天宮	四九一
	深紅品	四九二
三九	深紅天宮	四九二
四〇	極光天宮	四九三
四一	象天宮	四九四
四二	アローマー天宮	四九五
四三	酸粥施者天宮	四九六
四四	精舍天宮	四九七
四五	四女人天宮	五〇〇
四六	菫婆天宮	五〇二
四七	金色天宮	五〇三
四八	甘蔗天宮	五〇四

四五	禮拜天宮	五〇六
五〇	ラッヂューマーラー女天宮	五〇六
五一	蛙天宮	五一〇
五二	レーヴティイー天宮	五一一
五三	チャッタ青年天宮	五一四
五四	蟹味施者天宮	五一八
五六	守門者天宮	五一九
五七	所應作天宮	五一九
五八	第二所應作天宮	五一九
五九	針天宮	五一九
六〇	第二針天宮	五一九
六一	象天宮	五二〇
六二	第三象天宮	五二一
六三	小車天宮	五二一
六四	大車天宮	五二六

第六 バーヤーシ品 五三一

七五 チツタラタ一天宮 五三八

六五 在家天宮 五三一

七六 歡喜闇天宮 五三八

六六 第二在家天宮 五三一

七七 廉尼柱天宮 五三八

六七 果實施者天宮 五三二

七八 黃金天宮 五三九

六八 住家施者天宮 五三三

七九 菩薩天宮 五四〇

六九 第二住家施者天宮 五三四

八〇 牧牛天宮 五四二

七〇 食施者天宮 五三四

八一 捷陟天宮 五四三

七一 麥番天宮 五三四

八二 種々色天宮 五四六

七二 耳環天宮 五三五

八三 煙輝耳環天宮 五四七

七三 第二耳環天宮 五三六

八四 セーリップサカ天宮 五五〇

七四 菩多羅天宮 五三七

八五 整備天宮 五五八

第七 整備天宮 五三七

索 隱

一 發音索隱 (1) (3) (1)

二 漢字索隱 (1)

經集對照表 (1)

目
次

一一
一二

經 集 (スッタニパータ)

彼の世尊阿羅漢等正覺者に歸命し奉る。

一 蛇 品

一 蛇 經

二、^④〔體中に〕擴がれる蛇毒をば藥草をもて〔消すが〕如く、

〔心中に生起せる忿を〕調伏するかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を〔棄つるが〕如く、

⑤彼此の岸をば〔共に〕捨つ。

(二)

二、池に生ぜる蓮華をば〔子等が〕潛りて〔折るが〕如く、

貪を殘りなく棄斷せしかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を〔棄つるが〕如く、

彼此の岸をば〔共に〕捨つ。

(二)

三、急流する輪廻の流れを涸渴せしめ、
渴愛を残りなく棄断せしかの比丘は、
蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、
彼此の岸をば〔共に〕捨つ。

(三)

四、大暴流がいと弱き堤を壊すが如く、
慢をば残りなく破壊せしかの比丘は、
蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、
彼此の岸をば〔共に〕捨つ。

(四)

五、無花果樹の〔林〕中に花を求めて得ざるが如く、
三界諸有中に堅實なるものを得ざるかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば〔共に〕捨つ。

(五)

六、その内心に怒あることなく、

且つ禍福善惡を超越せるかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、
彼此の岸をば共に捨つ。

(六)

七、諸の〔不善尋をば燒盡せしめ、

心内すべて善く整備せるかの比丘は、
蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば共に捨つ。

(七)

八、走り〔精進し〕過ぎず遅れ懈怠するなく、

この〔愛見慢の三〕障礙をすべて超えたるかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば共に捨つ。

(八)

九、走り〔精進し〕過ぎず遅れ懈怠するなく、

一切はこれ虚妄なりと世間を知るかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば共に捨つ。

(九)

一〇、走り〔精進し〕過ぎず遅れ懈怠するなく、

「一切はこれ虛妄なり」とて貪欲を離れたるかの比丘は、
蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば〔共に〕捨つ。

(一〇)

二、走り〔精進し〕過ぎず遅れ懈怠するなく、

「一切はこれ虛妄なり」とて貪染を離れたるかの比丘は、
蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば〔共に〕捨つ。

(一一)

三、走り〔精進し〕過ぎず遅れ懈怠するなく、

「一切はこれ虛妄なり」とて瞋恚を離れたるかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば〔共に〕捨つ。

(一二)

三、走り〔精進し〕過ぎず遅れ懈怠するなく、

「一切はこれ虛妄なり」とて愚癡を離れたるかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば〔共に〕捨つ。

(一三)

一四、いかなる隨眠もあることなく、

諸の不善根を害破せしかの比丘は、
蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、
彼此の岸をば共に捨つ。

(一四)

一五、此岸に來るべき縁となる所の

不安所生の煩惱あることなきかの比丘は、
蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば共に捨つ。

(一五)

一六、有に結縛すべき因本たる、

愛林所生の煩惱あることなきかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば共に捨つ。

(一六)

3

一七、¹⁰蓋を捨斷して苦なく疑惑を度り、

〔煩惱の〕箭を離れたるかの比丘は、

蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、

彼此の岸をば[共に]捨つ。

(一七)

蛇經畢れり。

註① 本經は一時に説かれたるものに非ず。かの比丘は蛇が古りたる舊皮を棄つるが如く、彼此の岸をば[共に]捨つといふ句を有する偈のみを諸説法中より集めたるものなり。

而してこれに類する、茲芻勝彼此如蛇脫故皮の句を有する偈にして本經に存せざるものが多く有するものに法句經の異譯たる趙宋天息災譯法集要頌經卷第四茲芻勝品(大正四・七九七頁)あり。

② 本偈はSnA. p.2; p.14に引用せらる。本偈は法集要頌經卷四茲芻勝品(大正四・七九七c)と相應す。法句經卷上教學品(大正四・五五九c)參照。

③ 「彼此の岸」(orapara)とは註によるに、(a)本偈の場合にては忿が全斷せらるゝ阿那含向にて断ぜらるゝ五下分結を稱して orapara となす。(b)本經全偈に共通せる一般的の場合には orapara とは輪廻の大海上の此岸(ora)と彼岸(para)とを意味す。又は(c) orapara とは阿那含果に住する比丘の断するものにして、これに六種の解釋あり。(一)自己の身體が此岸、(二)他人の身體が彼岸、(三)六内處が此岸、(四)六外處が彼岸、(五)欲有色有が此岸、(六)無色有が彼岸、(七)身體が此岸、身體に樂を與ふる資助となるものが彼岸なりとす。

④ 本偈に相當する偈は阿毘曇八犍度論卷二(大正二六・七七六c)、阿毘達磨發智論卷二(大正二六・九二二c)、大毘婆沙論卷二八、卷九三(大正二七・一四五b、四〇八a)、阿毘曇毘婆沙論卷一五、卷四六(大正二八・一一二c、三五二c以下)にも引用せらる。

⑤ 本偈は出曜經卷二九(大正四・七六八b)、法集要頌經卷四(大正四・七九七a)参照。

⑥ 本偈はV. II, p.184; Ud. p.20 (II, 10) 参照。

⑦ 本偈はUd. p.71 (II, 7), 瑜伽師地論卷一九(大正三〇・三八四c)参照。

⑧ 本偈は出曜經卷二九(大正四・七六七c)、法集要頌經卷四(大正四・七九七a)参照。

⑨ 本偈はSn. v. 369, 出曜經卷二九(大正四・七六八b)、法集要頌經卷四(大正四・七九七b)参照。

⑩ 本偈は出曜經卷二九(大正四・七六八a)、法集要頌經卷四(大正四・七九七a)参照。

二 陀尼耶經^①

一八 牧牛者陀尼耶曰く、

我は既に飯を炊き乳を搾り已り、
摩企河の岸に近く妻子と共に住す、
家は葺かれ火は燈され居れり、

故に若し天よ汝望まば雨を降らせよ。 (一)

一九 世尊宣はく、

我は忿なく心の頑固を離れ已り、
摩企河の岸に近く一夜の宿をなす、

〔我執の家は剝がれ煩惱の火は消され居れり、
故に若し天よ汝望まば雨を降らせよ。〕（三）

二〇、牧牛者陀尼耶曰く、

虻も蚊も居ることなく、

牛共は沼地に茂れる草を食み、

雨降り來るとも堪へ忍ぶべし、

故に若し天よ汝望まば雨を降らせよ。〕（三）

二一、世尊宣はく、

筏（聖道）は既に組まれ善く作られたり、以て
暴流を調伏し已に度りて彼岸に到れり、

〔今を筏の要あることなし、

故に若し天よ汝望まば雨を降らせよ。〕（四）

二二、牧牛者陀尼耶曰く、

我が妻は從順にして動貪ならず、

久しく共に住し貞淑にして情愛あり、

彼女に何等の惡行あるを聞かず、
故に若し天よ汝望まば雨を降らせよ。

(五)

二三、世尊宣はく、

我が心は從順にして解脱し居れり、
久しう遍修し善く調御せられたり、
而して我に一の惡行あることなし、
故に若し天よ汝望まば雨を降らせよ。

(六)

二四、牧牛者陀尼耶曰く、

己が稼げる賃金もて我は暮す、

我が子女も共々に息災なり、

彼等に何等の惡行あるを聞かず、

故に若し天よ汝望まば雨を降らせよ。

(七)

二五、世尊宣はく、

我は何人の傭人にも非ず、

自ら得たる一切知智もて一切世間を遊行す、

他に備はるゝの要あることなし、

故に若し天よ、汝望まば雨を降らせよ。 (八)

二六、牧牛者陀尼耶曰く、

犢牛あり、乳牛あり、

孕める牛あり、處女牛もあり、

また牛主なる牡牛もあり、

故に若し天よ、汝望まば雨を降らせよ。 (九)

二七、世尊宣はく、

犢牛(繩)なく、乳牛(隨眠)あるなし、

孕牛(福非福生の行の思)も處女牛(欲愛)もなく、

牛主なる牡牛(行識)も茲にあるなし、

故に若し天よ、汝望まば雨を降らせよ。 (一〇)

二八、牧牛者陀尼耶曰く、

不動堅固なる杙は掘り建てられ、

文邪草製の新しき繩は善く縫はれ、

乳牛等も^{そを}断つ能はざるべし。
故に若し天よ、汝望まば雨を降らせよ。 (二二)

二九、世尊宣はく、

牛王の如く諸結(五上分結)を断ち、
象の如く臭蔓草^(くさかづら)五下分結)を摧破して、
我は再び母胎に宿ることなかるべし、
故に若し天よ、汝望まば雨を降らせよ。 (二三)

三〇、低地をも高地をも充しつゝ、

俄かに大雨降り来れり、

天の雨降るを聞き已りて、

陀尼耶は次の義を述べたり。

(二三)

三一、世尊を見奉れる我等には、

實に尠からざる利得ありき。

有眼者よ、我等は尊師に歸依す、

大牟尼よ、尊師は我等の師となりたまへ。 (一四)

三、從順なる妻と我とは、

善逝の許にて梵行を行ぜん。

生死の彼岸に達し、

苦の邊際を盡さん。

三、惡魔波旬曰く、

子ある者は子等によりて喜び、

牛ある者も牛等によりて喜ぶ。

實に依五種欲(ウバテイ)は人の喜びなり、

依なき者は喜ばざればなり。

三四、世尊宣はく、

子ある者は子等によりて愁ひ、

牛ある者も牛等によりて愁ふ。

實に依五種欲(ウバテイ)は人の愁ひなり、

依なき者は愁へざればなり。

陀尼耶經畢れり。

(一七)

(一六)

(一五)

註① 本經は數萬頭の牛を所有し、遊牧生活をなせる陀尼耶が、多くの妻子眷属及び使用人等と共に、雨期四ヶ月を過さんとて摩企河畔に住し居れるに對して、世尊が彼に説法せられたるものなり。本經の名をば Milindapañha p.369には牧牛者陀尼耶經(Dhananjagopalaka-sutta) とせり。

② 動貪(lola) 婦人には食物・裝飾具他の男性・財産遊山見物の五種に對する動貪あり。

③ 乳牛(dhenupā)とは註によるに母乳を呑む犢、又は授乳する母牛なり。

④ 本偈は Mil. p.369 に引用せらる。

⑤ 本偈は S.I.p.6; p.107f にも出で、Netti p.34 に引用せらる。本偈の相當偈は Mahāvastu III, p.417, 雜阿含一〇〇四經(大正二・二・六三a)別譯雜阿含一四二經(大正二・四二・八a)に見ゆ。

⑥ 依(upadhi)には欲依(kāmūpadhi)、蘊依(khandhupadhi)、煩惱依(kilesūpadhi)、行依(abhisam-kharūpadhi)の四種あり。五種欲は喜樂の止住所(adhiṣṭhāna)なるが故に「五蘊は五蘊根本とする苦の止住所なるが故に煩惱は惡趣の苦の止住所なるが故に善惡の諸行は有の苦の止住所なるが故にこの四を依と云ふ。この中、本偈にては欲依を指す。

⑦ 本偈は S.I.p.6; p.108 にも出で、Netti, p.34 に引用せらる。本偈の相當偈は Mahāvastu III, p.417f, 雜阿含一〇〇四經(大正二・二・六三a)別譯雜阿含一四二經(大正二・四二・八a)に出て。

三 ① 犀角經

三五、一切生物に對して三惡行の答を控へ、
彼等の何れをも害することなく、
子(女)を得んと欲せされ況んや朋友をや、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二)

三六、交はりをなせし者に親愛あり、

親愛に從ひてこの苦生ず。

親愛所生の過患を觀察しつゝ、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(三)

三七、友人や親友を憐愍しつゝ、

心繫縛せられたる者は利益を失ふ。

親暱(じたしみ)に斯る怖畏あることを觀察しつゝ、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(三)

三八、子や妻に對して貪愛ある者は、

恰かも鬱茂せる竹が瓦に縛著するが如し。

筍の如くに著することなくして、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(四)

元恰かも鹿が林野にて縛されずして、

食を求めて欲する處に行くが如く、

有識の人は獨存の自由をば觀察しつゝ、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(五)

四〇、朋友の間にては住するにも立つにも、

歩くにも遊行するにも語話を交ふ。

[愚者の願はざる獨存をば觀察しつゝ、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(六)

四一、朋友の間にありては戯樂あり、

また[妻子]の中にては大愛生ず。

愛別離の苦をば嫌忌しつゝ、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(七)

四二、^④四方の有情に瞋怒なく、

多少の衣食住にて満足し、

諸の危險にも堪へて動轉せず、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

四三、一類の出家者は攝益すること難し、

家に住する在家者も亦然なり。

他人の子〔女〕に執心あることなく、

犀角の如く應に遊行すべし。

四四、落葉せしコーギラーラ〔晝度樹〕の如く、

〔鬚髮嚴飾等〕の世俗の相を取り除き、

〔道精進の〕雄者は世俗の結縛を斷じて、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

四五、^⑨若し聰明なる友を——共に行じ

よく住する賢者を——汝等得なば、

一切諸の危險に打勝ちて、彼と共に

愉快に念ありて應に遊行すべし。

四六、若し聰明なる友を——共に行じ

(二)

(一〇)

(九)

(八)

よく住する賢者を——汝等得ずば、

王が征服せし國土を捨つるが如く〔一切を捨て〕
犀角の如く應に獨り遊行すべし。 (二二)

四七、正に〔無學の戒等を〕成具せる朋友を我等は賞讃す。

勝れたる〔又は〕等しき朋友に親近すべし。

彼等を得ざれば無罪なる〔衣食住〕を受用して、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。 (二三)

四八、^⑩金工のよく仕上げたる輝やける

二つの黃金の環が腕に懸けられ、

接觸しつゝ騒音あるを見ては、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。 (二四)

四九、斯の如く第二者と共にならば我に

冗漫の言又は親著あるべし。

未來に斯る怖畏あるを觀察しつゝ、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(一五)

五〇、實に欲は種々甘美にして意に樂しく、
雜多なる方法によりて心を攪亂せしむ。

〔五〕種欲にこの過患あることを見て、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。 (一六)

五一、こは我が疾なり、癱なり、禍なり、

病なり、箭なり、また怖畏なり。

〔五〕種欲にこの怖畏あることを見て、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。 (一七)

五二、寒さと暑さと飢と渴と、

風と太陽の熱と虻と蛇と、

此等一切に堪へ打勝ちて、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。 (一八)

五三、肩(骨格)のよく發育し肢體が蓮華に似たる、

大なる象が群を避けて、

所欲の儘に林野に住するが如く、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(一九)

五四、群集を樂しむ者が時解脱に

至るべきの道理あることなし。

[されば]日種たる佛の語に違ひて、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二〇)

五五、邪見を戰はすこと超越して、

〔正〕決定に達し[聖道]を獲得し、

他に導かれざる獨覺智を我は起せり、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二一)

五六、動貪なく詭詐なく渴欲なく、

覆^{僞善}なく惡濁と癡とを除去し、

一切世間に於て意樂(渴愛)あるなく、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二二)

五七、〔正しき〕義を見ず邪曲に住著せる、

惡き朋友をば回避すべし、

自ら依著者放逸者に習ふべからず、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二三)

五八、多聞にして法を持し應辯を

具せる偉大なる友に交はるべし。

〔自他の〕義を知り疑惑を調伏し、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二四)

五九、百ら莊嚴せず、世間の戯樂と

欲樂とを期待せずして、

實語者は縉素の嚴飾を離れ、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二五)

六〇、^て子をも妻をも父をも母をも、

財寶をも穀物をも親類をも、

それぞれの諸欲をも捨て、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

六一、^てこの受樂は縛著なり、茲の可樂は小なり、

(二六)

快味少くして茲には多くの苦あり。

これ鉤針なりと知りて覺慧者は、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二七)

六、水中の魚が網を破るが如く、

〔十結をば裂き破りて、

燃焼せし火の戻らざるが如く、〔煩惱に戻ることなく〕

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二八)

六三、眼を下に投げ彷徨することなく、

諸根を護り、意を守り〔制し〕、

〔煩惱の漏なく、煩惱の火に〕焼かれずして、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(二九)

七、葉の断除せる晝度樹の如く、

〔鬚髮嚴飾等の世俗の相を取り除き、

袈裟衣を著けて出家をし、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(三〇)

立諸味の貪求をせず動貪なく、

他を養ふことなく、次第乞食し、

家々にて心結縛せらるゝなく、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(三一)

六、初禪にて心の五蓋をば捨斷し、

一切の隨煩惱をば除却し、

依止なくして貪愛瞋恚を斷じ、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(三二)

七、豫め樂と苦とを離去せしめ、

且つ喜と憂とを(第二第三禪にて除き)、

〔第四禪にて〕清淨なる捨と止とを得て、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

六、第一義に達せんが爲に勤精進し、

沈滯の心なく懈怠の行爲なく、

固き努力あり、體力・智力を具し、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(三四)

六九、獨坐と禪とを遣つることなく、

諸法に於て常に法に隨ひて行じ、

〔三界諸有の過患を思惟し、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(三五)

七〇、不放逸にして愛の滅盡を冀求し、

聞あり念ありて聾啞に非ず、

法を察悟し〔正〕決定し〔正〕勤ありて、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(三六)

七一、¹⁴師子が諸聲に駭怖せざるが如く、

風が網に著せざるが如く、

蓮〔葉〕が水〔滴〕に塗著されざるが如く、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

(三七)

七二、齒牙強く百獸の王たる師子が

〔他を〕制壓し克服して行くが如く、

(困苦を克服して邊境の臥坐所を受用し、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。 (三八)

七三、^⑩慈と捨と悲と喜との四無量心

解脱を時々に習行しつゝ、

一切世間に違背することなく、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

七四、貪と瞋と癡とを捨斷し、

諸の結を裂き破りて、

生命滅盡するも駭怖せず、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

七五、利の爲に人々は他に親近す、

無所得の友は今や得ること難し。

不淨なる人々には自己の爲の慧あり、

犀角の如く應に獨り遊行すべし。

犀角經畢れり。

(四〇)

(四一)

註① 本經は辟支佛(獨覺又は緣覺)の有すべき諸徳に就きて述べたるものなり。註書にては三五偈一七五偈の本經四十一偈を、三五一四四(十偈)、四五一五四(十偈)、五五一六四(十偈)、六五一七五(十偈)の四品に四分し、各偈にその偈名を附し居れり。本經四十一偈は其儘 Apadāna pp.8-13 に辟支佛の説明として採用せらる。また Culā-Niddesa PP.317-429 (シャム本)には本經の各偈に對する逐字的註釋あり。故に讀者は南傳大藏經・小義釋經、をも參照せられたし。尙ほ Mahāvastu I, PP.357-359, に *eko care khadgavisiñakalpo* なる終句を有する本經同類の偈十二個あり。

② 本偈前半は UdA. P.3 に引用せらる。Mahāvastu I, PP.358 參照。

③ 「犀角の如々」(*khaggavisiñakappa*) 梵語は *khadgavisiñakalpa* にして、鱗角喻と漢譯せらる。鱗角喻とは辟支佛を指すものにして、辟支佛が自ら覺り、他を救濟することなく、他と交らずして獨一に行ずるを一角を有する犀の角に譬へて言ひたるものなり。

④ 本偈は Mahāvastu I, P.358; Divyāvadāna P.294, 金色王經(大正三·三八九b)、大毘婆沙論卷一二六(大正二·七·六六〇a)等參照。

⑤ 本偈は Mahāvastu I, P.359 參照。

⑥ 本偈は UdA. P.163 に引用せらる。

⑦ 本偈は DA.I,P.207; MAII,P.213 に引用せらる。本偈前半は KhpA.P.147 に引用せらる。

⑧ 「*नीग्लानी*」(*kovilā*) 一種の落葉樹にして、畫度樹(*pāricchattaka*) と同じ。三十三天に生ぜりと訖べ。

⑨ 次の二偈は M. III, p.154; V. I, P.350; J. III, P.488; DhP.328, 329 偈中阿含七二經長壽王本起經(大正一五二五〇)、四分律卷四三(大正二二·八八二〇)、法句經卷下象喻品(大正四五七〇

b等参照。

- ⑩ 本偈は有部苾芻尼毘奈耶卷二(大正二三・九一五b)参照。
 ⑪ 本偈前半は SnA.P.509 に引用せらる。

⑫ 五種欲(pañca kāmaguṇā)とは色・聲・香・味・觸の五に對する欲なり。

⑬ 「時解脱」(sāmavika-vimutti)とは註によるに世間定のことなり。世間定の根本四禪定に入定せし度毎に諸煩惱を解脱するが故に世間定を時解脱と云ふ。

⑭ 本偈に稍々類似する偈は辟支佛因縁論卷下(大正三二四七八b)に見ゆ。

⑮ 本偈は Mahāvastu I, p.358 參照。

⑯ 豊度樹は前の註③参照。

⑰ 本偈は Mahāvastu I, p.357 參照。

⑯ 本偈は Sn. 213 倶參照。

⑯ 本偈は Mahāvastu I, p.357 參照。

四 耕田婆羅墮闍經

是の如く我聞けり。一時世尊は摩竭陀國^{ダッキナーギリ}を遊行し南山の一^{エーカナーラ}丈^{ダラ}といふ婆羅門村に住したまへり。爾の時、耕田婆羅墮闍婆羅門は播種時に五百許^{ばかり}の鋤^{ツバメ}を牛に輒し居れり。時に世尊は晨朝に著衣し鉢と僧伽梨^{カシバラ}衣とを携へて耕田婆羅墮闍婆羅門の作業の所に至りたまへり。爾の時、耕田婆羅墮闍婆羅門は食物を農夫等に分配し居れ

り。時に世尊はかの食物分配の所に近づきたまひ近づきて一方に立ちたまへり。時に耕田婆羅墮闇婆羅門は世尊が受食のために立ちたまへるを見たり。見已りて世尊に白して言く、沙門よ、我は耕耘し且つ播種す。耕耘し且つ播種して然る後に食す。沙門よ、汝も耕耘し且つ播種せよ。耕耘し且つ播種して然る後に食せよ。婆羅門よ、我も亦耕耘し且つ播種す。耕耘し且つ播種して然る後に食す。されど我等は卿瞿曇の輒をも鋤をも鋤先すきさきをも鞭をも牛をも見ず。然るにも拘らず卿瞿曇は婆羅門よ、我も亦耕耘し且つ播種す。耕耘し且つ播種して然る後に食すと斯く言ふ。かくて耕田婆羅墮闇婆羅門は偈を以て佛に白せり。

七六、耕耘者なりと汝は自称するも、

我等は汝の耕耘を見ず。

汝の耕耘を我等が得心するやう、

我等に問はれて耕耘を語れ。

七七、信は種子なり、苦行根律儀は雨なり、

慧は我が輒と鋤なり、

慚は鋤棒なり、意は勒なり、

念は我が鋤先と鞭なり。

(三)

七八、身(惡行)を護り、語(惡行)を護り、

[衣食住]に對し腹の量に對して自制し、

[智諦]をば煩惱草の芟除とし、

柔和を我が解脱とす。

(三)

尤、精進は我が荷駄牛にして、

[我を]瑜伽安穩に運載し、

行きて退轉あることなく、

其處に至らば愁ひなし。

八〇、斯の如くこの耕耘が行はるれば、

そは甘露(涅槃)の果を致す。

(四)

この耕耘を行ひて後は、

一切の苦より解脱す。*

(五)

時に耕田婆羅墮闇婆羅門は大なる青銅の鉢に乳粥を盛りて世尊に獻じたり、卿

瞿曇は乳粥を食したまへ。卿は耕耘者なり、蓋し卿瞿曇は甘露の果ある耕耘をなし

たまへばなり」とて。

八、「偈を唱へて得たる食は我が食すべきに非ず。」

婆羅門よ、この偈による受食は諸正見者の法に非ず。

偈を唱へて得たる食を諸佛は斥けたまふ。

婆羅門よ、淨法ある時は、この行乞が諸佛の生活法なり。(六)

八、「而して一切諸徳を具し、漏盡き。」

惡作(後悔)の寂靜せる大仙をば、

〔偈による食以外の〕他の飲食もて供養せよ。

彼佛は福を望む者の〔福田たればなり」。

(七)

然らば卿瞿曇よ、誰に我はこの乳粥を與ふべきや。婆羅門よ、我は天を含めたる魔を含める梵天を含めたる〔一切〕世界に於て、沙門婆羅門を含めたる天と人とを含める人々の中に於て、如來又は如來の弟子を除きて、その乳粥を食してよく消化せしむる者あるを見ず。故に汝婆羅門よ、その乳粥をば草なき所に棄てよ、又は生物なき水中に流せ。時に耕田婆羅門はその乳粥を生物なき水中に流したり。時にその乳粥は水中に投ぜられてシユツシユツと音を立て大いに湯煙を出せり。譬へ

ば日中に太陽に熱せられたる鋤先が水中に投ぜらるれば、シユツシユツと音を立て大いに湯煙を出すが如く、斯の如くかの乳粥は水中に投ぜられてシユツシユツと音を立て大いに湯煙を出せり。時に耕田婆羅墮闍婆羅門は悚懼して身毛堅立し、世尊の許に至れり。至りて後、世尊の足下に頭を伏せ、世尊に白して言く、「卿瞿曇よ、希有なり。卿瞿曇よ、希有なり。譬へば卿瞿曇よ倒れたるを起すが如く、蔽はれたるを開くが如く、迷へる者に道を教ふるが如く、又は眼ある者は諸色を見るならん」とて暗夜に燈火を掲ぐるが如く、斯の如く卿瞿曇は多くの教説もて法を説きたまへり。この我は卿瞿曇と法と比丘衆とに歸依す。我は卿瞿曇の許にて出家を得んと欲す、具足〔戒〕を得んと欲す。

かくて耕田婆羅墮闍婆羅門は世尊の許にて出家を得、具足戒を得たり。而して具戒後久しからずして、尊者婆羅墮闍は獨一に遠離し、不放逸に熱心に自ら精勤して住しつゝ、久しからずして、——諸の善男子が正に家より非家に出家するの目的たる——無上の梵行の終局〔即ち涅槃〕をば現世にて自ら知通し作證し具足して住せり、生已に盡き、梵行已に成じ、所作已に辨じ、更に斯る〔輪廻苦界の〕状態に至らずと了知せり。斯くて尊者婆羅墮闍は阿羅漢の一人となれり。

耕田婆羅墮闇經畢れり。

註① 本經の大部は S. I. p.172 f. (S. 7.2.1.Kasi) にも出づ。本經と Kasi(耕田經)との相違は、本經にては婆羅墮闇婆羅門は佛の説法を聞きて出家し、遂に阿羅漢を成すとなせるも、耕田經にてはかの婆羅門は三寶に歸依して優婆塞とならんことを願ふのみにて出家せしことを説かず。尙ほ雜阿含九八經(大正二二・七 a 以下)、別譯雜阿含二六四經(大正二・四六六 b 以下)參照。

② 晨朝に著衣し云々とは、世尊を始め諸比丘の日常生活に於ける行乞の有様を示せるなり。佛教に於ける出家者の生活は中夜には横臥して眠り、初夜と後夜には坐禪又は經行をなし、曉方には起ちて顔を洗ひ口を嗽ぐ。年少比丘は長老比丘の爲に水や楊枝を備へ、其他の用務をなし、僧房内外の灑掃をなし、托鉢に行く迄の間を再び坐禪して過し、世人の朝食時の頃に起ちて安陀衣(内衣)と鬱多羅賀上衣(上衣)とをよく著て帶を締め、僧伽梨衣(重衣)は肩に掛け鉢は鉢袋に入れて首より懸けて行乞に出づ。彼等は村落又は城市に近づくや、鉢は出して手に持ち、僧伽梨衣は身に纏ひ、威儀を正して托鉢するなり。以上のことを晨朝に著衣し鉢と衣とを携へてと云へるなり。

③ 以下の五偈は S. I. p.172f. にも出づ。漢譯相當偈は雜阿含九八經(大正二二・七 a 以下)、別譯雜阿含二六四經(大正二二・四六六 b 以下)參照。

④ 本偈は S. I. p.167; p.168; p.173; Sn. 481 偈にも出で、Mil. p.228 に引用せらる。尙、別譯雜阿含九九經(大正二二・四〇九 a)參照。

⑤ 本偈は S. I. p.167; p.168; p.173; Sn. 481 偈にも出で。尙、別譯雜阿含九九經(大正二二・四〇九 a 以下)參照。

五 淳陀經^①

八三 鍛工子淳陀曰く、

チュンダ

廣博の慧ある牟尼佛陀。

法主離愛者人類の最上者。

御者中の優者に我は問ふ。

世間に幾何の沙門ありや。

冀はくばそを語りたまへ。

八四 世尊宣はく、淳陀よ、

四沙門あり、第五あることなし。

そを汝に現に問はれて説明せん。

道による[煩惱の]勝者と道の説示者と、

道中に生活する者と道を汚す者となり。」(二)

八五 鍛工子淳陀曰く、

諸佛は誰を道による勝者と言ふや。

云何が比類なき說道者なる。

道中に生活する者を問はれて我に語りたまへ。
また道を汚す者を我に説明したまへ。(三)

八、疑惑を度り、煩惱の箭を離れ、

涅槃を楽しみ、隨貪あることなく、

天を含めたる世界の導師、

斯る人を諸佛は道による勝者と言ふ。(四)

八七、この〔佛教〕中にて第一なるを第一と知り、

この〔佛教〕中にて法を説き分別し、

疑を断じたるかの不動の牟尼を、

第二の比丘たる道の説示者と云ふ。(五)

八八、自ら制して念あり、無罪の〔聖句〕に

親しみつゝ、法句の善説せられたる

道中に生活する所の者を、

第三の比丘たる道による生活者と云ふ。(六)

八九、諸の善務者漏盡者の裝ひをなして、

〔衆中に跳入し傲慢にして在家を汚し、

詔ありて自ら制せず、虛談をなして、

殊勝げに行する者が道を汚す者なり。 (七)

九〇、此等四沙門を洞察せる在家の

有聞有慧なる聖弟子は、

彼等一切をば斯の如しと知り、

斯く見已りて彼の信は退するなし。

云何が〔彼は染汚者と不染汚者とを

〔また淨者と不淨者とを同視すべけんや。(八)

淳陀經畢れり。

註① 本經は世尊入滅の直前に波婆城の鍛工子淳陀所有の菴婆園に住したまひし時、淳陀より佛最後の供養を受けられ其際に於ける淳陀の質問に對する四種沙門に關する說法なり。この說法は佛入滅前後の叙述をなせる巴利長部の大般涅槃經 (Mahaparinibbana-sutta) には存せずして茲に別出せられて單獨經となり居るも漢譯長阿含遊行經を始め其他の涅槃經類には、この說法を別立せずして涅槃經中に含ましめたるものあり。

即ち長阿含遊行經大正一一八b、佛般泥洹經卷上(大正一一六七。以下)、般泥洹經卷上(大正一・一八三b)、有部毘奈耶雜事卷三七(大正二四三九〇b以下)には本經に相當する說法を含めり。右の中、有部毘奈耶雜事は本經と極めてよく類似す。

六 敗亡經

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衛城の祇樹給孤獨園に住したまへり。時に一人の麗はしき容色の天神あり、夜半を過ぎたる頃、隅なく祇樹園を照して、世尊の許に近づけり。近づきたる後、世尊を禮して一方に立てり。一方に立ちたるかの天神は世尊に偈を以て白せり。

九一、我等は瞿曇世尊に

敗亡する人を問はんと〔欲〕す。

何が敗亡者の〔敗亡への〕門なりやを

問はんがために我等は來れり。

九二、勝存者を識知するは易し、

敗亡者を識知するは易し。

法を欲する者が勝存者なり、

法を嫌ふ者が敗亡者なり。

九三、第一のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第二をば世尊は語りたまへ、

何が敗亡者の敗亡への門なりや。

九四、寂なき人々を彼は愛し、

寂ある人々を愛するなく、

不善なる人々の法を希ぶ、

これ敗亡者の敗亡への門なり。

九五、第二のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第三をば世尊は語りたまへ、

何が敗亡者の敗亡への門なりや。

九六、睡眠を事とし、集會を事とし、

また懶惰にして奮起するなく、

忿^{いが}を自己の標識とする人、

これ敗亡者の〔敗亡への門なり〕。

九七、第三のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第四をば世尊は語りたまへ、

何が敗亡者の〔敗亡への門なりや〕。

九八、老いたる盛莊を過ぎたる

母をば又は父をば〔自らは〕

富裕に暮しつゝ養はざる者、

これ敗亡者の〔敗亡への門なり〕。

九九、第四のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第五をば世尊は語りたまへ、

何が敗亡者の〔敗亡への門なりや〕。

一〇〇、婆羅門又は沙門を、

(六)

(七)

(八)

(九)

又は他の行乞者をば、

妄語を以て欺く者、

これ敗亡者の「敗亡への門なり」。

一〇一、第五のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第六をば世尊は語りたまへ、

何が敗亡者の「敗亡への門なりや」。

一〇二、財産多く、金銀あり、

食物を有する人が、

獨り美味を食する、

これ敗亡者の「敗亡への門なり」。

一〇三、第六のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第七をば世尊は語りたまへ、

何が敗亡者の「敗亡への門なりや」。

(一〇)

(一一)

(一二)

(一三)

一〇四、生れ(血統)を誇り財を誇り、

また姓(家柄)を誇りて、

己が親戚を輕蔑する人、

これ敗亡者の〔敗亡への門なり〕。

一〇五、第七のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第八をば世尊は語りたまへ、

何が敗亡者の〔敗亡への門なりや〕。

一〇六、女に溺れ酒に溺れ、
また賭博に溺れて、

得たるを得たるをも失ふ人、

これ敗亡者の〔敗亡への門なり〕。

一〇七、第八のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第九をば世尊は語りたまへ、

(一四)

(一五)

(一六)

何が敗亡者の〔敗亡への門なりや。〕

(一七)

「○八、己が妻のみを以て満足せず、

諸の遊女に見え、

他人の妻女に見ゆ、

これ敗亡者の〔敗亡への門なり。〕

(一八)

「○九、第九のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第十をば世尊を語りたまへ、

何が敗亡者の〔敗亡への門なりや。〕

(一九)

「一〇、盛壯を過ぎたる人が、

ティンバル果の如く〔盛り上れる〕

乳房ある〔若き〕女を連れ歩き、

彼女への嫉妬より〔夜も〕眠らず、

これ敗亡者の〔敗亡への門なり。〕

「一一、第十のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第十一をば世尊は語りたまへ、

何が敗亡者の〔敗亡への門なりや〕。

(三二)

二三、酒〔肉〕に耽り財を散ずる婦人、

又はこれに類する男子をば、

主人の位に立つる、

これ敗亡者の〔敗亡への門なり〕。

(三三)

二三、第十一のかの敗亡者は、

これ斯の如しと我等は識れり。

第十二をば世尊は語りたまへ、

何が敗亡者の〔敗亡への門なりや〕。

(三四)

二四、刹帝利の家に生れたる者が、

財産小にして渴愛大に、

此世にて〔不可能なる〕王位を希求する、

これ敗亡者の〔敗亡への門なり〕。

(三四)

一五、世間に於ける此等の敗亡者を、

正しく觀じて見を具足せる、

賢者聖者(不法に赴かざる者)

彼は幸福なる〔天〕界に至る。

(一五)

敗亡絶れり。

註① 本經の註書によるに、佛は吉祥經(經集小品第四、大吉祥經)を説きて、有情の繁榮する方面のみを示したまひしが故に、諸天は更に世尊に有情の衰亡はいかなる理由によるやを質問せり。佛は吉祥經を説きたまひし翌々日に、彼等の爲に本經を説きたまへりと云ふ。尙ほ本經の諸偈に相當すべき諸偈は雜阿含一二七九經(大正二三五二a以下)、別譯雜阿含二七七經(大正二四七〇b以下)に見ゆ。

② 本偈はSn.124 偈及びJ. IV, p.184 參照。

③ 本偈はSn.129 偈参照。

七 賤民經^④

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衛城の給孤獨園に住したまへり。時に世尊は晨朝に著衣して鉢と〔僧伽梨〕衣とを携へ、舍衛城に行乞のために入りたまへり。爾の

時、事火婆羅墮闇婆羅門の住居にて〔神〕火が燈され供物が供へられ居たり。時に世尊は舍衛城内を家毎に行乞して、事火婆羅墮闇婆羅門の住居に近づきたまへり。事火婆羅墮闇婆羅門は世尊が遙かに來りたまへるを見たり。見已りて世尊に白して言く、「坊主よ、其處に〔止まれ〕」似而非沙門よ、其處に〔止まれ〕。賤民よ、其處に〔止まれ〕。神聖なる所に近づくこと勿れ。斯の如く言はれて、世尊は事火婆羅墮闇婆羅門に次の如く宣へり。「婆羅門よ、然らば汝は賤民を〔知るや〕、又は賤民となる法を知るや。瞿曇よ、我は賤民をも賤民となる法をも知らず。卿瞿曇よ、賤民を又は賤民となる法を我が知るやう、願はくば法を説示せよ。」婆羅門よ、然らば聞け、善く作意せよ、我は説かん。卿よ、唯諾」と事火婆羅墮闇婆羅門は世尊に答へたり。世尊は次の如く宣へり。

二六、忿ある者、また恨ある者、

また覆(僞善)ある悪人、

惡邪見ある者、詭ある者、

彼を賤民なりと知るべし。

(一)

二七、一生(胎生・濕生・化生)又は二生(卵生)、

〔此等〕生類をこの世にて害する者、

生類に對して慈愛なき者、
彼を賤民なりと知るべし。

一八、村々町々〔都市〕の人々を

害し包圍〔掠奪〕する者、

壓制者と稱せらるゝ者、

彼を賤民なりと知るべし。

一九、村に於て或は又林野に於て、

他人の所有物をば、

與へられざるに盜心もて取る、

彼を賤民なりと知るべし。

二〇、實に負債を蒙れる者が、

返済を迫られて、「汝に對して、

負債あるなし」と遁辭をなす、

彼を賤民なりと知るべし。

二二、實に些少の欲心より、

(五)

(四)

(三)

道行く人々を殺害して、
些少のものを奪ひ取る、

彼を賤民なりと知るべし。

二三、證人として問はれて、自己の因に、
他人の因に、また財の因に、

〔即ち身命財産を失ふを恐れて〕、
虚偽を語る所の人、

彼を賤民なりと知るべし。

二三、親戚等の、又は友人等の妻と、

暴力によりて、或はまた

合意の上にて交はる者、

彼を賤民なりと知るべし。

三四、年老いて盛壯を過ぎたる

母や又は父をば、〔自らは〕

富裕に暮しつゝ養はざる者、

(六)

(七)

(八)

彼を賤民なりと知るべし。

(九)

二五、母や又は父に、兄弟

姉妹や妻の母に、

害を加へ語もて惱ます者、

彼を賤民なりと知るべし。

二六、〔第一〕義を問はれつゝも、

不〔饒益の〕義をば教へ、

隠蔽して語る者、

彼を賤民なりと知るべし。

(一〇)

二七、惡業を行ひて、『我が行爲』は

知られざれと欲し、

隠れたる行爲をなす者、

彼を賤民なりと知るべし。

(一一)

二八、實に他家に行きては、

佳饌の饗應を受け、

客來らば返禮し饗せざる者、
彼を賤民なりと知るべし。

(一三)

二九、婆羅門又は沙門を、

又は他の行乞者をば、

妄語もて欺く者、

彼を賤民なりと知るべし。

(一四)

三〇、食事の時となりたるに、

婆羅門又は沙門をば、

語をもて惱まし、〔食を〕與へざる者、

(一五)

彼を賤民なりと知るべし。

三一、此世にて愚癡に纏はれ、

些少をば貪求しつゝ、

不實の語を語る者、

彼を賤民なりと知るべし。

三二、自己を高揚し、

(一六)

且つ他人を輕賤し、

自慢のために卑賤なる者、

彼を賤民なりと知るべし。

(一七)

一三三、惱害者・吝嗇者・

悪欲者・慳者・誑者・

無慚者・無愧者・

彼を賤民なりと知るべし。

(一八)

一三四、佛を誹謗する者、

或はまた出家在家の

佛弟子を誹る者・、

彼を賤民なりと知るべし。

(一九)

一五、實に〔自ら〕阿羅漢に非ずして、

阿羅漢なりと公言する者は、

梵天を含めたる世間の賊なり。

この者が實に最下の賤民なり。

我が汝等に説明せし所の

此等の者が賤民と言はる。

(二〇)

三六、^④生れによりて賤民なるに非ず、
生れによりて婆羅門なるに非ず。

行爲によりて賤民となり、
行爲によりて婆羅門となる。

(二一)

三七、我がこの説示の眞偽をば、
この〔次の例〕によりても知れ。

犬殺しの摩騰^⑦とて、

(二二)

有名なる旃陀羅の子ありき。

三八、彼摩騰は得難き所の

第一の名聲を得たり。

多くの刹帝利・婆羅門は

彼の供奉に來れり。

三九、彼は離塵の大道たる

(二三)

天乘(八等至)に乗り、

欲貪をば離貪して、

梵天界に至りたり。

彼が梵天界に至ることを、

(卑しき)生れも遮止せざりき。

(二四)

一四〇、聖典を誦習する家に生れ、

聖典に關係深き諸の婆羅門、

彼等も諸の惡業に

屢々近づき行かば、

(二五)

一四一、現世にては呵責せられ、

また來世は惡趣に至る。

彼等が惡趣に至り、

又は呵責せらるゝを、

(高き)生れも遮止するなし。

一四二、^⑧生れによりて賤民なるに非ず、

(二六)

生れによりて婆羅門なるに非ず。

行爲によりて賤民となり、

行爲によりて婆羅門となる。

(一一七)

斯く言はれて事火婆羅墮闇婆羅門は世尊に白して言く、「卿瞿曇よ、希有なり。卿瞿曇よ、希有なり。譬へば卿瞿曇よ、倒れたるを起すが如く、蔽はれたるを開くが如く、迷へる者に道を教ふるが如く、又は「眼ある者は諸色を見るならん」とて暗夜に燈火を掲ぐるが如く、斯の如く卿瞿曇は多くの教説もて法を説きたまへり。この我は卿瞿曇と法と比丘衆とに歸依す。卿瞿曇は、今日より以後壽盡くるまで歸依せる優婆塞として我を認受したまへ」。

賤民經畢れり。

註① 本經は註書にては事火婆羅墮闇經(Aggika-Bharadvāja-sutta)の名を表題とせり。漢譯に於ける本經の相當經は雜阿含一〇二經(大正一・二八以下)、別譯雜阿含二六八經(大正二四六七以下)なり。

② 本偈はPs. I, P.160にも出づ。

③ 本偈はSn.98偈及びJ.IV,P.184 參照。

④ 本偈はSn. 100偈 參照。

⑤ 本偈は十誦律卷二(大正二二三・一一二b)「三五六c」、有部毘奈耶卷一〇(大正二二三・六七六a)「有部苾芻尼毘奈耶卷四(大正二二三・九二七b)」参照。

⑥ 本偈はSn. 142 偈に同じ。

⑦ 摩訶(Māraṅga)の物語はSnA. pp.184-191; J. IV, pp.376-389 等に出て。

⑧ 本偈 Sn. 136 偈に同じ。又 SnA. p. 192 に出て。

八 慈經^①

「四三、義に巧なる者がかの寂靜句(涅槃)を

現觀して行ふべき所のことは〔次の如し〕。

有能にして直く且つ端正に、

善語柔和にして且つ過慢ならざれ。 (一)

「四四、足ることを知り且つ養ひ易く、

雜行なくして且つ簡素に暮し、

諸根寂靜にして且つ聰明なり、

傲慢ならず、檀越の家に隨貪せず。 (二)

「四五、また諸識者に非難せらるゝが如き、

いかなる雜(穢)行をも行はされ。

〔但だ斯る慈を修せよ。〕一切有情は
幸福なれ、安穩なれ、福祉あれ、

(三)

一四六、いかなる生物生類たりとも、

怖動者(凡夫)も定立者阿羅漢も、

長身者も又はいかなる大身者も、

中身者も短軀者も微細者も粗大者も、

(四)

一四七、〔目に〕見ゆるも又は見えざる者も、

遠くに住するも遠からざる者も、

已生者^③(漏盡者)も又は求生者も、

〔此等〕一切有情に福祉あれ。

(五)

一四八、互に他を欺瞞すること勿れ、

何處にても何者をも輕賤せされ。

惱害によりて、瞋恚の想によりて、

互に他を苦しめんと欲すべからず。

(六)

一四九、恰かも母が己が獨り子をば、

身命を賭しても守護するが如く、
斯の如く一切生類に對しても、
無量の〔慈〕意をば修習すべし。

一五〇、また一切世間に對して、無量の
慈意をば應に修習すべし。

上に下にまた横に、障礙なき

怨恨なき敵意なき〔慈〕意を修すべし。

一五一、立てるも行けるも坐しつゝも、

臥せるも睡眠を離れ居る限りは、

この〔慈禪の〕念を住立せしむべし。

この〔佛教〕中にてこは〔慈〕梵住と言はる。

一五二、また〔惡〕見に從ふことなく、

戒を具し見を成具せる者は、

諸欲に對する貪求を調伏して、

(七)

(八)

(九)

決して再び母胎に入ることなし。

(10)

慈經畢れり。

註 ① 本經は其儘 Khuddaka-pāṭha p.8 (小誦經第九經)にも出づ。Manoratha-pūraṇī II, p.342 に依れば、本經のことを慈護呪 (Metta-paritta) と稱せり。故に本經は護呪として用ひられるを知る。本經の註によるに本經は雪山の麓にて諸天神のために惱まされたる諸比丘に對して、世尊が護呪として、又業處(禪定觀法の對象)として説きたまへりといふ。

② 以下の二句は Visuddhi-magga p.297 に引用せらる。

③ 「已生者」 (bhūta) 巳に生じて更に生ずることなき阿羅漢を指す。

九 雪山夜叉經

一五三、^{サターギラ}七岳夜叉曰く、

② 今日は十五日の布薩日なり、

天の(輝やかしき)夜は近づけり。

いざ我等は高名ある師

瞿曇に見えなん。

一五四、^{ヘーヴタ}雪山夜叉曰く、

その如き師の意は一切有情に對し、
平等に善く確立し居れるや否や。

また好惡の對象に對し彼の思惟は、
〔善く〕統制せられ居るや否や。

五五、七岳夜叉曰く、

その如き彼の意は一切有情に對し、
〔平等に〕善く確立し居れり。

また好惡の對象に對し彼の思惟は、
〔善く〕統制せられ居れり。

五六、雪山夜叉曰く、

與へられざるを取らざるや否や、
諸生物に對して自制ありや否や、
放逸より遠ざかり居れるや否や、
禪定を遣つることなきや否や。

五七、七岳夜叉曰く、

(三)

(二)

(一)

與へられざるを取ることなし、
また諸生物に對して自制あり、

また放逸より遠ざかり居れり、
佛は禪定を遣つることなし。

二五八、雪山夜叉曰く、

妄語をなさざるや否や、

惡口をなくし居れるや否や、

毀傷の語を言はざるや否や、

〔無義の〕綺語を語らざるや否や。

二五九、七岳夜叉曰く、

彼は妄語をなすことなし、

また惡口をなくし居れり、

また毀傷の語を言ふことなし、

彼は慧智もて〔勝〕義のみを語る。

二六〇、雪山夜叉曰く、

(五)

(六)

(七)

諸欲に染せざるや否や、

〔その〕心混濁せざるや否や、

愚癡を超越せるや否や、

諸法に對して眼を具ふるや否や。

一六一、七岳夜叉曰く、

彼は諸欲に染することなし、

また〔その〕心混濁あるなし、

一切の愚癡を超越し居れり、

佛は諸法に對して眼を具したまふ。

一六二、雪山夜叉曰く、

明を成具し居れるや否や、

〔その〕行爲清淨なりや否や、

彼は諸漏を盡せるや否や、

再有あることなきや否や。

一六三、七岳夜叉曰く、

(一〇)

(九)

(八)

必ず明を成具し居れり、

またその行爲清淨なり、

彼は一切諸漏を盡せり、

彼に再有あることなし。

(一一)

一六三、イ、牟尼の心は〔正しき身と意の業〕と、
〔正しき言語〔業〕〕とを成具し居れり。

明と行とを成具せる彼〔佛〕をば

汝が讚歎するは〔これ如法なり。〕

一六三、ロ、牟尼の心は〔正しき身と意の業〕と、

〔正しき言語〔業〕〕とを成具し居れり。

明と行とを成具せる彼〔佛〕をば、

汝が隨喜するは〔これ如法なり。〕

一六四、牟尼の心は〔正しき身と意の業〕と、

〔正しき言語〔業〕〕とを成具し居れり。

いざ、明と行とを成具し居れる、

(一一、ロ)

瞿曇に我等は見えなん。

(三二)

一六五、鹿の如き輕ある、瘦身なる、

觀智ある、少食なる、動貪なき、

林中に禪思しつゝある牟尼

世尊に、いざ我等は見えなん。

(三三)

一六六、諸欲をば期待することなき、

師子の如き獨行の龍世尊)に、

近づきて我等は問はん、

死の網よりの解脱をば。

(三四)

一六七、宣說者解說者・

一切諸法の悟達者・

怨恨怖畏の越度者たる、

瞿曇佛陀に我等は問はん。

(一五)

一六八、雪山夜叉曰く、

何がある時世間は生起するや、

何に對して親愛はなさるゝや、
何を執取して世間はありや、

何によりて世間は害はるゝや。 (二六)

一六九、世尊宣はく、雪山(夜叉)よ、

六④ある時世間は生起す、

六に對して親愛がなさる、

六のみを執取して世間あり、

六によりて世間は害はる。

一七〇、それによりて世間が害はるゝ

その執取とは何ぞや。

出脱の道を問はれて語りたまへ、

云何にして苦より脱するや。 (一八)

一七一、世間に五種の欲あり、

第六として意が示さる。

此等への欲を離れなば、

斯くせば苦より脱すべし。

(一九)

一七一、世間のこの出脱(の道)を、

汝等に如實に宣説せり。

我は汝等に斯く宣説す、

斯くせば苦より脱すべし」と。

(二〇)

一七三、^④誰が此世の暴流おとるを度るや、

誰が此世の海洋を度るや、

支持なく懸り[擱まる]ものなき

深き生死の大海上沈まざるは誰ぞ。

(二一)

一七四、一切常時に戒を成具し、

慧ありて善く等持(禪定)し、

内に思慮あり念ある者が、

度り難き暴流を度る。

一七五、欲愛の想より離れ、

一切諸縛をば超え、

喜と有とを滅盡せる、
彼は深海に沈むなし。

(二三)

一七八、甚深の慧ありて微妙の義を見、
無所有にして欲有に著せず、

一切處に解脱して天の路を

歩きつゝあるかの大仙を見よ。

(二四)

一七八、高名ありて微妙の義を見、
^④

慧を與へ欲阿賴耶に著せず、

一切を知り善慧あり天の路を

歩きつゝあるかの大仙を見よ。

(二五)

一七八、實に今日は我等に〔義が善く見られ、
^⑩

善く輝やき善く現起せり。

蓋し我等は暴流を度れる

無漏の正覺者に見えたればなり。

一七九、神變を有し名聲ある

(二六)

この〔我等〕一千の夜叉は、

すべて尊師に歸依をなす、

尊師は我等の無上師なり。

(二七)

一八〇、^①この我等は村より村に、

山より山に徘徊せん、

正覺者と善法性の法と、

〔比丘衆とを〕禮拜しつゝ。

(二八)

雪山〔夜叉〕經畢れり。

註① 本經の註によるに、前世にて出家して善根を積みたる二人の者が、或る過失の爲に今生にて夜叉王として生れ、各五百の夜叉の首領として雪山に住する雪山夜叉と、中印度の七岳に住する七岳夜叉とが、世尊の出世成佛を知りて共に來りて佛の説法を聞くことを叙す。漢譯に於て本經に相當するものは、雜阿含一三二九經(大正二三六五。以下)、別譯雜阿含三二八經(大正二・四八三。以下)、義足經卷下兜勒梵志經(大正四・一八三b以下)、立世阿毘曇論卷一、夜叉神品(大正三二・一七七b以下)等に見ゆ。此等の中、立世阿毘曇論が本經に最も近く義足經これに次ぎ、雜阿含諸經は最も本經に遠し。されど右の漢譯諸經相互の關係は其等が本經に對する關係よりも近きものあり。

② 以下の二偈は A.A. I, p.239 に引用せらる。

③ 本偈の前半と次偈とは S.I.P.16 にも出づ。

④ 次の二偈は S.I.P.41 にも出づ。此等の漢譯相當偈は雜阿含一〇〇八經(大正二・二六四 a)、雜阿含一三二六經(大正二・三六四 c)、別譯雜阿含二三五經(大正二・四五九 a 以下)、有部毘奈耶卷四七(大正二・三・八・八・四 c)に見ゆ。

⑤ 六とは眼・耳・鼻・舌・身・意の六内處と色聲香味觸法の六外處とを指す。

⑥ 本偈は S.I.P.16 にも出づ。Maitavastu III, P.417, 雜阿含六〇二經(大正二・一・六・一 a)、別譯雜阿含一七七經(大正二・四・三・八 a 以下)参照。四分律卷三二(大正二・二・七・九・二 o 以下)の偈も多少本偈に類似す。

⑦ 以下の三偈は S.I.P.53, 雜阿含一二六九經、一三一六經(大正二・三・四・八 c)、三六一 b 以下)、別譯雜阿含一七八經、三一五經(大正二・四・三・八 b)、四七九 c)、瑜伽師地論卷一八(大正三・〇・三・七・六 b) 参照。

⑧ 本偈は S.I.P.33 にも出づ。

⑨ 欲阿賴耶(Kamalaya)とは欲に對する渴愛と邪見との二を指す。阿賴耶は執著の義なり。

⑩ 本偈前半はその表面的意味は實に今日は我等は善き日を迎へたり美はしく曉が明け、氣持よく起き出でたり、ならんも、その内面的意味は譯出の如くなるべし。

⑪ 本偈は S.n. 192 偈 參照。

一〇 暝野(夜叉)經^①

是の如く我聞けり。一時世尊は曠野の曠野夜叉の棲處に住したまへり。時に曠

アラヤー
アラガ

野夜又は世尊の許に近づきたり。近づきたる後、世尊に白して言く、「沙門よ、去れ。」
友よ、唯諾」とて世尊は去りたまへり。「沙門よ、入れ。」友よ、唯諾」とて世尊は入りたまへり。
再び曠野夜又は世尊に白して言く、「沙門よ、去れ。」友よ、唯諾」とて世尊は去りたまへり。
三たび曠野夜又は世尊に白して言く、「沙門よ、去れ。」友よ、唯諾」とて世尊は去りたまへり。
四たび曠野夜又は世尊に白して言く、「沙門よ、去れ。」汝が應に作すべきことをなせ。

沙門よ、我は汝に質問をなさん。若し汝我に解答せざれば、我は汝の心を錯亂せしめん、或は汝の心臓を引き裂かん、或は汝の兩足を捉へて恒河の彼岸に投ぜん。友よ、我は天を含めたる魔を含めたる梵天を含めたる世界に於て、沙門婆羅門を含めたる、天と人を含めたる人々の中に於て、我が心を錯亂せしめ、或は(我が)心臓を引き裂き、或は(我が)兩足を捉へて恒河の彼岸に投する者あるを見ず。されど友よ、汝若し〔問はんと欲せば問へ〕。時に曠野夜又は世尊に偈を以て白さく、

一八一、此世にて何が人の最勝の富なりや。

いかなる善行が樂を齎らすや、

實に何が味中の美味なりや、

云何なる命を最勝の命と云ふや。

一八、此世にて信が人の最勝の富なり、

〔施戒等の〕法善行が樂を齎らす、

實に第一義諦が味中の美味なり、

慧命をば最勝の命と云ふ。

(二)

一八、^三云何にして暴流を度るや、

云何にして海洋を度るや、

云何にして苦を越度するや、

云何にして遍淨となるや。

(三)

一八、^四信によりて暴流を度る、

不放逸によりて海洋を〔度る〕、

精進によりて苦を越度す、

慧によりて遍淨となる。

(四)

一五、云何にして慧を得るや、
云何にして財を得るや、
云何にして稱譽を獲るや、
云何にして友と結ぶや、
云何にせばこの世界より

一六、他の世界に至りて愁ひざるや。
涅槃を獲得せんがために、

諸阿羅漢の法を信じつゝある
不放逸なる聰慧者が、

聞欲によりて慧を得。

一七、適當に行じ荷負に耐へ、

奮闘する者が財を得、

〔眞諦〕によりて稱譽を獲、

〔所欲を興ふる者が友を結ぶ。〕

一八、諦と法と堅固心と捨との

(五)

(六)

(七)

此等四法が、信を主とする

在家生活者に存しなば、

彼こそは〔他界に至りて愁へず。〕

一八九、若し諦調御捨忍辱よりも、

勝れたるもの茲に存しなば、

いざ〔其等〕他のものをも廣く

〔他の〕沙門婆羅門等に問へ。

一九〇、今や廣く〔他の〕沙門婆羅門等に、

問ふべきもの云何が〔存せん〕。

この我は今日〔現世のみならず〕、

後世〔安穏〕の義〔原因〕をも知解せり。

一九一、實に我を饒益せんがために、佛は曠野に住すべく來りたまへり。

この我は今日、何處に布施せば大果ありやを知解せり。

(八)

(九)

(一〇)

(一一)

一九二、この我は村より村に、
城より城に徘徊せん、

正覺者と善法性の法と、

〔比丘衆とを〕禮拜しつゝ。

(111)

曠野〔夜叉〕經畢れり。

註① 本經は曠野夜叉に對する佛の化導を説く。本經は殆んど其儘の形にてS.I., pp.213-215 (S. 10, 12, Alavani) にも出づ。漢譯としては雜阿含一三二六經(大正二・三六四b以下)、別譯雜阿含三二五經(大正二・四八二c以下)、有部毘奈耶卷四七(大正二・三・八八四b以下)參照。此等漢譯相當經の中、雜阿含三二五經が最も本經に近し。

② 以下の二偈は前註の諸經及びS.I., p.42にも出づ。雜阿含一〇一三經(大正二・二六五a)、別譯雜阿含二四〇經(大正二・四六〇a)出曜經卷一二(大正四・六七三a)、法集要頌經卷一(大正四・七八二a)に此等の相當偈あり。

③ 以下の二偈は前註の諸經に出づる外、雜阿含六〇三經、一三二九經(大正二・一六一a以下)、三六七a)、別譯雜阿含三二八經(大正二・四八五a)、瑜伽師地論卷一八(大正三〇・三七五c以下)參照。

④ 本偈はMII. P.36に引用せらる。尙ほ本偈に相當する偈は大毘婆沙論卷一四二(大正二・七・七三一c)、阿毘曇毘婆沙論卷三七(大正二・八・七三c)に見ゆ。

⑤ 本偈及び一八七偈に稍々類似せる偈は雜阿含一二八二經(大正二・三・五三a)、別譯雜阿

舍二八〇經^三二五經(大正二・四七一 b・四八三 a)、瑜伽師地論卷一八(大正三〇・三七五 b)に出づ。

⑥ 本偈は出曜經卷一二(大正四・六七三 b)、法集要頌經卷一(大正四・七八二 a 以下)参照。

⑦ 本偈前半は KhpA. p.139 に引用せらる。

⑧ 以下の二偈に相當する偈は雜阿舍一三二九經(大正二・三六七 a)にも見ゆ。一八九偈後半は SA.I,p.26 に引用せらる。

◎ 本偈は DA.I,p.232; MA.I,p.133; AA.II,p.110 に引用せらる。尙ほ一八〇偈参照。

一一 征勝經^①

一九三、或は歩き、或は立ち、

或は坐し、或は臥し、

[身を]屈し伸ぶる、

これ身の動作なり。

一九四、骨と腱とが結び付き、

深皮と肉とが上に塗著し、

表皮もて蔽はれ居る[が故に]、

身は如實に見られず。

(一)

(二)

一九五、身は腸に充ち、胃に充ち、

肝臓に[充ち]、また膀胱に[充ち]、

心臓に[充ち]、肺臓に[充ち]、

腎臓に[充ち]、また脾臓に[充ち]、

一九六、湧に[充ち]、唾液に[充ち]、

汗に[充ち]、また^{あぶら}肪に[充ち]、

血に[充ち]、關節滑液に[充ち]、

膽汁に[充ち]、また膏に[充つ]。

一九七、またこの「身の」九孔よりは

一切常に不淨が漏る。

〔即ち眼よりは眼垢が流れ〕、

耳よりは耳垢が[流れ]、

一九八、また鼻よりは湧が[流れ]、

口よりは時には膽汁を吐き、

また時には痰を吐き、

(五)

(四)

(三)

身よりは汙水が〔流る〕。

(六)

一九、またかの頭は空洞にして、

〔その中は脳もて充滿せり。〕

愚者は無明に障へられて、

〔その身〕を淨なりと思ふ。

(七)

二〇、されど〔その身〕が死して、

膨脹し青瘀となり、

墓場に棄てられ横はれば、

親兄弟も〔これを〕顧みず。

(八)

二一、〔その屍〕をば狗が瞰ひ、

また野干・狼・蛆蟲が〔瞰ひ〕、

また鶴や鷺が〔これを〕瞰ひ、

また其他の生物の瞰ふあり。

(九)

二二、佛の語を聞き已りて、

この〔佛教〕中にて有慧の比丘は、

實にその身の不淨を遍知す、
蓋し、彼は如實に見ればなり。

(一〇)

二〇三、この生身の如くがの屍も同じ、
かの屍の如く、この生身も同じ。

内部に於てもまた外部に於ても、
身に對する欲を應に離るべし。

二〇四、欲貪を離れたるかの

有慧の比丘はこの佛教中にて、
甘露寂靜にして死あるなき
涅槃句をば證得したり。

(一一)

二〇五、この人間の身は愛護さるゝも、
實は不淨にして惡臭あり。

種々の汚穢もて充滿し、
此處彼處より垢穢流漏す。

二〇六、斯の如き不淨の身を有し乍ら、

(一二)

[自らを高揚せんことを思ひ、

又は他人を輕視せんとする者は、

無見の愚盲者に非ずして何ぞや。

(一四)

征勝經畢れり。

註①註書にては本經の表題を身斷壞經 (Kāyavacchedanika-sutta) となす。本經の由來は註によ
るに佛の迦尼羅城訪問によりて多くの釋迦族の子弟は出家せり。醯摩迦釋迦王 (Khe=
maka-Sakkarāja) の娘にして佛弟難陀の許嫁たる國中第一の美人 Janapada-kalyāñi-Nanda
(即ち孫陀利難陀)も夫を失ふ等の爲に餘儀なく出家せしも眞に佛教に信入せしに非ず。
世尊は彼女の欲心を止め世の無常を感じしめんが爲に妙齡の絶世の美人を化作して
自己に侍せしめ化女は最初十五六歳なりしも次第に二十歳、三十歳、四五十歳乃至百歳
の老嫗となりて昔日の佛もなく老衰し、遂に死して横はり、その死屍は膨脹し腐敗し爛
壊し白骨と化することを化現せしめ給ひ、遂に彼女をして正しき修行に入り阿羅漢果
を成ぜしめたまへり。本經は其際に於ける彼女への説法なりといふ。本經の經名た
る征勝經とは欲愛の征服を説ける經の意味ならんか。註書の如く身斷壞經とするが
經名としては適切なり。孫陀利難陀の右の物語は本經の註 (SnA. pp.241-243) の他に
DhpA. III, pp.113-119 にも出づ。

②以下の大偈は J.I, P.146 にも出づ。

③九孔 (nava sotā) とは兩眼・兩耳・兩鼻孔・口・大小便道を指す。

④本偈は Thag. 453 偈にも出づ。

一一 卒尼經^①

一一七、親暱(渴愛邪見)より怖畏生ず、

居家(所縁)より〔煩惱〕塵垢生ず。

親暱ならず居家なきは、

これ實に牟尼の見なり。

(二)

一一八、已生〔の煩惱〕を斷絶して生長せしめず、
現生〔の煩惱〕をしてそれに委せざる者
彼を諸牟尼中〔第〕一行者と云ふ。

(三)

かの大仙は寂靜涅槃句を見たるなり。

一一九、〔煩惱の事(根基)〕を考量して〔その〕種子を亡ぼし、
愛潤をしてそ〔の活動〕に委せざる、

生の盡滅の邊を見たるかの牟尼は實に、

〔不善尋を捨斷して〔輪廻の〕數に入らず。 (三)

三〇、一切諸の住著を了知し已りて、

其等の一つをも欲求することなく、

離貪して貪求なきかの牟尼は實に

勤求せず、蓋し彼岸に達し居ればなり。 (四)

三一、一切に勝ち、一切を知り、善慧あり、

一切諸法に塗著することなく、

一切を捨て、渴愛盡き解脱せる者、

彼をも諸の賢者は牟尼なりと知る。

三二、慧力あり戒と務めを具備し、

等待して禪を楽しみ念あり、

著より脱して障礙なく漏なき者、

彼をも諸の賢者は牟尼なりと知る。

三三、獨り行じつゝある不放逸なる牟尼、

師子が諸聲に駭怖せざるが如く、

風が網に著せざるが如く、

(六)

(五)

蓮葉が水滴に塗著されざるが如く、
毀譽褒貶に對して動ずることなく、
他を導き他に導かれざる者、
彼をも諸の賢者は牟尼なりと知る。

(七)

三四、他の人々が極端の毀譽語をなすも、
水浴場の柱の如くに泰然と振舞ひ、
貪を離れ諸根をよく等持せる者、
彼をも諸の賢者は牟尼なりと知る。

(八)

二五、棊の如く端直に自ら住立し、
不正と正とを觀察しつゝ、

諸の惡業をば嫌忌する者、
彼をも諸の賢者は牟尼なりと知る。

(九)

二六、自己を禁制して惡を行はず、
幼年にも中年にも牟尼は自ら制す。
自ら惱害されず誰をも惱害せざる、

彼をも諸の賢者は牟尼なりと知る。 (一〇)

(一〇)

三二七、他の施に依存する者が上より(食)、

中より(食)又は殘餘よりの食を得るも、

賞むることなく貶ることなき、

彼をも諸の賢者は牟尼なりと知る。 (一一)

三二八、青壯時にいかなる[女色]にも縛著せず、

姪を離れて行ずる牟尼、

橋と放逸とを離れ解脱せる者、

彼をも諸の賢者は牟尼なりと知る。 (一二)

三二九、世間を了知して第一義を見たる者、

暴流と大海とを越度せるが如き者、

繫縛を斷じ依止なく漏なき彼、

彼をも諸の賢者は牟尼なりと知る。 (一三)

三三〇、[在家出家の]兩者は住所も生活も隔りて等しからず。

在家者は妻子を養ひ、善務者(漏盡者)は我執なし。

在家者は他の生物を害せざらんと自ら制せず、

牟尼は自ら制して常に諸の生物を守護す。(一四)

三二、^④恰かも空を翔ぶ青頸の孔雀が、

〔金〕鵠の速力に決して及ばざるが如く、
斯の如く在家者は禪思しつゝ林中に
遠離せる牟尼比丘に及ぶことなし。

(一五)

牟尼經畢れり。

蛇品第一畢れり

その攝頌、

蛇と陀尼耶と〔犀〕角とまた耕田と、
純陀と敗亡と賤民と慈の修習と、
七岳と曠野と征勝とまた牟尼と、
此等十二の經をば蛇品とは言ふ。

註① 本經は註によるに一時に一人の人に説かれたるものに非ず、種々の人に種々の場合に、
牟尼(眞實の比丘)に關して説かれたるものを集めたるものなり。

② 本偈は Mil. P.211; P.385 に引用せらる。

③ 本偈は S. II, P.284, 雜阿含一〇七一經(大正二・一・一七八。)、別譯雜阿含一〇經(大正二・三・六。)参照。

④ 務め(vata)とは頭陀支(dhutanga)のことなり。頭陀に關しては清淨道論第二品参照。

⑤ 本偈は Mahāvastu III, p.110. 四分律卷一六(大正二・二・六・七三。)参照。

⑥ 以下の三句は Sn. 71 偈参照。

⑦ 本偈は DhP. IV, P.99 に引用せらる。

⑧ 上よりの食とは齋より最初に取出したる食なり、中よりの食とは中程まで取出されたる齋より取り來れる食なり、餘よりの食とは齋に一匙二匙残れるを取り來れる食なり。

⑨ 本偈に相當する偈は別譯雜阿含卷一(大正二・三・七四。)、三法度論卷上(大正二・五・一・七。)大智度論(大正二・五・八・四。)に見ゆ。

一一 小 品

一 實 經

茲に來集せし諸の鬼神は、

地上なるも又は空中なるも、

一切諸鬼神は幸福なれ、

また恭敬して[我が]所說を聞け。

(一)

二三三、されば一切諸鬼神よ傾聽せよ。

人類に對して慈をば行へ、

書も夜も供物を運ぶ彼等を、

かるが故に不放逸にして護れ。

三四、此世他世のいかなる財富も、

諸天界の勝れたる財寶も、

如來_(寶)に等しきものあるなし、

これ即ち勝れたる佛寶なり。

この眞理によりて吉瑞あれ。

二三五、⁶等持(入定)の釋迦牟尼が證得せし、

勝れたる滅盡離貪_(甘露)の法、

これ即ち勝れたる法寶なり。

この眞理によりて吉瑞あれ。

二三六、最勝の佛が讚歎する淨_(定)、

これを世人は無間定と云ふ、

(三)

(四)

その定に等しきものあるなし。

この眞理によりて吉瑞あれ。

三二七、諸善人に賞讃せられたる八輩、

〔即ち〕此等四雙なる〔僧衆〕は、

これ善逝の弟子應施者なり。

彼等に施せるものは大果あり、

これ即ち勝れたる僧寶なり。

この眞理によりて吉瑞あれ。

三二八、堅固なる意もて善く努力し、

瞿曇の教中にて無欲なる者、

彼等は應達に達し甘露に入り、

得已りて所作なく寂定を受く、

これ即ち勝れたる僧寶なり。

この眞理によりて吉瑞あれ。

三二九、^⑨恰かも帝柱〔界標〕が大地に依止して、

(五)

(六)

(七)

四方よりの風に動ぜざるが如く、
その如く不動にして諸聖諦をば
諦觀する者を我は善人と言ふ、
これ即ち勝れたる僧寶なり。

この眞理によりて吉瑞あれ。

三〇、^⑩甚深の慧者がよく説示したまひし

諸聖諦をば分明ならしむる人々、
彼等は假令屢々放逸なりと雖も、
彼等は第八の有を取ることなし、
これ即ち勝れたる僧寶なり。
この眞理によりて吉瑞あれ。

三一、^⑪見の成具と共に、彼には

實に三法が捨てられたり、

[即ち]存在するあらゆる身見と、
疑と及び戒禁取となり。

また四惡趣より解脱し、

且つ六重罪を犯す能はず、

これ即ち勝れたる僧寶なり。

この真理によりて吉瑞あれ。

二三一、假令彼は身をもて語をもて、

また心もて惡業を行ふと雖も、

彼はそを隱蔽する能はず〔懺悔す〕、

見涅槃句者は〔隠す能はずと說かれたり〕、

これ即ち勝れたる僧寶なり。

この真理によりて吉瑞あれ。

二三二、恰かも夏月中の初夏〔の月〕に、

林や叢にて花の満開せるが如く、

その如く涅槃に至る優れたる

法を第一利益のために説ける、

これ即ち勝れたる佛寶なり。

(一〇)

(一一)

この眞理によりて吉瑞あれ。

(二二)

三四、優者知優者施優者優の將來者。

無上者にして優れたる法を説ける、

これ即ち勝れたる佛寶なり。

この眞理によりて吉瑞あれ。

(二三)

一三五、古き〔業〕は已に盡き、新しきは生ぜず、

未來の有に對して〔その〕心離貪し、

種子の盡き欲の增長するなき彼等
諸の賢者はかの燈明の如く寂滅す、

これ即ち勝れたる僧寶なり。

この眞理によりて吉瑞あれ。

(一四)

一三六、茲に來集せし我等諸の鬼神は

地上なるも又は空中なるも、

如來せし、人天に供奉されし、

佛をば禮せん、有情に吉瑞あれ。

(一五)

三七茲に來集せし(我等諸の鬼神は、
地主なるも又は空中なるも、

如來せし人天に供奉されし、
法をば禮せん〔有情に〕吉瑞あれ。

(一六)

三八茲に來集せし我等諸の鬼神は、

地上なるも又は空中なるも、
地上なるも又は空中なるも、

如來せし人天に供奉されし、

僧をば禮せん〔有情に〕吉瑞あれ。

(一七)

寶經畢れり。

註①註書によるに、毘舍離に饑饉等の災禍が生じたる時、毘舍離の離車族はこれを除かんと
欲して、王舍城に至りて世尊を毘舍離に招請せり。世尊は毘舍離に赴きて、その災禍を
除かんが爲に本經を説かれたりとす。本經は其儘の形にて Khuddakapatha pp. 3-6 (小
誦經第六經)にも出づ。 Milinda-pañha p. 150; Visuddhi-magga p. 414; Samantapāśādikā p. 159;
Pts A.I, P. 367 等には世尊の説かれたる護呪 (paritta) として本經の名を最初に挙げ、
Manoratha-purani II, P. 342 には本經のことを寶護呪 (Ratana-paritta) とせり。故に本經は重
要なる護呪經として用ひられしことを知る。尙ほ本經に相當すべからむの Mahavastu
I, pp. 290-295 ありて、兩者は類似極めて多し。

② 本偈は *Mahāvastu I*, P.290 參照。

③ 本偈は *ibid.* p.294 參照。

④ 本偈は *ibid.* p.290f 參照。

⑤ 以下の 三偈は *ibid.* p.291 參照。

⑥ 「無間定 (ānantariya-samādhi) とは無漏の道定 (magga-samādhi) を云ふ。この定の無間(直後)に何等の障礙なくして直ちに樂果を得るが故に無間定と云ふ。」

⑦ 八輩 (attha puggalā) とは八種の聖者、即ち須陀洹向・須陀洹果・斯陀含向・斯陀含果・阿那含向・阿那含果・阿羅漢向・阿羅漢果なり。四雙 cattāri yugāni とは向と果の二を雙(一對)となしたる右の須陀洹乃至阿羅漢の四雙なり。

⑧ 本偈は *Mahāvastu I*, P.293 參照。

⑨ 本偈は *ibid.* p.292 參照。

⑩ 本偈は *ibid.* p.29f 參照。

⑪ 第八の有を (bhavam atthamain) 云々、聖諦を見て須陀洹となれば、最劣者と雖も極七反生と云ひて、今後最極の場合七回生存世界(有)に生じ其後に般涅槃して更に有に來らず。故に見道を得たる聖者には第八回の有を受くることなし。

⑫ 本偈は見道を得たる者に關して説けるなり。本偈は *Kathā-vattu* p.109; p.179; p.185f; p.193 に引用せらる。尙ほ *Mahāvastu* p.291f 參照。

⑬ 四惡趣 (cattāro apāyā) とは地獄・餓鬼・畜生・阿修羅なり。

⑭ 「六重罪」 (cha abhīthānani) とは殺母・殺父・殺阿羅漢・出佛身血・破和合僧の五逆罪に他師(外學)に就くことを加へたるものなり。

「三九〔苦行婆羅門帝須迦葉佛に曰く〕「穢・デイニングラカ・支那豆、
葉果・根果・蔓果〔等の食物を〕、
諸の善人は如法に得て食しつゝ、
欲を欲せず、虚偽を語らず。
一四〇、善く調理し善く炊ぎたる、
他人の淨施の美味を喫しつゝ、
〔且つ〕米飯を食しつゝある者、

二 臭穢經 ①

- ⑯ 本偈は Mahāvastu I, P. 292 參照。
- ⑯ 本偈は Ibid. P. 294 參照。
- ⑰ 本偈は Ibid. P. 293 參照。
- ⑱ 「如來せし」(Rathagata) は元來「如來」にして本偈の場合には「如來」と譯して可なるも、次の二偈は「法と僧」とを指すが故に、「如來」と譯されず、故に全部に共通せしめて「如來せし」と譯せり。以下二句は Mahavastu I, P. 295 參照。

- ⑲ 本偈の後半及び次偈の後半は Uda, P. 153 に引用せらる。

彼は迦葉よ、臭穢を食するなり。

(三)

一四一、梵天の親類〔婆羅門〕たる汝は、

善く料理せる鳥の肉と共に
米飯を食しつゝ「我は臭穢を
許さず」と斯く言説す。

迦葉よ、我は汝にこの義を問ふ、

汝の臭穢はいかなるものなりや。

(三)

一四二、〔迦葉佛宣はく〕生物を殺し、打擲し、切斷し、繩縛し、
盜取し、妄語し、瞞著し且つ詐欺し、

邪曲を習誦し他人の妻に親近する、

(四)

これ臭穢なり、實に肉食は然らず。

一四三、此世にて諸欲を自ら制せざる人々、

諸味を貪求し、不淨〔業〕に混入せる者、

空無見者不正業者化導し難き者、

これ臭穢なり、實に肉食は然らず。

(五)

二四四、粗暴冷酷にして噉背肉(陰口を言ひ)し、
友を裏切り、慙懼なくして過慢あり、
また吝嗇にして誰にも施すなし、
これ臭穢なり、實に肉食は然らず。

二四五、忿と憤と剛情と反抗心とあり、

詭あり、嫉妬あり、自ら賛揚して語り、
慢あり、過慢あり、諸不善者と親しむ、
これ臭穢なり、實に肉食は然らず。

二五六、惡性にして債務を果さず、讒謗し、

詐りの言説あり、茲に假面を被り、

此世の最下の人にして罪惡をなす、
これ臭穢なり、實に肉食は然らず。

二五七、此世にて生物に對して禁制なき人、

他の〔金品〕を取り、加害を事とする者、
惡戒・殘忍・粗語にして他人を敬せず、

(六)

(七)

(八)

これ臭穢なり、實に肉食は然らず。

(九)

二四八、此等**生物**に貪求し違背し侵害し、

常に**惡事を**事とし、死しては闇に至り、
頭を下にして地獄に墮つべき諸有情

これ臭穢なり、實に肉食は然らず。

(一〇)

二四九、**魚肉獸肉**の不食も、斷食も、裸體も、

圓頭も、結髮も、塗塵も、獸皮服も、

火への供養の營みも、又は世間にて
不死を得んがための多くの苦行も、

眞言(吠陀)も、祭祀も、犠牲も、季節の荒行も、

疑惑を越度せざる人を淨むるなし。

二五〇、通路(六根)を護り、根に勝ちて行ぜよ、

(一一)

〔諦法に住立し質直と柔軟を樂しみ、
執著を去り、一切の苦を捨断したる、
賢者は見聞せしものに染著せず。〕

(一二)

二五一、斯くこの義をば世尊は反復して説きたまへり。

真言(吠陀)に通曉せる化導し難き[帝須婆羅門]は、牟尼が種々の偈をもて説明したまへるが故に、

臭穢なく依著なくなりて、ぞ(の義)を知りぬ。(111)

二五二、佛の善説したまへる——一切苦を薄くする、

臭穢なき——(涅槃句)を聞き已りて、

[かの婆羅門は謙虛の意もて如來を禮拜し、

其場にて出家せんことを乞へり。

(一四)

臭穢經畢れり。

註① 本經は魚や肉を以て臭穢(なまぐさ物)と考へ、それを食せざることを聖者の條件なりと

信じ居たる苦行婆羅門の爲に、世尊が迦葉佛の臭穢説法を持ち來りて説かれたるものなり。即ち過去の迦葉佛の時に魚や肉を以て臭穢なりと信じたる帝須婆羅門の爲に、迦葉佛は眞の臭穢とはいがなるものなりやに關する説法をせられたり。即ち本經なりとす。

② 魚[肉・獸]肉[の不食]も、斷食も……なし(na maccha-mainsam nānāsakattai) 註によるに、古人は、魚も肉も斷食も……なしと解釋するも、魚と肉との不食も……なし(na maccha-ma-nissānānāsakattai), と解するを可なりとす。但し今は古説によりて讀めり。

◎季節の荒行 (utupasavana) とは、暑夏には太陽に照され、雨期には屋根の下に入らずして樹下に住し、冬期には水中に入る等の習行なり。

❶「根に勝ちて」(vijitindriya) 異本及び註書に於ては vijitindriya (根を知りて)となし、「智遍知を以て六根を知り、六根を明察して」と註せり。

三 懈經^①

一五三、慚を超えつゝ〔これを〕嫌忌する者、

我は〔汝の親友なり〕と語りつゝも、

〔自ら〕可能の所業を引受けざる者、

彼を「これ我が〔友〕ならず」と知るべし。 (一)

一五四、實の伴はざる愛語をば、

諸の友に對して語る者を、

言ふのみにて行はざる者

と諸の賢者は遍知す。 (二)

一五五、常に怠らず不和〔なるに非ざるや〕を疑惧し、

〔友の〕缺點のみを見る者はこれ友ならず。

〔母の〕胸に在る子の如く、彼に我身を托し〔信頼し〕、

他の人々に裂かれざる者が眞の友なり。(三)

一五六賞讃を將來する〔涅槃の〕樂果を

期待する者は、寧人間に適せる

負擔〔四正勤〕を運びつゝ、喜悅を

生ずる原因〔たる精進〕を修習す。

(四)

一五七遠離〔最上異〕の味と寂靜〔涅槃〕の

味とを飲み已りて、法の喜の

味を飲みつゝある者は

惱苦なく惡徳あるなし。

慚經畢れり。

(五)

註①本經五偈は、世尊が一苦行婆羅門より、「いかなる友は親近すべからざるや、いかなる友に親近すべきや、いかなる加行を修すべきや、いかなる味が最上なりや。」の四問を意中にて質問せられて、世尊は彼の心を察して返答説法せられたるものなりといふ。本生經三六三慚本生物語 (Hiri-jātaka, J. III, p.196) には同じくこの五偈が二五四偈前半に於て相違せる以外は全同の形を以て出で、而もこの説法は本經の註の如く釋尊の説法とせ

ずして、釋尊前生の菩薩たる波羅奈の長者のなせしものとせり。更に本經五偈と同源より出でたるものに漢譯雜阿含九七八經(大正二・二五三c)、別譯雜阿含二一二經(大正二四五三a)以下等あり。此等に於てはその說法は釋尊のものにして本生話に非ずと雖も、その說法因縁は本經のものと大いに異れり。思ふに、既に說時說處說法因縁等の忘れられて斯る偈のみとして傳承せられたるを、後人がそれに種々の因縁物語を附して、現在の如き種々の經典となりしものならんか。

②本偈はJ. III : P.152fにも出づ。

四 大吉祥經

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衛城の祇樹給孤獨園に住したまへり。時に一人の麗はしき容色の天神あり、夜半を過ぎたる頃、隅なく祇樹園を照らし、世尊の許に近づけり。近づきたる後世尊を禮して一方に立てり。一方に立ちたるかの天神は世尊に偈を以て白せり。

二五六、多くの諸天諸人等は、

諸の福祉をば望みつゝ、
諸の吉祥を思念せり。

〔我に最上の吉祥を語りたまへ。〕

(二)

二五九、諸の愚者に親近せずして、

諸の賢者に親近し、

また供奉すべき者に供奉す、

これ最上の吉祥なり。

(三)

二六〇、適當なる場所に住し、

前世にて福を積み居り、

自ら正しき誓願ある、

これ最上の吉祥なり。

(三)

二六一、^④多聞(博識)と工巧と、

調伏と善く學せると、

善く説かれたる語とは、

これ最上の吉祥なり。

(四)

二六二、母や父への孝養と、

子や妻の攝取(扶養)と、

混濁なき正しき業務とは、

これ最上の吉祥なり。

(五)

二云三、布施と如法なる行爲と、

諸の親戚の攝取(愛護)と、

罪なき諸の行業とは

これ最上の吉祥なり。

(六)

二云四、惡行を樂しまずして離れ、

且つ飲酒をば自ら禁制し、

また諸法に於て不放逸なる、

これ最上の吉祥なり。

(七)

二云五、敬重と謙讓と、

満足と知恩と、

時々の聞法とは、

これ最上の吉祥なり。

二云六、忍辱と柔和と、

これ最上の吉祥なり。

(八)

諸沙門に見ゆると、

時々の法談とは、

これ最上の吉祥なり。

二六七、苦行(離惡)と梵行と、

〔四〕聖諦を見ること、

涅槃の作證とは、

これ最上の吉祥なり。

二六八、諸の世間法に觸るとも、

その心動搖することなく、

無憂離塵安隱なるは、

これ最上の吉祥なり。

二六九、斯の如きを行ひ已りて、

一切處にて不善に敗れず、

一切處にて福祉に至る人々、

彼等にかの最上の吉祥あり。

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

大吉祥經畢れり。

註① 本經は吉祥に關する諸天への說法にして、本經其儘の形に於て Khuddaka-pātha p.2f (小誦經第五經)に吉祥經の名に依て出づ。尙ほ法句經卷下吉祥品(大正四五七五a)、法句譬喻經卷四、吉祥品(大正四六〇九a以下)中には本經の諸偈と比較的よく一致し、又は類似する偈多し。

② 本偈は成實論卷一(大正三二二一四七b)参照。

③ 本偈は J. III, p.369 に引用せらる。

④ 諸の世間法 (loka-dhamma) とは利得 (labbha)、不利得 (alabbha)、名聲 (yasa)、不名聲 (ayasa)、賞讚 (pasanīsa)、毀訾 (ninda)、樂 (sukha)、苦 (dukkha) の八法なり。

五 鈿毛夜叉經^①

是の如く我聞けり。一時世尊は伽耶村のタンキタ石床の針毛夜叉の棲處に住したまへり。爾の時粗皮夜叉と針毛夜叉とが世尊の附近を通過せり。時に粗皮夜叉は針毛夜叉に告げて曰く、「こは沙門なり」。そが沙門なりや又は似而非沙門なりやを我が知る迄は、これ沙門ならず、これ似而非沙門なり。時に針毛夜叉は世尊の許に近づけり。近づきたる後、世尊の身に近接せり。時に世尊は身を避けたまへり。時に針毛夜叉は世尊に白して言く、「沙門よ汝は我を怖るゝや」。友よ、我は汝を怖れず。

但だ汝に觸るゝは惡し、「故に我は避けたり」。沙門よ我は汝に質問をなさん。若し汝我に解答せざれば我は汝の心を錯亂せしめん、或は汝の心臓を引き裂かん、或は汝の兩足を捉へて恆河の彼岸に投ぜん。友よ我は天を含めたる魔を含めたる、梵天を含めたる世界に於て、沙門婆羅門を含めたる天と人とを含めたる人々の中に於て、我が心を錯亂せしめ、或は〔我が〕心臓を引き裂き、或は〔我が〕兩足を捉へて恆河の彼岸に投する者あるを見ず。されど友よ、汝若し〔問はんと〕欲せば問へ。時に針毛夜又は世尊に偈を以て白せり。

二七〇貪欲と瞋恚とはいかなる因縁より起るや、

不樂と樂と身毛堅立とは何より生ずるや、
何の等起によりて諸不善尋は〔善き〕意をば、

童子等が鴉を放つが如くに〔放捨〕するや。(二)

二七八貪欲と瞋恚とはこの〔身體の〕因縁より起る、

不樂と樂と身毛堅立とはこゝ〔身體〕より生ず、
この〔身體の〕等起によりて諸不善尋は〔善き〕意をば、
童子等が鴉を放つが如くに〔放捨〕するなり。(三)

一一七一、〔貪欲乃至不善尋は〕親愛より生じ自己中に發生す、

恰かも尼拘律樹(榕樹)に寄生木が〔生ずるが〕如く。

〔貪欲乃至不善尋は〕廣く諸欲に繫著し居れり、

恰かも林中に蔓草が擴がり居れるが如く。

(三)

一一七三、〔その煩惱〕がいかなる因縁より生ずるやを知る人々は、

〔その煩惱〕を除去す。——夜叉よ聞け——

彼等はこの度り難き曾て度りたることなき、

〔三〕界の暴流を度り再有あることなし。

(四)

針毛〔夜叉〕經畢れり。

註① 本經は其儘 S.I, p.207f (S.10,3, Südloma) にも出づ。漢譯相當經として雜阿含一三一四經 (大正二・三六一-a 以下) 別譯雜阿含三一三經、三二三經(大正二・四七九b、四八一c 以下) 等あり。

② 以下の四偈に相當する偈は瑜伽師地論卷一八(大正三〇・三七六。)にも見ゆ。

③ 本偈は MNd. p.16, p.364, p.471; Cnd. p.352 (小義釋はシャム本)に引用せらる。本偈に相當するものは上掲の漢譯雜阿含、別譯雜阿含等には存せず。

六 法行經

一七四、²〔善き〕法行と梵行とは、

これ最上の力〔寶〕と云はる。

假令在家より非家に

出家せし者なりとも、

一七五、若し彼龜語を語り、

加害を楽しむ黙〔人〕なりせば、

彼の命は〔在家よりも〕更に悪く、

〔彼は〕自己の塵垢を増す〔のみ〕。

一七六、争鬪を楽しむ比丘は、

愚癡の法によりて障へられ、

〔諸善友より訓〕言せらるとも、

佛の説きたまへる法を知らず。

一七七、〔彼は〕百修習せし者を加害し、

無明のために先行せられて、

(二)

(三)

(一)

雜染が地獄に至るべき
道なることを知らず。

二六、彼は墮處(惡趣)に陥り、

胎より胎に、闇より闇に至る。

斯の如きかの比丘は、

死して後、種々の苦を受く。

二七、恰かも糞坑が長年月に、

[糞もて]充满して[淨め難きが]如く、
その如く種々の汚染ある人は、

清淨となること實に難し。

二八、斯の如き(比丘)をば諸比丘よ、

家に依止せる、惡欲ある、

惡思惟ある、惡き所行ある、

[惡き]行處に至る者と知れ。

二九、汝等はすべて和合して、

(四)

(五)

(六)

(七)

彼比丘をば避斥せよ。

糲溼^④(惡丘比)をば吹き除け、

塵芥をば取り除くべし。

(八)

二八一、非沙門にして沙門なりと誇る

諸の糲殼(惡比丘)を次に除去せよ、

惡欲ありて惡き所行あり、(惡き)

行處に至る(惡比丘)を吹き除け。

(九)

二八三、^⑤[相互に敬重し]念慮し、百ら淨くして、

淨き人々と〔汝等は〕共住を營め。

斯くて和合せる聰明なる〔汝等〕は

苦の邊際を盡すならん。

(一〇)

法行經畢れり。

註① 本經は過去の迦葉佛の滅後に佛法に出家し、三藏に通達せしも、傲慢にして邪說を唱へ、他人を誹謗して阿鼻地獄に墮し、今世にて魚となり更に死して地獄に墮したる迦毘羅(Kapila)の物語に因みて、世尊が諸比丘に說法せられたるものなり。註書にては本經を迦毘羅經(Kapila-sutta)と標題せり。

- ② 本偈は DhP.A.IV,P.42 に引用せらる。
- ③ 惡き行處(pāpa-gocara)とは 婦女寡婦・處女黃門・比丘尼の居所及び酒屋等なり。詳しく述べ Visuddhi-magga P.17 参照。

④ 以下の三偈は A.IV,P.172 にも出で。

- ⑤ 以下の半偈及び次の前半偈は Mil.P.44 に引用せらる。以下の半偈及び次の二偈は M.A.II,P.119; S.A.II,P.49 に引用せらる。尙ほ此等は四分律卷六〇(大正二二·一〇一〇 a)参照。
- 二八二偈前半は SnA. P.165 に引用せらる。

- ⑥ 本偈は Mil. P.411 に引用せらる。

七。婆羅門法經

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衛城の祇樹給孤獨園に住したまへり。時に憍薩羅國の婆羅門大家の老い年長け耆宿にして年を重ね老齡に達したる者達が世尊の許に近づけり。近づきたる後、世尊と共に挨拶をなせり。喜ぶべき記憶すべき挨拶の語を交したる後、「彼等は」一方に坐せり。一方に坐したる彼等婆羅門大家の者達は世尊に白して言く、「卿瞿曇よ、現今の諸婆羅門は婆羅門法に於て往昔の諸婆羅門に合致するや否や。諸婆羅門よ、現今の諸婆羅門は婆羅門法に於て往昔の諸婆羅門に合致せず。若し卿瞿曇に支障なくば、願はくば卿瞿曇は我等に往昔の諸婆羅門に合致せん。」

の婆羅門法を説きたまへ。然らば諸婆羅門よ、よく聞き作意せよ。我は説かん。卿

よ、唯諸と彼等婆羅門大家の者達は世尊に答へたり。世尊は斯く宣へり。

二八四、往昔の諸の仙人苦行者は

自らよく自制し居れり。

〔彼等は〕五種欲をば捨てゝ、

自己の〔眞の〕利を行へり。

二八五、〔往昔の〕婆羅門には家畜なかりき、

黄金も財穀もあることなかりき。

〔吠陀讀誦を財とし穀としたり、

梵〔最上善〕の庫藏を守護したり。

二八六、彼等〔婆羅門〕に〔信者等〕によりて

用意せられ戸口に置かれたる食、

それを〔信者等〕は〔信施〕を欲する

〔諸婆羅門〕に施さんと思惟せり。

二八七、種々に染めたる衣服や、〔種々の〕

臥具や住居を豊富に有せる、

諸の地方や國土の人々は、

彼等婆羅門をば禮拜せり。

二八八、婆羅門は神聖不可侵なりき、
法に護られて不能勝なりき。

彼等をば總ての家の戸口にて、

何人も妨遮することなかりき。

二八九、四十八年間、彼等は

童子(無妻)梵行を行へり。

往古の諸の婆羅門は

明と行との遍求をなせり。

二九〇、婆羅門は他階級と結婚せざりき、

また彼等は妻を買ふことなかりき。

共に相愛して交際しつゝ、

(愛する者との)共住を相樂しめり。

(七)

(六)

(五)

(四)

「五」かの〔妻に近づくべき時以外に、
月經にて遠ざかれる〔妻〕に對して、

諸の婆羅門はその間には、
決して姪法を行ふことなし。

「五」梵行(不姪)と戒と、

質直と柔軟と苦行と、

柔和と不害と忍辱とを、

〔彼等婆羅門は〕讀説せり。

「五三」彼等の中の第一の梵者は、
堅固なる努力をなせり。

彼は實に姪法をば、

夢の中にすら行はざりき。

「五四」彼の禁戒を隨學する、

此世の一部の有識の人々は、

梵行(不姪)と戒と、

忍辱とをば讚説せり。

(一一)

二五五、米(食)と臥具と衣服と、

酥と蜜とを乞ひ求め、

如法に其等を受取りて、

其中より施與を營めり。

[そ]の施與を行ひたる際にも、

彼等は決して牛達を殺さざりき。

(一三)

二五六、恰かも母や父や兄弟や、

或はまた他の親戚の如く、

牛達は我等の第一の友なり、

彼等より(五味の)薬が生ず、

二五七、此等の牛の薬は食を與へ力を與へ、

(皮膚の)光澤を與へまた樂を與ふ。

[牛に]斯る利益あるを知りて、

彼等は牛達を決して殺さざりき。

(一四)

二九、手足優美に身體大に

容色麗はしく名聲ある

諸婆羅門は己が諸行法もて、

行[善]・止[惡]に熱心なりき。

彼等が世に生存せし限りは、

この〔世〕の人々は樂を得たり。

二九、漸次に〔世〕の歡樂を見て、

彼等に顛倒想ありき。

〔即ち〕王の〔榮耀〕榮華と、

よく飾れる諸の女人と、

三〇、良馬に輒し善く作りたる

美彩の縫付けある車駕と、

〔縱横に〕區割し門庭等の部分を

測定せる〔宏莊なる〕家屋敷と、

三〇一、牛群の繁榮し、優れたる女等を

(一五)

(一六)

(一七)

擁したる世俗の人々の

廣大なる財富とを得んことを、

〔彼等婆羅門は思考したり。〕

(一八)

三〇一、茲に彼等は聖典(吠陀)を編み、

次に甘蔗^④(オッカーカ)王の所に行きて〔言へり。〕

獻供せよ、汝には多くの富あり、

獻供せよ、汝には多くの財あり、

〔然らば來世にも汝は財穀多かるべしと。〕(一九)

三〇二、斯くて諸車兵の主たる王は、

諸の婆羅門に勸説せられて、

獻馬祭や獻人祭や擲棒祭や、

ソーマ祭や無遮會等の

此等の獻供祭を行ひて、

〔彼等婆羅門に財を施せり。〕

(二〇)

三〇四、牛や臥具や衣服や、

よく飾れる諸の女人や、

良馬に輶し善く作りたる

美彩の縫付けある車駕や、

三〇五、縦横に區割し[門・庭等]の部分を

測定せる[宏莊なる]家屋敷や、

種々の穀物を充満したる

財[寶]をば諸婆羅門に施せり。

三〇六、その時、彼等は財[寶]を得て、

[そを]貯藏することを喜べり。

欲に陥りたる彼等には、

益々渴愛が增長せり。

彼等は茲に聖典(吠陀)を編み、

更に甘蔗(王)の所に行きて[言へり]。

三〇七、恰かも水や地や、

黄金や財穀[等]が、

(二二一)

(二二二)

(二二三)

人の資具なるが如く、

斯く牛も人々の〔資具〕なり、

獻供せよ、汝には多くの富あり、

獻供せよ、汝には多くの財あり」と。

(二四)

三〇八 斯くて諸車兵の主たる王は、

諸の婆羅門に勸説せられて、

幾百千の多くの牛をば、

獻供のために殺したり。

(二五)

三〇九 脚を以ても角を以ても、

何によりても決して害せざる

牛は羊に等しく柔和にして、

譽を充す程多くの乳を出す。

〔その〕角を捕へて、刀もて

王は彼等諸牛を殺したり。

帝釋も阿修羅も夜叉も、

〔王が〕刀を牛に下したれば、
非法なりと叫びたり。

(二七)

三一、往古には、欲求と食不足と
老との三病患のみありき。

諸の家畜を殺害せしが故に、
〔今や〕九十八(の)病患來起せり。

(二八)

三二、往昔にこの諸杖罰の

非法生起しありしが故に、

暴害なかりし(牛共は害するに至り、

諸獻供者(婆羅門)は法より退失せり。

(二九)

三三、斯の如く往昔のこの微法(非法)は、

識者によりて呵責されたり。

人々は斯の如き(非法)を見る毎に、

獻供者(婆羅門)をば呵責す。

(三〇)

三四、斯の如く法が毀失せし時、

首陀毘舍の二族は分裂(違和)し、

刹帝利も互に分れ争^ヘり。

妻は夫を輕視せり。

三五、刹帝利も梵天の親類(婆羅門)も、

(各自)種姓に護られたる其他の者も、

(自己の)血統を重んぜずして、

(五)欲に左右せらるゝに至れり。

(三二)

斯く言はれて、彼等婆羅門大家の人々は世尊に白して言く、卿瞿曇よ、希有なり。

卿瞿曇よ、希有なり。譬へば卿瞿曇よ、倒れたるを起すが如く、蔽はれたるを開くが如く、迷へる者に道を教ふるが如く、又は眼ある者は諸色を見るならんとて暗夜に燈火を掲ぐるが如く、斯の如く卿瞿曇は多くの教説もて法を説きたまへり。この我等は卿瞿曇と法と比丘衆とに歸依す。卿瞿曇は今日より以後壽盡くるまで歸依せる優婆塞として我等を認受したまへ。

婆羅門法經畢れり。

註① 本經は漢譯中阿含一五六經、梵波羅延經(大正一六七八a以下)に相當するも兩者は相當相違せり。

② 甘蔗王(Okkaka)往昔の大王にして日種族、釋迦族の祖とせらる。

③ 獻馬祭(assaka-medha)とは馬を神に犠牲に供へて殺す祭なり。獻人祭(purisa-medha)も同様に推知すべし。

④ 擲棒祭(sunnappasa)とは祭祀用の棒を投げて行ふ獻供祭らしきも詳細不明。

⑤ ヴィーマ祭(Vāja-peyya)とはソーマ酒を飲む祭。無遮會(nigaggata)とは一切のものを施す祭なり。

八 船經⁶

三二六、人が他より〔學びて〕法を識らんと欲しなば、

諸天が帝釋を禮敬するが如く、彼を禮敬すべし。

かの多聞者〔師は〔學人に〕禮敬せられて、

彼〔學人〕に對して心欣び〔學人に〕法を顯示す。(二)

三二七、斯る〔師〕に不放逸にして親近する

賢者はその法を聽聞し解了し、

法隨法(毘鉢舍那)を行道しつゝ、

識者分別者聰慧者となる。

(二)

三一八、未だ義を得ず、且つ他を羨む

小人愚者に親近する者は、

茲に法を辯知することなく、

疑惑を越度せずして死に近づく。

(三)

三一九、譬へば人あるが如し、大水の

急流する河に入るに彼は、

運ばれつゝ流水に従ひ行く、

いかでか彼は他人を度すを得ん。

(四)

三二〇、その如く、法を自ら辯知せず、

諸の多聞者に義を聽聞せず、

自ら知らず、疑惑を越度せずして、

いかでか他を悟解せしむるを得ん。

(五)

三二一、また譬へば堅固なる船に乗り、

櫈や舵を具備し居らば、

操縱法を知れるかの巧なる覺慧者は
他の多くの人々を其^船に^{乗せて}度すが如く。 (六)
三三三、斯の如く、吠陀(四道智)に通曉し自己を修習し、

多聞にして[世間]法に侵されざる^[不動なる]

彼は、傾聽し近習せんとの心を起したる他の人々を、

[先づ自ら]知解しつゝ、彼等を悟解せしむべし。(七)

三三三、故に實に慧ありて多聞なる

善人にのみ親近すべし。

[第二]義を了知して行道しつゝ、

法を識れる彼は樂を得べし。

船經畢れり。

(八)

註① 本經は註によるに、舍利弗が彼を佛教に導入せし馬勝(Assaji)をば常に師として尊敬し、馬勝が他方に離れ居る時は、舍利弗は馬勝の居る方向を拜し居れり。これを見たる比丘等はこの事情を知らずして、舍利弗が方角を禮拜する外學の邪習慣を未だ棄てざるものと思惟して、舍利弗の惡口をなせり。世尊はこれを知りたまひ、この事件に因みて彼等諸比丘に對して、師に對する心得として本經を説かれたるなり。註書にては本經

の經題を法經(Dhamma-sutta)となせり。

九 何戒經^o

三三四、いかなる戒あり、いかなる正行あり、いかなる身口意業を增長せしめば、人は正しく佛教中に定立し、

また最上の義に到達すべきや。

三三五、長上を敬ひ、(他を)羨むべからず、

また師に見ゆべき時を知るべし。

法說のなさるゝ(を聞く)刹那を知り、

善く説かれたるを恭敬して聞くべし。 (二)

三三六、強情をなくし謙遜の態度もて、

時々に師の面前に行くべし。

義と法と禁制と梵行とを

隨念すべし、且つ(そを)正行すべし。

三七、法樂ありて法を楽しみ、

法に住立して法決定を知り、

法を冒瀆する語を語るべからず。

善く説かれたる眞理もて暮すべし。 (四)

三八、笑喜と饒舌と悲泣と瞋怒と、

詔曲と詭詐と貪求と慢と、

激情と暴言と汚濁と惑溺とを捨て、

憍を離れ自ら住立して行すべし。 (五)

三九、善く説かれたるは聞きてそを識らば眞體となる、

聞き且つ識りたるは定(もて修習せばそ)の眞體となる。

性急にして放逸なる所の人、

彼には慧も聞も増大することなし。 (六)

三〇、聖者の宣説したまへる諸の法を喜べる

人々は語と意との業によりて無上なり。

彼等は寂靜柔和にして定に住立し、

聞と慧との眞髓に證達せるなり。

(七)

何戒經畢れり。

註❶註によるに、舍利弗が彼の在家時代の友人を出家せしめ、種々に教へて業處(禪定觀法の對象)を與へたるも、聖果を得ざりしため、舍利弗はこの比丘が自己の教化に縁なく、佛に教化せらるべき者なることを知りて、世尊の許に彼を連れ行きた。かくて舍利弗はこの比丘に因みて、本經の最初の偈を以て世尊に質問せり。佛はそれに對して解答せられたり。これ本經なり。本經の各偈に大體相當する諸偈は佛本行集經卷三八(大正三・八二八〇以下)に見ゆ。

一〇 起立經

三三一、起立せよ、而して靜坐せよ、
眠りて汝等に何の益がある、
〔煩惱の〕箭に射られて惱み、

病痛せる人々に何の眠かある。

(二)

三三二、起立せよ、而して靜坐せよ、
寂靜のために懸命に學べ、

死の王をして汝等の不放逸を

知りて、汝等を^④翻弄せしめざれ。

(二)

三三、諸の天や人がそれに依止し、

それを欲求し居れる所の、

かの染著^{漏愛}を越度せよ。

修習の刹那を^空過せしめされ、

修習の刹那を過ぎたる人々は、

地獄に墮して悲しめばなり。

三四、放逸は塵垢なり、放逸に

続ける放逸も塵垢なり。

不放逸にして明を以て、

己が煩惱の箭を抜くべし。

起立經畢れり。

(四)

註① 本經は出家後間もなき五百の新參比丘が放逸にして食事等に關する雜談を高聲にてなせしたため、佛が彼等に說法せられたるものなりといふ。

② 本偈は S.I. P.198、雜阿含一三三二經(大正二・三・六七c)、別譯雜阿含三五二經(大正二・四八九c)、大智度論卷一七(大正二五・一・八四b)等參照。

③ 本偈に相當する偈は出曜經卷五(大正四・六三四c以下)、法集要頌經卷二(大正四・七七八c)に見ゆ。

④ 以下の三句は Thag. 403 偈にも出づ。

⑤ 本偈は Thag. 404 偈に同じ。

一一 羅睺羅經^①

三三五、共住によりて汝は屢々

賢者を輕蔑するには非ずや。

人々のために〔法〕炬を掲ぐる

〔教授者を汝は尊敬せるや否や。〕

(一)

三三六、共住によりて我は屢々

賢者を輕蔑することなし。

人々のために〔法〕炬を掲ぐる

〔教授者を我は常に尊敬せり。〕

(二)

以上は序偈なり。

三三七、愛すべき悦ばしき

〔色聲等の五種欲を捨て、
信によりて家より出で、

苦の邊際を盡す者たれ。」

三三八、諸の善友に親近せよ、

また遠離せる〔驅〕音なき

邊地の臥坐所に住せよ)。

食に於て量を知る者たれ。

三三九、衣服や食物に對して、

また臥坐所や〔藥品〕に對して、

此等に對して渴を起す勿れ。

再び〔輪廻の〕世界に來る勿れ。

三四〇、別解脫〔律儀〕に於て、また

五根〔律義〕に於て〔自ら〕防護し、

(五)

(四)

(三)

汝に身至念(念身)あれ。

屢々厭離(一切世間不樂想)せよ。

(六)

三四一、貪を伴へる淨なる

相をば回避せよ。

不淨[想]によりて善く

等持せる心一境を修習せよ。

(七)

三四二、また無相[三昧]を修習せよ。

慢隨眠をば捨て去れ。

斯くて慢の止滅の故に、

汝は寂靜にして行ずるならん。

(八)

斯く實に世尊は尊者羅睺羅に此等の偈を以て屢々教誡したまへり。

羅睺羅經畢れり。

註① 佛子羅睺羅は出家して比丘となり、舍利弗・目犍連を師となせしも、自己の生れ・姓容貌等のために慢を起し、虚談をなさしめざるやう、佛は彼が出家以來聖道を得るに至るまで屢々彼を教誡せられたり。本經も斯る教誡の一なり。

② 本偈はThag.105 偈參照。

③以下の二偈は N.A. II, p.380 を引用せらる。

④以下の半偈は Thag. 1225 僧後半, S.I., p.188 にも出で。また Vm. p.38 にも引用せらる。雜阿含一二一四經(大正二·三·三)、別譯雜阿含二三〇經(大正二·四五八b)、瑜伽師地論卷一七(大正三〇·三·七二b)に相當句あり。

⑤本偈は Thag. 1224 僧後半 1225 僧前半, S.I., p.188 にも出で。また Vm. p.38 に引用せらる。雜阿含同上、別譯雜阿含同上、瑜伽師地論同上(三·七二·a)。

⑥本偈は Thag. 1226 僧、S.I., p.188 にも出で、Vm. p.38, Dhs.A.P.223 に引用せらる。雜阿含同上、別譯雜阿含同上、瑜伽師地論同上(三·七二·a 以下)に相當偈あり。

⑦止滅の故^ニ(abhisamayā) の語は現觀の意味の abhisamaya (abhi+sam+^vtī) に非ずして、
abhi+^vsam+yā も成れるものなり。註書には滅盡の故^ニ(khayā)、襄滅の故^ニ(vayā)、捨
斷の故^ニ(pahānā)、捨遣の故^ニ(patinissaggā)と説明せらる。尙右の如き用語は七三七偈参照。

一一 鵬耆舍經^①

是の如く我聞けり。一時世尊は曠野のアッガーラヴ廟に住したまへり。爾の時、尊者鵬耆舍の和尚なる尼拘盧陀劫波といふ長老はアッガーラヴ廟に於て般涅槃して久しからざりき。時に閑處し禪思せし尊者鵬耆舍の心に斯る思念起れり、「我が和尚は果して般涅槃せしや、或は般涅槃せざりしや」と。時に尊者鵬耆舍は夕刻に禪思より出で、世尊の所に至れり。行きて後、世尊を禮拜して一方に坐せり。一方に

60

坐せる尊者鵬耆舍は世尊に白して言く、『尊師よ、こゝに閑處し禪思せし我が心に我が和尚は果して般涅槃せしや或は般涅槃せざりしや』との思念起れりと。時に尊者鵬耆舍は座より起ち上り、衣を一肩にして世尊の方に合掌を向け、偈を以て世尊に白さく、

三四三、現世にて諸疑を断じたまへる

高大なる慧ある師に問ひ奉る。

有名にして名聲あり自ら寂止せる

比丘がアッガーラヴ〔廟〕にて命終せり。 (一)

三四四、尼拘盧陀劫波といふ名は世尊よ、

尊師によりてかの婆羅門に付せられたり。

堅固法の見者よ、彼は尊師を禮拜しつゝ、

解脱を望み勤め精進して行ぜり。 (三)

三四五、釋〔尊〕よ、普眼者よ、かの聲聞〔比丘〕につきて、

我等すべての者は知らんと欲す。

我等の耳は聞かんとて用意し居れり。

尊師は我等の師なり尊師は無上者なり。 (三)

三四六、我等の疑を断じたまへ、これを我に語りたまへ。
廣慧者よ、彼が般涅槃せしや否やを知りて、

千眼ある帝釋が諸天の中にて説くが如く、

普眼者よ、我等の中にて説きたまへ。

三四七、此世にて愚癡の道たり、無智の類たり、

疑の根據たるあらゆる諸結縛は、

これ如來に遇ひては滅してあるなし。

この如來は人々の第一眼なればなり。

(五)

三四八、若し實にこの人(如來)が諸煩惱をば、

風が密雲を拂ふが如く拂はざれば、

一切世間は煩惱に蓋はれて闇黒なるべし。

〔舍利弗等の智光ある人々も輝かざるべし。 (六)

三四九、また諸賢者は世を照す者なり、

故に賢者よ、我は尊師を斯る人と思惟す。

〔尊師を觀慧者と知りつゝ我等は近づけり。

衆中にて我等に劫波につきて明したまへ。 (七)

三五〇、速かに種々の美妙なる聲を放ちたまへ。

〔金鵠が首を擧げて徐ろに啼くが如く、

善く調整せる圓音を徐ろに出したまへ。

我等一切の者は心を端直にして聞かん。

三五一、生死を残りなく捨斷し煩惱を除遣せし〔佛〕に、

乞ひ奉りて我は法を説かしめんとす。

蓋し諸凡夫は知らんと言はんと欲して能はず、

諸如來は慮智ありて〔知り且つ説き〕たまへばなり。

三五二、端正の慧ある尊師にはこの〔凡夫を知解せしむる〕

(九)

完全なる説明法がよく把握せられ居れり。

〔尊師に對して〕この最後の合掌はよく向けられたり。

高慧者よ、劫波の趣を知りつゝ我を無知ならしめされ。(一〇)

三五三、彼此の聖法を知りたる高精進者よ、

「劫波の趣を知りつゝ我を無知ならしめされ。

譬へば夏時に暑熱に熱せられたる者が水を望む如く、

我は如來の語を望む。聞(の雨)を降らしたまへ。

三四、その涅槃を目的とする梵行をば劫波師は行ぜり。

その彼の梵行は空しからざりしや否や、

彼は解脱者(無學)の如くに般涅槃せしや、又は

「有學の如く有餘なりしや、そを我等は問ふ。

三五、世尊宣はく、

「彼は茲に名色に對する渴愛を、即ち

長時隨在せし黒魔の流れを斷ぜり、

生と死を残りなく越度せり」、

と五者の最勝なる世尊は宣へり。

三六、第七の仙人(釋尊)よ、これを聞きて、

我は尊師の語をば信樂す。

我が所問は實に空しからざりき。

(一三)

(二二)

婆羅門(世尊)は我を欺きたまはず。 (一四)

三五七、佛の聲聞弟子たる劫波は、

言の如くに[身に]行へり。

人を訛かす惡魔の擴げたる

堅固なる網を彼は斷ぜり。

(一五)

三五八、世尊よ、劫波師は

取(輪轉)の初(根元)を見たり。

實に劫波師は度^{わたり}り難き

死(魔)の領域を越えたり。 (一六)

鵬耆舍經畢れり。

註① 本經を註書は尼拘盧陀劫波經(Nigrodhakappa-sutta)と標題せり。本經は漢譯雜阿含一二二一經(大正二・三三三 a 以下)に相當す。

② 以下十六偈全部は Thag. 1263-1278偈と一致す。

③「五者の最勝」(Pañca-setthi)とは註によるに、阿若憍陳如等の五比丘の最勝者、又は信・勸・念・定・慧の五根、或は戒・定・慧解脱・解脫智見の五分法身によりて最勝となれる人の意味とす。

④「第七の仙人」(isi-sattama)釋尊は毘婆尸佛乃至迦葉佛の過去六佛に次いで出世せられた

る第七の佛なるが故に。

一三 正普行經^①

三五九、廣博の慧あり、「暴流を度り彼岸に達し、

般涅槃し、自ら住立したまへる牟尼に我は問ふ。

家より出離し諸欲を除却したる所の比丘は、
云何にして正しく世間を普行すべきや。」（二）

三六〇、世尊宣はく、

吉凶判断天變地異判断夢判断、

及び占相をば根絶〔棄捨〕し、また

〔其他の〕吉凶判断の過失を捨断せし

所の比丘が正しく世間を普行すべし。」（三）

三六一、比丘は應に人界と天界との

諸欲に對する貪を調伏すべし。

有を超越し法を證知して、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (三)

三六二、比丘は兩舌を放擲し、

忿と吝とを應に捨つべし、

適順(貪)と異逆(瞋)とを捨斷せる、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (四)

三六三、愛と不愛とを捨て已り、

取著あるなく何物にも依止せず、

諸の結縛の縁より離脱せる

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (五)

三六四、彼は諸(蘊)依(カバア)中に常樂等の壓實を見ず、

諸取に對する欲貪を調伏すべし、

彼は無依にして他に導かれず、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (六)

三六五、語をもて意をもてまた(身業もて、

〔善行に違逆せずして正しく法を知り、

涅槃の句をば欲求しつゝ、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (七)

三六六、彼は我を禮すとて自ら高ぶるなく、

〔種々に〕怒罵せらるとも瞋恨せず、

他より食を得ても憍るなき比丘、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (八)

三六七、貪欲と〔三界諸〕有とを捨断し、

〔他有情の離反結合より離れ、

疑惑を度り〔煩惱の〕箭を離れたる比丘、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (九)

三六八、比丘は自己の適當なる行道を知り、

また世間にて何物をも害すべからず。

如實に〔蘊處諦等の法を知りて、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (一〇)

三六九、いかなる隨眠もあることなく、

諸の不善の根は根絶されたり。

彼は意樂(渴愛)なく希求あるなし、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (一一)

三七〇、諸漏盡き慢を捨断し、

一切の貪路を越え過ぎ、

「自ら調御し、圓寂し自ら住立せる、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (一二)

三七一、信あり聞ありて〔正〕決定を見たる

賢者は〔邪見者〕群中にありて群に従はず。

貪欲と瞋恚と瞋怒とを調伏し、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (一三)

三七二、よく淨もて〔煩惱に勝ち、三毒の〕覆ひを開き、

〔四諦の法に自在にして、彼岸に達し、不動となり、

諸行の滅〔たる涅槃〕の智に善巧なる

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (一四)

三七三、過去及び未來の諸蘊に對して、

[妄想]分別を越度し、極めて淨き慧あり、

一切[十二]處より離脱せる

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (一五)

三七四、四諦の句を知り、[四諦の]法を證知し、

諸漏の捨斷[せる涅槃]を明白に見て、

一切[蘊依]を滅盡せるが故に、

かの比丘は正しく世間を普行すべし。 (一六)

三七五、世尊よ、こ[の世尊の所說]は誠に斯の如し。

斯く住し[自ら]調御せるかの比丘は、

一切の結縛の縁を超越し居れり、

彼は正しく世間を普行すべし。 (一七)

正普行經畢れり。

註① 言によるに本經は大會の日に説かれたるが故に大會經 (Mahasamaya-sutta)とも云ふ。

世尊は迦毘羅城の大林に五百の阿羅漢比丘に圍繞せられ、聞法の爲に集會せる諸天を化導せんと、世尊自ら化作したまへる化佛の質問に對して本經を説かれたり。これ

貪行の傾向ある諸天への説法なり。

②本偈はD.A.II,p.684に引用せらる。

一四 曼彌迦經

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衛城の祇樹給孤獨園に住したまへり。時に曼彌迦優婆塞は五百の優婆塞と共に世尊の許に近づけり。近づきたる後、世尊を禮拜し、一方に坐せり。一方に坐せる曼彌迦優婆塞は世尊に偈を以て白して言く、
三五六、廣慧者瞿曇よ我は尊師に問はん。

家より非家に至る者にせよ、

或はまた在家の優婆塞にせよ、

(佛)弟子はいかに行はゞ善妙なりや。

(二)

三七七、蓋し尊師は天を含めたる世界の

[善惡の]趣と彼岸とを知りたまひ、

尊師に比すべき微妙の義を見たる者なく、

[世人は]尊師をば優れたる佛と言へばなり。

(三)

三七九、尊師は證入して諸有情を憐愍つゝ、

一切の智と法とを說きたまふ。

普眼者よ、尊師は三毒の覆ひを開きたまひ、
無垢にして一切世間を遍く照したまふ。

三七九、伊羅婆那といふ龍王が〔尊師を〕勝者なりと

聞きて、尊師のみ許に來れり。

彼も尊師と談論して證得せり。

〔佛說を聞き、善哉といひて喜び去れり。〕

三八〇、毘沙門〔天王鳩鞞羅も法を遍く

問はんとて尊師に近づけり。

賢者よ、彼にも尊師は問はれて語りたまへり。

彼も亦佛說を聞きて喜び去れり。

三八一、邪命〔外學にせよ、又は尼犍にせよ、

論爭を事とするあらゆる此等外學は、
すべて慧をもて尊師を超ゆるなし。

(四)

(五)

立てる者が走り行く者を[超えざるが]如し。 (六)

三八二、論爭を事とする此等の老婆羅門も、

また[中幼の]あらゆる婆羅門も、

又は他の[自ら]論客なりと考ふる人々も、
すべては尊師より利益を望み居れり。

三八三、世尊よ、尊師の善説したまへる、

この法は微妙にして樂を齋らす。

一切の人々は[その法]をのみ聞かんと欲す。

最勝の佛よ、尊師は問はれて我等に説きたまへ。(八)

三八四、一切の此等の比丘及び優婆塞は、

共に[佛説を]聞かんが爲に集坐せり。

諸天が天王の[説を聞く]如く、離垢者が

隨覺し善説したまへる法を[彼等は]聞かん。

三八五、諸比丘よ聞け、我は汝等に[煩惱]除遣の

法をば聞かしめんぞをすべて[行持せよ]。

(九)

利益を見る覺慧者は出家者に隨順せる

かの〔行住坐臥の〕威儀を習行すべし。

(一〇)

三八六、比丘は非時に遊行すべからず、

但だ早朝に村を行乞すべし。

非時行者を縛著が縛すればなり。

故に諸覺者は非時に行乞せず。

三八七、諸の有情に橋を生ぜしむる所の

諸の色と聲と香と觸との

此等諸法に對する欲を調伏して、

彼は早朝に食〔のため〕に〔村に〕入るべし。

(一一)

三八八、また比丘は早朝に食を得已りて、

獨り〔村より〕歸りて密かに坐すべし。

自己を攝制して内を思念し、

意を外に放散せしむべからず。

(一三)

三八九、假令彼は他の聲聞と又は

いかなる比丘と共に語るとも、

勝れたる法を彼に説くべし。

兩舌や他人の誹謗をなすべからず。

三五〇、蓋し、或る人々は誹謗の語に反駁す。

彼等小慧者をば我等は讚歎せず。

諸縛著が彼等を縛しかくて彼等は

その心をば聖道より遠ざくるが故に。

三九、^④勝慧ある聲聞は善逝の説きたまへる

法を聞き食と住と臥坐具と、

僧伽梨衣の塵垢を除く水とを、

應に省察し已りて用ふべし。

三五二、故に食と臥坐具と僧伽梨衣の
塵垢を除く水との此等諸法に

對して、比丘は染著することなし、

猶ほ荷葉に宿る水滴の如し。

(一七)

(一六)

(一五)

三九三、いかに行ふ在家弟子が善妙なりや[に關する]、

在家者の務めを次に汝等に説かん。

蓋し、純然たる比丘法はこれ

[財物]所有の[在家]者が達す能はざればなり。 (一八)

三九四、^④生物を自ら害すべからず、[他をして]殺さしむべからず。

また他の人々が殺害するを認容すべからず。

世間に於ける強剛なる、又は戰慄する

一切生類に對して笞杖を藏むべし。 (二九)

三九五、次に[在家]弟子は何物にても何處にても與へられざるを、

[他物と]知りつゝそを取ることを回避すべし、

[他をして]盗ましむべからず、人々が盜むを認容すべからず。

一切の與へられざるを取ることを回避すべし。 (三〇)

三九六、諸識者は非梵行(姪行)をば回避すべし、

赤熱せる炭火を回避するが如く。

されど梵行(不姪)を行ふこと能はざる者は、

「少くとも他人の妻を犯すべからず。」(二二)

三九七、集會に行ける者、又は衆中に在る者は、

何人も何人にも妄を語るべからず、

「他をして語らしむべからず、人々が語るを認容すべからず。

一切の不眞を語るを回避すべし。」(二三)

三九八、また飲酒をば〔自ら〕行ふべからず。

この〔不飲酒〕法を喜ぶ在家者は、また、

「他をして飲ましむべからず、人々が飲むを認容すべからず。

その飲酒は人を狂醉せしむと知りて。」(二三)

三九九、蓋し諸の愚者は醉のために諸惡を行ひ、

また他の醉へる人々をして〔惡を行はしむ。〕

斯る非福の原因たる愚者の欲する

狂醉癡蒙〔の飲酒〕を應に避くべし。」(二四)

四〇〇、^⑥生物を害すべからず與へられざるを取るべからず、妄を語るべからず、また飲酒者たるべからず、

姪事たる不梵行をば離るべし、

夜に非時食を食すべからず。

(二五)

四〇一、花環を著くべからず芳香を用ふべからず、

地上に敷きたる床にのみ臥すべし。

これ即ち八支の布薩なるものにして、

苦邊を盡したまひし佛によりて説かれたり。(三六)

四〇二、^而して半月の第十四日・第十五日、

及び第八日に布薩を行ふべし。

また神變月に八支を具せる布薩を、

信樂せる意もて缺かさず(行ふべし)。

四〇三、布薩を終りたる諸識者は次に、

心信樂し隨喜しつゝ、

翌朝早く食物と飲物とを

所應に隨ひて比丘衆に頒つべし。

四〇四、如法に得たる財もて父母を養ふべし。

(二六)

(二七)

彼は正當なる商賣を行ふべし。

斯く行じつゝある不放逸の在家者は、

〔死して後〕、自光と名づくる天に生ず。 (二九)

曇彌迦經畢れり。

小品第二〔畢れり〕

その〔小〕品の攝頌

寶と臭穢と慚と最上の吉祥と、

針毛と法行と更に婆羅門法と、

船經と何戒と起立とまた羅睺羅と、

劫波と普行と更にまた曇彌迦と、

此等の十四經が小品と言はる。

註①三歸五戒を持ち、多聞にして經典に通曉し、阿那含を得たる曇彌迦優婆塞は、彼と同様なる五百の優婆塞と共に世尊の許に行き、在家者及出家者の行道に關して質問し、佛はこれに解答したまへり。即ち本經なり。

②天王 (Vāsava) とは帝釋の別名なり。

③本偈は Mahāvastu III, P.328 參照。

④以下の二偈は Viśuddhi-magga p.45 に引用せらる。

⑤以下最後に至る十一偈に相當する偈は舍利弗阿毘曇論卷第六(大正二・八・五七四 a 以下)に見ゆ。

⑥以下の二偈は A.I, p.214f; A.IV, p.254; p.257f; p.261 にも出で。尚ほ増一阿含卷一六(大正二・六二五 c)、長爪梵志請問經(大正一・四・九六八 c)参照。

⑦本偈は A.I, p.144; p.145; 雜阿含一一七經(大正二・一・九六 a)、別譯雜阿含四六經(大正二・三八九 a)以下参照。

⑧「神變月」(Pājñāriya-pakkha)とは註によるに「雨期に入る前の月たる Āśalha-māsa (頬沙茶月一・五六月)と雨期三ヶ月と雨期直後の月たる Kattika-māsa (迦刺底迦月一九・十月)との五ヶ月を言ふ。されど他の人々は神變月とは Āśalha と Kattika と phagguna-māsa (頗勒賽那月一・一二月)との三ヶ月なりとし、更に他の者は半月毎の布薩日の前後の日たる一日十三日・七日・九日を神變月分なりと言ふ。

三 大 品

一 出家經

四〇五、^❶有眼者(佛)は云何に出家したまひしや、

彼世尊は云何に觀察しつゝ

出家を大いに喜びたまひしや、

〔佛の出家を我〔阿難〕は述べん。〕

(二)

四〇六、家の居住はこれ狭隘にして

〔煩はしく〕、塵垢の發生處なり。

然るに出家は廣寛にして

〔煩なし〕と見て出家したまへり。

(三)

四〇七、出家したる後、身による

惡業を避け離れたまへり。

語惡行を捨て已りて、

活命(生适)を遍く淨めたまへり。

(三)

四〇八、^④佛は〔成道前に〕摩竭陀國の〔首都〕

——山に圍まれたる——王舍城に行きたまへり。

〔三十二相等の〕優れたる相に充てる〔佛〕は、

行乞のために王舍城に赴きたまへり。

(四)

四〇九、高殿に立ち居たる〔摩竭陀國王〕

頻毘婆羅は彼〔佛〕を見たり。

〔妙〕相を具足せる〔佛〕を見已りて、

〔王は近臣に〕次の義を述べたり。

(五)

四二〇、汝等よ、この者を注意せよ。

〔彼は〕麗容にして長大に〔顔色〕淨し。

また〔彼の〕行歩は完全にして、

〔眼前〕尋ひるを見るのみ。

(六)

四二一、念ありて眼を下に投げ、

彼は賤家の出の如くならず。

王使をば走り遣はすべし。

比丘は何處に行かんとするや〔を知らんが爲に〕。 (七)

四二二、遣はされたる彼等王使は、

〔佛の〕後より追ひ行けり。

比丘は何處に行くならん、

〔彼の〕住所は何處ならんと〔窺ひつゝ〕。 (八)

四二三、家毎に〔次第に〕行乞しつゝ、

〔根門を護りよく防護し、
念あり正知ある〔佛〕は、

〔適量を受けて直ちに鉢を満たしたまへり。〕（九）

四一四、彼牟尼は行乞を已りて、

〔王舍城〕市より外に出で、

此處を住所とせんとて

槃茶婆〔山〕に赴きたまへり。

（一〇）

四五、〔佛が住所に近づきたまへるを見て、

然る後、諸の使者は近づき行けり。

而して一人の使者は〔王城に〕還りて、

王に奏上して言く、

四一六、大王よ、この比丘は、

槃茶婆〔山〕の前方なる

山窟中に虎や牛の如く、

師子の如く坐し居れり。

（一一）

（一一一）

四一七、使者の言を聞き已るや、

刹帝利〔王〕は美はしき乗物にて、
大いに急ぎて槃茶婆山の
かの所へと出で行けり。

(一三)

四一八、かの刹帝利は乗物の〔行く〕
所まで乗り、〔それより〕下乘し、
歩行して近づき行き、

(一四)

彼〔牟尼〕の近くに行きて坐せり。

四一九、坐し已りて王は喜ばしき

挨拶の語を喜び交せり。

彼は〔挨拶の〕語を交したる後、
次の義を述べたり。

(一五)

四二〇、汝は〔未だ〕若く且つ年少なり。

〔人生の〕第一期に達せる青年なり。
榮え行く容色を具備せり。

由緒正しき刹帝利なるが如し。

(二六)

四二、我は〔汝の欲する〕財物を與へん。

光輝ある〔汝〕は象衆を先頭とせる、

精銳なる軍隊を受用せよ。

〔我に〕問はれて〔汝の〕生れを語れ。

(二七)

四三、^①王よ、雪山の山腹に、

昔より橋薩羅國に住し、

財と精進〔勇氣〕とを具備せる、

端直なる一民族あり。

四三、その族姓を日種といひ、

その生族を釋迦といふ。

王よ、その家より我は出家せり。

諸欲を冀求せんが爲に非ず。

四四、^②諸欲の過患を見已りて、

出離をば安穩なりと見て、

(二九)

(二八)

[出離の爲の]精勤に我は行かんとす。

我が意はこの精勤を喜ぶ[諸欲には非ず]。(一一〇)

出家經畢れり。

註① 本經は世尊が踰城出家後に迦毘羅城より南下し、王舍城に入りて行乞せらるゝ時、摩竭陀國王頻毘婆羅と會見せられたる時の状態を述べたるものにして、佛傳の一部なり。

この頻毘婆羅王との會見の物語は多くの佛傳に出づるも、本經の如く偈文を以てし、本經と同源より來れるものは Mahāvastu II, p.198f、四分律卷三一(大正二二・七七九c以下)、有部毘奈耶破僧事卷四(大正二四・一・一八b以下等なり)。殊に有部毘奈耶破僧事のものは本經の各偈と極めてよく類似す。

② 本偈以下最後までの各偈は有部毘奈耶破僧事卷四(大正二四・一・一八b以下)参照。

③ 本偈以下多くの偈は Mahāvastu II, p.198f 參照。

④ 本偈以下最後までの各偈は四分律卷三一(大正二二・七七九c以下)に相當よく一致す。

⑤ 本偈に相當するものは Mahāvastu に無し。

⑥ 以下の四偈も Mahāvastu に相當せず。

⑦ 以下の二偈は大智度論卷三(大正二五・七・七a)参照。

⑧ 本偈の相當偈も Mahāvastu に無し。

二 精勤經^①

四五、尼連禪河の畔にて、

瑜伽安穩を得んがために、

極めて勤め禪思し、

專心に精勤せるこの我に、

四六、〔惡魔障解脱〕は悲愍の語をば、

語りつゝ我に近づけり。

汝は瘦せて顔色悪し、

汝の死は近づけり。

四七、〔汝の死に千の分あり、

汝の生は一分にすぎず。」

卿よ、生きよ、生くるが優れり。

命ありてこそ諸善も行すべけれ。

四八、汝が梵行者となりて梵行を行せば、

また聖火に供物を獻じなば、

〔汝に〕多くの福は積まるべし。

(二)

(三)

(一)

汝精勤して何をかなす。

(四)

四元、精勤への道は至り難く、

行じ難く、到達すること難し。

この偈を述べつゝ惡魔は

佛の近くに立てり。

四三〇、斯の如く語るかの惡魔に

世尊は次の如く宣まへり。

放逸の親類よ、波旬よ、

汝が此處に來れる目的たる

(六)

四三一、[世間の]福は微量だも、

我に用あることなし。

但だ諸の福を目的とする

人々に惡魔はそを説く可し。

(七)

四三二、[先づ]信あり、次に精進あり、

また我に慧のあるあり。

斯の如く自ら專心せる我に、
いかでか汝は生を求むるや。

四三、この〔精進より起る〕風は諸河の

流水をも涸渴せしむべし。

いかでか自ら專心せる

我が〔身の〕血は涸れざらん。

三四、〔身體の〕血が涸るゝ時は、

膽汁も痰も涸るべし。

〔身體の〕肉が滅盡する時は、

心は益々靜澄し、

また我が念も慧も、

定も益々〔よく〕住立す。

四五、斯の如く住し、最高の

受を得たるこの我が

心は諸欲を希求せず。

(八)

(九)

(一〇)

見よ、有情の淨きことを。

(一一一)

四二六、汝の第一の軍は欲なり。

第二の軍は不樂と言はる。
汝の第三の軍は飢渴なり。

(一一二)

第四の軍は渴愛と言はる。

(一一三)

四二七、汝の第五の軍は惛眠なり。

(一一四)

第六の軍は怖畏と言はる。

汝の第七の軍は疑なり。

(一一五)

覆と強情が汝の第八軍なり。

四二八、利得と名譽と恭敬と、

(一一六)

邪行もて得たる名聲と、

(一一七)

また自己を賞揚すると、

(一一八)

他人を貶下するとは、

(一一九)

四二九、これ障解脱よ、汝の軍なり、

(一一一〇)

〔汝黒魔〕の軍勢なり。

勇なき者はそれに勝たず、

〔勇者は〕勝ち已りて樂を得。

(一五)

四〇、我は〔勝者として〕文邪草ムンザヤを著けん。

茲に〔汝に敗れたる〕生命は厭はしき哉。

若し我敗れて生きんよりは、
戦ひて死すこそ優れたり。

(一六)

四一、一部の沙門婆羅門は、

此處に沈没して見えず。

また諸の善行者が辿り行く、
かの〔涅槃への〕道をも知らず。

(一七)

四二、用意怠らずして駕象に乗れる
惡魔の軍勢を四方に見て、

我は戦はんとて立ち向ふ。

我は〔この〕場より動ぜしめられず。

四三、天を含めたる〔一切〕世間の人々は、

(一八)

汝のかの軍に堪へ〔勝た〕ざるも、
我は汝の軍をば慧もて破る。

石もて生なまの〔土〕鉢を〔破るが如く〕。

四四、止惡行善し思惟を自由にし、

また念をよく住立せしめ、

國より國へ我は遊行せん、

廣く諸弟子を化導しつゝ。

四五、我が教を行ずる彼等諸弟子は、

不放逸にして自ら專心なり。

其處に至らば憂ひあるなき

無欲涅槃に彼等は至るべし。

四五六、七年間我は世尊に

付き纏ひて從ひたり。

〔されど〕念ある正覺者に、

〔乘すべき〕機會を得ざりき。

(一九)

(二〇)

(二一)

(二二)

四七、脂肪の色ある石の周圍^を

「恐らく此處に柔かきものあらん、
恐らくこの石に美味あらん、

とて鴉が歩き廻るが如し。」

四八、其處に美味を得ずして、

鴉は此處を棄て去る。

石に近づける鴉の如く、

我等は瞿曇を厭ひて去る。」

四九、^④憂悶に敗れたる彼惡魔の

脇より琵琶は落ちたり。

かくて意氣銷沈せるかの夜又は
其處にて便ち消失したり。

精勤經畢れり。

(一三)

(一四)

(一五)

註① 本經は前經の最後偈に、精勤に我は至らんとするあるその精勤——即ち成道前の六ヶ年の苦行中に於ける惡魔との爭鬪に關して説かれたるものにして、これも佛傳の一部分

を成す。この物語も多くの佛傳中に出づるも本經と同源の偈を有するものは *Mahāvastu II*, pp.238-240 佛本行集經卷二五(大正三・七六九 b 以下)、*Lalitavistara* (Leffmann) pp. 261-263, 方廣大莊嚴經卷七(大正三・五八二 b 以下等)なり。

② 以下の四偈は *MN*.d,p.96; p.174; p.333f; *CNd*(シャム本)p.144f に引用せらる。尙ほ此等四偈に相當すべき偈は大智度論卷五、卷一五(大正二五・九九 b 以下、一六九 a)にも見ゆ。而して卷五の場合には雜藏經の所說としてこの四偈及び以後の數偈に相當するものを引用于す。

③ 文邪草(munjā) 世尊が成道時に菩提樹下に座物として敷きたまへる草にして禾本科に屬す。漢譯には吉祥草ともあり。

④ 以下の三偈は大智度論卷五(大正二五・九九 c)参照。

⑤ 本偈は *DA*. III, p.994; *MA*. III, p.373; *SuA*. p.37 に引用せらる。

⑥ 以下の二偈は *S.I*. p.124 にも出づ。その相當偈は雜阿含二四六經、一〇九二經(大正二・五九 b 二八六 c)、別譯雜阿含三一經(大正二・三八三 b)に見ゆ。

⑦ 本偈は *S.I*. p.122 にも出で、*DhpA.I*, p.433 に引用せらる。漢譯相當偈は雜阿含一〇九一經(大正二・一八六 b)に見ゆ。

三 善說經

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衛城の祇樹[給孤獨園]に住したまへり。〔時に世

尊は諸比丘に告げたまへり。諸比丘よ、尊師よと彼等諸比丘は世尊に答へたり。世尊は斯く宣へり。諸比丘よ、四支を具備せる語は善説にして惡説ならず、無罪にして諸識者に非難せられず。云何が四支なる。諸比丘よ、茲に比丘あり。善説のみを語り、惡説を語らず。法のみを語り、不法を語らず。愛語のみを語り、不愛語を語らず。眞實のみを語り、虛偽を語らず。諸比丘よ、此等の四支を具備せる語は善説にして惡説ならず、無罪にして諸識者に非難せられず。世尊は斯く説きたまへり。善逝は斯く説き已りて、師世尊はまた更に宣へり。

四五〇、善人は最上の善説を説く、「これ第一なり」。

法を語り不法を語るべからず、これ第二なり。

愛語を語り、不愛語を語るべからず、これ第三なり。

眞實を語り、虛偽を語るべからず、これ第四なり。(二)

時に尊者鵬耆舍^{ブンギサ}は座より起ちて衣を一肩にし、世尊の方に合掌を向け、世尊に白して言く、善逝よ、[世尊所説の義を我は明解せり]。鵬耆舍よ、汝の明解に委すと世尊は宣へり。時に尊者鵬耆舍は[世尊の]面前にて適當なる諸偈を以て世尊を讚歎せり。四五一、自己を苦しめず、また

他人を害せざるが如き
語のみを語るべし。

これ實に善說の語なり。

四五二、歡び迎へらるゝ所の語、

[即ち]愛語のみを語るべし。

諸の惡語を用ひずして、

他人に愛語をば語るべし。

四五三、眞實は實に甘露の語なり。

これ往昔よりの(永遠の)語なり。

善人は眞實の上に、義の上に、

また法の上に住立せりと言はる。

四五四、^④佛が涅槃に達せんがために、

苦の邊際を盡さんがために、

説きたまふ所の安穩の語は、

これ實に諸語中にて最上なり。

(三)

(二)

(一)

(五)

善說經畢れり。

註① 本經は殆んど其儘の形に於て S.I. p.18f (S.35, Subhāsi tā) に出で、漢譯相當經としては雜阿含一二一八經(大正二・三三二^a)、別譯雜阿含二五三經(大正二・四六二^b以下等)あり。殊に雜阿含は巴利によく類似す。

② 本偈は上述の諸經に出づる他に KhpA. p.135 に引用せられ、出曜經卷一(大正四・六・六七^a)、法集要頌經卷一(大正四・七八一^b)、四分律卷五二(大正二・二・九五二^b)、大毘婆沙論卷六(大正二・七・一八^c)、阿毘曇毘婆沙論卷三(大正二・八・二〇^c)、瑜伽師地論卷一七(大正三〇・三八一^b)に相當偈あり。

③ 以下の四偈 Thag. vv. 1227-1230 にも出づ。尚ほ出曜經卷一一(大正四・六・六七^a以下)、法集要頌經卷一(大正四・七八一^c)四分律卷五二(大正二・二・九五二^b)に相當偈あり。

④ 本偈は KhpA. p.136 に引用せらる。

四 孫陀利迦婆羅墮闍經^①

是の如く我聞けり。一時世尊は憍薩羅國の孫陀利迦河畔に住したまへり。爾の時、孫陀利迦婆羅墮闍婆羅門は孫陀利迦河畔にて[聖]火を祀り火への供養を行じたり。時に孫陀利迦婆羅墮闍婆羅門は火を祀り火への供養を行じ已りて、座より起ち、普く四方を眺めたり、この供物の残りを誰に受けしむべきや」とて。孫陀利迦婆羅墮闍婆羅門は遠からざる一樹下に世尊が頭まで[衣を]纏ひて坐したまへるを見たり。見

已りて左手もて供物の残りを持ちて世尊の所に近づき行けり。時に世尊は孫陀利迦婆羅墮闇婆羅門の足音を聞きて頭を開けたまへり。時に孫陀利迦婆羅墮闇婆羅門は、この尊は圓頂なり、この尊は坊主なりとてそこより更に引歸さんと欲せり。時に孫陀利迦婆羅墮闇婆羅門は斯く思念せり。圓頂なりと雖も此世にて一部の人々は婆羅門もあり、いざ我は近づきて生れを問はばやと。かくて孫陀利迦婆羅墮闇婆羅門は世尊の所に近づけり。近づきて世尊に白して言く、尊はいかなる生れの者なりや。時に世尊は孫陀利迦婆羅墮闇婆羅門に偈を以て説きたまへり。

四五五、我は婆羅門に非ず、王子(刹帝利)に非す。

毘舍族にも非ず、又は他(何)者にも非す。

諸の凡夫の姓(五蘿)を遍く知りて、

無一物にして慧もて世間を遊行す。

(二)

四五六、僧伽梨衣を著け、家なくして我は遊行す。

〔鬚髮を剃り自心を寂滅せしめ、

此世にて人々に染著することなし。

婆羅門よ、汝は我に不適當なる姓の質問をなせり。(三)

四五七、尊よ、〔我等婆羅門は婆羅門と〔會へる時〕、

『尊は婆羅門なりや否や』と問ふ〔を習ひとす〕。

汝若し自ら婆羅門なりと言はゞ、

非婆羅門たる我に〔答へて〕言へ。

私は汝に三句二十四字なる

かの娑毘底〔吠陀の讚歌〕を問ふ。

(三)

四五八、何のために仙人や刹帝利や

婆羅門や〔其他の〕人々はこの世間にて
諸天神に多く供養を營みしや。

極に達し吠陀に達したる者が、
供養時に人の供物を受けなば、

そ〔の供養〕は有効なるべしと我是言ふ。 (四)

四五九、婆羅門曰く、

我が今見えたる斯る吠陀の達人、
彼への供養は實に有効なるべし。

〔從來尊師の如きを見ざりしかば、

他の〔無資格の〕人々に獻菓を施せり。」

(五)

四六〇、汝は我に信樂せりそれ故に婆羅門よ、
義を求むる汝は我に近づきて問へ。

恐らく茲に汝は寂靜者無煙忿者、

無苦者無求者善慧者を發見せん。

(六)

四六一、卿瞿曇よ我は供養を樂しめり。

供養を行はんと欲するも我は知らず。

卿は我に〔供養の方法を教へたまへ。

何處への獻供が有効なりやそを我に語りたまへ。

然らば汝婆羅門よ耳を傾けよ。

我是汝に〔供養の法を説示せん。

(七)

四六二、生れを問ふ勿れ但だ行を問へ。

實に火はあらゆる薪より生ず。

卑賤の家の者と雖も牟尼、

有智者高貴者慚慎者あり。

(八)

四六三、眞諦もて自ら調練し、諸根を調御し、
吠陀の極に達し、梵行已に成じたる人、
斯る人に々々に供物を供ふべし。

福を望む婆羅門は彼を供養すべし。

(九)

四四、諸欲を捨て家なくして行じ、

善く自ら制し梭の如く端直なる

人々に々々に供物を供ふべし。

(一〇)

福を望む婆羅門は彼を供養すべし。

四五、貪を離れ善く諸根を寂靜に等持し、

月が羅睺の手を脱せるが如く煩惱を脱せる

人々に々々に供物を供ふべし。

(一一)

福を望む婆羅門は彼を供養すべし。

四六、執著あることなく、常に念あり、

我意を捨てゝ世間を遊行する

人々に時々に供物を供ふべし。

福を望む婆羅門は彼を供養すべし。

(一三)

四六七、諸欲を捨て諸欲に打勝ちて行じ、

生と死との邊際を知り、

寂滅して湖水の如く清涼なる

如來は獻菓を受くるに値す。

(一四)

四八、如來は諸等者(諸佛)に等しく、

諸不等者より遠ざかり、無邊の慧あり、

此世にても他世にても染著なき、

如來は獻菓を受くるに値す。

(一五)

四六九、詔あることなく慢なく、

貪欲を離れ我意なく求めなく、

忿を除き自ら寂滅し、

憂垢を斷じたるかの婆羅門〔即ち〕

如來は獻菓を受くるに値す。

(一五)

四七〇、意の住著を既に斷じ、

何等の執著あることなく、

此世にても彼世にても取著なき

如來は獻墓を受くるに値す。

四七一、「心等持して暴流わだを度り、

最上の見を以て法を知り、

漏盡きて最後身となれる

如來は獻墓を受くるに値す。

四七二、有漏と麤惡の語とは、

除遣せられ滅没して存せず、

吠陀に達し一切處にて解脱せる

如來は獻墓を受くるに値す。

四七三、染著を超え染著あることなく、

慢ある有情中にて慢あるなく、

田事因縁と共に苦を遍く知り、

如來は獻菓を受くるに値す。

(一九)

四七四、意欲に依らず、遠離を見、

他人の説く〔異端の〕見を超越し、

〔煩惱を起す〕何等の所縁なき、

如來は獻菓を受くるに値す。

(二〇)

四七五、彼此の諸法を證知し、〔其等を〕

除遣し滅没せしめて無くし、

寂靜となり取盡きて解脱せる

如來は獻菓を受くるに値す。

(二一)

四七六、結〔煩惱〕と生との究竟滅盡を見、

貪路を残りなく斥除し、

淨く過なく垢を離れ礙なき

如來は獻菓を受くるに値す。

(二二)

四七七、自ら己我を觀ることなく、

〔心〕等持し、〔身〕端正にして自ら住し、

不動にして心裁なく疑惑なき

如來は獻菓を受くるに値す。

(二三)

四七八、愚癡の原因煩惱毫もあるなく、

一切諸法に對する智見あり、

また最後の身體を持ち〔再有なく〕、

吉瑞ある無上の正覺に達せる

——以上もて人〔心〕は淨まる——

如來は獻供を受くるに値す。

(二四)

四九、尊師の如き吠陀の達人を得たるが故に、

我が供養は眞實の供養にてあれかし。

蓋し、梵天(如來)は〔眞實の供養の〕證人なり。

世尊は我が獻菓を受けたまへ。

(二五)

四八〇、偈を唱へて得たるは我が食すべきに非ず。

婆羅門よ、この偈による受食は諸の正見者の法に非ず。

諸佛は偈を唱へて得たるもの斥けたまふ。

婆羅門よ法ある時それのみを諸佛は行ふ。(二六)

四八一、而して一切諸徳を有し漏盡き、

疑惑を消滅したる我天仙をば、

偈による以外の他の飲食もて供養せよ。

彼佛は福を望む者の福田たればなり。

(二七)

四八二、世尊よいかなる人が我が如き者の施を

食すべき人なりや願はくば我識らんと欲す。

尊師の教を受けて供養時に我は、

(二八)

斯る人を遍く求めて供養せんと欲す。

四八三、強情を離れたる者、

その心混亂なき者、

また諸欲を解脱したる者、

昏沈を除去したる者

四八四、諸の越境(煩惱)を調伏したる者、

生と死をば明察したる者、

牟尼性(智)を具備せる牟尼、

斯る者が供物を受けに來れる時、

(三〇)

四五五、彼に對する齋饗を調伏し、

〔彼に〕合掌し禮拜せよ。

飲食物を以て〔彼を〕供養せよ。

斯くせば〔その〕施は有効なり。

(三一)

四五六、尊師佛陀は獻菓を受くるに值す。

〔尊師は〕無上の福田なり。

一切世間の受獻者なり。

尊師に施さば大果あり。

(三二)

時に孫陀利迦婆羅墮闍婆羅門は世尊に白して言く、卿瞿曇よ、希有なり。卿瞿曇よ、希有なり。譬へば卿瞿曇よ、倒れたるを起すが如く、蔽はれたるを開くが如く、迷へる者に道を教ふるが如く、又は眼ある者は諸色を見るならんとて暗夜に燈火を掲ぐるが如く、斯の如く卿瞿曇は多くの教説もて法を説きたまへり。この我は卿瞿曇と

法と比丘衆とに歸依す。我は卿瞿曇の許にて出家を得んと欲す、具足戒を得んと欲す。

孫陀利迦婆羅墮闍婆羅門は世尊の許にて出家を得、具足戒を得たり。而して具戒後久しうからずして、尊者孫陀利迦婆羅墮闍は獨一に遠離し、不放逸に熱心に精勤し住して、久しうからずして——諸の善男子が正に家より非家に出家するの目的たる——無上の梵行の終局(即ち涅槃)をば現世にて自ら知通し作證し具足して住せり、生已に盡き、梵行已に成じ、所作已に辨じ、更に斯る(輪廻苦界の)状態に至らずと了知せり。斯くて尊者孫陀利迦婆羅墮闍は阿羅漢の一人となれり。

孫陀利迦婆羅墮闍經畢れり。

註① 訳書にては本經を獻菴經 (Pūralāśa-sutta) となせり。本經の序文たる長行の部分は S.I., P. 167f (S.7,1,9, Sundarika) と一致す。

②僧伽梨衣 (saṅghāti) とは重衣とも義譯し、内衣 (安陀衣)、外衣 (憲多羅僧) の上に著けるものにして此等を三衣と言ひ、普通の比丘の衣服は原則的にこの三衣に限らる。尚ほ蛇品第四、耕田婆羅墮闍經の註二参照。

③娑毘底 (Sāvitti) 偕とは Rigveda III, 62, 10 に存する三句二十四字より成る偈にして、太陽神 Sāvitrī に對する讚歌なり。この讚歌は普通に Gāyatrī と稱せられ婆羅門にして吠陀を

學ぶ者の最初に學習すべきものなり。この婆毘底偈と同様に、佛教徒にして最初に唱ふべきものば

Buddham saranam gacchāmi (歸依佛)

Dhammam saranam gacchāmi (歸依法)

Sangham saranam gacchāmi (歸依僧)

の三句二十四字より成る三歸依文なり。今茲に婆毘底と言へるは佛教の婆毘底たる三歸依文を指す。尙ほ婆羅門の婆毘底に關しては五六八偈参照。

④ 本偈前半は一〇四三偈に同じ。

⑤ 本偈はS.I. p.168 雜阿含一一八四經(大正二·三二〇c)、別譯雜阿含九九經(大正二·四〇九a)参照。

⑥ 本偈及び次の前半偈はS.I. p.168 もに出づ。漢譯相當偈は雜阿含一一八四經(大正二·三二一〇〇)、別譯雜阿含九九經(大正二·四〇九a)に見ゆ。

⑦ 本偈前半はS.A. I. p.26 に引用せらる。

⑧ 吠陀(Veda)とは須陀洹道乃至阿羅漢道の智を指す。

⑨ 以下二偈は四九七偈・四九八偈に同じ。

⑩ 「羅睺」(Rahu)とは印度に於て信ぜられたる傳說的の阿修羅(鬼神)にして、月や太陽を呑むとせらる。羅睺が月や太陽を呑む時に月蝕・日蝕が起る。

⑪ 心裁(cetokhila)とは心が荒めること。これに五種あり、即ち佛を疑ひて信せず、法を疑ひて信せず、僧を疑ひて信せず、戒定慧の三學を疑ひて信せず、同梵行者に對して瞋りて喜ばず自ら精勤せざることなり。

(2) 以下の二偈は八一偈、八二偈に同じ。尙ほ S.I. P.167; P.168 にも出で前偈は Mil. P.228 に引用せらる。此等二偈の漢譯相當偈は別譯雜阿含九九經(大正二四〇九a 以下)に見ゆ。

五 摩伽經^①

是の如く我聞けり。一時世尊は王舍城の靈鷲山に住したまへり。時に摩伽學童^{マーガ}^②は世尊の所に近づけり。近づきたる後、世尊と共に挨拶せり。喜ぶべき記憶すべき挨拶の語を交して一方に坐せり。一方に坐したる摩伽學童は世尊に白して言く、「卿瞿曇よ、我は施者たり施主たり、寛仁にして[他の]求めに應じ、法によりて財を遍求す。」法によりて財を遍求し已りて、如法に得たる如法に儲けたる諸財を以て一人にも施す、二人にも施す、三人にも施す、四人にも施す、五人にも施す、六人にも施す、七人にも施す、八人にも施す、九人にも施す、十人にも施す、二十人にも施す、三十人にも施す、四十人にも施す、五十人にも施す、百人にも施す、それ以上の人にも施す。卿瞿曇よ、我は斯の如く施し、斯の如く供養するに多くの福を生ずるや否や。」學童よ、汝は斯の如く施し、斯の如く供養するに多くの福を生ず。學童よ、施者たり施主たり、寛仁にして[他の]求めに應じ、法によりて財を遍求す。法によりて財を遍求し已りて、如法に得たる如法

に儲けたる諸財を以て一人にも施す、乃至百人にも施す、それ以上の人にも施す。斯る人は多くの福を生ず。時に摩伽學童は偈を以て世尊に白せり。

四八七、摩伽學童曰く、

我は袈裟を著け家なくして

遊行する寛仁なる尊瞿曇に問ふ。

福を求め福を望みて供養し、

〔他の〕求めに應ずる在家施主が、

此世にて他人に飲食物を施すに、

獻供者には何處への供養が淨きや。 (二)

四八八、世尊宣はく、

摩伽よ、福を求め福を望みて供養し、

〔他の〕求めに應ずる在家施主が、

此世にて他人に飲食物を施すに、

應施者(聖者)に施さば彼は幸あるべし。 (三)

四八九、摩伽學童曰く、

福を求め福を望みて供養し、

〔他の〕求めに應ずる在家施主が、

此世にて他人に飲食物を施すに、

應施者(聖者)をば、世尊よ、我に語りたまへ

四九〇、無一物にして一切〔諸徳〕あり、自ら制し、

實に染著なくして世間を遊行する

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は〔彼等に〕供養せよ。

四九一、一切の結縛を斷じ、諸根を調御し、

解脱して苦なく欲求なき所の

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は〔彼等に〕供養せよ。

四九二、一切の結を解脱し、〔諸根を〕調御し、

解脱して苦なく欲求なき所の

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は〔彼等に〕供養せよ。 (六)

四九三、貪欲と瞋恚と愚癡とを捨断し、

諸漏盡き梵行已に成じたる所の

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は〔彼等に〕供養せよ。 (七)

四九四、詣あることなく慢なく、貪欲を

離れ我意なく欲なき所の

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は〔彼等に〕供養せよ。 (八)

四九五、諸の渴愛に陥ることなく、暴流を

度り我意なくして行する所の

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は〔彼等に〕供養せよ。 (九)

四九六、此世にても彼世にても、いかなる

世界にても、種々なる有への渴愛あるなき、

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は[彼等に]供養せよ。 (一〇)

四九七諸欲を捨て、家なくして遊行し、

善く自ら制し、棱の如の端直なる

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は[彼等に]供養せよ。 (一一)

四九八、貪欲を離れ善く諸根を等持し、

月が羅睺の手を[脱したる]が如く煩惱を[脱したる]

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は[彼等に]供養せよ。 (一二)

四九九、自ら寂止し、貪欲を離れ、怒るなく

此世の[五蘊]を捨断して趣あるなき

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は[彼等に]供養せよ。 (一三)

五〇〇、生と死とを残りなく斷じ、

一切の疑惑を超えたる所の

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は[彼等に]供養せよ。 (二四)

五〇一、自己[の徳]を依所として世間を遊行し、

無一物にして一切處にて解脱せる

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は[彼等に]供養せよ。 (二五)

五〇二、『これ最後[有]なり、再有あるなし』

と斯く此世にて如實に知る所の

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は[彼等に]供養せよ。 (二六)

五〇三、吠陀に達し禪を樂しみ念あり、

正覺を得て多くの[人天の]歸依處たる

人々は時々に供物を受くべき人なり。

福を望む婆羅門は[彼等に]供養せよ。 (二七)

五〇四、實に我が質問は空しからざりき。

世尊は我に應施者を說きたまへり。

蓋し、尊師にはこの法界が知られ居るが故に、

尊師は此世にて斯く如實に知りたまへばなり。〔一八〕

五〇五、摩伽學童曰く、

福を求め、福を望みて供養し、

〔他の〕求めに應する在家施主が、

此世にて他人に飲食物を施すに、

完全なる供養〔法〕を世尊よ、我に語りたまへ。〔一九〕

五〇六、世尊宣はく、

摩伽よ、供養せよ、供養するには、

一切〔三〕時に心を欣淨ならしめよ。

斯く供養せば所縁〔財物〕は眞の施物となる、

この際〔彼は〕住立して過惡を斷ず。

五〇七、彼は貪欲を離れ瞋恚を調伏し、

(二〇)

慈無量心をば修習しつゝ、

日夜常に不放逸にして、

一切諸方に無量心を遍満せしむ。

(三二)

五〇八、誰が淨まり解脱するや、また誰が縛せらるゝや。

何によりて自ら梵天界に至るや。

牟尼よ、知らざる我に問はれて語りたまへ。

世尊よ、我は今日^{まのあた}面^{おもて}り梵天を見たり。

尊師は眞に我等の梵天に等しければなり。

光り輝やく人よ、いかにせば梵天界に生ずるや。 (三三)

五〇九、世尊宣はく、摩伽よ、

⑤ 三種のものゝ完具せる供養を行ふ者、

斯る人は受施せる應施者と共に幸あるべし。

斯く供養して正しく求めに應ずる者は、

梵天界に生ずと我は言ふ。

斯く言はれて、摩伽學童は世尊に白して言く、卿瞿曇よ、希有なり。〔卿瞿曇よ、希有

なり。譬へば卿瞿曇よ倒れたるを起すが如く、蔽はれたるを開くが如く、迷へる者に道を教ふるが如く、又は眼ある者は諸色を見るならんとて暗夜に燈火を掲ぐるが如く、斯の如く卿瞿曇は多くの教説もて法を説きたまへり。この我は卿瞿曇と法と比丘衆とに歸依す。卿瞿曇は今日より以後壽盡くるまで歸依せる優婆塞として我を認受したまへ。

摩伽經畢れり。

註① 本經は漢譯雜阿含一一五九經(大正二・三〇九a以下)、別譯雜阿含八二經(大正二・四〇二b以下)に相當するも、漢譯は極めて簡潔にして、偈數も少なく巴利と多少の類似あるも一々の偈としては比較相當せしめ難し。

② 學童(munhava)とは漢譯にては儒童と譯さる。師に就きて受學せる時代の婆羅門の子弟を云ふ。多く青少年なるが故に學童儒童等と譯するも、中には一一二〇偈の寶祇耶學童の如く極めて老年の者にも學童の名を付す。蓋し、彼は當時尚ほ婆和利の弟子なりしが故なり。

③ 本偈は四六九偈參照。

④ 以下の二偈は四六四偈、四六五偈に同じ。

⑤ 一切時(sabbattha)とは、施す前と、施す時と、施して後との三時を指す。この三時に欣べる心を以て供養すべし。

⑥ 三種云々前註參照。

六 薩毘耶經

92

是の如く我聞けり。一時世尊は迦蘭陀竹林園に住したまへり。爾の時、薩毘耶普行者に昔の血縁者たる一天神によりて、[薩毘耶よ、沙門又は婆羅門にして汝が問へる此等の質問に解答し得]る者の許にて汝は梵行を行すべしとて質問が提示せられたり。時に薩毘耶普行者はその天神の許にて其等の質問を把持し已りて、沙門婆羅門にして[弟子]衆あり、群あり、群の師たり、有名にして名聲あり、宗祖にして多くの人々に善く評判せらるゝ者所謂不蘭迦葉・末伽梨瞿舍・羅・阿耆多・翅舍・欽婆羅・波拘陀・迦旃延・散若耶・毘舍遮・提子の六師なる彼等の所に至りて、其等の質問をなせり。彼等は薩毘耶普行者に質問せられて、満足に答ふること能はざりき。満足に答へずして怒と瞋と不機嫌とを現はし、加之も薩毘耶普行者に反問せり。時に薩毘耶普行者は思念すらく、尊沙門婆羅門にして弟子衆あり、群の師たり、有名にして名聲あり、宗祖にして多くの人々に善く評判せらるゝ者所謂不蘭迦葉乃至尼犍若提子の六師なる]彼等は我に質問せられて満足に答ふること能はず。満足に答へずして怒と瞋と不機嫌とを現はし、加之もこれに關して我に反問す。いでや我は劣位(在家の狀)

態に轉じて諸欲を受用せばや」と。時に薩毘耶普行者は〔更に〕思念すらく、「この沙門瞿曇も弟子衆あり、群あり、群の師たり、有名にして名聲あり、宗祖にして多くの人々に善く評判せらる。いでや我は沙門瞿曇の所に至りて此等の質問をなさばや」と。時に薩毘耶普行者は〔更に〕思念すらく、「尊沙門婆羅門にして老い長じ耆宿にして年を重ね老齡に達し、長老にして経験多く、久しう出家し、「弟子衆あり、群あり、群の師たり、有名にして名聲あり、宗祖にして多くの人々に善く評判せらるゝ者、所謂不蘭迦葉乃至尼犍若提子の六師なる彼等すら、我に質問せられて満足に答ふること能はざりき。」然らばいかでか沙門瞿曇は我に此等の質問をせられて解答し得べけんや。蓋し、沙門瞿曇は生年も若く、出家も新しければなりと。時に薩毘耶普行者は〔更に〕思念すらく、「沙門は若しとて輕視すべからず、侮蔑すべからず。假令沙門は若しと雖も、而も彼は大神變大威力あり。我は沙門瞿曇の所に至りて此等の質問をなさばや」と。時に薩毘耶普行者は世尊の〔所住〕所に向ひて旅立てり。次第に旅行しつゝ、王舍城の迦蘭陀竹林園の世尊の所に近づけり。近づきたる後、世尊と共に挨拶せり。喜ぶべく記憶すべき挨拶の語を交はしたる後、一方に坐せり。一方に坐したる薩毘耶普行者

は偈を以て世尊に白して言く、

五一〇、薩毘耶曰く、

疑惑あり疑ひありて質問を

なさんと欲して我は來れり。

我がために其等質問の終熄者と
なりたまへ。我に質問せられて、

順次に法に隨ひて我に解答したまへ。(二)

五一、世尊宣はく、

薩毘耶よ、汝は質問をなさんと

欲して遠方より來れり。

汝のために其等質問の終熄者と

我はならん。汝に質問せられて、

順次に法に隨ひて我は汝に解答せん。(三)

五二、^④薩毘耶よ、汝が意に欲する所を、

何事にても我に質問せよ。

私は汝がためにそれぞれの

質問をして終熄せしめん。

(三)

時に薩毘耶普行者は思念すらく、實に尊瞿曇は希有なり。實に尊瞿曇は未曾有なり。實に我は他の諸の沙門婆羅門にありては質問すべき餘地すらをも得ざりしに、沙門瞿曇は我のために質問をなす餘地を與へたり」とて意悅び歡喜踊躍し、喜悅を生じて世尊に質問せり。

五一三、薩毘耶曰く、

何を得たる者を比丘と言ふや。

何によりて柔和者となるや。

いかにして調御者と言ふや。

いかにして佛と言はるゝや。

世尊よ、我に問はれて答へたまへ。

(四)

五一四、^④世尊宣はく、

薩毘耶よ、自ら修習せる道によりて、般涅槃に至り、疑惑を度り、

わたり

非有と有とを捨断し、梵行已に成じ、

再有を滅盡せる、これ比丘なり。

(五)

五五、一切處にて捨あり、念を有し、

一切世間にて何物をも害するなく、

暴流を度り、混濁なき沙門にして、

増盛(煩惱)あるなき、これ柔和者なり。

(六)

五六、内と外との一切世間に於て、

諸根を調御して修習し、

此世と他世とを洞察して、

修習せる者、これ調御者なり。

(七)

五七、一切の妄想分別と輪廻と、

死と生との兩者とを辨知し、

塵を離れ穢汚なく清淨なる、

生の滅盡を得たる、これ佛と言ふ。

(八)

時に薩毘耶普行者は世尊の所説を大いに喜び隨喜し、意悅びて歡喜踊躍し、喜悅を

生じて更に世尊に質問をなせり。

五一八 薩毘耶曰く、

何を得たる者を婆羅門と言ふや。

何によりて沙門なりや。

いかにして沐浴者と言ふや。
いかにして龍象と言はるゝや。

世尊よ、我に問はれて答へたまへ。

五一九 ^{四〇}世尊宣はく、薩毘耶よ、

一切の諸惡を斥け、垢を離れ、

善く心を等持して自ら住立し、

輪廻を越えて一切功德あり、

依止なき者はこれ婆羅門と言はる。

五二〇、寂靜にして善惡を捨斷し、

塵を離れ此世と他世とを知り、

生と死とを超越せるが如き、

(九)

(一〇)

斯る者はそれ故に沙門と言はる。

(一一)

五二、内と外との一切世間の、

一切の諸悪をば洗ひ落し、

時間的(輪廻的)なる天と人〔の世界〕にて、

時間(輪廻)に入らざる、これ沐浴者と言ふ。(一一)

五三、^❶世間にて何等の罪惡をも行はず、

一切の結の結縛を捨離し、

一切處にて解脱し染著せざる、

斯る者はそれ故に龍象と言はる。

(一三)

時に薩毘耶普行者は世尊の所説を大いに喜び隨喜し、意悅びて歡喜踊躍し、喜悅を生じて、更に世尊に質問をなせり。

五三、薩毘耶曰く、

諸佛は誰を田の勝者と説くや。
何によりて善巧なりや。
いかにして賢者なりや。

いかにして牟尼と言はるゝや。

世尊よ、我に問はれて答へたまへ。

(一四)

五三四、世尊宣はく、薩毘耶よ、

天人と梵天との田なる

一切の田をば辨知して、

一切田の根本縛を解脱せる、

斯る者はそれ故に田の勝者と言はる。

(一五)

五四五、天人と梵天との藏なる

一切の藏をば辨知して、

一切藏の根本縛を解脱せる、

斯る者はそれ故に善巧者と言はる。

(一六)

五五六、内と外との兩者の白きを

辨知して淨慧あり、

黑白を超越せるが如き、

斯る者はそれ故に賢者と言はる。

(一七)

五二七 内と外との一切世間に於て、

不善と善との法を知りて、

天と人よりの供養に値し、

著と網とを越えたる、これ牟尼なり。 (一八)

時に薩毘耶普行者は世尊の所説を大いに喜び隨喜し、意悅びて歡喜踊躍し、喜悅を生じて、更に世尊に質問をなせり。

五二八 薩毘耶曰く、

何の得者を吠陀の達人と言ふや。

何によりて隨知者なりや。

いかにして具精進者なりや。

いかなる者を貴族と言ふや。

世尊よ問はれて我に答へたまへ。

五二九 ^⑩世尊宣はく、薩毘耶よ、

沙門と婆羅門とに存する、

一切の吠陀をば辨知し、

一切の諸受に對する貪を離れ、

一切の受を超ゆる、これ吠陀の達人なり。(二〇)

五三〇、内と外との病根たる

^⑩ 障礙と名色とを隨知して

一切病根の縛を解脱せる、

斯る人はそれ故に隨知者と言はる。

(二二)

五三一、此世の一切諸惡を離れ、

地獄の苦を越えて精進ある

かの精勤を有する賢者、

斯る人はそれ故に具精進者と言はる。

(二三)

五三二、諸の縛と内と外との

染著の根本を斷除し、

一切染著の根本縛を解脱せる

斯る人はそれ故に高貴者と言はる。

(二四)

時に薩毘耶普行者は世尊の所説を大いに喜び隨喜し、意悅びて歡喜踊躍し、喜悅を

生じて更に世尊に質問をなせり。

五三、薩毘耶曰く、

何を得たる者を聞解者と言ふや。

何によりて聖者なりや。

またいかにして具行者なりや。

いかなる者を普行者といふや。

世尊よ、我に問はれて答へたまへ。

五四、世尊宣はく、薩毘耶よ、

聞き已りて世間に存するあらゆる
有罪無罪の一切諸法を知通せる、
征勝者無疑惑者・解脱者、一切處にて
苦なき者を聞解者と言ふ。

(二五)

(二四)

四五、諸の漏と阿賴耶(執著)とを断じ、

知り已りて母胎に赴くことなく、
三種の想と游泥(欲)とを除去し、

〔妄想〕分別に至らざる、これを聖者と言ふ。(二五)

五三六、この〔教〕中にて行もて得べきを得、

善巧にして一切時に〔涅槃法〕を知り、
一切處にて執著なくして解脱し、

瞋恚あるなき者はこれ有行者なり。 (二七)

五三七、上と下と横と中(過去現在未來)の

苦果を招くべきあらゆる業を

回避し、諂と慢とまた

貪と忿とを遍知して行じ、

名色の邊際を盡せるかの

得べきを得たる者を普行者と言ふ。 (二八)

100 時に薩毘耶普行者は世尊の所説を大いに喜び隨喜し、意悅び歡喜踊躍し、喜悅を生じ、座より起ち上りて上衣を一肩となし、世尊の所に合掌を向け、面前にて適當なる偈を以て世尊を讃歎せり。

五三八、沙門の論争に依止して起れる、

言説文字顛倒想に依止して起れる、

^⑯六十と三の異端説を調伏して、

廣慧者は暴流(の闇)を度りたまへり。 (わた)

五三九、苦の邊に至り、彼岸に到りたまへり。

尊師は阿羅漢等正覺者なり。

尊師を漏盡者なりと我は思ふ。

〔尊師は光輝あり、覺慧あり、博慧あり。

盡苦際者よ、師は我を度したまへり。

五四〇、我に疑惑あるを知りたまへり。

我を疑より度したまへり。牟尼よ、

牟尼道の頂を極めたる者よ、尊師に歸命す。

〔心裁なき⑯日種よ、尊師は柔軟なり。〕

五四一、曾て我に疑惑の存せしに、

具眼者はそを我に解答したまへり。

牟尼よ、尊師は確かに正覺者なり。

尊師に諸蓋あることなし。

(三二)

五四二、而して尊師の苦惱はすべて

これ摧破せられ断滅せられたり。

清涼となり、調御を得たまふ。

〔尊師は〕心堅固にして誠實なり。

(三三)

五四三、かの龍象中の龍象にして

大雄たる尊師の說法に、

一切の天も那羅陀鉢婆多の

兩〔神〕も、〔共〕に隨喜するなり。

(三四)

五四四、人中の高貴者よ、尊師に歸命す。

人中の最上者よ、尊師に歸命す。

天を含めたる〔一切〕世界に於て、

尊師に匹敵すべき者あるなし。

(三五)

五四五、^印尊師は佛なり、尊師は師なり。

尊師は魔の征勝者なり、牟尼なり。

尊師は諸の隨眠を斷じ已り、

自ら度り、この人々を度したまふ。

(三六)

五四六、尊師は依^{クバティ}をよく超えたまへり。

尊師は諸漏を破壊したまへり。

尊師は取著なき師子なり。

怖畏恐怖の捨斷者なり。

(三七)

五四七、譬へば美はしき蓮華が

泥水に塗著せざるが如く、

斯く尊師は善と惡との

兩者に塗著したまはず、

雄者よ、兩足を出したまへ、

薩毘耶は師を禮拜せん。

(三八)

時に薩毘耶普行者は世尊の兩足に頭^面を伏せて世尊に白して言く、「希有なり、尊師よ。」〔希有なり、尊師よ。譬へば尊師よ。倒れたるを起すが如く、蔽はれたるを開くが如く、迷へる者に道を教ふるが如く、又は眼ある者は諸色を見るならん」とて暗夜に燈

火を掲ぐるが如く、斯の如く尊師は多くの教説もて法を説きたまへり。この我は尊師と法と比丘衆とに歸依す。我は尊師世尊の許にて出家を得んと欲す、具足戒を得んと欲す。

「薩毘耶よ、曾て異學徒たりし者がこの佛教の法と律とに於て出家を望み具足戒を望むときは、彼は四ヶ月間別住すべし。四ヶ月を過ぎて、心決定せる諸比丘が〔彼を出家せしめ具足せしめて比丘となす。されどこの場合人によりて相違あり、〔汝は四ヶ月の別住に及ばずして出家することを得〕」。尊師よ、若し曾て異學徒たりし者がこの〔佛教の〕法と律とに於て出家を望み具足戒を望むときは、彼は四ヶ月間別住し、四ヶ月を過ぎて、心決定せる諸比丘が〔彼を出家せしめ具足せしめて比丘となすべき規定〕ならば、我は〔四ヶ月のみならず〕四ヶ月間別住せん。四ヶ月を過ぎて、心決定せる諸比丘が〔我を出家せしめ具足せしめて比丘となさんことを〕。〔されど即座に〕薩毘耶普行者は世尊の許にて出家を得、具足戒を得て比丘となれり。〔而して具戒後久しからずして、尊者薩毘耶は獨一に遠離し、不放逸に熱心に精勤し住して、久しうからずして――諸の善男子が正に家より非家に出家する目的たる――無上の梵行の終局〔即ち涅槃〕をば現世にて自ら知通し作證し具足して住せり、生已に盡き、梵行已に成じ、所

作已に辨じ更に斯る〔輪廻苦界の〕狀態に至らず」と了知せり。斯くて尊者薩毘耶は阿羅漢の一人となれり。

薩毘耶經畢れり。

註 ① 本經に相當すべきものに Mahāvastu I, PP.389-401; 佛本行集經卷三八・三九(大正三・八三三 a 以下)等のものあり。而して Mahāvastu 等に於ては薩毘耶の物語を詳出せり。巴利に於ける薩毘耶の物語は本經の註(SnA, PP.420-422)及び Thag, vv. 275-278 の註に出で、後者が寧ろ Mahāvastu 等に近し。

② 不蘭迦葉等は所謂六師外道にして釋尊時代に摩竭陀を中心とする中印度に於て、一派の宗祖として説を立て徒衆を率ゐたる沙門團なり。彼等の所説に關しては諸種の文獻に出づるも例へば長阿含沙門果經(大正一・一〇八 a 以下) Sumanagala-vilāśī I, P.142ff 等参照。

③ 以下本經各偈は Mahāvastu III, PP.394-401; 佛本行集經卷三九(大正三・八三三 c 以下)参照。

④ 本偈は D.A. I, P.155; M.A. II, P.274 に引用せらる。

⑤ 本偈は MNd. P.71; CNd. (シヤム本) P.31 に引用せらる。

⑥ 本偈は MNd. P.170; CNd. (シヤム本) P.244; Nettl. P.170 に引用せらる。

⑦ 本偈は MNd. P.87; CNd. (シヤム本) P.100; P.113 に引用せらる。

⑧ 本偈は MNd. P.202; CNd. (シヤム本) P.98; P.373; M.A. I, P.153; SnA. I, P.77 に引用せらる。

⑨ 本偈は MNd. P.58; P.336; CNd. (シヤム本) P.84 など引用せらる。

⑩ 本偈は MNd. p.93; p.205; CNd. (シャム本) p.70 に引用せらる。

⑪ 呪陀とは須陀洹道等の四聖道の智を指す。

⑫ 障礙(papāca)とは渴愛と惡見とを指す。漢譯にては「戲論」と譯せらる。

⑬ 三種の想(tividha-saṇṇa)とは欲想(kama-saṇṇa)、恚想(vyapada-saṇṇa)、害想(vihimsa-saṇṇa)な
り。

⑭ 六十三の異端說(tūpi saṭṭhi osarāṇī)とは六十二見に邪見を加へたるもの。六十二見は長部第一梵網經(D. I. p.13ff) 參照。

⑮ 疑より(vicikicchā) 底本には vicikicchān あるも今は異本に従ひて讀む。

⑯ 日種(Ādīcca-bandhu) 太陽の親戚の意味にて種族名なり。釋尊は日種族に屬する釋迦族の出なるが故に釋尊を日種と云へるなり。

⑰ 次の二偈は五七一偈五七二偈及び Thag. vv. 839, 840 に同じ。

⑱ 人によりて相違ありとは異學より佛教に歸依せる場合には原則的に四ヶ月間のテスト時代を経て始めて出家を許さる、規定なるも嘗て事火外學・結髮外學たりし者、釋迦族にして嘗て異學徒たりし者、及び何者にても四向果を得べき因を具せる者は除外例にして彼等は直ちに出家を許さる。今の薩毘耶の場合は最後の除外例に該當す。前の三除外例に關しては V.I. p.71 參照。

七 施羅經

是の如く我聞けり。一時世尊は大比丘衆千二百五十人と俱に鷲嶺多羅波國を遊

^② アンダカタ ラーバー

行し、阿波那と名づくる鷲崛多羅波國の或る町に入りたまへり。^③ 結髮苦行者雞尼耶は斯る噂を聞けり、實に釋迦族の子なる沙門瞿曇は釋迦族より出家し、千二百五十人の大比丘衆と俱に鷲崛多羅波國を遊行し、阿波那に到着せり。而してかの尊瞿曇には、「彼世尊は、阿羅漢等正覺者、明行具足者、善逝・世間解・無上者、調御丈夫・天人師・佛・世尊とも言はる。彼は自ら知通し作證して、天を含めたる惡魔を含めたる梵天を含めたるこの「一切世界に教説し」、沙門婆羅門を含めたる天と人とを含めたる人々に教説す。彼は初善中善後善にして義あり文ある法を説き、全く完全にして遍淨なる梵行を説き明す」といふ善き名聲揚り居れり。然らば斯の如き阿羅漢に見ゆることは幸福なり」と。

時に結髮苦行者雞尼耶は世尊の所に近づけり。近づきたる後世尊と共に挨拶をなせり。喜ぶべく記憶すべき挨拶の語を交したる後、一方に坐せり。一方に坐したる結髮苦行者雞尼耶に世尊は説法を以て教示し鼓舞し激勵し悦喜せしめたまへり。時に結髮苦行者雞尼耶は世尊より説法を以て教示・鼓舞・激勵・悦喜せしめられて、世尊に白して言く、「尊瞿曇は比丘衆と俱に明日の食を我より受くることを我に聽許したまへ」。斯く言はれて、世尊は結髮苦行者雞尼耶に宣へり、「雞尼耶よ、比丘衆は多く、

千二百五十人なり。加之も汝は諸の婆羅門を信奉し居れり、「故に婆羅門に施食し更に我が大比丘衆に供養するは汝の大負擔なり。されば我等に供養することを止めよ」。再びまた結髮苦行者雞尼耶は世尊に白して言く、「尊瞿曇よ、假令比丘衆は多く、千二百五十人なりとも、且つ我是諸の婆羅門を信奉し居れりとも、尊瞿曇は比丘衆と俱に我が明日の食を受くることを聽許したまへ」。再びまた世尊は結髮苦行者雞尼耶に宣へり、「雞尼耶よ、比丘衆は多く、千二百五十人なり。加之も汝は諸の婆羅門を信奉し居れり」。三たびまた結髮苦行者雞尼耶は世尊に白して言く、「尊瞿曇よ、假令比丘衆は多く、千二百五十人なりとも、且つ我是諸の婆羅門を信奉し居れりとも、尊瞿曇は比丘衆と俱に我が明日の食を受くることを聽許したまへ」。世尊は沈黙によりて聽許したまへり。

斯くて結髮苦行者雞尼耶は世尊の聽許を知りて、座より起ち上り、己が住院に歸り近づけり。歸りたる後、諸の友人同僚親戚縁者に告げたり、皆、友人同僚親戚縁者よ、我が言を聞け。私は沙門瞿曇を比丘衆と共に明日の食に招待せり。故に汝等は我に手傳へ。唯諾卿よ、と結髮苦行者雞尼耶の友人同僚親戚縁者等は結髮苦行者雞尼耶に答へ、或る者は竈を掘り、或る者は薪を割り、或る者は器具を洗ひ、或る者は水を

充たせる水甕を据ゑ、或る者は座席を設け、また結髮苦行者雞尼耶は自ら假屋圓堂を準備せり。

爾の時、三吠陀に通曉し語彙儀軌音韻語源論「阿闍婆吠陀」の類を含め、古傳説を第五とする諸書典の句と解説(文法)とに通じ、順世論大人相論に熟達せる施羅婆羅門ありて阿波那に住し、三百人の學童に吠陀聖典を教へ居たり。

爾の時、結髮苦行者雞尼耶は施羅婆羅門を信奉し居たり。時に施羅婆羅門は三百人の學童を從へ、久坐より生ぜし疲勞を除くべく膝を伸ばす爲の遊歩をあちこち行ひつゝ、結髮苦行者雞尼耶の住院に近づけり。施羅婆羅門は雞尼耶の住院に屬する諸の結髮苦行者が、或る者は竈を掘り、或る者は薪を割り、或る者は器具を洗ひ、或る者は水甕を据ゑ、或る者は座席を設け、結髮苦行者雞尼耶は自ら假屋を用意せるを見たり。見已りて結髮苦行者雞尼耶に問うて曰く、「卿雞尼耶には息子の嫁取りありや、「息女の嫁入りありや、大供養が現起せりや、又は摩竭陀王斯尼耶頻毘婆羅が軍隊と共に明日の食事に招待せられたりや。卿施羅よ、我には息子の嫁取りあるに非ず、一息女の嫁入りあるに非ず、また摩竭陀王斯尼耶頻毘婆羅が軍隊と共に明日の食事に招待せられたるにも非ず。但だ我に大供養現起せり。即ち釋迦族より出家

せし釋迦族の子たる沙門瞿曇が鷲嶠多羅波國を遊行し、大比丘衆千二百五十人と俱に阿波那に達せり。而してかの尊瞿曇には、「彼世尊は阿羅漢等正覺者明行具足者善逝世間解無上者調御丈夫夫人師」佛世尊とも言はるといふ善き名聲揚り居れり。我は彼を比丘衆と共に明日の食に招待せり。卿雞尼耶よ汝は佛と言ふや。卿施羅よ我は佛と言ふ。我は佛と言ふ。卿雞尼耶よ汝は佛と言ふや。卿施羅よ我は佛と言ふ。

時に施羅婆羅門は思念すらく、「この佛といふはその聲すらも世間にて得難きものなり。而して我等の聖典中に三十二大人相が述べられ居れり。その三十二相を具備せる大偉人には二途のみありて其他なし。〔即ち若し彼家に住しなば轉輪王となり、如法正義なる法王にして、四邊の國々を征服し、國土を安固ならしめ、七寶を具備し、彼には此等の七寶あり。所謂輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・第七に主兵寶なり。また彼には勇敢豪邁にして敵軍を擊破する千人以上の子あり。彼は海洋に圍まれたるこの〔全域〕土をば罰杖を用ひず刀劍を用ひず、法正義によりて征服して住す。されど若し彼家より非家に出家しなば、彼は阿羅漢等正覺者となり、世間の諸煩惱の蔽ひを開く。」

卿雞尼耶よ、然らば阿羅漢等正覺者たるかの尊瞿曇は今何處に住したまふや。斯

107

く問はれて結髮苦行者雞尼耶は右腕を差伸べて施羅婆羅門に謂ひて言く、「卿施羅よ、この方角に當りて一帯の青き林あり、「そこに世尊は住したまふ」。

時に施羅婆羅門は三百人の學童と共に世尊の所に赴けり。かくて施羅婆羅門は彼等學童に告ぐらく、「汝等よ、小股に歩き靜肅にして來れ。蓋し、彼等世尊は近づき難く師子の如く一人行けばなり。而して我沙門瞿曇と共に談する時、汝等はその中間に容喙すること勿れ。我が談論の終るまで汝等は待て。」時に施羅婆羅門は世尊の所に近づけり。近づきたる後、世尊と共に挨拶せり。喜ぶべく記憶すべき挨拶を交したる後、一方に坐せり。一方に坐したる施羅婆羅門は世尊の身中に三十二の大・人相ありや否やを探したり。施羅婆羅門は世尊の身中に二〔相〕を除きて三十二の大・人相を殆んど見たり。「但だ陰馬藏〔相〕と廣長舌〔相〕との二大人相に關して、それが世尊にありや否やを」彼は疑惑し疑ひ、「佛たることを信解せず信受せざりき。時に世尊は施羅婆羅門が世尊の陰馬藏〔相〕を見るが如き神變行を行ひたまへり。また世尊は舌を出し、「舌を以て」兩耳孔を上下に摩したまひ、兩鼻孔を上下に摩したまひ、前額一面を舌を以て蔽ひたまへり。かくて施羅婆羅門は思念すらく、沙門瞿曇は完全なる三十二大人相を具足し、不完全ならず。されど我は彼が佛なりや否やを知らず。然

るに我は諸の年老いたる耆宿の師婆羅門又は〔更に〕その師婆羅門が阿羅漢等正覺者たる人は自己が讚説せらるゝ時〔自己の面目〕を現はすと斯く言ふを聞きたり。いでや我は沙門瞿曇を面前にて適當の偈を以て讚歎せばや」と。斯くて施羅婆羅門は面前にて適當の偈を以て世尊を讚歎せり。

五四八、^④世尊よ、汝は身體完全し、

善く輝き善く生れ見ま欲しく、

黃金の色をなせり、具精進者よ、

汝は極めて白き齒牙あり。

五四九、蓋し、善く生れたる人に

存するあらゆる相好は、

すべてこれ汝の身中に

大人相としてあればなり。

五五〇、澄淨なる眼あり、善き顔あり、

沙門衆の中にありて、

(二)

(三)

汝は太陽の如くに遍照す。

(三)

五五、(汝は)見るに善き(美はしき)比丘なり。

黄金の如き皮膚を有す。

斯の如く最上の容色ある

汝に沙門たるべき何の要あらん。

(四)

五五二、汝は轉輪王として

車兵の主となり、四邊を征服し、

閻浮林(この世界)の主宰者と

なるに値す(べき人なり)。

(五)

五五三、諸の刹帝利や地方の諸王は

汝の隸屬者となるべし。

瞿曇よ、汝は王中の王として、
人類の帝王として統治せよ。

(六)

五四、世尊宣はく

施羅よ、我は王なり。

無上の法王なり。

法によりて輪を轉ず、

反轉すべからざる輪を。

五五五、施羅婆羅門曰く、

「汝は正覺者と公言す。

瞿曇よ、汝は我は無上の

法王なり、法によりて

輪を轉ず」と斯く説く。

五六六、誰が果して師に繼ぐべき

卿の將軍(最勝)弟子なりや。

誰が汝が轉じたるこの

法輪をば〔汝に〕次いで轉ずるや。

五五七、世尊宣はく、施羅よ、

我が轉じたる輪をば、

〔即ち〕無上の法輪をば、

(七)

(八)

(九)

如來より生れ出でたる

舍利弗が〔我に〕次いで轉ず。

(一〇)

五五八、^ア我は知通すべき〔苦〕を知通せり。

修習すべき〔道〕を修習せり。

捨斷すべき〔煩惱〕を捨斷せり。

五五九、我に對する疑惑をなくせよ。

故に婆羅門よ、我は佛なり。

(一一)

婆羅門よ、〔我を〕信解せよ。

諸の正覺者に屢々見ゆるは

〔極めて〕得難きことなり。

五六〇、彼等〔正覺者〕が屢々世に

(一二)

出現するは實に難し。

婆羅門よ、この我は正覺者なり。

〔煩惱の箭に對する〕無上の治癒者なり。

(一三)

五六一、〔我は〕最勝にして比類なく、

能く惡魔の軍を擊破し、

一切の敵を降伏せしめ、

何處にも怖畏なくして喜ぶ。

(一四)

五〇二〔施羅は三百の弟子等に言ひて曰く〕卿等よ、有眼者箭(毒)の治癒者

大雄が恰かも師子が林中にて

吼ゆるが如くに説きたまふ所の

この〔所説〕をばよく傾聽せよ。

(一五)

五〇三、最勝にして比類なく、

惡魔の軍を擊破せる〔佛〕に

見えて誰か信樂せざらん。

賤族の者すら〔彼〕を信樂す。

(一六)

五〇四、〔從はんと欲する者は我に從へ。〕

また〔從ふを欲せざる者は去れ。〕

我は優れたる慧者の許にて、

この〔佛教〕中に出家せんとす。

(一七)

五五、若しこの等正覺者の教が、

尊師に望ましきものなりせば、

我等も亦優れたる慧者の

許にて出家をなさん。

五六、此等三百人の婆羅門は、

合掌をなして願求す。

世尊よ、我等は尊師の

許にて梵行を行ぜんと欲す。

五七、世尊宣はく、施羅よ、

梵行は善く説かれ居れり。

現に見られ、即時に[果]あり。

[故に]不放逸にして學する者の

此處に出家するは空しからず。

(一〇)

施羅婆羅門は徒衆と共に世尊の許にて出家を得、具足戒を得たり。

時に結髮[苦行者]雞尼耶はその夜を過ぎ、(翌朝)自己の住院にて美味なる硬食軟食

を準備し、「尊瞿曇よ、〔食〕時なり、食は〔整ひ畢れり〕」とて世尊に時を告げしめたり。かくて世尊は晨朝に衣を著け鉢と僧伽梨衣とを携へて結髮苦行者雞尼耶の住院に近づきたまへり。近づきて後、比丘衆と共に設けの席に坐したまへり。時に結髮苦行者雞尼耶は佛を首め、比丘衆に美味なる硬食軟食を以て手づから給仕し満足せしめ、飽食せしめたり。かくて結髮苦行者雞尼耶は世尊が食を終り鉢より手を放したまひし時、「自ら低き座を取りて一方に坐せり。一方に坐したる結髮苦行者雞尼耶に世尊は次の偈を以て隨喜(禮言)したまへり。

五六、火への獻供は供養の最上なり。

(15) 婆毘底(偈)は聖偈(吠陀)の最上なり。

王は諸人中の最上者なり。

海洋は諸水中の最上者なり。

五六九、月は諸星辰の最上者なり。

太陽は輝くものゝ最上者なり。

僧衆は實に福を望みて

供養する人々の最上(應施)者なり。

(二二)

(三三)

かくて世尊は結髮苦行者羅尼耶に此等の偈を以て隨喜^(禮言)したまひし後座より起ちて去りたまへり。

時に尊者施羅は^{〔徒〕衆}と共に獨一に遠離し、不放逸に熱心に自ら精勤し住しつゝ、久しからずして——諸の善男子が正に家より非家に出家するの目的たる——無上の梵行の終局^{〔即ち涅槃〕}をば現世にて自ら知通し作證し具足して住せり、生已に盡き、梵行已に成じ、所作已に辨じ、更に斯る^{〔輪廻苦界の〕}狀態に至らずと了知せり。斯くて尊者施羅は^{〔徒〕衆}と共に阿羅漢の一人となれり。時に尊者施羅は^{〔徒〕衆}と共に世尊の所に近づけり。近づきたる後衣を一肩にし、世尊の方に合掌を向け、偈を以て世尊に白せり。

五七〇。^⑯具眼者よ、今より八日以前に、

我等は尊師に歸依せり。

世尊よ、七夜を過ぎて我等は、

尊師の教中にて調御されたり。

五八一。^⑰尊師は佛なり、尊師は師なり。

尊師は魔の征勝者なり、牟尼なり。

(二三)

尊師は諸の隨眠を斷じ已り、

〔自ら〕度り、この人々を度したまふ。 (一四)

五七一、尊師は依をよく超えたまへり。

尊師は諸漏を破壊したまへり。

尊師は取著なき師子なり。

怖畏恐怖の捨斷者なり。

五七三、此等三百の諸比丘が

合掌をなし立ち居れり。

雄者よ、兩足を伸ばしたまへ、

諸龍象をして師を禮せしめん。

施羅經畢れり。

(一六)

註① 本經は其儘の形にて中部九二經に出づるも P T S 本にては本經と重複するが故に省略せられ、從つて南傳大藏經、中部經典に於ても省略せらる。本經の相當經は增一阿含卷四六、四七(大正二・七九八以下)に存するも、これは本經と多少の類似ある程度にて、大部分は相違せり。

② 鶩帳多羅波、(Anguttarāpa) とは *Anga-Uttarāpa* にして *Uttarāpa* とは摩企といふ河水(*apa*)

の北方 (uttara) 地方の意味なり。鷲伽 (Aṅga) 地方が摩企河の北方に在るが故に鷲伽地方を斯く言ふ。

③以下底本一〇四頁十六行に至るまでは、双方に多少の出入あるも V.I, p.245f に大體一致す。

④「阿羅漢」云々、これ如來十號なり。如來十號に關しては本書の註にも略説あるも、詳細は Visuddhi-magga pp.198-212; Samantapāśādikā pp.112-125 等參照。

⑤「三吠陀」¹⁴々の語は博學多識なる婆羅門来形容するに用ひらるゝ佛典中の定型句なり。

⑥「順世論」(lokayata) とは世俗的學問のこと、哲學説としては唯物論を指す。註には詭辯論 (vitanda-sattha) とあり。

⑦「卿」(hho) の字は底本に缺くも異本によりて補ふ。

⑧以下五六七偈に至る二十偈は Thag. vv.818-837 の二十偈に同じ。

⑨「見丈欲」くく (cārudassano)、註に「丈に美しき眼あり」とふ解釋もあり。

⑩本偈は Mil. p.183 に引用せらる。

⑪本偈は Vm. p.201; UddA. p.84; MNdA. p.186 に引用せらる。

⑫「實」(vo) 異本にては ve とあり。vo も時に ve と同様に用ひらる。七六〇偈參照。

⑬「時」(atha)、底本の attha は誤植。以下底本一一一頁の下より二行目迄は其儘の形にて V.I, p.246 にも出で。

⑭ 次の二偈は V.I, p.246 に出づ。尙ほ五六八偈及び五六九偈の前半に相當すべき偈は 中阿含一六一梵摩經(大正一六八九c)、雜阿含一一〇經(大正二三七b)、別譯雜阿含五二經、二五九經(大正二三九一b)、四六五a 以下、增一阿含卷九(大正二五八九b)、卷一

八(六三七c)、卷二五(六八四a)、卷二六(六九四c)、卷三〇(七一七a)、卷四〇(七六八b)、卷四一(七七五b)、頻毘婆羅王詣佛供養經(大正二・八五六c)、過去現在因果經卷四(大正三・六四七b、c、六四八a、b)、佛本行集經卷三三、卷五五(大正三・八三五b、九〇九a)、中本起經卷下(大正四・一六三b)、五分律卷一(大正二二・二b)、十誦律卷一四、卷二六(大正二三・一〇〇b、一・八八c以下、一・八九c以下、一・九二b)、有部毘奈耶破僧事卷一一(大正二四・一・五八b)、有部毘奈耶雜事卷三五(大正二四・三八〇a)、鼻奈耶卷四(大正二四・八六七a以下)等に見ゆ。

⑯ 婆毘底(Savitti)とは婆羅門の偈頌中にて最も重んぜらるゝ偈にして Rig-veda III, 62, 10 にあり。即ち Om tat Savitur varenyam, bhargo devasya dhimahi dhiyo yo naḥ pracodayat 〇 三句二十四字より成る。尙ほ四五七偈の註參照。

⑮ 以下四偈は Thag. vv. 38-41 に同じ。

⑯ 次の二偈は五四五偈、五四六偈に同じ。

八 箭經

五七四^①此世に於ける人々の命は、無相にして知るべからず。

また悲惨にして短かし、

またそは苦と相應せり。

五七五、蓋し、生れたる者の死せざるが

(1)

如き手段なければなり。

〔生れたる者は老と死とに至る。」

これ生物の法性なればなり。

(三)

五七六、熟せる果實には早朝に

落つるの怖畏あるが如く、
生れたる人々にも同様に、
常に死するの怖畏あり。

(三)

五七七、また譬へば陶工が

作りたる粘土の器具は、

すべて最後には壊るゝ如く、
人々の命も亦斯の如し。

(四)

五七八、幼少者も長大者も、

またあらゆる愚者も賢者も、
すべての者は死に左右せらる。
すべての者は必ず死に至る。

(五)

五七九、死に打敗れて去りつゝある、

彼等をば父は子を、

また親類は親類を、

他の世界より救ふことなし。

五八〇、現に見つゝあり、種々に〔親しく〕

語りつゝある親類の人々が、

屠所に引かるゝ牛の如く、銘々に

〔死魔に〕連れ去らるゝを見よ。

五八一、斯の如く世間〔の人々〕は、

死と老とによりて攻め撃たる。

故に諸の賢者は世間の自性を、

知り已りて憂ふることなし。

五八二、〔生れ來り死して去る

かの道を汝は知らず。

〔生死の〕兩端を正しく見ざる

汝は無益にも悲泣す。

(九)

五八三、^①蒙昧にして自己を害しつゝ

悲泣する者

が若し何等かの

利益を自己に齎らすべくんば、
聰慧者は應にこれをなすべし。

(一〇)

五四、されど涕泣と憂愁とによりて

〔人は〕心の寂靜を得ることなし。

〔但だ〕益々彼に苦が生じ、

(一一)

〔彼の〕身體は害はるるのみ。

五八五、^②自己自らを害しつゝ

身は瘦せ色は褪するなり。

その悲泣にて死者は蘇らず。

悲泣することは無益なり。

(一二)

五六六、憂愁を捨斷せざる人は

益々苦を受くるに至る。

命終せし者を慟哭するは
憂愁の虜となれるなり。

(一三)

五七、また他の人々が業の儘に

隨ひ行きて死に左右せられ、

〔他の世界に〕行く時、茲に〔彼等〕

生類が戰慄しつゝあるを見よ。

五八、蓋し斯くあるべしとの考へより

そは異りて〔現はるれば〕なり。

(一四)

異變あること斯の如し。

世間の自性を斯の如しと見よ。

(一五)

五九、假令人あり百年生きんも、

或はまたそれ以上ならんも、

彼は〔遂に〕親戚衆より別れて、

此世の生命を捨つるに至る。

五九〇、故に人は阿羅漢より〔法を〕聽きて、

(一六)

命終せし亡者を見ては、

彼は我と共に暮すを得ずとて
悲泣せる〔心〕を調伏すべし。

(一七)

五九一 譬へば燃えつゝある家の火を、
水を以て消し止むるが如く、
斯の如く慧者有慧者、

賢者善巧ある人も、

風が兜羅〔綿〕を吹き飛ばす如く、
生起せし憂愁を速に滅すべし。

(一八)

五九二 自己の樂を求むる者は、

自己の悲泣と貪求と、

憂とを除くべし、自己の

〔煩惱の〕箭を應に抜くべし。

(一九)

五九三 〔煩惱の〕箭を抜きて依なく、

心の寂靜を得なば

一切の憂愁を超越して、

無憂者寂滅者となる。

(110)

箭經畢れり。

註 ① 訳によるに、「權越優婆塞あり、子を喪ひて憂愁の餘り、七日間食をも攝らざるを世尊は憐愍したまひ、彼の家に赴きて本經を説きたまへり」と云ふ。

② 本偈は J.IV, p.113 参照。

③ 本偈は J.IV, p.127; J.IV, p.28 にも出で MNd, p.121; Vm, p.23¹ に引用せらる。尙ほ本偈に相當するものは増一阿含經卷二六(大正11・六九〇c)「中本起經卷下(大正四・一六〇c)」、法句經卷下、生死品(大正四・五七四a)、法句譬喻經卷四(大正四・六一六a)、出曜經卷一(大正四・六一四a)、法集要頌經卷一(大正四・七七七a)等に見ゆ。

④ 本偈は MNd, p.121; Vm, p.23¹ に引用せらる。尙ほ D.II, p.120 参照。本偈の相當偈は法句經卷上、無常品(大正四・五五九a)、法句譬喻經卷一(大正四・五七五c)、出曜經卷一(大正四・七七七c)等に見ゆ。

⑤ 本偈は MNd, p.121 に引用せらる。尚ほ D.II, p.120; J.IV, p.127 参照。

⑥ 以下五八一偈前半に至る二偈半は MNd, p.121, に引用せらる。

⑦ 本偈は J.IV, p.127 にも出で。

⑧ 本偈は J.IV, p.127 にも出で。

⑨ 本偈は J.IV, p.127 にも出で。

九 婆私吒經

是の如く我聞けり。一時世尊は伊車能伽羅村の伊車能伽羅森に住したまへり。^①爾の時極めて有名なる多くの婆羅門諸大家が伊車能伽羅村に居住せり。所謂商伽婆羅門多梨車婆羅門沸伽羅姿帝婆羅門^{チヤーメワツニ}力提耶婆羅門及び其他の極めて有名なる婆羅門諸大家なり。時に婆私吒と婆羅墮闍との二學童が久坐より生ぜし疲勞を除くべく膝を伸ばす爲の遊歩をあちこち行ひつゝありしに、〔彼等に〕卿よ、婆羅門とは云何といふ議論生ぜり。婆羅墮闍學童は〔主張して〕曰く、卿よ、母と父との兩方に於て由緒正しく純潔なる母胎に宿り、七世の祖先に至るまで系統に關して未だ曾て指彈せられたることなく、曾て非難せられたることなきが故に、かるが故に婆羅門なり。婆私吒學童は〔主張して〕曰く、「卿よ、戒を具し義務を完具せるが故に、かかるが故に婆羅門なり」。婆羅墮闍學童は婆私吒學童を説得すること能はず、また婆私吒學童は婆羅墮闍學童を説得すること能はざりき。時に婆私吒學童は婆羅墮闍學童に告げて曰く、「卿婆羅墮闍よ、釋迦族より出家せしかの釋迦族の子の沙門瞿曇が伊車能伽羅森に住す。而してかの尊瞿曇には「彼世尊は阿羅漢等正覺者明行具足

者善逝世間解無上者調御丈夫夫人師一佛世尊とも言はるといふ善き名聲揚り居れり。いざ卿婆羅墮闇よ我等は沙門瞿曇の所に行かん。行きて沙門瞿曇にこの義を問ひ沙門瞿曇が我等に解答する通りにそれを受持せん。唯諾卿よと婆羅墮闇學童は婆私吒學童に答へたり。かくて婆私吒と婆羅墮闇との二學童は世尊の所に行けり。行きて世尊と共に挨拶せり。喜ぶべき記憶すべき挨拶の語を交したる後、彼等は一方に坐せり。一方に坐したる婆私吒學童は偈を以て世尊に百して曰く、

五九四、我等兩人は三吠陀學者なりと

〔他より認められ自らも稱し居れり、

我は沸伽羅婆帝の〔學童〕なり。

この者は多梨車の學童なり。 (二)

五九五、三吠陀に説かれ居るもの、

それの祕奥を我等は極めたり。

我等は吠陀の句と解説とに通じ

吠陀に於ては阿闍梨に等し。

五九六、瞿曇よ斯る我等に、

系統説に關して諍論あり。

「生れによりて婆羅門なり」と

婆羅墮闇は主張して言ふ。

されど我は行爲によりてと

言ふ。有眼者よ斯く知りたまへ。

五九七、この我等兩人は相互に

〔他を〕説得すること能はず。

正覺者なりとの名聲ある

尊師に問ふべく我等は來れり。

五六八、譬へば人々が満ちたる月に

近づき合掌して恭敬し

禮拜するが如く、斯く世人は

瞿曇をば〔恭敬し禮拜す〕。

五九九、世間の眼として興起せし

〔世尊瞿曇に〕我等は問ふ。

(五)

(四)

(三)

生れによりて婆羅門なりや。
或は行爲によりてなりや。

知らざる我等に語りたまへ。
我等が婆羅門を知るために。

六〇、世尊宣はく、婆私吒よ、
(六)

我は汝等にかの諸の

生物の生れの差別をば、

順次に如實に解説せん。

蓋し、生れは相異ればなり。

六一、草や木の差別を知るべし。

而も、彼等はその別を百ら認めず。

彼等には生れによる相形(の別)あり。

蓋し、[生類の]生れは相異ればなり。

(八)

(七)

六二、次に蛆蟲や蟋蟀乃至

蟻類の差別を知るべし。

彼等には生れによる相形〔の別〕あり。

蓋し、生類の生れは相異ればなり。 (九)

六〇三、矮少なると粗大なるとの

四足〔獸の差別〕をも知るべし。

彼等には生れによる相形〔の別〕あり。

蓋し、〔生類の生れは相異ればなり。 (一〇)

六〇四、腹にて歩く背の長き、

蛇〔類の差別〕をも知るべし。

彼等には生れによる相形〔の別〕あり。

蓋し、〔生類の生れは相異ればなり。 (一一)

六〇五、次に水に棲む水中の

魚類の差別〕をも知るべし。

彼等には生れによる相形〔の別〕あり。

蓋し、〔生類の生れは相異ればなり。 (一二)

六〇六、次に虚空を飛ぶ翼に乗る

鳥類の差別をも知るべし。

彼等には生れによる相形〔の別〕あり。

蓋し、〔生類の生れは相異ればなり。〕（二三）

六〇七、此等生類に於て生れによる

相形〔の別〕が種々なるが如く、

その如くには人類に於ては

生れによる相形が種々なるなし。

（一四）

六〇八、髪によりても、頭によりても、

耳によりても、眼によりても、

口によりても、鼻によりても、

脣によりても、又は眉によりても、

（一五）

六〇九、頭によりても、肩によりても、

腹によりても、背によりても、

臀によりても、胸によりても、

陰部に於ても、行姪に於ても、

（一六）

六〇、手によりても足によりても、
指によりても又は爪によりても、
脛によりても腿によりても、
色によりても聲によりても、
他の諸の生類に於けるが如く、

生れによる相形の別あるなし。

(一七)

六一、人々の身體中に於ては

各人に別異あることなし。

但だ婆羅門刹帝利等の名稱もて、

人中に差別が說かるゝなり。

(一八)

六二、即ち人中にて土地を耕して

生活をなす者はすべてこれ

農夫にして婆羅門に非ず。

婆私吒よ斯の如しと知れ。

六三、また人中にて種々の工巧もて

(一九)

生活をなす者はすべてこれ
職人にして婆羅門に非ず。

婆私吒よ斯の如しと知れ。

(二〇)

六一四、また人中にて賣買をなして、

生活をなす者はすべてこれ
商人にして婆羅門に非ず。

婆私吒よ斯の如しと知れ。

(二一)

六一五、また人中にて他人に仕へて
生活をなす者はすべてこれ

奴僕にして婆羅門に非ず。
婆私吒よ斯の如しと知れ。

(二二)

六一六、また人中にて盜みをなして
生活をなす者はすべてこれ

盜賊にして婆羅門に非ず。
婆私吒よ斯の如しと知れ。

(二三)

六一七、また人中にて武術者として

生活をなす者はすべてこれ

武士にして婆羅門に非ず。

婆私吒よ斯の如しと知れ。

(二四)

六一八、また人中にて司祭者として

生活をなす者はすべてこれ

祭官にして婆羅門に非ず。

婆私吒よ斯の如しと知れ。

(二五)

六一九、また人中にて村や國をば、

受用(領有)する者はすべてこれ

王にして婆羅門に非ず。

婆私吒よ斯の如しと知れ。

(二六)

六二〇、而して我は胎より生じ母より

産れたる(儘の)者を婆羅門と言はず。

彼は「卿よと呼ぶ者」と言はる。

彼は實に有所得の者なり。

無一物にして無取著の者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(二七)

六二、一切の結を斷じ已り、

著を超え繫縛を離れ、

懼怖することなき者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(二八)

六三、革紐(忿)と革緒(愛)と綱(惡見)をば

馬勒(隨眠)と共に断じ已りて、

門(無明)を放棄し四諦を覺れる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(二九)

六三、怒罵され毆打され繩縛さるゝも

これを瞋らずして耐へ忍ぶ者、

忍辱力あり強き忍の軍ある者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(三〇)

六四、忿なくして務め(頭陀)を具し、
戒を有し、〔愛等の〕増盛なく、
〔身を〕調御し、最後身となれる、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(三一)

六五、水が蓮の葉に著かざるが如く、

芥子粒が錐尖に止まらざるが如く、

諸欲に染著せざる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(三一)

六六、此世にて自己の苦の

滅盡を了知せる者、

重擔を卸し、縛を離れたる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(三一)

六七、甚深の慧ある有慧者、

道と非道との通曉者、

最上義に到達せる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(三四)

六八、諸の在家者とも非家者とも、
兩者の何れとも交らざる者、
少欲にして家に住せざる者、
彼を我は婆羅門と言ふ。

(三五)

六九、戰慄する(弱き)、また強剛なる(強き)

〔一切庄類に對して笞を藏め、

〔彼等を害せず殺さざる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(三六)

古〇、違背せる人々の中に違背せず、

笞を執れる人々の中に笞を執らず、

有取著の人々の中に取著なき、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(三七)

古一、貪と瞋と慢と覆とが、

芥子粒が錐尖より落つるが

如くにその人より落ちたる、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(三八)

古三、粗惡ならざる義を含める、

眞實なる語のみを語り、

その語によりて誰をも怒らしめざる、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(三九)

古三、長きも短きも、小なるも大なるも、

淨きも不淨なるも、すべて世間にて、

與へられざるは(之)を取らざる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(四〇)

古四、この世界に對してもまた他の
〔世界〕に對しても欲求あるなく、
意樂欲求なく縛を離れたる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

古五、阿賴耶(執著)あることなく、

(四一)

〔眞相を〕知り已りて疑惑なく、

甘露(涅槃)に没入し到達せる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(四二)

玄六、此世にて善と惡とを

共に〔棄て〕、執著を超え

憂愁なく、塵を離れ淨き者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(四三)

玄七、曇りなき月の如くに淨く、

清澄にして濁りなき、

有の喜びを普く滅盡せし者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(四四)

玄八、この〔貪の〕險路と〔煩惱の〕難路と

輪廻〔輪轉〕と四諦への愚癡とを超え、

〔暴流を〕度り彼岸に到りて禪定し、

〔無愛〕不動にして疑惑あるなく、

取著なくして煩惱の寂滅せる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(四五)

六元此世にて諸欲を捨斷し、

家なくして普行し、

欲有を普く滅盡せし者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

六四〇此世にて愛を捨斷し、

衆なくして普行し、

愛有を普く滅盡せし者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

六四一人の軛(毒と五欲)を捨て、

天の軛(毒と五欲)を超え、

一切の軛より離縛せし者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

六四二樂と不樂とを捨て、

(四八)

(四七)

(四六)

清涼となりて依なく、

一切世界に打勝てる雄者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

四三諸有情の死と生とを

すべてこれ覺知せる、

著なき善逝・四諦の覺者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

四五諸天も乾闥婆ガンダッバも諸人も、

彼の趣(行方)を知ることなき、

諸漏を盡せる阿羅漢、

彼を我は婆羅門と言ふ。

四五前(過去)にも後(未來)にも中(現在)にも、

何物をも有することなく、

無一物にして取著なき者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

(四九)

(五〇)

(五一)

(五二)

六四六、牛王最勝者精進ある雄者、

大仙征服し已りたる者、

不動者〔煩惱の〕洗浴者・〔四諦の〕覺者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

六七、有情の宿住を覺知する者、

〔來世の〕天と惡趣とを見る者、

また生の滅盡に達したる者、

彼を我は婆羅門と言ふ。

六八、人に附せられたる名や姓は、

これ世間の通名たるのみ、

〔そ〕は世俗に傳へ來りしものにて、

〔人の生れたる〕その時々に附さる。

六九、不知なる人々〔の心に〕〔この姓名は〕

長時に先入見となりて隨在し、

諸の不知者は汝等に言ふ。

(五三)

(五四)

(五五)

「生れにより婆羅門なり」と。

五〇、生れによりて婆羅門に非ず。

生れによりて非婆羅門に非ず。

行爲によりて婆羅門なり。

行爲によりて非婆羅門なり。

五一、行爲によりて農夫なり。

行爲によりて職人なり。

行爲によりて商人なり。

行爲によりて奴僕なり。

五一、行爲によりて盜賊なり。

行爲によりて武士なり。

行爲によりて祭官なり。

五三、行爲によりて王なり。

五三、縁起を見る諸の賢者は、

業(行爲)と異熟(結果)とに通曉し、

(五六)

(五七)

(五八)

(五九)

斯の如くこの行爲をば、
如實に誤らずして見る。

(六〇)

至四業によりて世間は存し、

業によりて人々は存す。

有情の業に結ばること、

猶ほ行く車の轍(くさり)に結ばるゝが如し。

(六一)

至五苦行(根律儀)と梵行と、

禁制(戒)と、調御(慧)と、

これによりて婆羅門なり。

これ最上の婆羅門なり。

(六二)

至六三明を具備し、寂靜にして、

再有を盡せる阿羅漢は、

諸の識者の梵天帝釋なり。

婆私吒よ斯の如しと知れ。

(六三)

斯く言はれて婆私吒と婆羅墮闇との二學童は世尊に白して言く、希有なり、卿瞿

曇よ、「希有なり、卿瞿曇よ、譬へば倒れたるを起すが如く、蔽はれたるを開くが如く、迷へる者に道を教ふるが如く、又は「眼ある者は諸色を見るならん」とて暗夜に燈火を掲ぐるが如く、斯の如く卿瞿曇は多くの教説もて法を説きたまへり。」この我等は卿瞿曇と法と比丘衆とに歸依す。卿瞿曇は、今日より以後壽盡くるまで歸依せる優婆塞として我等を認受したまへ。

婆私吒經畢れり。

註① 本經は其儘の形にて中部九八經として出づるも PTS 出版本にては本經の表題のみを擧げて經文を略せるは、本經と重複せるが故なるべし。南傳大藏經に於ても中部經典に於ける婆私吒經は省略せられたり。

② 以下の長行(散文)は殆んど D. I, p.235^f の文と一致す。

③ 卿よ(bho)、底本には kho とあるも、今は異本に從ふ。

④ 土地を耕して(goarakkhai)、語義通りには「牛を護りて」とすべきも、註に「田を護りて」耕作をなしてとあり。

⑤ 本偈は MA, III, p.39; SA, I, p.149; UdA, p.332 に引用せらる。

⑥ 以下六四七偈に至る二十八偈は DhP. vv. 396-423 の二十八偈に同じ。此等に相當すべき漢譯偈は法句經卷下、梵志品(大正四・五・七二c以下)、出曜經卷二九卷三〇(大正四・七七〇b以下)、法集要頌經卷四(大正四・七九八b以下)等に見ゆ。

⑦ 卿よと呼ぶ者(bhovadi)とは婆羅門族を指す。蓋し、彼等は相互に他を「卿よ(bho)」の語

を以て呼べばなり。

⑧ 本偈は KhpA. P.149 に引用せらる。

⑨ 以下の二句は Vm. P.295 に引用せらる。

⑩ 本偈は VA. P.273; DhP.A. II, P.51 に引用せらる。

⑪ 本偈は Mil. P.386 に引用せらる。

⑫ 本偈は S.I.P.236 繆沙塞五分戒本(大正二二·II·〇〇〇a'II〇六b)、五分比丘尼戒本(大正二二·II·II·四a)、十誦比丘戒本(大正二二·四七八c)、十誦比丘尼戒本(大正二二·四八八b)等参照。

⑬ 本偈は AA. I, P. 277 に引用せらる。

⑭ 淨身(subha) とは高價なる物不淨なる(asubha) とは安價なる物なり。

⑮ 本偈は DhP.A. II, P.200 に引用せらる。

⑯ 本偈は AA. I, P.247 に引用せらる。

⑰ 本偈は ibid. P.268 に引用せらる。

⑱ 本偈は ibid. P.269 に引用せらる。

⑲ 本偈は ibid. P.363 に引用せらる。

⑳ 本偈は DhP.A. III, P.187 に引用せらる。

㉑ 本偈は M. II, P.144; S.I, P.167; P.175; A.I, P.165; P.167; It, P.100; Thig. vv. 63-64, 中阿含一六一梵摩經(大正一·K 八九a)、雜阿含一一六一經一一八一經(大正二二·II·〇九〇c'II·一九c)、別譯雜阿含八四經、九五經(大正二二·四〇三a'四〇七c)等參照。

㉒ 本偈は KV. P.546; Dhs A, P.66 に引用せらる。

㉓ 本偈は Thag. v. 631 に同じ。

一〇 拘迦利耶經

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衛城の給孤獨園に住したまへり。時に拘迦利耶比丘は世尊の所に近づけり。近づきて後、世尊を禮して一方に坐せり。一方に坐したる拘迦利耶比丘は世尊に白して言く、「尊師よ、舍利弗自犍連は惡欲あり。惡き諸欲に捉はれ居れり。斯く言はれて世尊は拘迦利耶比丘に告げて宣はく、「拘迦利耶よ、斯の如く言ふこと勿れ。拘迦利耶よ、斯の如く言ふこと勿れ。拘迦利耶よ、舍利弗目犍連に對して心信樂せよ。舍利弗自犍連は敬愛すべき者なり。二たび拘迦利耶比丘は世尊に白して言く、「尊師よ、假令世尊は我にとりて信ずべく頼るべき人なりと雖も、而も實に舍利弗自犍連は惡欲あり。惡き諸欲に捉はれ居れり。二たび世尊は拘迦利耶比丘に告げて宣はく、「拘迦利耶よ、斯の如く言ふこと勿れ。拘迦利耶よ、舍利弗自犍連に對して心信樂せよ。舍利弗自犍連は敬愛すべき者なり。三たび拘迦利耶比丘は世尊に白して言く、「尊師よ、假令世尊は我にとりて信ずべく頼るべき人なりと雖も、而も實に舍利弗自犍連は惡欲あり。惡き諸欲に捉はれ居れり。三たび世尊は拘迦利耶比丘に告げて宣はく、「拘迦利耶よ、斯の如く言ふこと勿れ。拘迦

利耶よ、舍利弗・目犍連に對して心信樂せよ。舍利弗・目犍連は敬愛すべき者なり。時に拘迦利耶比丘は座より起ちて世尊を禮し右繞をなして去れり。

拘迦利耶比丘去りて久しうからざるに、「彼の」全身に芥子粒大の吹出物現はれたり。
〔そは初め芥子粒大なりしが次第に〕小豆程になれり。小豆程になれるものが大豆程になれり。大豆程になれるものが棗の核程になれり。棗の核程になれるものが棗程になれり。棗程になれるものが餘甘子程になれり。餘甘子程になれるものが熟せざる木瓜^{ピーリカ}程になれり。熟せざる木瓜程になれるものが熟せる木瓜程になれり。木瓜程になりて裂け潰れたり。而して膿を血とが流出せり。時に拘迦利耶比丘はその病氣のために命終せり。命終せし拘迦利耶は、舍利弗・目犍連に對して心恨みたる廉にて紅蓮地獄に生れたり。

時に娑婆世界主なる梵天は夜半を過ぎたる頃、麗はしき容色もて祇樹園を隈なく照して世尊の所に近づけり。近づきたる後、世尊を禮して一方に立てり。一方に立ちたる娑婆世界主梵天は世尊に白して言く、「尊師よ、拘迦利耶比丘は命終せり。尊師よ、命終せし拘迦利耶比丘は舍利弗・目犍連に對して心恨みたる廉にて紅蓮地獄に生れたり。娑婆世界主たる梵天は右の如く言へり。斯く言ひたる後、世尊を禮し右

繞して其處に便ち消失せり。

時に世尊はその夜を過ぎて諸比丘に告げて宣はく、諸比丘よ、昨夜、娑婆世界主たる梵天が夜半を過ぎたる頃、〔麗はしき容色もて祇樹園〕を隈なく照して我が所に近づけり。近づきたる後我を禮して一方に立ちたり。一方に立ったる娑婆世界主梵天は我に白して言く、「尊師よ、拘迦利耶比丘は命終せり。尊師よ、命終せし拘迦利耶比丘は、舍利弗、自犍連に對して心恨みたる廉にて紅蓮地獄に生れたり」。娑婆世界主たる梵天は右の如く言へり。斯く言ひたる後我を禮し右繞して其處に便ち消失せり。斯く世尊に言はれて、一比丘あり、世尊に白して言く、「尊師よ、紅蓮地獄の壽量は幾何なりや。」比丘よ、紅蓮地獄の壽量は〔極めて長し。そは幾年なり、幾十年なり、幾千年なり又は幾十萬年なりとて數ふること難し。】尊師よ、然らば譬喻もて説き得らるゝや。比丘よ、得らるゝなり。世尊宣はく、譬へば比丘よ、橋薩羅國の〔柵目による〕二十石の胡麻の荷ありて、その中より、人が百年を過ぐる毎に一粒宛の胡麻を取出さんに、比丘よ、かの橋薩羅國の柵目による二十石の胡麻の荷が右の方法によりて盡くるまで取去らるゝ〔年時〕は、一阿浮陀地獄〔の壽量〕よりも短し。比丘よ、二十阿浮陀地獄〔の壽量〕は一尼羅浮陀地獄〔の壽量〕に等し。比丘よ、二十尼羅浮陀地獄〔の壽量〕は一阿婆

婆地獄〔の壽量〕に等し。比丘よ、二十阿婆婆地獄〔の壽量〕は一阿訶訶地獄〔の壽量〕に等し。比丘よ、二十阿訶訶地獄〔の壽量〕は一阿吒吒地獄〔の壽量〕に等し。比丘よ、二十阿吒吒地獄〔の壽量〕は一白睡蓮地獄〔の壽量〕に等し。比丘よ、二十白睡蓮地獄〔の壽量〕は一青睡蓮地獄〔の壽量〕に等し。二十青睡蓮地獄〔の壽量〕は一青蓮地獄〔の壽量〕に等し。比丘よ、二十青蓮地獄〔の壽量〕は一白蓮地獄〔の壽量〕に等し。比丘よ、二十白蓮地獄〔の壽量〕は一紅蓮地獄〔の壽量〕に等し。而して比丘よ、拘迦利耶比丘は舍利弗自犍連に對して心恨みたる廉にて紅蓮地獄に生れたり。世尊は右の如く宣へり。善逝は斯く言ひて後更に師は告げて宣はく、

六五七、生れたる人の口には

實に斧が生じ居れり。

愚者は惡言を語りつゝ

その斧もて自己の善根^⑥を切る。

(二)

六五八、毀誓すべき者を賞讃し、

賞讃すべき者を毀誓する、

彼は口もて惡運を積み、

その悪運のために樂を得ず。

(三)

立九骰子の爲に一切の財産のみならず、

己が身をも失ふとも、

この悪運は些少なり。

諸の善逝に對して心瞋る者、

彼の悪運こそ甚大なれ。

六〇、惡き語と意とに因りて

聖者を非難する者は十萬と
三十六の尼羅部陀及び五の

阿浮陀^{壽量}ある紅蓮地獄に墮つ。

六一、不眞を語る者、又は行ひて

行はずと言ふ者は地獄に墮つ。

彼等は共に卑劣業ある人々にて、

死して他界にて等しく地獄に墮つ。

六二、瞋怒なく淨くして汚點なき

(四)

(三)

人に瞋怒する所の

かの愚者に悪は必ず戻る。

逆風に投ぜる細塵の如し。

(六)

玄三種々の貪欲に耽る者、

彼は語もて他人を誹謗し、

信なく吝嗇にして親切ならず。

物を慳み兩舌を事とす。

(七)

玄四^④惡口し不實にして非聖なる者よ、

生類を殺し邪惡にして惡行をなす者よ、

極劣悪運にして生れ卑しき者よ、

此世にて多く語る勿れ汝は地獄に至る。(八)

玄五汝は煩惱の塵を撒きて不利を招き、

諸の善人を非難して罪過を作り、

また多くの惡行を行じて、

長時に深淵(地獄)に至る。

(九)

空六、蓋し何者の業も滅することなく、
そは必ず來りて〔業の主が〕之を得、
愚鈍なる者は自ら罪過を作りて、
他世にて自ら苦を受くればなり。

(一〇)

空七、即ち鐵針の打込まれたる處に〔至り〕、
銳利なる刃ある槍もて突かれ、

また赤熱せる鐵丸に似たる食物が
業に應じて〔食せしめらるゝ〕あり。

(一一)

空八、語る〔獄卒等〕は親切に語らず、〔和顔もて〕
來らず。〔罪人等は〕避難所に至らず、
擴げ敷きたる炭火の上に坐し、

普く燃え盛る火焰の中に入る。

(一二)

空九、また〔鐵網〕を以て覆はれ、
鐵製の鎧もて其中にて擊たれ、
眞の暗黒なる闇に至る。

その[闇の]擴ごれること霧の如し。 (一三)

六七〇、また次に火の普く燃え盛れる
金屬製の籠に[彼等は]入る。

その火の燃え盛れる籠の中にて
浮き沈みつゝ長時に煮らる。 (一四)

六七一、また膿や血の混在せる籠あり、

罪過を作りし者は其處にて煮らる。

いかなる方角に往くとも、

其處にて膿血に觸れ惱まさる。 (一五)

六七二、[また]蟲類の棲める水籠あり、

罪過を作りし者は其處にて煮らる。

四邊すべて等しき大釜より

[出で]去るべき岸あることなし。

六七三、また銳利なる劍の葉の林あり、

其處に入りて四肢は切斷せらる。

(一六)

〔獄卒等は〕鉤針もて舌を捕へ、
引延ばし引延ばしては撃つ。

(一七)

六四、また次に銳利なる剃刀の刃ある
越え難き地獄河ヨダラニに彼等は至る。

愚鈍なる諸の作惡者は、

諸惡を行ひて其處に墮つ。

六五、其處にて黒きアカ又は斑點ある犬や、

黒鴉の群や野干や大鷲が、

悲泣しつゝある人々を噉ふ。

また鷹や鳥は彼等を啄む。

六六、罪過を作りし人々が遭遇する

茲地獄の斯る生活は實に悲惨なり。

故に此世の餘命に於て〔善行をば、

行ふ者となり、放逸なるべからず。

六七、紅蓮地獄に墮せし者の壽量は、

(一九)

(三〇)

これ胡麻荷もて智者に測られたり。

即ち五千萬兆年¹と更に

また百二十億年²なり。

(111)

六六、茲に地獄の苦の長さが説かれたる、

その長さ、其處に住せざるべからず。

故に淨き好ましき善き諸徳のために

語と意とを常に遍く守護すべし。

(111)

拘迦利耶經畢れり。

註①六六〇偈に至る本經の前半は S.I, pp. 149-153 (S.6, 1, 1c, Kokallko) と殆んど全文一致しま
た A.V, p. 170ff (A.10.8g) にも類似す。恐らく相應部にある如き經典に十數偈を附加し
て本經となれるものならん。漢譯相當經としては雜阿含一二七八經(大正二・三五一
以下)、別譯雜阿含二七六經(大正二・四七〇a 以下)、增一阿含卷一二(大正二・六〇三b 以
下)、大智度論卷一三(大正二・五・一五七b 以下)等あり。

②以下の四偈は S.I, p. 149; P.152f; A.V, p. 171; p. 174 にも出で、Netti, p. 132f に引用せらる。此
等四偈の漢譯相當偈は雜阿含一一九四經(大正二・三二四a)、同一二七八經(大正二・三五
一c、但し六六〇偈に相當するものを缺く)、別譯雜阿含一〇六經、二七六經(大正二・四一
c、四七〇a 以下)、增一阿含卷一二(大正二・六〇三c)、義足經卷上(大正四・一七七a)、

法句經卷上、言語品(大正四・五六・一c)、出曜經卷一〇(大正四・六・四a以下)、法集要頌經卷一(大正四・七・八・一b)、金色童子因緣經卷一二(大正一・四・八・九・三a)、五分律卷二五(大正二・一・六・五c以下)、十誦律卷四、卷四九(大正二・三・一・三a・三・五・五c以下)、有部毘奈耶卷一四(大正二・三・六・九・七b)、有部毘奈耶藥事卷二(大正二・四・六c以下)、大智度論卷一三(大正二・五・一・五・八a)、立世阿毘曇論卷一(大正三・二・一・七・三c等)等にあり。尙ほ六・五・七偈に相當する偈は正法念處經卷一、卷八(大正一・七・五b・四・六b)、諸法集要卷五(大正一・七・四・八・四a等)等に見え、六・五・八偈に相當するものは阿毘達磨發智論卷二〇(大正二・六・一・〇・三・一c)に見え、六・六・〇偈に相當するものは三法度論卷下(大正二・五・二・七b)、成實論卷七(大正三・二・二・九・一・b等)等に見ゆ。

③以下の三偈はA.II, P.3fにも出づ。

④本經の註書には何等の説明なきも、本偈に對する相應部の註(Sāratthappakasini I, P.216)に依れば、三十六は尼羅部陀にかゝるとなせり。

⑤本偈はDhp. v.306; Ud.P.45(自說經第四品第八經)、It.P.42f(如是語經四八經)、J.II,P.416f等にも出づ。漢譯相當偈は法句經卷下、地獄品(大正四五七〇a)、法集要頌經卷一(大正四・七八・一・b)、義足經卷上(大正四・一・七・七a)、十誦律卷四、卷四九(大正二・三・二・三a・三・五・五c)等に見ゆ。

⑥本偈はS.I, p.13; P.164; Dhp. v.125; J III, p. 203; Pv. P.124 じ も出で、Vm. P.301f じ 用せらる。漢譯相當偈は雜阿含一・一五四經、一・二・七・五經(大正二・三・〇・七b以下)、五〇c)、別譯雜阿含七七經、二・七・三經(大正二・四・〇・一a・四・六・九b)、義足經卷上(大正四・一・七・七b)、法句經卷上、惡行品(大正四・五・六・五a)等に見ゆ。

⑦ 次の二偈は Netti.P.133 に引用せらる。

⑧ 大鷲 (Paṭīgijjhā) は註書にては Paṭīgiddha (貪婪なる)となり居れり。されど一説にては大鷲 (Mahāgijjhā) なりとす。

一一 那羅迦經

〔序偈〕

六九、歡喜を生じ満足せる三十三天衆、
及び淨衣ある諸天が恭しく、
衣を取り帝釋を極めて讚歎せるを、
阿私陀仙は晝住の時見たり。

(一)

六〇、意悦び踊躍せる諸天を見已りて、
茲に[仙人は]恭敬して問うて曰く、
何に縁りて天衆は極めて満悦し、
衣を取りて何ぞ[それを]振廻すや。
六一、假令阿修羅との戦ありて、

(二)

勇士が勝ち阿修羅が敗れたりとも、

その時すら斯の如き身毛堅立の大歡喜なし。
何の希有を見て諸天は喜悅し。 (三)

六八二、口笛を吹き歌ひ且つ樂を奏で、

手を拍ちまた踊るや。

我は須彌の頂に住する汝等に問ふ。

汝等よ速に我が疑を除きたまへ。 (四)

六八三、比類なき最勝の寶たるかの菩薩が、

人界に生れたまへり利益安樂のために、

釋迦族の村に藍毘尼の土地に。

故に我等は満足し極めて満悦す。 (五)

六八四、かの一切有情の最上者最高の人、

人中の牛王・一切の人々の最上者は、

仙人墮處といふ林にて法輪を轉ぜん。

猛き師子が百獸に打勝ちて吼ゆるが如く吼えつゝ。 (六)

六五、その諸天の聲を聞きて彼は急ぎ人界に下降せり。

その時彼は淨飯王の宮殿に近づけり。

其處に坐して釋迦族等に告げて曰く、

童子は何處か、我は見えんと欲す。

(七)

六六、かくて釋迦族等は爐邊にて名金工が

鍛へたる輝やける黄金の如く赫耀たる

麗はしくして高貴の容貌ある童子をば

阿私陀と言ふ仙人に見せたり。

(八)

六七、火焰の如くに輝やき空を運行する

星の牛王(月)の如く清淨に雲を脱せる

秋の太陽の如く耀やける童子を見て、

歡喜を生じ廣大なる喜びを得たり。

六八、諸天は多くの骨あり千の圓輪ある

傘蓋をば空中に保持せり。

黄金の柄ある拂子をば上下に扇げり。

(九)

〔されど拂子や傘蓋の持者は見えず。〕(一〇)

六九、見已りて黒妙③カクミシリ(阿私陀といふ結髮仙人は、

頭上に白傘を翳されて恰かも赤き

毛布の中の黄金の飾具の如く美はしき

〔太子〕をば心踊躍し喜びて抱き取れり。

六九〇、相好と真言(吠陀)とに通曉せる彼は

釋迦牡牛を抱き取りて檢しつゝ、

心欣樂して〔感歎の〕聲を擧げたり。

これ無上者なり、人間の最上者なり。

六九一、時に自己の行く末を隨念して、

快々たる〔仙人〕は涙を流せり。

仙人の泣くを見て釋迦族等曰く、

童子に障礙あるには非ずや。

六九二、快々たる釋迦族を見て仙人曰く、

我は童子に不利あるを隨念せず。

(一一)

(一二)

また彼には障礙あらざるべし。

彼は凡庸ならず、注意して育てよ。

(一四)

六九三、この童子は最高の正覺を得べし。

彼は最上の清淨を見、多くの人々を

利益し憐愍し、法輪を轉すべし。

彼の梵行の教は廣く弘通すべし。

(一五)

六九四、然るに此世の我が餘命は久しからず。

中途にて〔正覺以前に〕我は命終すべし。

この我は無等精勤者の法を聞かじ。

故に我は痛み悩み苦しむなり。

(一六)

六九五、彼梵行者は釋迦族等に大なる喜を生ぜしめて、城内より出で去れり。

彼は自己の甥を憐愍しつゝ、

無等精勤者の法を〔學ぶ〕を勧めたり。

六九六、若し汝後に佛あり、正覺を成じて、

(一七)

法道を行く」といふ聲を聞かば、

その時彼處に行きて遍問し、

かの世尊の許にて梵行を行せよ。

(二八)

六九七、未來に於ける第一清淨を豫見せる

斯る饒益の意ある彼仙人に教へられ、

〔宿世の〕福善を多く積める彼那羅迦^{ナラカ}は、

勝者を待望しつゝ出家して諸根を護り住せり。(二九)

六九八、優れたる勝者の轉法輪の噂を聞き、

阿私陀なる仙人の教言の實現せし時、

行きて仙人牛王(佛)に見えて信樂し、

最勝の牟尼に最勝の牟尼行を問へり。

(三〇)

序偈畢れり。

六九九、^④阿私陀の語れるこの語をば

私は如實に了知し居れり。

故に瞿曇よ、私は一切諸法の

通達者たる世尊にこれを問ふ。

(一一)

七〇、〔家を出でゝ非家に至りて

托鉢の行を求めつゝある、

我に問はれて、牟尼よ、

最上句なる牟尼行を語りたまへ。

(一一一)

七一、世尊宣はく、

行ひ難く得ること難き

牟尼行をば我は汝に知らしめん。

いざ我はそを汝に告げん。

強毅たれ、心堅固たれ。

(一一二)

七二、村にては罵らるゝも禮さるゝも、

平等の態度もて臨むべし。

意瞋ることを慎しみ護り、

寂靜にして高ぶらず行ぜよ。

七三、園中にも黄赤大小の火焰の如く、

(一一四)

種々なるものが現はれ来る。

諸の女人は牟尼を誘惑す。

彼女等をして彼を誘惑せしめざれ。

(二五)

七〇四、姪の法より離れ、

彼此の諸欲を捨て、

弱き強き諸生物に對して
違背(瞋害)せず愛執せず。

(二六)

七〇五、我は彼等と同様なり、

彼等は我と同様なりとて、

自己〔が害せらるゝ場合〕に引較べて、

〔生物を害し殺すべからず。〕

(二七)

七〇六、凡夫が執著する所の

欲求と貪欲とを捨て、

有眼者は應に行道すべし。

この〔貪欲の〕地獄を度るべし。

(二八)

七〇、腹を控へ、食を節し、

少欲にして貪求すべからず。

彼は實に欲に厭き離れて、

無欲となりて煩惱寂滅す。

七八、彼は行乞をなし已りて、

林邊に赴くべし。

樹下に止在して、

牟尼は座に就きて坐す。

七九、かの賢者は禪定を勵み

林邊をば楽しむべし。

自らよく満足しつゝ、

樹下にて禪思すべし。

七〇、それより夜を過ぎて、

〔翌朝村に赴くべし。〕

〔信者の招待をも、村より

(二五)

(三〇)

(三一)

持來れる〔食〕をも喜ぶべからず。

(三三一)

七二、牟尼は村に來りて、

家々を急ぎ行くべからず。

啞者の如くせよ。食を求めるんと
策したる語を語るべからず。

(三三二)

七三、若し〔食を得なばこれ可なり。

〔若し食を得ざるも善しとて

兩者をば同様に見做し、

② 平然として彼は還り来る。

(三四)

七三、彼は鉢を手にして遊行しつゝ、

啞者に非ずして啞者と謂はれ、

僅少の施をも輕んずべからず。

〔その〕施者をも輕蔑すべからず。

(三五)

七四、沙門〔佛〕によりて種々なる

〔至高の〕行道が説かれたり。

彼岸に二回至ることなく、

一回にてこれ(到彼岸あるなし)。

(三六)

七五、輪廻の流れを断ちたるかの

比丘には愛著あることなし。

種々の所作(善惡)を捨斷せる

〔比丘〕には熱惱あることなし。」

(三七)

七六、世尊宣はく、

牟尼行を汝に知らしめん。

〔食を攝ること〕剃刀の刃(を嘗むる)が如くせよ。

舌を以て口蓋を抑へ、

胃に對して自制すべし。

(三八)

七七、沈滯の心あるべからず。

また多くを思念すべからず。

臭穢なく、依著あるなく、

梵行を最後の目的とすべし。

(三九)

七一八、獨坐(身離)と親近沙門(心離)

とを應に學すべし。

牟尼行は獨一(離)と稱せらる。

若し獨り(行道を)樂しまば、

七一九、然らば(名聲十方に輝やく)。

禪思し、諸欲を棄てたる

諸の賢者の名聲を聞きては、

我が弟子は慚と信とを

益々增長せしむべし。

七二〇、そは河底の深く掘られたる

河川(の譬)もて識るべし。(即ち)

河底淺き小川は音を立てゝ流れ、

大河は音を立てずして流る。

七二一、水淺きものは音を立て、

満水せるものは寂靜なり。

愚者は半水の甕の如く、
賢者は満水の湖の如し。

(四三)

七三、沙門(佛)が〔法と義を〕真し且つ、

利益あることを多く語るは、

彼は〔自ら〕知りて法を示し、

彼は〔自ら〕知りて多く語るなり。

(四四)

七三、また〔自ら〕知りて〔心を〕自制し、

〔自ら〕知りて多く語らざる

彼牟尼は牟尼行に值し、

彼牟尼は牟尼行に證達せり。

(四五)

那羅迦經畢
れり。

註① 本經は佛傳の一部に關係せり。即ち釋尊が迦毘羅城に降誕せられたるを阿私陀仙人が占相して、釋尊の將來を豫言し、且つ自らは佛の成道に會する能はざるを悲しみ、自己の甥たる那羅迦に遺言して佛の成道を聞かば直ちに就きて梵行を修せよと命じたり。那羅迦はその遺言に従ひ、佛の轉法輪の噂を聞くや、それより七日目に佛の許に至りて牟尼行を問へり。以上の物語を以て本經の序偈となし、牟尼行に關する佛の說法が本

經の本文となる。而して序偈に相當する物語は種々の佛傳中に出づるも、本經と類似せる偈を見ず。然るに本經の本文に相當する諸偈は Mahāvastu III, pp.386-389 佛本行集經卷三八(大正三八三〇 a 以下)に見出さる。恐らく本文の諸偈が古く存在し、後に序偈を加へたるものならん。

②此等の物語は例へば佛本行集經卷九(大正三・六九三 b 以下)参照。

③「晝住」(divavihāra)とは晝臥とも云ひ食後に於ける日中の休息なり。これ必ずしも臥するには非ず、樂住の坐禪をなすこと多し。

④「黑妙」(Kaṇha-sīrī)とは阿私陀仙(Asita-isi)を指す。即ち Kaṇha が Asita に當り、sīrī が isi に當る。蓋、Kaṇha も Asita も黒色の意味にして sīrī は吉瑞ある人の意味なれば茲にては仙人を指せばなり。

⑤本偈は DA, II, p.438; MA, IV, p.185 に引用せらる。

⑥以下本經の最後偈に至るまでは、幾分の相違あるも Mahāvastu III, pp. 386-389 佛本行集經卷三八(大正三・六九三〇 a 以下)に大體相當す。

⑦「平然として」(rukkhain va)直譯は「樹に對するが如く」。註によれば、果實を求むる人が樹に近づきて、果實を得るも得ざるも、それによりて得意となり失意となることなく、平然として去るが如しとあり。

⑧本偈は SA, II, p.109 に引用せらる。

⑨本偈は KV, p.89 に引用せらる。

⑩本偈は CND (シャム本) p.209 に引用せらる。

⑪本偈は Mil, p.414 に引用せらる。

一一 二種隨觀經

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衛城の東園鹿母高堂に住したまへり。爾の時、世尊は十五日の布薩の満月の夜に、比丘衆に圍繞せられて露地に坐したまへり。時に世尊は沈黙せる多くの比丘衆を顧みて諸比丘に告げて宣はく、諸比丘よ、「世間を出離し正覺に至る聖なる諸の善法あり。諸比丘よ、『汝等は何故に世間を出離し正覺に至る聖なる其等の善法を聞くや』と若し諸比丘よ、『汝等に問ふ者あらば、『汝等は彼等に斯く答ふべし、『二法を如實に知らんがために他ならず』と。然らば汝等は何をか二と言ふ。『これ苦なり、これ苦の集なり』とはこれ一隨觀なり。『これ苦の滅なり、これ苦の滅に至る道なり』とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には、(二)現世に於ける完全智(阿羅漢)又は(三)殘餘の煩惱^①ある時には(現状への)不還(阿那含)の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて更にまた師は告げて宣はく、

七四、苦を知解することなく、
また苦の發生を知らず、

また苦が普く残りなく
絶滅する處を〔知らず〕、
また苦の寂滅に至る

かの道を知らざる所の、
七五、人々は心解脱あるなく、
また慧解脱も〔あるなく〕、

彼等は〔苦〕際を盡す能はず。
彼等は實に生と老に至る。

七六、されど苦を知解し、

また苦の發生を〔知り〕、

また苦が普く残りなく、
絶滅する處を〔知り〕、

また苦の寂滅に至る
かの道を知解する所の

七七、人々は心解脱を具足し、

(二)

(三)

(三)

また慧解脱を具足す、

彼等は苦際を盡すを得。

彼等は實に生と老に至らず。

(四)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、
「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「いかなる苦が發生すとも、そはすべて依に縁
りて[發生す]」とはこれ一隨觀なり。「されど依の残りなき離と滅との故に苦の發生
あることなし」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸
にして熱心に自ら精勤して住する比丘には(二)現世に於ける完全智(阿羅漢)又は(三)殘餘
「の煩惱」ある時には(現状への)不還阿那含の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右
の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて更にまた師は告げて宣はく。

七八世間に於けるあらゆる種々なる

苦は依を因縁として發生す。

知らずして依を作る所の

愚鈍者は屢々苦を受く。

故に苦の發生を隨觀する者は、

「如實に知りて依を作らざれ。」

(五)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、
「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「いかなる苦が發生すとも、すべて無明に縁り
て[發生す]」とはこれ一隨觀なり。「されど無明の殘りなき離と滅との故に苦の發生
あることなし」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸
にして熱心に自ら精勤して住する比丘には、(一)現世に於ける完全智阿羅漢又は(二)殘餘
の煩惱ある時には現状への不還阿那含の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右
の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師は告げて宣はく。

七五、この狀態より他の狀態へと、

生と死の輪廻をば、

屢々〔輪轉し〕行く人々は

その趣〔縁〕は無明にあり。

七六、蓋し、無明はこれ大癡なり。

それによりてこの久しき輪廻あり。

明〔智慧に至れる諸有情は、

再有に來ることなし。

(七)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、
「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「いかなる苦が發生すとも、すべて行に縁りて
[發生す]」とはこれ一隨觀なり。「されど諸行の残りなき離と滅との故に苦の發生あ
ることなし」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸に
して熱心に自ら精勤して住する比丘には、(一)現世に於ける完全智(阿羅漢)又は(二)殘餘の
煩惱ある時には、(現状への)不還(阿那含)の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右の
如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師は告げて宣はく、

七三、いかなる苦が發生すとも、

すべて行に縁りて[發生す]。

諸行の滅によりて、

苦の發生あることなし。

七三、苦は行に縁りて[發生す]。

これ過患なりと知りて、

一切の行を止息せしめ、

(八)

〔欲等の諸想を斷滅せば、

茲に苦の滅盡あり、

これを如實に知り已りて、

(九)

セミ、正しく見、吠陀に達し、

正しく知れる諸の賢者は、

惡魔の結に打勝ちて、

再有に來ることなし。

(一〇)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、
「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。いかなる苦が發生すとも、すべて識に縁りて
〔發生す〕とはこれ一隨觀なり。されど識の残りなき離と滅との故に苦の發生ある
ことなしとはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸にして
熱心に自ら精勤して住する比丘には〔ニ現世に於ける完全智(阿羅漢)又は〔三殘餘の煩
惱〕ある時には〔現狀への〕不還(阿那含)の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右の如
く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師は告げて宣はく、
セ四、いかなる苦が發生すとも、

すべて識に縁りて[發生す]。

識の滅によりて、

苦の發生あることなし。

(二二)

七五、苦は識に縁りて[發生す]。

これ過患なりと知りて、

識を寂靜ならしむるが故に、

比丘は愛なく寂滅す。」

(二三)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「いかなる苦が發生すとも、すべて觸に縁りて[發生す]」とはこれ一隨觀なり。「されど觸の残りなき離と滅との故に苦の發生あることなし」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には、(一)現世に於ける完全智(阿羅漢又は(二)殘餘)の煩惱[ある時には(現状への)不還阿那含の二果中の隨一の果が期待せらる]。世尊は右の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師は告げて宣はく、

七六、がの觸に打ち敗れて、

有の流れに従ひ行き、

邪道を行く人々には、

結の滅盡あることなし。

(一三)

七三七、されど觸を遍知し了知して、

寂靜を喜ぶ所の人々、

彼等は實に觸の止滅の故に、

愛なくして寂滅す。④

(一四)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、
「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。いかなる苦が發生すとも、すべて受に縁りて
〔發生す〕とはこれ一隨觀なり。されど受の残りなき離と滅との故に苦の發生ある
ことなしとはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸にして
熱心に自ら精勤して住する比丘には、〔現世に於ける完全智〔阿羅漢又は三殘餘〕の煩
惱〕ある時には〔現状への不還〔阿那含〕の二果中の隨一の果が期待せらる〕世尊は右の如
く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師は告げて宣はく、
七八、樂にせよ或は苦にせよ、

また不苦不樂にせよ、

内なるもまた外なるも、

すべて感受せられたるは、

(一五)

七三九、これ苦なりと知り、

虛偽の〔滅法破壞の法に

〔智もて觸るゝ度毎に衰滅を

認め斯くてそれを離貪す。

諸受の滅盡の故に比丘は、

愛なくして寂滅す。 (一六)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「いかなる苦が發生すとも、すべて渴愛に縁りて〔發生す〕」とはこれ一隨觀なり。「されど渴愛の残りなき離と滅との故に苦の發生あることなし」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には、(一)現世に於ける完全智(阿羅漢又は(二)殘餘の煩惱)ある時には〔現状への不還(阿那含)の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右

の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師は告げて宣はく。

七四〇。渴愛を友とせる人は、

長時に輪廻しつゝ、

この状態より他の状態への

輪廻を超度するなし。

(二七)

七四一。渴愛は苦の發生の縁なり。

これ過患なりと知りて、

渴愛を離れて取あるなく、

念ありて比丘は普行すべし。

(二八)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「いかなる苦が發生すとも、すべて取に縁りて[發生す]とはこれ一隨觀なり。されど取の残りなき離と滅との故に苦の發生あることなし」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には、(二)現世に於ける完全智阿羅漢又は(三)殘餘の煩惱ある時には[現状への]不還阿那含の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右の如

く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、一更にまた師は告げて宣はく、

七四「取に縁りて有あり。

有者生類は苦を受く。

生れたる者には死あり。

これ苦の發生の縁なり。

七四三、故に取の滅盡の故に、

正しく了知する諸賢者は、

生の滅盡をば知通し、

再有に來ることなし。

(二〇)

145

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、
「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「いかなる苦が發生すとも、すべて離離に縁り
て[發生す]」とはこれ一隨觀なり。「されど離離の残りなき離と滅との故に苦の發生
あることなし」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸
にして熱心に自ら精勤して住する比丘には、(一)現世に於ける完全智(阿羅漢又は(二)殘餘
の煩惱)ある時には(現状への)不還(阿那含)の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右

の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、」更にまた師は告げて宣はく、

七四、いかなる苦が發生すとも、

すべて離齟に縁りて[發生す]。

諸の離齟の滅によりて、

苦の發生あることなし。

(二二)

七五、離齟に縁りて苦あり、

これ過患なりと知りて、

一切の離齟を捨遣し、

離齟なくして解脱し、

(二一)

七六、^⑩有愛を斷絶し、

心寂靜となれる比丘は、

生の輪廻を越度せり。

彼には再有あることなし。

(二三)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、
「あり」と彼等に答ふべし。」然らば云何。「いかなる苦が發生すとも、すべて食に縁りて

〔發生す〕とはこれ一隨觀なり。されど食の残りなき離と減との故に苦の發生あることなしとはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には(一)現世に於ける完全智(阿羅漢)又は(二)殘餘の煩惱ある時には〔現状への〕不還阿那含の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師は告げて宣はく。

七西七、いかかる苦が發生すとも、

すべて食に縁りて〔發生す〕。

諸の食の減によりて、

苦の發生あることなし。

七西八、食に縁りて苦あり、

これ過患なりと知りて、

一切の食を遍く知り、

一切の食に依止せず。

七西九、吠陀の達人は無病(涅槃)を

正しく了知し、諸漏の遍盡の故に、

省察して〔食を受用し法に住し、

〔輪廻の〕數に入ることなし。 (二六)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「いかなる苦が發生すとも、すべて動轉に縁りて〔發生す〕」とはこれ一隨觀なり。されど動轉の残りなき離と滅との故に苦の發生あることなしとはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し、不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には〔一〕現世に於ける完全智〔阿羅漢〕又は〔二〕殘餘〔の煩惱〕ある時には〔現状への不還阿那含の二果中の隨一の果が期待せらる〕。世尊は右の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師は告げて宣はく、

七五〇、いかなる苦が發生すとも、
すべて動轉に縁りて〔發生す〕。

諸の動轉の滅によりて、

苦の發生あることなし。

七五、動轉に縁りて苦あり。

これ過患なりと知り、

(二七)

斯くて愛欲を棄て、

諸行を滅せしめ、

不動にして取あるなく、

念ありて比丘は普行すべし。

(二八)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「依止ある者には動搖あり」とはこれ一隨觀なり。依止なき者は動搖せずとはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には「現世に於ける完全智(阿羅漢)又は「殘餘の煩惱」ある時には「現状への不還阿那含」の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師に告げて宣はく、

七五二、依止なき者は動搖せず。

依止ある者は取著し、

この状態より他の状態への

輪廻を越度せず。

(二九)

七五三諸の依止に大怖畏あり。

これ過患なりと知りて、

依止なく取著あるなく

念ありて比丘は普行すべし。

(三〇)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。「色界定よりも無色界定は一層寂靜なり」とはこれ一隨觀なり。「無色界定よりも滅盡定は一層寂靜なり」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には(二)現世に於ける完全智阿羅漢又は(三)殘餘の煩惱ある時には現状への不還阿那含の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて更にまた師は告げて宣はく。

七五四、色界定に至る諸の有情、

及び無色界定に住する人々は、

滅盡定を知解することなく、

再有に来る人々なり。

(三一)

七五、されど色界定を遍知し、

無色界定の中には解説する人々、

彼等は死魔を捨てたるなり。

(三二)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ若し問ふ人々あらば、「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。諸比丘よ、「天を含めたる魔を含めたる梵天を含めたる世界に於て沙門婆羅門を含めたる天と人とを含めたる一切の人々の中に於て、「こは眞理なり」と考へられたるものは諸聖者には、「これ虚妄なり」と如實に正慧もて善く見られたるものなり」とはこれ一隨觀なり。諸比丘よ、「天を含めたる魔を含めたる梵天を含めたる世界に於て沙門婆羅門を含めたる天と人とを含めたる一切の人々の中に於て、「こは虚妄なり」と考へられたるものは諸聖者には、「これ眞理なり」と如實に正慧もて善く見られたるものなり」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく「一を隨觀し不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には、「現世に於ける完全智(阿羅漢又は三)殘餘の煩惱ある時には現状への不還(阿那含)の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、「更

にまた師は告げて宣はく、

十六、非我なるものを我と謂へる、

名と色とに住著し居れる

天を含めたる世人を見て、

これ眞理なりと愚者は考ふ。

(三三)

七五七、〔愚者が斯く考ふる所の

その考へよりそは異れり。

蓋し彼愚者のその考へは虚妄なり、

暫時〔的世〕法は虚妄滅法なればなり。

(三四)

七五八、涅槃は不虛妄法なりと、

そを諸聖者は眞に知る。

彼等は實に眞理を解するが故に、

愛なくして寂滅す。

(三五)

「また他の異門によりても正しき二種隨觀ありや」と諸比丘よ、若し問ふ人々あらば、「あり」と彼等に答ふべし。然らば云何。諸比丘よ、天を含めたる魔を含めたる梵天

を含めたる世界に於て沙門婆羅門を含めたる天と人とを含めたる一切の人々のうちに於て、「こは樂なり」と考へられたるものは諸聖者には、「これ苦なり」と如實に正慧もて善く見られたるものなり」とはこれ一隨觀なり。諸比丘よ、「天を含めたる魔を含めたる梵天を含めたる世界に於て沙門婆羅門を含めたる天と人とを含めたる魔を一切の人々の中に於て、「こは苦なり」と考へられたるものは諸聖者には、「これ樂なり」と如實に正慧もて善く見られたるものなり」とはこれ第二隨觀なり。諸比丘よ、斯の如く正しく二を隨觀し不放逸にして熱心に自ら精勤して住する比丘には、「現世に於ける完全智(阿羅漢)又は(三)殘餘の煩惱」ある時には(現状への)不還(阿那含)の二果中の隨一の果が期待せらる。世尊は右の如く宣へり。善逝は斯く言ひ已りて、更にまた師は告げて宣はく。

七九、⁽¹⁾有りと言はるゝだけの

あらゆる色と聲と味と

香と觸と法とは好ましく

愛すべく意に適ふものなり。

七〇、天を含めたる世界の人々には

(三六)

此等は實に樂なりと思惟せらる。

されど此等が滅する時は、

そは彼等に苦なりと思惟せらる。

(三七)

夫一有身の斷滅することは、

諸聖者には樂なりと見らる。

〔正しく〕見る人々の〔の考へ〕は、

一切世間〔の考へ〕と反對なり。

(三八)

七二、他の人々が樂なりと言ふものを、

諸聖者はこれを苦なりと言ふ。

他の人々が苦なりと言ふものを、

諸聖者はこれを樂なりと言ふ。

〔斯く〕了知し難き法を見よ。

無知の人々は茲に癡迷す。

(三九)

七三、〔無明に〕蔽はれたる人々には闇あり。

〔正しく〕見ざる人々には暗黒あり。

〔正しく〕見る諸の善人には

光明の〔輝やく〕如く涅槃の開顯あり。

法に熟達せざる獸の如き愚人は、

近くにある〔涅槃〕を識ることなし。

(四〇)

七四、有貪に打ち敗れ、

有の流れに従ひ行き、

魔の支配下に至れる人々には、

この法は善く正覺せられず。

(四一)

七五、諸の聖者を除きては涅槃の

句を正覺するに値する者誰かある。

その〔涅槃〕句を正しく了知せば、

人々は無漏となりて般涅槃す。

(四二)

右の如く世尊は宣へり。意悦べる彼等諸比丘は世尊の所説を聞きて歡喜せり。而してこの説法がなさるゝ時、六十人の比丘の心は取著なくして諸漏を解脱せり。

二種隨觀經畢れり。

この二種隨觀經の攝頌

諦(真理)と依と無明と、
諸行と第五には識と、

觸と諸受と渴愛と、
取と離離と諸の食と、

動轉と動搖と色と、
真理と苦とによりて十六なり。

大品第三三畢れり。

その攝頌

出家と精勤と、

善說とまた孫陀利と、

摩伽經と薩毘耶と、

施羅と箭とが說かる、

また婆私陀と拘迦利耶と

那羅迦と二種隨觀との

此等の十二の經が

大品と言はる。

註① 以下の四偈は S.V. P.433 (S.56,22, Vijjā; It, P.106 (如是語經一〇三經)にも出づ。漢譯相

當偈は雜阿含三九二經(大正二·一〇六 a)にあり。

② 本偈は一〇五〇偈の後半及び一〇五一偈の前半に同じ。

③ 「吠陀」とは須陀洹道乃至阿羅漢道の智を指す。

④ 「止滅の故に」(abhisamaya), 之の語に關しては三四二偈の註參照。

⑤ 本偈及び次偈の前四句は S. IV. P. 205 にも出づ。

⑥ 「離食す」(Virajjati) 註書にては vijānāti (識る)の語を使用し、其等の諸受を識る。又は「苦なことを識る」と説明せり。

⑦ 次の偈は A. II. P. 10; It. P. 9; P. 109 (如是語經一五經、一〇五經)にも出づ。 MNd. P.455; CNd. (シャム本) P.291; P.320; Dhs. A. P.364; SnA. P.64 等に引用せらる。尙ほ七四〇偈のみは CNd (シャム本) P.363; SnA. P.17; MNdA. P.39 に引用せらる。

⑧ 本偈は J. IV. P.354 にも出づ。尙ほ出曜經卷五(大正四·六三六 b), 法集要頌經卷一(大正四·七七八 c)に本偈と類似せる偈あり。

⑨ 以下の三句は It. P.93; P.95; P.108f (如是語經九三經、九四經、一〇四經)にも出づ。

⑩ 本偈は Ud. P.46 (自說經第四品第九經)にも出づ。尙ほ本偈に類似する偈は大毘婆沙論卷五六、卷一九六(大正二七·一八八 b、九八〇 b)、阿毘曇毘婆沙論卷三一(大正二八·二二三 a)に見ゆ。

四 義品^①

一 欲經^②

七六六、^③欲〔の對象〕を欲しつゝある

彼に若しそが成じなば、

人は欲せしものを得て、

確かに〔彼は〕心喜ぶ。

七六七、^④若しかの欲しつゝある

欲を生じたる人に、

其等諸欲が失はるれば、〔彼は〕

⑪ 以下の二偈は舍利弗阿毘曇論卷一三、卷一五(大正二・八・六・一・三・b・六・二・五・c)参照。

⑫ 本偈は S.I.P.133 にも出で、七五四、七五五の二偈は It. P. 62 (如是語經七三經)にも出づ。

この二偈に相當する偈は雜阿含四六二經(大正二・一・一・八・a)、阿毘達磨集異門足論卷三(大正二・六・三・七・八・e)に見ゆ。

⑬ 本偈は It. P. 45f (如是語經五一經)参照。

⑭ 以下の三句は It. P. 35 (如是語經四一經)にも出づ。

⑮ 以下七六五偈に至る七偈は殆んど其儘 S.IV.P.127f に出づ。雜阿含三〇八經(大正二・八・八・c)に此等七偈の相當偈あり。

箭に射られたるが如く惱む。

七八蛇の頭より足を避くるが如く、

諸欲を回避する者、

彼は世間の愛著をば、

念ありて正に超越す。

七九田畠や道具や黄金や、

牛や馬や奴僕や傭人や、

婦人や親類や多くの欲やを、

追ひ求むる所の人あらば、

七〇彼に無力煩惱が打勝ち、

彼を諸危難が打破る。

かくて彼に苦が從ふこと、

壊れたる舟に水のに入るが如し。

七一故に人は常に念ありて、

諸欲を應に回避すべし。

(三)

(三)

(四)

(五)

船のあかを汲出すが如く到彼岸者は、
彼等諸欲)を捨断して暴流を度るべし。 (六)

欲經畢れり。

註❶ 義品の原語なる Atthaka-vagga は或は、八つある品の意味にて、八法品、又は、八偈品、とす
べきものなりやも知れず。現に本品の第二經たる Guṇatthaka-sutta (窟八偈經)、第三經
Paramatthaka-sutta (眞怒八偈經)、第四經たる Sudhātthaka-sutta (淨八偈經)、第五經たる
Duttātthaka-sutta (眞怒八偈經)に於ける atthaka は其等の諸經が各八偈より成れるが故に、
明らかに、八つある、「八偈ある」の意味なり。この意味よりすれば Atthaka-vagga も、八偈經
の群の意味なりとも解せらるゝも、本品の第二經より第五經に至る四經を除ける十二
經は何れも八偈より成立せざるが故に、本品全體に八偈品の名を冠するは適切ならず
と思はる。加之、Atthaka-vagga は梵文にては Arthaka-vargiya (J.R.A.S. 1916, p.712) 又は Artha-
vargiya (Yasomitra, Abhidharmaśā-vyākhyā p.33; Bodhisattva-bhumi p.48) の如く「義品」となり居
り、漢譯諸文獻に於ても、摩訶僧祇律卷二三(大正二二·四一六·a)に八跋祇經とせる以外に
は atthaka を八 (astaka) の意味に取れるものなく、また大智度論卷一(大正二五六三·c)に阿
他婆耆經と音譯せる他は總て義 (artha or arthaka) の意味に解せり。即ち漢譯中に出づ
る譯語は左の如し。

義品——雜阿含五五一經(大正二·一四四b·c)、義足經——義足經(大正四·一七四以下)、
十六義品經——五分律卷二一(大正二二·一四四b)、十六句義——四分律卷三九(大正
二二·八四五c)、句義經——同卷五四(大正二二九六八b)、說義——毘尼母經卷三(大

正二四・八一八 a)、衆義經——大智度論卷一(大正二五六〇 c)、義品——同卷一八(大正二五・一九三 b)、衆義品——大毘婆沙論卷四、卷一三七(大正二七・一七 a、七〇六 a)、義品——同卷三四(大正二七・一七六 a)、衆義經——阿毘曇毘婆沙論卷二、卷一六、卷一八(大正二八・一一 c、一一八 a、一三三 c)、義品——俱舍論卷一(大正二九三 b)、義部經——俱舍釋論卷一(大正二九・一六四 a)、義品——順正理論卷二(大正二九・三三七 b)、義品——瑜伽師地論卷一九、卷二六(大正三〇・三八七 b、四八九 a)

右の中義足經の義足と四分律の句義と毘尼母經の說義とはその原語は Artha-pada 又は Pada-artha 等なりしやも知れず、其他は總て Arthaka-vargiya 又は Artha-vargiya なりしを推察し得べし。このことは現に V.I, p.196; S.III, p.9; PI.2; UD, p.59 等に引かれたるを見るも、すべて Arthaka-vargiya に相當する Aṭṭhaka-vaggika の名を用ひ居れるに依りても知るを得べし。即ち多くの部派によりて傳へられたる Aṭṭhaka-vagga は義を齋らす經を集めたるもの、利益を齋らす經を集めたるもの、意味にて義品と呼ばれ居りたるを知る。故に今も義品と譯出せり。

この義品は恐らく各部派を通じて十六の經を集めたるものなるべく、巴利の本品も、漢譯の義足經も十六品を有し、且つ右の表に示せるが如く、五分律及び四分律にて十六義品經、十六句義と云ひ Udana P.59 とある點等よりこれを知り得べし。本品に相當するものとしては吳の支謙譯義足經二卷あり。義足經と本品とを比較するに各十六の經はその順序に多少の相違あるも、各經は互に相當し、本品の側に相當するものは總て義足經にも存す。今その兩者の十六經を比較すれば左の如

二〇

本品

義足經

本品

義足經

1. Kāma-sutta

一、桀貪王經

8. Pañña-sutta

八、勇辭梵志經

2. Guṇatīkā-sutta

二、「優填王經」

9. Māgandhiya-sutta

九、摩因提女經

3. Duttatīkā-sutta

三、「須陀利經」

10. Purābheda-sutta

一五、子父共會經

4. Suddhatīkā-sutta

四、「摩竭梵志經」

11. Kalahavivāda-sutta

一〇、異學角飛經

5. Paramatīkā-sutta

五、「鏡面王經」

12. Cūjaviyūha-sutta

一一、「猛觀梵志經」

6. Jarā-sutta

六、「老少俱死經」

13. Mahāvīrūha-sutta

一二、「法觀梵志經」

7. Tissametteyya-sutta

七、「彌勒難經」

14. Tuvaṭaka-sutta

一三、「兜勒梵志經」

15. Attadanta-sutta

一四、「維樓勒王經」

16. Sañīputta-sutta

一五、「蓮花色比丘尼經」

本品と義足經との體裁の相違は本品が偈のみより成るに反して、義足經には各經の偈の説かれたる因縁物語を偈の前に附し居れり。巴利に於ては其等の因縁物語は本品の各經の註の中に説かる。而して巴利の註書の因縁物語と義足經のそれとを比較するに、兩者は割合に類似せるものもあり、又話の筋は相違するも其等が説かんとする趣旨は同一なるものありて、相互に何等かの關係あるを思はしむるも、「三の經の因縁物語は全く相異れり。その一々の比較に就きては各經の註を參照せられたし。

義足經の如く、他の部派に於ても因縁物語を附したる義品が流行せりと覺しく、中央亞細亞より發見せられたる梵文義品三經の断片 (IRAS, 1916, pp. 711-718) 及び大智度論卷一八(大正二五・一九三b)に引用せられたる義品の一經は何れも偈文の前に因縁譚を附

し居れり。

②本經は註によるに、舍衛城と祇樹園の中間なる阿致羅伐底河畔に麥を播き手入をして極めてよく成熟し、將に刈入れんとせし前日に河水氾濫して麥を全部流失し、大いに悲歎せる一婆羅門の爲に佛が説法せられたるものなりといふ。本經に相當する義足經卷上桀貪王經(大正四・一・七四 b 以下)にては、その因縁物語は本經の註と類似し、本經の註よりも更に詳細なり。義足經のこの物語は本經の註よりも寧ろ本生經の四六七(Kāma-jataka, J.IV, pp.167-175)に割合に類似す。恐らく本經の註は詳細の説明を右の本生經に譲りたるものならん。尙ほ本經各偈の語句の逐字的解釋は Mahā-niddesa pp.1-22 に存するが故に、彼處をも参照せられだし。

③本經は J.IV, p. 172 にも出づ。以下本經の六偈は義足經卷上(大正四・一・七五 c)参照。七六六偈乃至七七〇偈の五偈に相當するものは瑜伽師地論卷一九(大正三〇・三八七 b)に見ゆ。七六七偈より七六八偈に至る三偈は Netti, p.5, p.69 に引用せらる。七六七偈七六八偈に相當する二偈は大毘婆沙論卷三四(大正二七・一・七六 a 以下)に見ゆ。七六七偈七六八偈に相當する偈は義足經卷上(大正四・一・七五 b)、阿毘曇毘婆沙論卷一八(大正二八・一・三三〇)に見ゆ。七六七偈前半は Vm. p.378 に引用せらる。

④本偈は Vm. p.576; SA, I, p.32 に引用せらる。本偈に相當する偈は俱舍論卷一(大正二九・三 b)、俱舍釋論卷二(大正二九・一六四 a)、順正理論卷二(大正二九・三三七 b)等に見ゆ。

⑤本偈は Thag. v.457 参照。

⑥本偈は Ud.A.P. 120 に引用せらる。本偈に相當する偈は大毘婆沙論卷五六、卷一九六(大正二七・一・八八八 b・九八〇 c)、阿毘曇毘婆沙論卷三一(大正二八・二二三 a)に見ゆ。七六九

偈乃至七七一偈の三偈はNāṇāśāraに引用せらる。

二 痞八偈經

七七二窟(身體)に著し多くのものに蔽はれて

住しつゝある人は令愚(欲)中に沈潛せり。

斯の如き人は實に遠離より遠ざかる。

欲は世間にて捨斷し易からざればなり。

七七三、欲求を因縁として有の樂に結ばれたる、

彼等は解脱し難し。蓋し他脫に非ざればなり。

〔彼等は〕後〔未來〕をも前〔過去〕をも期待しつゝ、

此等〔現在未來〕の諸欲も前〔過去の欲〕をも覓む。

七七四、諸欲に對して貪求し熱中し昏迷し、

吝嗇にして彼等不正(惡業)に住著せる者は、
これより死して我等はいかになるならん
とて苦に陥りて悲泣す。

(二)

(二)

(三)

七五、故に人は茲(佛教)にて次の如く學すべし。

世間に於けるあらゆる不正を^{不正と}知り、
その不正に因りて不正を行ふべからず。

諸賢者はこの命は短少なりと言へばなり。

(四)

七六、我は世間にて顛動しつゝある者を見る。

この人々は有に對する愛に至れるなり。

劣れる人々は死^神に直面して泣き、

種々の有に對する愛を越えず。

七七、我執ありて動じつゝある人々を見よ。

〔彼等は〕涸れたる河の少水中の魚の如し。

これを見ては我執なくして行づべし。

有に對して繫著をなさずして。

七八、兩邊(極端)に對する欲を調伏すべし。

觸を遍知し隨貪あることなく、

自ら呵すべき〔惡業〕を行ふなく、

(六)

(五)

賢者は見と聞とに著するなし。

(七)

七七九想を遍知して暴流を度るべし。

(八)

牟尼は諸遍取に染著するなく、

箭を抜き不放逸にして行じつゝ、

此世と他[世]とを願求するなし。

窟八偈經畢れり。

註 ① 訳によるに、實頭盧婆羅墮闇尊者が橋賞彌の優填王の庭園に於て晝住の坐禪をなせる時、優填王は多くの侍女等を連れてこの園に遊び、泥酔して一侍女を枕にして眠りたれば、侍女等は園内を遊歩しかの尊者を見付けて近づき禮拜し、尊者より説法を聽き居たり。その時、王は目醒めて侍女等の不在の理由を聞き、怒りて尊者に近づき、尊者に「汝の遠離を語れ」と言へり。尊者は王が眞に聽法の爲に質問せるに非ざるを知りて默然たりしかば、王は益々怒りて尊者を害せんとせしが、尊者は神通を現はして事なきを得たり。尊者は其後、世尊の許に至りてその顛末を語りたるに世尊は尊者の爲に本經を説きたまへりといふ。本經は義足經卷上、優填王經(大正四一七五。以下)に相當し、本經の註の物語と優填王經の因縁物語とは、骨子に多少の類似あるも、その叙述は大いに異れり。本經の註の物語は本生經四九七(Matanga-jataka,J.W.P.375f)の序分に類似す。尙ほ本經各偈の語句の逐字的解釋はMahā-niddesa PP.23-61にあり。

②窟 (guh) とは身體を指す。身體は貪等の諸煩惱の居住する窟宅なればなり。本經の各偈は義足經卷上(大正四·一七六a以下)參照。

三 愼怒八偈經

七〇一部の人々は實に瞋怒の意ありて〔誹謗〕を語り、

他の人々は〔そ〕を妄信し眞實と意ひて〔誹謗〕を語る。

牟尼は生じたる〔誹謗〕の語に近づかず。

故に牟尼には何處にも〔心裁〕あるなし。 (二)

七一欲に牽かれ、意欲に住著せる者は、

己が見をいかにして越ゆべけんや。

〔彼は〕自ら完成せりと〔思ひ〕做しつゝ、

知るが如くに其儘に言ふなるべし。 (三)

七二質問せられずして他の人々に、

自己の戒と務め〔頭陀〕とを言ふ人、

〔及び〕自己を自ら言ふ者あらば、

そを諸善巧者は非聖法なりと言ふ。 (三)

七八三、また寂にして自ら寂滅せる比丘は、
我は斯の如しと諸戒を誇るなく、

彼には世間の何處にも煩惱増盛あるなし。

そを諸善巧者は聖法なりと言ふ。 (四)

七八四、不淨白の諸法ありて〔そを〕遍計し、

造作し重視する所の人は、

かの自己の見に功德を見て、

その動(妄見)に縁る〔虚〕寂に依止せり。 (五)

七八五、諸法に對する取著を〔取著と〕確知して、

見住著を離越するは實に易からず。

故に人は彼等住著に在りて、

〔正〕法を放棄し、また〔諸法を〕取著す。 (六)

七八六、除遣者には實に何處の世間にても、
種々の有に對する遍計の見なし。

除遣者は詣と慢とを捨断せり。

近著なき彼は何ぞ[輪廻に]赴かん。

(七)

^{大七、近}著者は諸[煩惱]法の語を受く。(彼は貪あり瞋あり等と)。

不近著者をば云何が何の語もて説くべけん。

蓋し彼には我も非我もあるなく、

彼は茲に一切の見を遣りたればなり。

(八)

瞋怒八偈經畢れり。

註① 訳によるに、佛の成道後、各地の人民は皆佛教に歸依したる爲に、諸の外學は信者を失ひて飲食衣服等に窮乏せり。彼等はこれを釋尊の出現によるものとなし佛陀及び諸弟子を憎惡し、機會ある毎に佛教を亡ぼさんと策謀したり。彼等外學は或る時白衣の女普行者、孫陀利を指嗾して、彼女をして恰かも世尊や佛弟子と驟近なるかの如くに世人に見せしめ、其後密かに彼女を殺害して祇樹園中に埋め、舍衛城の人々及び波斯匿王に佛教の比丘等が孫陀利と不義をなしたる上にこれを殺せりと宣傳したり。世人はこれを信じ、比丘等に對して種々に怒罵したり。この事件に因みて世尊は阿難に本經を説かれたりといふ。本經は義足經卷上、須陀利經(大正四·一七六b以下)に相當し、本經の物語は須陀利經の因縁物語の前半に稍々類同す。この物語は自說經第四品第八經(Udāna P. 43ff) 参照。尙ほ本經各偈の語句の逐字的解釋は Maha-niddesa pp.62-83 に

四 淨八偈經^①

あり。

②以下本經各偈は義足經卷上(大正四・一七七b以下)參照。

③本偈に相當すべき偈は大智度論卷二(大正二五六・一a)に見ゆ。

七八八、^②第一無病なる淨を我は見る、

[その]見によりて人に正淨あり、

と斯く知解するを第一なりと知り、

淨觀者は[見を]智なりと解す。

七八九、若し見によりて人に淨あらば、

又は智によりて彼は苦を捨斷せば、

[聖道]以外によりて彼有依者は淨まるべし。

(二)

[聖道]以外によりて彼有依者は淨まるべし。

(三)

七九〇、婆羅門(漏盡者)は[聖道]以外の見や聞や、

戒や務めや覺に於ける淨を言はず。

[彼は]善にも惡にも染著し居らず。

自己を捨てゝ此世にて[善惡]を行はず。 (三)

七九一、前の師等を捨てゝ後[の師等]に依止し、
動[貪]に從ふ人々は著を度ることなし。
彼等は捕捉しては放棄すること、

〔他を放して〕面前の枝を把ふる猿の如し。

七九二、自ら諸務を受持する人は、

想に著して彼此[の師等]に至る。

智者は吠陀(智)もて法を證知し、

廣慧ありて彼此に至ることなし。

七九三、あらゆる見たる聞きたる覺りたる

一切諸法に於て彼は破[煩惱]軍し居れり。

かの[煩惱の蔽]を開き行ずる斯る見者を、

何ぞこの世間に於て〔妄想〕分別すべけん。(六)

七九四、〔諸の漏盡者は諸法を〕分別せず重視せず。

彼等は〔世間を〕究竟清淨なりと言はず。

繫せられたる取繫を放棄して

世間の何處に於ても意欲を作さず。 (七)

七九五、婆羅門(漏盡者)は界(煩惱)を超えたる。

知り已り見已りて彼には執取なし。

貪への貪なく離貪への貪もなし。

彼には“これ第一なり”との執取なし。 (八)

淨八偈經畢れり。

註①

註書によるに、一婆羅門あり、過去に於て迦葉佛を供養したる功德によりて舍衛城の大婆羅門家に生れ、胸より月輪の如き光を發せり。故に彼は月光と名づけられたり。婆羅門等は月光童子の胸の月光を見たる者は名譽財産等を得、死後は天に生ると世人に宣傳し、彼等は月光婆羅門を諸地方に連れ歩き、各地の人々より大なる尊信を博し居れり。時に世尊は出世して舍衛城に住したまへり。その時會し月光婆羅門は地方より舍衛城に歸り來り、世尊に見えてその威光に打たれ、自己が些細なる身光のために慢心に陥り居たるを慚ぢ、遂に佛に歸依して出家し精進の後に阿羅漢となれり。其後諸比丘は集まりて月光を見たる人々は名譽財産を得、死後は天に生れ又は清淨を得たり等の雑談に耽り居れり。世尊はこれを聞きて、その雑談に因み、本經を説きたまへりといふ。本經は義足經卷上、摩竭梵志經(大正四一七七〇以下)に相當す。本經の註の物語と

摩竭梵志經の因縁物語とは全然異なるも、その物語の趣旨は類似す。本經各偈の語句の逐字的解釋は *Maha-nidæsa* pp.84-110. にあり。

② 以下本經各偈は義足經卷上(大正四·一七八 a)参照。

五 第一八偈經^①

七九六、第一なりとて各自諸見に遍住し、

そを人は世間に於て最上となし、

それ以外のものは總て劣なりと言ふ。

故に諍論を離越することなし。

七九七、あらゆる自己の見や聞や戒や、

務めや覺に於て彼は功德を見る。

それのみを彼は其處に執取し、

他的一切をば賤劣なりと見る。

七九八、他を劣なりと見るあらゆる依止者、

彼をも諸善巧者は繫ありと言ふ。

故に見や聞や覺や戒や務めに、

比丘は應に依著すべからず。

(三)

七九九、智によりても戒や務めによりても
世間に於て見を營み起すべからず。

自己を[他に]等しと見做すべからず。

劣なりとも勝なりとも思ふべからず。

八〇〇、自己を捨斷して取著することなく、

智に對しても彼は依止をなさず。

彼は實に異諍者中にて違和に至らず。

彼は何等の〔惡〕見にも戻り來らず。

八〇一、茲に兩邊(極端)に對して、種々有に對して、

此界又は他界に對して願(渴愛)なき者は、

諸法に對する取著を〔取著と〕確知しつゝ、

彼には何等の住著あることなし。

八〇二、彼には茲に見や聞や覺に對して

(五)

(六)

遍計せる微の想すらあることなし。

見を取せざる彼婆羅門(漏盡者)をば

何ぞこの世間に於て〔妄想〕分別すべけん。(七)

八〇三、〔諸の漏盡者は諸法を〕分別せず重視せず。

諸法(惡見)も亦彼等に認受せられず。

婆羅門は戒や務めによりて導かれず。

斯る者は彼岸に到りて戻り來らず。 (八)

第一八偈經畢れり。

註 ① 訳によるに、世尊が舍衛城に住したまへる時、種々の外學は自己の見を以て最第一なりとて互に相争ひ決するを得ずして王に訴へたり。王は生れ乍らの盲人を多く集まらしめ、彼等をして大象を摸せしめ、然る後、王は彼等に「象は何の如きや」と問ひしに、盲人等は自己の摸したる部分のみに依て象を判断し、「象は壁の如し」、「象は柱の如し」等と言ひて相争へり。王は諸の外學に對して、「汝等の各自の主張も斯の如し」とて彼等を還らしめたり。佛は一比丘よりこの事件を聞き、これに因みて本經を説きたまへりといふ。本經に相當するものは義足經卷上、銕面王經(大正四・七八a以下)にして、本經の註の物語は銕面王經の物語を幾分類同するも多少の相違あり。寧ろ銕面王經の物語は自說經第六品第四經(Udāna p.66ff)に近し。本經各偈の語句の逐字的解釋は Maha-

niddesa pp.102-116 にあり。

②以下本經各偈は義足經卷上(大正四·一七八b以下)参照。

六 老經^①

八〇四、^②〔人間の〕この命は實に短少なり。

百歳より以下にても死す。

「百歳を過ぎて生くる者と雖も、

彼もまた老のために死す。 (二)

八〇五、人々は我執せる物のために愁ふ。
蓋し、遍取の常なることなければなり。

そは存在しては變滅するものなり、
と斯く見て家に居住すべからず。 (三)

八〇六、人が「こは我がものなり」と思惟する物、
そは死のためにも亦失はる。
賢者はこれを知り已りて、

我が弟子は我執に向ふべからず。

(三)

八〇七、譬へば夢にて會ひたるものを、

寤めて後人は見ざるが如く、

斯の如く愛する人々をば、

亡じ命終せば見ることなし。

(四)

八〇八、その名が某々と言はるゝ人々、

彼等は曾て見られ聞かれたるも、

亡じて後は、[彼等]人々の名のみが、

[これを語るべく残るものなり。]

(五)

八〇九、我執せるものを貪求する人々は、

愁と悲と慳とを捨つることなし。

故に安穩を見たる諸の牟尼は、

遍取を捨て、行じたるなり。

八一〇、滯著なくして行ずる比丘は、

遠離せる座所に親近しつゝ、

(六)

彼にはかの和合涅槃等ありと言はる。

彼は自己を存在中に現はさじ。

八一、牟尼は一切處に依著あるなく、

〔他を〕愛者とも不愛者ともなさず。

〔荷葉〕^{はすのは}に水の著かざるが如く、

彼には悲泣も慄も著くことなし。 (七)

八二、譬へば水滴の荷葉に於けるが如く、

譬へば蓮葉^{はすのは}に水の著かざるが如く、

斯の如く牟尼はあらゆる見や聞や

又は覺の法に對して染著するなし。 (八)

八三、除遣者は實にあらゆる見や聞や

覺に關係せるものを以て思惟せず。

〔彼は〕他によりて清淨を求めず。

彼には貪なく離貪なければなり。

老經畢れり。

(一〇)

註① 註によるに、娑羅多城に老夫婦の婆羅門あり。彼等は過去世に於て屢々世尊と親子の關係ありしため、世尊が娑羅多に來りたまふや、彼等は世尊を呼ぶに、「我が子」となし、常に世尊に供養し、世人は彼等を佛父、佛母と稱せり。彼等は世尊及び諸比丘の說法を聞きて遂に無餘涅槃に入れり。娑羅多城の婆羅門優婆塞等は集まりてこの老夫婦を弔送せり。時に世尊は舍衛城よりこの葬場に來りて、優婆塞等の爲に本經を説きたまへりといふ。尙ほ本生經六八(Sāketa-jātaka, J.I,p.38f)にも本經説示の因縁を説くも、本經註書の説明と多少異れり。本經に相當するものは義足經卷上老少俱死經(大正四・七八c以下)にして、本經の註の物語は老少俱死經の因縁物語と全然異なる。尙ほ本經各偈の字句の逐字的解釋は Mahā-niddeśa pp.117-138 にあり。

② 本偈は Dhp A. III, P. 320 に引用せらる。以下本經各偈は義足經卷上(大正四・一七九a)参照

③ 本偈に相當する偈は大毘婆娑論卷三七(大正二七・一九三b)、阿毘曇婆娑論卷二〇(大正二八・一四四c)に見ゆ。

④ 本偈は Vm. p.666 に引用せらる。

◎ 遠離せる座所に(vivittam āsanam)、底本及びVm. に於ては vivitta-mānasam(遠離せる意を)となり居れるも今は Mahāniddeśa に従ひたり。底本の如くする時はこの一句は「遠離の意を養成しつゝとなるべし。」

七 帝須彌勒經

八一四、尊者帝須(及び)彌勒曰く、

ティフサ
メッターヤ

姪に耽溺せる者の²

害を語りたまへ、我が師よ。

師の教を聞き已りて、

我等は遠離を學すべし。

八一五、世尊宣はく、彌勒よ、

姪に耽溺せる者には、

即ち〔我が〕教も失はる。

また〔彼は〕邪に行道す。

これ彼の非聖〔法〕なり。

八一六、嘗て〔出家當時には〕獨り行ぜるも、

〔後に〕姪を受用する者は、

世間に於ける放恣なる

駕獸の如く、劣凡夫と言はる。

八一七、嘗て彼に存したるかの

名聲も稱譽もすべて失はる。

(二)

(三)

(一)

このことを見て、姪をば

捨断せんことを學せよ。

八二八、諸思惟に襲はれたる彼は、

貧困者の如く思ひ廻らす。

他の人々の叱責の聲を聞きては、

斯の如き人は悄心す。

八二九、また他の人々より叱責せられて

〔彼は諸の刀劍（惡行）を作る。〕

これ實に彼の大貪求にして、

〔彼は〕妄言に沈潜す。

八二〇、賢者なりとの名聲高く、

獨り行ぜんと決意せる者が

而も姪を行ぜば、

愚鈍者の如く惱まさる。

八二一、牟尼は茲にこの前後の

(七)

(六)

(五)

(四)

過患を知り已りて、

獨行を堅く行すべし。

婬を受用すること勿れ。

八三、遠離のみを學すべし。

これ諸聖者の最上[法]なり。

[されど]それを最勝と思ふべからず。

彼は涅槃の近くにあるのみ。

(九)

八三、[惡行]絶無となりて行ずる牟尼の、

諸欲を顧みることなく、

暴流を度りたる者をば、

諸欲を貪覓する人々は美む。

(一〇)

帝須彌勒經畢れり。

註①註によるに、帝須と彌勒との二友人ありて共に出家せしも彌勒は最初より修行に勵み、帝須は長兄の死に遭ひて歸宅し親戚に勧められて遂に還俗せり。偶々世尊は遊行して帝須の住する村を通過したまひしかば、彌勒は帝須を世尊の許に連れ來り、本經の初

(八)

偈にある如き質問をなせしに對して、世尊は本經を説きたまへりといふ。本經は義足經卷上彌勒難經(大正四・一七九a以下)に相當し、本經の註の物語は彌勒難經の因縁物語と多少の類似あるも、叙述は大いに異れり。更に本經に相當すべき梵文断片が中央亞細亞より發見せられ、この断片は彌勒難經の如く因縁物語をも含める様式のものなり(J.R.A.S. 1916, P.711)。本經各偈の語句の逐字的解釋は *Mahā-niddeśa*, pp.139-160 にあり。

② 以下本經各偈は義足經卷上(大正四・一七九b以下)参照。

八 波須羅經^①

八四、茲にのみ淨ありと彼等は説き、

諸他の法には清淨なしと言ふ。

それに依りて其處に淨を説きつゝ、

廣く各自の眞理に住著せり。

(一)

八五、論を欲する彼等は衆中に入りて、

敵對して互に他を愚者と見做し、

他(自師)に依止せる彼等は議論をなし、

〔自説を賛讃せんと欲して善なりと説く。(二)

八天、會衆の中に論を行ふ者は、

賞讃せられんと欲して懸念す。

而して敗北しては憮心し、

缺點を探す彼は毀譽せられては怒る。 (三)

八七、諸の審判者が彼の論に、「汝は」

毀失せり、敗北せりと言ふに、

劣論者は悲泣して愁ひ、

「彼は我を凌げり」と悲歎す。

八八、此等諍論は諸沙門の間に生ず。

此等の人々には得意と失意とあり。

これを見て論議をば離るべし。

賞讃の利得より他の利生ぜざればなり。 (五)

八九、或はまた會衆の中に論を述べて、

それにつきて賞讃せられ、

意に期待せしが如きかの利を得て、

彼はそのため笑喜し高貢る。

(六)

八二〇、高貢なるものはこれ彼の害地なり。

而して彼は慢過慢の言をなす。

二〔の過患〕を見て、諍論すべからず。

それによりて淨ありと諸善巧者は説かざればなり。

(七)

八三、譬へば王の祿を食める勇士が、

喚聲を擧げて敵士を求め行くが如く、

勇士よ、彼〔討論者〕の居る所に至れ。

既に彼と戦ふべきことあるなし。

(八)

八三二、〔惡見〕を把取して諍論し、

これのみが眞理なりと言ふ人々あらば、

汝は彼等に言へ、論が生ぜりとも、

汝に敵對する者は茲に居らずと。

(九)

八三三、されど〔惡見〕を破軍して行ずる人々は、
〔その〕見が諸見と違背することなし。

波須羅よ、汝は彼等より何を得んとするや。

彼等には茲に最極なりとの把取あるなし。 (一〇)

八四、また汝は尋求に因り、

意もて諸悪見を思議しつゝ、

除遣者(佛)と歩調を合して、

汝は行くこと能はず。

波須羅經畢れり。

(一一)

註① 註によるに波須羅といふ普行者あり、彼は、我は閻浮洲第一の論議者なりとて世人に議論を挑み居たりしに、舍利弗と論議して敗れ、論議法を學ばんが爲に佛教中に出家し、得る所あるや、再び外學に還り、佛教徒に論議せんことを申込み、舍衛城の人々にも佛教徒との論戦を豫告したれば、人々はこの論戦を聽かんとして集まれり。波須羅はこの論議に於ても一語をも發すること能はず、世尊は群衆のために本經を説きたまへりといふ。本經は義足經卷上、勇辭梵志經(大正四・一七九〇)に相當し、本經の註の物語は勇梵辭志經の因縁物語とその趣旨は似たるも、叙述は大いに異なる。尚ほ本經に相當すべきものに、大智度論卷一八(大正二五・一九三b)及び中亞發見の梵文斷片あり。何れも義足經に於けるが如く因縁物語を含めるものにして、その物語は何れも勇辭梵志經及び本經の註に異なる。而して大智度論と梵文斷片とは相互に類似せるが如くに思はる。梵文斷片は

各行の三分の二を磨失せるものなれば完全なる比較は不可能なるも、その中には大智度論に出で、他のものに存せざる *Miga-siṅga* (鹿頭) の語あるによりて兩者の類似を推知し得べし (J.R.A.S. 1916, p.711)。梵文断片の第五葉は第一葉と第二葉との間に置くべきものにしてこの第五葉は正しく本經の因縁物語の部分に相當す。この點に關しては、梵文断片の整理者 Hörnle は誤まれり。本經各偈の語句の逐字的解釋は *Mahā-niddeśa* pp. 161-180 に出づ。

②以下本經十一偈は義足經卷上(大正四・一七九。以下)に相當す。尙ほ大智度論卷一八(大正二五・一九三-b)に五偈ありて本經に相當し兩者は類似點あるも、一々の偈の對比は不可能なり。

九 摩健地耶經^①

△五、愛と不樂と貪との三魔女を見て、

姪に對する欲すら[我に]なかりき。

この糞尿に充てる〔穢身〕を何かせん。

そを足もて觸るゝことすら欲せじ」。

△六、多くの帝王によりて求められたる

斯の如き女寶を若し汝欲せば

いかなる見と戒と務めと、

活命と有の生起とを汝は説くや。

(11)

八七、世尊宣はく、摩健地耶よ、
マーガンティヤ

斯く我は説くといふこと我にあるなし。

諸法に對する取著を取著と確知して、

諸見に於て過患を見て取著せず、

省察しつゝ内の寂を我は見たり。 (三)

八八、摩健地耶曰く、

あらゆる遍計せられたる見決定、

其等に取著せずして、牟尼よ、

内寂と尊師が宣ふ所のこの義は、

これ果していかに諸慧者は宣說せしや。(四)

八九、世尊宣はく、摩健地耶よ、

見によりても聞によりても智によりても、

戒や務めによりても淨ありと言はず。

またかの無見無聞無智によりても、

無戒〔無〕務によりても淨ありと言はず。

但だ此等を放棄し、取著することなく、

寂にして依なく、有を熱望せざれ、斯くせば淨あり』。(五)

八四〇、摩健地耶曰く、

若し實に見によりても聞によりても智によりても、

戒や務めによりても淨ありと言はず、

またかの無見無聞無智によりても、

無戒無務によりても淨ありと言はずれば、

我は『そを愚迷の法に他ならずと思念す。

或る人々は見によりて淨を解す。』

(六)

八四一、世尊宣はく、摩健地耶よ、

見に依りて問を重ねつゝ、汝は

取著のために蒙昧に陥れり。

而してこの内寂に就きて微想だに見ず。

故に汝は『我が説を愚迷なりと見るなり。』(七)

八四二、等し、勝れたり』、劣れり』と思念する人

彼はそれによりて諍論すべし。

〔此等三種に對して動搖せざる人、

彼には『等』『勝』といふことなし。

(八)

八三、かの婆羅門(佛)は「我が說は眞理なり」と何ぞ論ぜん。

彼は「汝の說は虛妄なり」といかでか諍論せん。

等をも不等をも思念せざる所の人、

彼はいかでか論に關はらん。

(九)

八四、窟宅を捨てゝ標榜をなさざる

牟尼は村にて親暱をなすことなく、

諸欲に空無にして世間を重視せず、

異執して人々と論ぜられ。

(一〇)

八五、世間にて遠離して遊行すべき所の

其等(惡見)に龍象(佛)は取著して論ぜられ。

譬へば水蓮^{エーラン}や棘莖^{シナカンタカワリ}の蓮が

水や泥に染著せざるが如く、

斯く牟尼は寂を論じて貪求なく、

欲と世間とに染著することなし。 (二二)

八四六、かの吠陀の達人は見によりても覺によりても、

慢に至ることなし、彼はそれに與せざればなり。

〔また彼は業によりても聞によりても導かれず。〕

彼は諸の執着に牽引せられ居らず。 (二三)

八四七、想を離貪せる者には繫縛あるなし。

慧もて解脱せる者には癡あるなし。

想と見とを執したる人々は、

これ他と衝突しつゝ世間を彷徨す。 (二三)

摩健地耶經畢れり。

註① 訳によるに、世尊は摩健地耶婆羅門夫妻を化導せんが爲に、舍衛城より拘樓國の調牛聚落に至りたまへり。金色の光ある世尊を見たる摩健地耶婆羅門は、いかなる國王に求められても與へざりし金色の光ある自己の娘の婿として金色の光ある世尊をば最も適任者なりと考へて大いに喜び、直ちに家に歸りて娘を著飾らしめ、妻と共に彼女を伴ひて世尊の所に至り、世尊に叱の娘を娶られんことを乞ひたりし際に、世尊は彼等のために

本經を説きたまへりとる。この因縁物語は AA.I.P.435ff, DhpA.I.P.199ff に現出づ。本經の相當經は義足經卷上、摩因提女經(大正四・一八〇a 以下)にして、本經の註の物語と摩因提女經の因縁物語とを比較するに、本經の註が詳細なるも、兩者は割合に類似し居れり。尙ほ本經の相當經たるべき梵文断片は摩因提女經の如く因縁物語を有するも、その物語は本經や義足經のものとは更に異り、寧ろ *Divyāvadana* P.515ff の物語に近きが如し。

(JRAS.1916, P.715f)。尙ほ説一切有部毘奈耶卷四七(大正二二三・八八六b)参照。本經各偈

の語句の逐字的解釋は *Mahā-niddeśa* Pp.181-209 にあり。

② 本偈は AA.I.P.437; DhpA. III, P.199; Uda-P.383 に引用せらる。本偈に類似する偈は有部毘奈耶卷四七(大正二二三・八八六c)に見ゆ。以下本經の各偈は義足經卷上(大正四・一八〇b 以下)参照。

③ 以下八四一偈に至る四偈に相當するものは大智度論卷一(大正二五六・三〇)に引用せらる。

④ 本偈は些少の相違を以て S.I. P.12 に出づ。漢譯相當偈は雜阿含一〇七八經(大正二・二八二a)、別譯雜阿含一七經(大正三・三七九b)、瑜伽師地論卷一七(大正三〇・三七〇c)に見ゆ。

⑤ 本偈は S.III. P.9; P.12 に引用せらる。漢譯相當偈は雜阿含五五一經(大正二・一四四b, c)に見ゆ。

⑥ 吠陀の達人(*vedagu*)とは須陀洹道等の四聖道の智を得たる人なり。

一〇 死前經

八四、いかなる見者いかなる戒者が、

寂靜なりと言はるゝや。

その最上の人をば瞿曇よ、

問はれて我に語りたまへ。

八五、世尊宣はく、

〔身壞〕以前に愛を離れ、

前際〔過去〕に依止するなく、

中〔現在〕にて稱計すべき煩惱なき者、

彼には世間に對する重視なし。

八五、忿なく、戰慄あることなく、

誇大せず、後悔あることなく、

眞言を語り、掉擧あるなき者、

彼は實に語を慎める牟尼なり。

八五、未來に對して繫著なく、

過去を憶ひ憂ふるなく、

(二)

(一)

(三)

諸觸の上に遠離を見

また諸見に導かれず。

(四)

八五、離著して詭詐あるなく、

羨望なく慳あることなく、

傲慢ならず嫌惡されず、

また兩舌に關はるなし。

八五三、好もしきものに漏(愛著)なく、

過慢に關はることなく、

柔和にして應辯を具し、

[妄信せず、〔貪も〕離貪もなし。

八五四、利得を欲して學するに非ず、

不利得にも怒ることなし。

〔心の〕違和なく、愛と味に

對して貪求することなし。

八五五、常に捨あり、念あり、

(六)

(五)

(七)

世間にて〔他を己に等しと思はず、

勝れたりとせず、劣れりとせず。〕

〔彼には増盛煩惱〕あることなし。

〔八〕
〔彼には依止あることなく、

〔彼は法を知りて無依なり、

〔彼には有と非有とへの

愛の存することなし。〕

〔五七〕諸欲を期待せざる、

斯る人を寂靜者と我は言ふ。

〔彼には繫縛の存するなし。〕

〔彼は愛著を度れるなり。
わたく〕

〔八〕
〔彼には〔妻子〕も家畜も、

田畠も器具も存するなく、

〔彼には我〔常見〕も、

非我〔斷見〕も得られず。〕

(一一)

(一〇)

(九)

(八)

八五、諸の凡夫及び沙門婆羅門等が、

その〔貪等〕の廉にて〔彼を皆論すべき〕

〔その貪等〕は彼に無視せられ居れり。

故に諸〔皆論〕に對して彼は動ぜず。 (一三)

八六、貪求を離れて慳あるなく、

牟尼は『勝れたり』とも『等し』とも

『劣れり』とも論ずることなく、

無分別にして〔妄想〕分別に至らず。 (一三)

八七、彼には世間にて所有なし、

また無所有を愁ふるなし。

〔彼は諸法に至ることなく、

彼は實に寂なりと言はる。 (一四)

死前經畢れり。

註①註によるに、本經は諸天の大會の間にて、千二百五十人の比丘に圍繞せられたる世尊が、化佛をして死の以前に行ふべきことについて世尊に質問せしめ、その解答として聽衆

に説法せられたるものなりといふ。本經の相當經は義足經卷下、子父共會經(大正四・一八六。以下)なるも、本經の註の因縁話と子父共會經のそれとは全く異なる。本經各偈の語句の逐字的解釋は *Mahā-niddeśa* PP.210-254 にあり。

(2) 以下本經各偈は義足經卷下(大正四・一八七。以下)参照。

一一 國譯經

八二、^② 爭鬭と諍論と悲と愁と及び慳と、

慢と過慢と及び兩舌とは、

これ何處より發生せしや。

冀はくばそを語りたまへ。

八三、^③ 爭鬭と諍論と悲と愁と、

及び慳と慢と過慢と、

及び兩舌とは愛より發生せり。

爭鬭と諍論とは慳に伴ひ、

諍論生ぜし時に兩舌あり。

(二)

八四、愛は世間にて何を因縁とするや。

また世間にてその貪の爲に人々が彷徨する貪は〔何を因縁とするや〕。

また人々の依趣となる所の

意欲と〔その成就とは何を因縁とするや〕。(三)

八五、愛は世間にて欲を因縁とす。

また世間にて〔その貪の爲に人々が〕

彷徨する貪も欲を因縁とす。

また人々の依趣となる所の

意欲と〔その成就ともこの欲〕を因縁とす。(四)

八六、欲は世間にて何を因縁とするや。

或はまた〔見〕決定は何處より發生せしや。

忿と妄語と疑惑と或はまた沙門の

説く所の諸煩惱は〔何處より發生せしや〕。(五)

八七、可意不可意と世間にて言ふ所の

ものに近依(原因)して欲は發生す。

諸色に於て無有(斷)と有(常)とを見て、人々は世間にて[見]決定をなす。

(六)

八六八、忿と妄語と疑惑との此等諸法も、

[可意不可意の]二ある時に[發生す]。

疑惑ある者は沙門(佛)の說きたる

法を知りて智路のために學すべし。

八六九、可意と不可意とは何を因縁とするや。

何の無き時此等あることなきや。

[可意不可意の]無有と有との義は、

これ何を因縁とするやを我に語りたまへ。 (八)

八七〇、可意と不可意とは觸を因縁とす。

觸の無き時此等あることなし。

[可意不可意の]無有と有との義は、

これ觸を因縁とすと我は汝に語る。

(九)

(七)

八七一、觸は世間にて何を因縁とするや。

或はまた遍取は何處より發生せしや。

何の無き時、我執あることなきや。

何の無有なる時、觸は觸せざるや。 (一〇)

八七二、名と色とに縁りて觸あり。

欲求を因縁として遍取あり。

欲求の無き時、我執あるなく。

色の無有なる時、觸は觸せず。

八七三、いかに行ぜし者に色は無となるや。

或はまた樂と苦はいかにして無となるや。

いかにして無となるや、そを我に語りたまへ。

我が意こころそを知らんと欲す。 (一一)

八七四、想想者ならず、無想想者ならず。

また非想者ならず、無有想者ならず。

斯く行ぜし者に色は無となる。

障礙なるものは想を因縁とすればなり。 (三三)

八七五、尊師に問ひし所を〔尊師は〕我等に答へたまへり。

其他を尊師に問はん冀はくばそを語りたまへ。

或る賢者等は〔この非想非非想處定〕を以て、

これ人の最高の淨なりと説くや。

或はまたこれより他〔の淨〕をも説くや。 (三四)

八七六、茲に或る賢者等はこれを以て、

人の最高の淨なりと説く。

更に彼等の或る者は無餘依を

善説とし、滅を〔最高の淨と〕説く。

(五)

八七七、彼等〔諸見者〕を依著者なりと知り、

かの觀慧ある牟尼は依著を知り、

「慧者は種々の有に戻り來らざ」と

知りて解脱者は諍論に至らず。

鬪諍經畢れり。

(二六)

註 ① 訳によるに、本經の説示の因縁も前經に於けるが如し。本經の相當經は義足經卷上、異學角飛經(大正四・一八〇c以下)なるも、本經の註の因縁話と異學角飛經の因縁話とは全く異なる。但だ化佛をして質問せしむとする點は兩者同じ。本經各偈の逐字的語句解釋は *Mahā-niddesa* pp.255-284 にあり。

② 以下本經の各偈は義足經卷上(大正四・一八一b以下)参照。

③ 本偈前半は UDA, p. 429 に引用せらる。

④ 本偈に相當する偈は大毘婆沙論卷四、卷一三七(大正二七・一七a、七〇六a)、阿毘曇毘婆沙論卷二(大正二八・一一c)に見ゆ。

⑤ 「障礙」(*papānca*) とは渴愛と惡見を指す。漢譯にては「戲論」と譯せらる。

一二 小集積經^①

八七八、「惡見者は各自の見に遍住しつゝ、

異執して「自ら善なりとて種々に論ず、

斯く知る者は法を知れるなり、

これを呵責する者は完全者ならず」と。(一)

八七九、「彼等は斯く異執して評論し、

且つ「他は愚なり不善なり」と言ふ。

彼等はすべて〔自ら〕善なりと説くも、

彼等中にて何れの論が眞理なりや。 (三)

八〇、^{若し}他人の法見を認めざる者が、

愚者劣者賤劣慧者なりせば、

彼等すべては〔自見に遍住せるが故に〕、
すべては愚者極賤劣慧者に他ならず。 (三)

八一、若しまた自見による諍論者が、

善淨慧者善者真慧者なりせば、

彼等の見は等しく完全なるが故に、

彼等の中には一人の賤劣慧者もなし。 (四)

八二、敵對者が相互に愚見と言ふ所の

この見を如眞なりと我は言はず。

〔彼等は各自の見をば眞理となせり。

故に他を愚なりと見るなり。 (五)

八三、或る人々が眞理なり如眞なりと言ふ所の

その見をば他人の人々は「虚偽なり虚妄なり」と言ふ。

斯く彼等は異執して諍論をなす。

何故に諸沙門は一致して説かざるや。 (六)

八四、真理は一にして第二あることなし。

その知解者は知解して「何ぞ諍論せん。

彼等惡見者は自ら種々に真理を稱説す。

故に諸沙門は一致して説かざるなり。 (七)

八五、自ら善なりと稱する議論者等は、

何故に種々に真理を説くや。

〔彼等は〕多くの真理を種々に〔他より〕聞きしや、

又は彼等は自己の思擇に従ふや。 (八)

八六、想による諸常(涅槃聖道等)を除きては、

世間に多くの真理が種々にあるなし。

諸見に於て思擇を遍計して、「彼等は

「真理なり」、「虚妄なり」と二法を言ふ。

(九)

八八七、見や聞や戒や務めや覺や、

此等に依止して〔他を蔑視し、

〔自己の見決定に立ちて喜悅しつゝ

「他は愚なり不善なり」と言ふ。

八八八、他を愚なりと見るが故に、

故に自らを善なりと言ふ。

彼は自ら自己を善なりと説きつゝ、

他を輕蔑し、斯く輕蔑して論議す。

八八九、過誤の見もて彼は完成せりとし、

慢に狂ひて〔自ら完全なりと思ひ、

自ら意に第一人者なりと自認す。

彼のその見は彼によれば斯く完成し居ればなり。

八九〇、若し他人の語もて賤劣となれば、

彼も共に賤劣慧者となるべし。

或はまた自ら吠陀の達人賢者なりせば、

(一〇)

(一一)

(一二)

沙門中には一人の愚者あることなし。

(三)

八九、「此の我が說以外の法を宣説する所の

人々は淨に背反し完全者ならず」と

斯く一般の諸外學は説く。

彼等は自見への貪もて貪染せるが故なり。

(四)

八九二、「茲我が說にのみ淨ありと説き、

他の諸法には清淨なしと言ふ、

斯く一般の諸外學は住著し、

かの自己の道を堅持し論ず。

(五)

八九三、自己の道を堅持し論じつゝ、

茲に何ぞ他を愚なりと見るべき、

他見を愚なり不淨法なりと説かば、

彼は自ら確執を將來すべし。

(六)

八九四、「見決定に立ちて自ら善く量りつゝ、

更に彼は世間にて諍論に至る。

一切の〔見〕決定を捨てなば、
人は世間にて確執をなさず。

(一七)

小集積經畢れり。

註①註によるに本經説示の因縁も前經と同様なり。本經の相當經たる義足經卷下、猛觀梵志經(大正四・一八一。以下)に於ける因縁物語は、本經の註のそれと異なるも、化佛が質問をなす點は兩者共通す。本經各偈の語句の逐字的解釋は *Mahā-niddesa* pp.285-304 にあり。

②本偈は大智度論卷一(大正二五・六〇。)の偈に多少類似す。以下本經各偈は義足經卷下(大正四・一八二。以下)参照。

③次の二偈に相當する偈は大智度論卷一(大正二五・六〇。以下)に見ゆ。

④「劣者」(onmako) 底本には *mago* (獸〔の如き人〕) とあるも、今は *Mahā-niddesa* に從ふ。

⑤本偈に相當する如く思はる、偈は三法度論卷中(大正二五・二五^a)、大毘婆沙論卷七七(大正二七・三九九^b)、阿毘曇毘婆沙論卷四〇(大正二八・二九八^a)、轉婆沙論卷八(大正二八・四七一^c)等に見ゆ。

⑥本偈の前半は *Vn. P.497SA. I. P.329* に引用せらる。

一三 大集積經

八九五、あらゆる此等の見の遍住者にして、

「これのみが眞理なり」と諍論する者、
彼等はすべて[他より]毀譽を蒙る。

但だかの〔百派〕中にて賞讃を受く。

八九六、この賞讃は鄙小にして寂に赴かず。

諍論の結果は〔毀譽の〕二なりと我は言ふ。

斯の如く見て、無諍論地をば安隱なりと

観じつゝ、「汝等は諍論すべからず。」

八九七、あらゆる此等の世俗凡俗のもの、

彼等一切に知者は近づくことなし。

見や聞に對して忍(愛著)をなさざる

かの不近著者は何ぞ近著に至らん。 (三)

八九八、戒を最上とする者は自制によりて淨ありと言ひ、
務めを受持して著在せり。

「茲〔百見〕にて學せば淨あるべし」 [とて]

有に牽引されたる彼等はそを善説とす。(四)

八九九、若し戒や務めを亡失せば、

〔戒務の〕業に違背して彼は駭怖し、
彼は茲に淨を熱望し冀求す。

家を出でたる者が隊商を離れて〔家や隊商を求むるが〕如く。(五)
九〇〇、一切の戒をも務めをも捨断し、

また有罪無罪のこの業をも〔捨て〕、

「淨」「不淨」とて〔これを〕冀求するなく、

寂に取著せず、離貪して行すべし。

(六)

九〇一、或はかの厭ふべき〔苦行〕に近依し、

或はまた見や聞や覺に〔近依し〕、

聲を擧げて淨を稱説する者は、

種々の有に對する愛を離れ居らず。

九〇二、^⑥冀求しつゝある者に諸の熱望あり。

また遍計ある時は〔破損の〕駭怖あり。

茲に死も生もあるなき所の者、

(七)

彼は何ぞ駭怖せん、何ぞ熱望せん。

(八)

九〇三、或る人々が第一と言ふ所の法、

それを他の人々は劣と言ふ。

彼等はすべて自見を善説となす。

彼等にはいかなる真理説ありや。

九〇四、自己の法を完全なりと言ひ、

而も他の法を劣れりと言ふ。

斯の如く異執して諍論し、

各自の假俗を眞理なりと言ふ。

(一〇)

九〇五、若し他に輕賤せられて劣ならば、

諸法中に一も勝なるなかるべし。

一般の人は自[法]を堅持し論じつゝ

他の法をば賤劣なりと説く。

(一一)

九〇六、而して自道を賞讃するが如く、

同じく自己に屬する[法]を尊敬せば、

一切の議論は如眞なるべし。

彼等各自は皆淨なればなり。

(二二)

九〇七、婆羅門(佛)には他に導かるべきなし。

諸法中にて決定せる執取[もなし]。

故に彼は諸諍論を超越し居れり。

他の法を最勝と見ざればなり。

(二三)

九〇八、我は知る、我は見る、これのみ如眞なり

と或る人々は見によりて淨を解す。

若し見たりせば、それによりて自ら
何をなせしや、〔四諦を解せしや〕。

〔正見〕を越度して他によりて彼等は淨を説く。

(二四)

九〇九、見つゝある人は名色を見るならん。

見已りて彼等〔名色〕を常樂等と知るならん。

多くも少くも名色を見るに任す。

それによりて諸善巧者は淨を説かざるなり。

(二五)

九一〇、執著論者は調伏し易からず。

〔彼は〕遍計せる見を重視しつゝ、

かの師等に依止し其處〔自見〕に淨を説き、

かの淨説者は其處〔自見〕に如眞を見たり。(二六)

九一二、婆羅門(佛)は正察して妄想分別に至らず。

見に赴かず、また智(もて愛見)に親します。

彼は諸の假俗凡俗の見を知りて、

他の人々が取著する〔見〕を捨置す。

(二七)

九二、茲に牟尼は世間の諸繫縛を遣り、

生ぜし諸諍論にもこれに加入せず。

彼は寂にして諸不寂にも關係せず。

他の人々が取著する〔見〕を取著せず。

(二八)

九三、以前の諸漏を捨てゝ新しきを作らず、

欲に至らず、また執著論者ならず。

かの賢者は諸の悪見を解脱し、

自己を呵責して世間に染せず。 (一九)

九一四、彼は一切諸法に於て、あらゆる

見も聞も覺も破軍し居れり。

かの牟尼は重擔を卸して解脱し、

分別なく愛樂なく冀求あるなし。

斯く世尊は宣へり。

大集積經畢れり。

(110)

註① 註によるに、本經説示の因縁も前の諸經に同じ。本經の相當經たる義足經卷下、法觀梵志品大正四・一八二c以下)に於ける説示の因縁物語は、本經の註のそれと全く異なるも、化佛の質問による説法なることは兩者共通す。本經各偈の語句の逐字的解釋は Mahā-niddesa pp.305-338 に出づ。

② 以下本經各偈は義足經卷下(大正四・一八三a以下)参照。

③ 本偈に相當する偈は Bodhisattva-bhūmi p.48f 瑜伽師地論卷三六(大正三〇・四八九a)に見ゆ。

④ 「がの」(tam)、底本には tap であるも、今は異本及び Mahā-niddesa に從ふ。

⑤ 本偈前半は MA. I, P.41 に引用せらる。

一四 迅速經^①

九一五、^② 我は尊師日種大仙に

遠離と寂句とを問ふ

云何に見て比丘は世間にて、

何物にも取著せずして寂滅するや。 (二)

九一六、世尊宣はく、

障礙なるものゝ根本と、

我慢とをすべて眞慧もて絶滅せよ。

内にあるあらゆる諸愛、

其等の調伏のために常に念ありて學せよ。 (三)

九一七、内の或はまた外のあらゆる

法を知通し已りて^{〔も〕}、

それによりて強慢すべからず。

そは寂滅なりと諸善人に說かれざればなり。 (三)

九一八、^{〔その慢〕}によりて勝れりと思ふべからず。

「劣れり」とも等同なりとも思ふべからず。

種々の類の勝徳を具せりと、

自己を妄分別して在るべからず。 (四)

九九、内にて寂靜となるべし。

比丘は他より寂を求めされ。

内にて寂靜となれる者には、
我あるなし、何ぞ非我あらん。

(五)

九〇、譬へば海洋の中央にては、

波浪生ぜず、靜止せるが如く、

斯く靜止不動なるべし。

比丘は何處にも増盛をなされ。 (六)

九一、明眼者よ、自内證の法たる

危険の調伏(涅槃)を述べたまへ。

賢善者よ、行道を説きたまへ。

別解脫(戒)をも定をも説きたまへ。 (七)

九三、眼もて動貪すべからず。

卑俗の論より耳を蓋ふべし。

味を貪求すべからず。

また世間にて何物にも我執せざれ。

九三、〔病〕觸もて觸れられたる時は、

比丘は決して悲泣すべからず。

また有を熱望すべからず。

諸恐怖に對して駭怖せざれ。

九四、食物や飲物や、

硬食やまた衣服やを

得て貯藏すべからず。

彼等を得ざるも懼怖せざれ。

九五、靜慮せよ、彷徨すべからず。

惡作(後悔)を離れよ、放逸ならざれ。

また聲なき坐所臥所に

(九)

(一〇)

比丘は應に住すべし。

(二)

九二六、眠りを屢々なすべからず、

熱心にして警寤を行ふべし。

曹憤ねむたきと諂と笑と戯と姪と

及び嚴飾とを捨斷すべし。

九二七、魔法や占夢や占相や、

また占星を行ふべからず。

占鳥獸聲や懷姪術や

治療を我が弟子は習ふべからず。

(三)

九二八、毀誓せられて駭怖すべからず、

比丘は賞讃せられて高舉せざれ。

貪欲と及び慳と、

忿と兩舌とを除却すべし。

(四)

九二九、賣買に從事すべからず。

比丘は決して誹謗すべからず。

また村に於て親著すべからず。

利得を欲して人々に語るべからず。

(一五)

九三〇、また比丘は誇大なるべからず。

〔受施を策せる語を語るべからず。

傲慢を學すべからず。

異執の論を論すべからず。

九三一、妄語に誘導さるゝ勿れ。

正知ありて誑をなさざれ。

また活命により慧によりて、

戒と務めによりて他を輕賤せざれ。

九三二、汚辱せられ諸の沙門や廣言者の

〔汚辱する〕多くの語を聞くも、

麤〔語〕もて彼等に返言せされ。

諸善人は返報せざればなり。

九三三、この法を了知して比丘は、

(一六)

(一七)

簡擇しつゝ常に念ありて學せよ。

〔煩惱の〕寂滅を寂なりと知り、

瞿曇の教に於て放逸ならざれ。

(一九)

九三四、彼は〔自ら〕勝ち〔他に〕勝たれず、

雜言なき自内證の法を見たり。

故にかの世尊の教に於て、

不放逸にして常に禮拜し隨學せよ。

斯く世尊は〔宣へり〕。

(二〇)

迅速經畢れり。

註① 註書によるに、本經説示の因縁も前の諸經の場合に同じ。本經に相當する義足經卷下、

兜勒梵志經(大正四・一八三b以下)にては、その因縁物語は本經の註のそれと大いに異なる
も化佛の質問による說法なることは兩者共に同じ。本經各偈の語句の逐字的解釋は
Mahā-niddesa pp.339-401 にあり。

② 以下本經各偈は義足經卷下(天正四・一八四b以下)参照。

③ 障礙,(papātca)、八七四偈の註參照。

④ 本偈はSA. II, p.108 に引用せらる。

一五 執杖經

九三五、確執ある人々を見よ、

執杖せしが故に怖畏生ぜるなり。

いかに我が悚懼せしや、

[その]悚懼を我は述べん。

九三六、恰かも少水中の魚の如く、

顫へつゝある人々を見て、

[また]相互に反目せし人々を見て、

我に怖畏起れり。

九三七、普く世間は堅實ならず。

一切諸方は無常の故に動搖せり。

自己の住所を求むるに、

既に占據されざる所を見ざりき。

九三八、一切有情の終末し不如意なるを

見て、我に不快ありき。

また此處〔有情〕の心に依止せる、見難き煩惱の箭を我は見たり。

(四)

九三九、その箭に中りたる者は、

一切諸方〔諸趣〕に走り〔輪廻し〕、

その箭を引抜きたる者は、

〔諸趣に〕走らず、〔暴流に〕沈ます。

(五)

九四〇、其處〔世間〕にては諸學術が教説せられ、

世間にはあらゆる繫縛〔五種欲〕あり。

其等〔學術繫縛〕に熱中すべからず。

普く諸欲を洞察して

自己の涅槃を學すべし。

(六)

九四一、眞〔語者〕無傲慢者たるべし、

無詭者無兩舌者〔たるべし〕。

牟尼は忿あることなく、

惡貪と慳吝とを越度すべし。

(七)

九四二、眠りと瞢憤と昏沈とに克て。
放逸と共に住すべからず。

涅槃を意とする人は、
過慢に在るべからず。

九四三、妄語に誘導せられざれ。

色に對して愛潤をなされ。

また慢を遍知すべし。

暴惡を離れて行すべし。

九四四、古き〔過去〕を歡喜すべからず、

新しき〔現在〕に對して忍〔愛著〕せられ。

減退しつゝあるを愁ふべからず。

^④鉤引者〔渴愛〕に依止すべからず。

九四五、我は鉤引者を貪求と曰ひ大暴流と

〔曰ひ〕、吸引と曰ひ熱望と〔曰ひ〕、
所縁〔と曰ひ〕、遍計〔と曰ひ〕、

(九)

(八)

(一〇)

超え難き欲泥と曰ふ。

九四六、牟尼は眞語より離去せず、

婆羅門(佛)は陸地(涅槃)に立つ。

彼は一切を捨遣し、

彼は實に寂者と言はる。

九四七、彼は實に知者なり、吠陀の達人なり。

法を知り已りて彼は依止なし。

彼は世間にて正しく動作しつゝ、

此世にて何人をも羨望せず。

九四八、世間に於ける諸欲と克服し難き

執著とを超えたる所の

彼は流れを断ち結縛なくして

愁ふるなく、煩ふことなし。

(一四)

九四九、前(過去)にある所(の煩惱)を涸渴せしめよ、

後(未來)なるは何物も汝にあらしめざれ。

(一三)

(一三)

若し中(現在)なるを汝が執せざれば、
寂靜にして汝は行するならん。 (二五)

九五〇、普く名と色とに對して、

我執あることなき者、

非有の故に愁へざる者、

彼は實に世間にて老いす。

九五一、こは我が物なり』『他の物なり』

とて何物をも執せざる者、

〔斯る〕我執を存せざる彼は、

『我になし』とて愁ふるなし。

九五二、嫉視なく、貪求あるなく、

不動にして、一切處に平等なり。

不動搖者にこの〔四〕功德ありと、

我は所間に對して語り曰ふ。

九五三、不動にして識智ある者には、

(一七)

(一六)

(一八)

何等の作爲あることなし。

彼は雑勤を離れて、

一切處に安穩を見る。

(一九)

九五四、等しとも劣れりとも、

勝れりとも牟尼は語らず。

彼は寂にして慳を離れ、

取著せず放擲するなし。』

(二〇)

斯く世尊は〔宣へり〕。

執杖經畢れり。

註① 註書によるに親戚關係にある釋迦族と拘利族との間に、河水のために爭鬭が生じたる時、世尊は兩軍の中間に立ちて本經を説きたまへりといふ。この物語に關しては本生經五三三六(Kunjala-jataka, J. V, p.412f) 參照。本經の相當經は義足經卷下、維樓勒王經(大正四・一八八a以下)なるも、維樓勒王經の因縁物語は本經の註のそれとは全然異なる。本經各偈の語句の逐字的解釋は Mahā-niddesa pp.402-444 にあり。

② 以下本經各偈は義足經卷下(大正四・一八九b以下)參照。

③ 「執杖せしが故に (atta-dandā)」 註書に「自己の惡行に原因して」と説明せるを見る時は、

atta-dan̄da たゞ'だんじ)の杖の故に、と取れるが如くにも思はるれども「元來 (atta-dan̄da たゞ + √dū + ta - dan̄da にして杖を取れる」とすべしなり。六三〇偈參照。

④「沈 ゃ き (na sīdati) 底本には nisidati とある。今は Mahā-niddesa に從ふ。

⑤「鉤引者 (ākāsa) は梵語の ākāṣa (ā + √kāṣ) に當り、虛空の意味の ākāśa (ā + √kāś) とは非ず。

⑥「吸引を (ācamāni) 底本には ājavatih とある。今は Mahā-niddesa に從ふ。

⑦本偈は DA. III, P. 746; MA.I, P. 232; Dhp.A. III, P. 80 に引用せらる。

一六 舍利弗經

九五五、尊者舍利弗曰く、

② 我は未だ曾て見たることなく、

また誰にも聞きたることもなし。

斯の如く妙語ある師が、

③ 兜率 (天)より衆主として來りたまへる (を)。(1)

九五六、天を含めたる(一切)世界(の人々)に、

見ゆるが如く、具眼者 (佛)は、

一切の [煩惱]闇黒を除去して、

獨り樂を證得したまへり。

九五七、依なく如々にして詭詐なく、

衆主として來りたまへるかの佛に、
結縛ある多くの此等の者のために、
問はんと欲して我は來れり。

九五八、〔世間を〕厭惡し、人なき坐所や

樹下又は塚墓に親しみ、

又は山々の洞窟の中にて

〔住する〕比丘に、〔又は〕

九五九、高き低き臥所に住する比丘に、

——其處には恐ろしき〔猛獸〕吠え、

それを音なき臥坐所にある

比丘は駭怖すべからず——

九六〇、未到の域〔涅槃〕に行く〔比丘〕に、

世間にて幾何の危険ありや、

(三)

(四)

(五)

(二)

——それを邊境の臥坐所にある

比丘が應に克服すべき——。

(六)

九六一、彼にはいかなる語路ことばあるべきや。

彼には茲にいかなる行處あるべきや。

自ら精勤せる比丘には、

いかなる戒や務めあるべきや。

九六二、専一にして智あり念ある

彼はいかなる學を受持して、

鍛工が銀の鑄うつを除くが如く、

自己の垢を吹き去るべきや。

九六三、世尊宣はく、舍利弗よ、

〔世間を厭惡しつゝ人なき

坐所や臥所を受用し、正覺を

欲する〔比丘〕にいかなる安樂住と

いかなる隨法〔聖道〕とありやを、

(七)

(八)

そを[我が]知解に隨ひて汝に語らん。 (九)

九四、念ありて[戒等の]周邊行あるかの

賢き比丘は、虻と蚊と爬蟲類と、

人と四足獸との接觸による

五つの怖畏を怖るべからず。

九五、彼等他法耆外學よりの多くの

恐怖を見るも懼怖すべからず。

また其他の諸の危険をば、

善を追求する者は克服すべし。

九六、疾に罹り饑餓に頻するも忍び、

[また]寒冷酷暑をも耐忍すべし。

其等種々なる觸をして餘地なからしめ、

彼は精進を勵みて堅持すべし。

九七、盜みをせされ、虚妄を語られ。

弱き強き[一切有情]に慈もて觸れよ。

意の混濁せるを識りては、
黒魔の分として除去すべし。

(一三)

九六八、忿と過慢とに左右されざれ、

彼等の根を掘り抜きて在るべし。

また勝者は愛をも不愛をも

完全に克服すべし。

(一四)

九六九、慧を重視し定善巧の喜ある者は、
かの〔禪定の〕危險(五蓋)を鎮伏せよ。

邊境の臥所にて不樂に克つべし。

〔次の〕四つの悲泣法に克つべし。

(一五)

九七〇、〔即ち〕何を我は食はん、何處にて食はん、
「今迄實に苦しく臥せり」、「今日は何處に臥せん」、
悲泣に導くべき此等の諸尋をば、

居家なき有學は應に調伏すべし。

(一六)

九七一、時に食物と衣服とを得ては、

茲に〔少量に〕満足せんが爲に彼は量を知るべし。

彼は彼等衣食に對して〔自ら〕護り、村を慎み行き、汚辱せらるとも蠶語すべからず。 (一七)

九七二、眼を下に投げて彷徨せず、

禪を勵み多く警寤してあれ。

捨を勤めて自ら等持し、

尋と意樂と後悔とを斷絶せよ。 (一八)

九七三、〔教誡の〕語もて叱責せられては、有念にして歡喜せよ。

諸同梵行者に對する〔心〕裁を破壊すべし。

善にして非時に非ざる語を發すべし。

人々を誹謗せんことを思ふべからず。 (一九)

九七四、また更に世間には五塵あり、

有念者は其等を調伏せんと學せよ。

〔即ち〕色と聲と、また味と、

香と觸とに對する貪に打克て。

(一〇)

九七五、有念にして普く心解脱せる比丘は、

此等諸法に對する欲を調伏すべし。

彼は時々によく法を遍観し、

彼は專一となりて闇黒を害破せよ。

斯く世尊は宣へり。

(二二)

舍利弗經畢れり。

義品第四(畢れり)

その攝頌

欲と窟と瞋怒と淨と第一と老と、

彌勒と波須羅と摩健地耶と死前と、

諍論と二の集積と更に迅速と、

優れたる執杖經と長老問とにて十六なり。

此等諸經はすべてこれ義品なり。

註 ① 註書によるに本經は長老問經(*Therapañha-sutta*)とも云ふ。本品最後の攝頌には本經のことと長老問となせり。註によるに世尊が三ヶ月間三十三天に昇りて生母及び諸天

の爲に説法をなし、人界に降りたまひて後、舍利弗が五百の比丘等のために世尊に八つの質問をなし、世尊がこれに答へたまひたり。その問答が即ち本經なりといふ。本經に相當する義足經卷下、蓮花色比丘尼經(大正四・一八四c以下)に於ける因縁物語は本經の註書のそれと同一には非ざるも、兩者は類同せる事柄を叙せり。本經各偈の語句の逐字的解釋は Maha-nidessa pp.445-510 にあり。

② 本偈は Dhp A. III, p.226 に引用せらる。以下本經各偈は義足經卷下(大正四・一八六b以下)参照。

③ 兜率天云々とは、世尊が迦毘羅城に降誕せらるゝ以前は一生補處の菩薩として兜率天に住したまひ、兜率天より没して人界に最後の生を享けたまひしを云ふなり。

④ 本偈は佛性論卷二(大正三一・八〇〇c)参照。

五 彼岸道品

一 序偈

九七八、真言(吠陀)に通達せる一婆羅門〔婆和利〕あり、

無所有を冀求しつゝ、

美はしき橋薩羅族の都より、

南路へと去り行けり。

(二)

九七、彼は阿攝迦^{アッサカ}と阿遷迦^{アラカ}との

〔中間〕等距離の境域なる、

瞿陀婆利^{ゴーダーヴリ}河畔に住せり、

落穂を拾ひ木實を食ひて。

九八、彼の〔住所の〕附近に

廣大なる村ありき、

そこに生ぜし收獲もて、

彼は大なる施與を營めり。

九九、大なる施與をなし已り、

彼は再び菴屋に入れり。

彼が再び入りたる時、

他の一婆羅門來れり。

九〇、足を傷め、日に焦け^(咽渴)、

齒に泥著き、頭に塵を受けて、

彼は彼婆和利に近づき、

(三)

(二)

(四)

五百金を乞へり。

(五)

九一、この彼を婆和利は見て、

坐所に招じて〔坐せしめ〕、

樂なりや善(健康)なりやを問ひ、

〔更に〕次の語を述べたり。

九二、我が〔有せし〕施物はすべて、

我〔これ〕を施捨せり。

梵者よ、我が〔言〕を信認せよ、

我に五百金あることなし。

九三、若し乞ひつゝある我に、

卿が〔五百金を〕與へざれば、

七日にして汝の頭を、

裂けて七つにならしむべし。

九四、〔呪詛の〕作法をなしてかの詭詐ある

〔婆羅門〕は右の恐怖の言を唱へたり。

(七)

(六)

(八)

彼のその〔呪咀〕の言を聞きて、

婆和利は苦惱したり。

九五、愁ひの箭に中てられて、

食をも攝らずして憔瘁し、

且つ斯る心なる〔彼〕の

意も禪定を樂しまざりき。

九六、駭怖し苦惱せる〔彼〕を見て、

義を欲する天神は、

婆和利に近づきて、

次の語を述べたり。

九七、彼は頂を知解せず、

彼は財を求むる詭詐者なり、

頂又は頂墮に關する

智が彼にあるに非ず。

九八、若し卿が知りたまはば、

(九)

(一〇)

(一一)

(一二)

頂又は頂墮に關する智を

問はれて我に語りたまへ。

我は卿のその語を聞かん。

九九、我も亦これを知るなし。

我にはこれに關する智あるなし。

されど頂と頂墮に關する智は

これ諸勝者の見たまへるなり。

九〇、然らばこの地上に於て

頂と頂墮とを誰が

知り居るや、天神よ、

そを我に告げたまへ。

九一、迦毘羅衛の都より

出家せる世間の導師あり、

甘蔗王の後裔たる

釋迦族の子にして世を光照す。

(一六)

(一五)

(一四)

(一三)

九九一、婆羅門よ、彼は實に正覺者にして、

一切諸法の彼岸に達し、

一切の神通と〔十〕万とを得、

一切諸法に對する具眼者なり。

一切諸法の盡滅に得達し、

解脱して依^{ウバタ}を斷盡したまへり。

九九二、かの佛世尊具眼者は、

世間に於て法を説きたまふ。

彼の許^{シテ}に行きて汝は問へ。

彼は汝にそを解説したまはん。

九九三、正覺者なる語を聞きて、

婆和利は踊躍したり。

彼の愁ひは薄らぎたり。

〔彼は廣大なる喜びを得たり。〕

九九四、かれ彼婆和利は意悦び踊躍し、

(一九)

(一八)

(一七)

感動してかの天神に問へり、
いかなる村に又は町に、

或はいかなる地方に世主は〔在すや〕、

其處に行きて最上の人たる

正覺者を我等は禮拜せん。

(二〇)

九九六、橋薩羅族の都たる舍衛城に、かの

勝者廣博慧者・優れたる廣慧者・

釋迦族の子荷を卸せる者無漏者・

頂墮の知者・人牛主は在す。

(二一)

九九七、この言を聞きて〔彼は眞言に通達せる

諸の弟子婆羅門に告げて曰く、

來れ諸學童よ我れ汝等に

語らん我が言を聞け。

九九八、その世間への出現は、

これ常に得難き所の

かの正覺者とて令名ある者が、

世間に興起したまへり。

急ぎ舍衛城に行きて、

「かの最上の人汝等は見えよ。」

(二三)

九九九、然らば、「師婆羅門よ、彼を見て、

いかにして佛なりと我等は知るや、いかにして我等はそを知るやを、知らざる我等に語りたまへ。」

(二四)

一〇〇、諸の真言(吠陀)の中に、

三十二の完全なる大〔偉〕人の相好が傳へられ順次に

解説せられ居れり。

一〇一、その四肢五體に此等の大

人の相好ある所の者、

彼には二途あるのみ、

(二五)

第三あることなし。

(二六)

一〇〇〔彼〕若し家に居住しなば、
この地上をば征服す、

笞杖によらず刀劍によらず、
法によりて〔國家を〕統治す。

(二七)

一〇〇三、若しまだ彼が家より

非家に出家しなば、

〔三毒の〕蔽を開き無上なる

正覺者阿羅漢となる。

(二八)

一〇〇四、我が生年と姓と〔特〕相と

眞言〔吠陀〕とまた弟子と、

頂と頂墮に關する智とを、

意中にて〔彼〕に問へ。

(二九)

一〇〇五、〔彼〕若し無障の見ある

佛(覺者)なりせば、

意もて質問せられて、

語もて返答するならん。

(三〇)

弟子たる十六人の婆羅門、

阿耆多と帝須彌勒と

富那迦とまた彌多求と、

一〇七、度多迦と優波私婆と、

難陀とまた醯摩迦と、

刀提耶と劫波との兩人と、

賢者たる闍都乾耳と、

一〇八、跋陀羅浮陀と優陀耶と、

及び布沙羅婆羅門と、

有慧者たる莫伽羅闍と

及び賓祇耶大仙と、

一〇九、彼等は各々徒衆を有し、

(三一)

(三二)

すべて一切世間に令名あり、

禪定者にして禪定を樂しみ、

賢者にして宿善を植ゑ居れり。

(三四)

一〇〇、結髮と羚羊皮とを著けたる

〔彼等〕すべては婆和利を禮し、

且つ彼に右繞の禮をなし、

北方に向ひて出發せり。

(三五)

一〇一、阿邏迦の〔首都〕波底吒那〔に入れり〕、

それより東方の摩醯沙底へ、

優禪尼ウッヂエニへ、また瞿那墮ゴーナツダへ、

卑地寫ヒタシへ、婆那といふ〔都市〕へ、

一〇二、橋賞彌コーサンビへ、また沙枳多サクタへ、

最上の都たる舍衛城サヅカへ〔入れり〕、

制多毘耶セタギヤへ、迦毘羅衛城カビラグワドウへ、

また拘尸那羅クナラの都市へ〔入れり〕。

(三六)

(三七)

一〇三、波婆城へ、また菩伽市へ、

毘舍離城へ、摩揭陀の都王舍城へ、

また美はしく適意なる

波沙那迦塔廟に達せり)。

一〇四、渴者が冷水を求むるが如く、

商人が大利得を求むるが如く、

暑熱に熱せられたる者が木蔭を

求むるが如く、彼等は急ぎて、

世尊の住したまへる山に登れり。

一〇五、世尊はその時に當りて、

比丘衆の前に在りて(敬はれ)、

師子が林中にて吼ゆるが如く、

諸比丘に法を説きたまへり。

(四〇)

一〇六、阿耆多は黃金色の光ある

太陽の如き圓滿となれる

十五夜の月の如き、

正覺者をば見たり。

(四一)

一〇七時に阿耆多は彼世尊の肢體に於て、

圓滿なる相好を見已りて、

欣悅して一方に立ち、

意中にて世尊に質問せり。

一〇八〔我が師の生年〕につきて

語れ、姓と特相とを語れ。

眞言吠陀への通達の有様を語れ。

〔師婆羅門は幾人に教ふるや。〕

一〇九、年齢は百二十歳なり。

彼の姓は婆和利なり。

彼の肢體には三相あり。

〔彼は三吠陀に通達せり。〕

一〇〇〔大人の〕相好と傳説と

(四四)

(四三)

(四二)

また語彙^{ニガンドウ}と及び儀軌^{ケイクイ}とに達し、

五百の弟子に教授し、

自法の極致に通達し居れり。

一〇二、愛を断ぜる最上の人よ、

婆和利の〔三〕相の簡別^(詳細)を

説きたまへ我等をして、

疑惑せしめたまふ勿れ。

一〇三、舌を以て彼は顔を蔽ふ。

彼の〔兩〕眉の中間に白毫あり。

〔彼の〕陰處は覆被に隠さる^(陰馬藏)。

學童よ、〔彼の〕三相を斯く知れ。

一〇三、質問者に何等をも聞かずして、

〔佛が〕間に答へたまふを聞きて、

一切の人々は感激し、

合掌して思惟すらく、

(四五)

(四六)

(四七)

(四八)

一〇四、天にせよ、梵天にせよ、

須闍^{スヂナ}の夫たる帝釋にせよ、

意中にて問へる質問に、

應答し得る者誰かあらん。

(四九)

一〇五、我が師婆和利は頂と

頂墮に關する智とを遍問す。

世尊よ、そを解説したまへ、

仙人よ、我等の疑惑を除きたまへ。

(五〇)

一〇六、無明が頂なりと知れ、

信と念と定と

欲と精進とに相應せる

明が頂墮に關する智なり。

一〇七、茲に於てかの學童は

大感激もて狂喜しつゝ、

羚羊皮(衣服)を片袒にし、

(五一)

[佛の]兩足に頭もて伏[禮]せり。

(五二)

一〇八、我が尊よ、婆和利婆羅門は、

諸の弟子と共に、

心踊躍喜悅して、

尊師の足下に禮拜す。

一〇九、婆和利婆羅門は

諸弟子と共に安樂なれ。

學童よ汝も亦、

安樂なれ、壽久しかれ。

(五四)

一〇〇、¹⁰婆和利及び汝の

一切の疑問は解明されたり。

汝等が意に[問はんと]欲する
あらゆることを問へ。

(五五)

一〇一、正覺者によりて解明せられて、

[學童は]合掌して坐し、

茲に阿耆多は如來に

第一の質問をなせり。

(五六)

序偈畢れり。

註①彼岸道(*paravaya*)は漢譯諸文獻に於ては皆音譯して、波羅延、婆羅延、波羅延耶(那?)、波羅衍擎等とせらる。即ち漢譯中に於て波羅延等の語を出せるは左の如し。

波羅延耶阿逸多所問——雜阿含三四五經(大正二九五b)、波羅延富隣尼迦所問——雜阿含九八二經大正二二五五c)、波羅延憂陀耶所問——雜阿含九八三經(大正二二五六a)、波羅延低舍彌德勒所問——雜阿含一一六四經(大正二三一〇b)、波羅延經——坐禪三昧經卷下(大正一五一七九c)、波羅延經——四分律卷五四大正二二九六八b)、波羅延薩遮陀舍修祐路——十誦律卷二五(大正二三一八一b)、波羅延——毘尼母經卷三(大正二四八一八a)、波羅延經阿耆陀難——大智度論卷三(大正二五八二c)、波羅延優波尸難——同卷四(大正二五八五b)、波羅延經——同卷三(大正二五二九五c)、波羅衍擎摩納婆——發智論卷一(大正二六九一八c、九一九a)、波羅衍擎——大毘婆沙論卷四、卷一三七(大正二七一七a、七〇六a)、波羅衍擎摩納婆——同卷六(大正二七二六b、二七c)、波羅衍擎見諦經——同卷三〇(大正二七一五三c)、波羅延——阿毘曇毘婆沙論卷二、卷一六(大正二八一一c、一七八a)、波羅延中因阿氏多請問頌——瑜伽師地論卷一九(大正三〇三八六c)、婆羅延經——成實論卷一(大正三二二四四b)、波羅延經——同卷一二(大正三二三三九a)

②元來はこの序偈の部分は存せずして、後に傳承に基づきて附加せられたるものなるや

も知れず。蓋し、本品の古き註釋たる Cūla-niddesa に於ては序偈の部分の語句解釋なく、且つこの部分の偈に相當するものは漢譯文獻中に見當らず、他の部派に於てはこれと全然異りたる序偈を有したるに非ざるやを疑はしむる點あり。即ち前註に表出せる中、大毘婆沙論卷六(大正二七・二六b、二七c)に波羅衍摩納婆との問答として三偈を擧げ、また發智論卷一(大正二六・九一八c、九一九a)にも同様の二偈を、坐禪三昧經卷下(大正十五・二七九c)にも波羅延經中の所説として右所掲の偈に相當する一偈を擧ぐるも、此等三偈は巴利相當偈に見當らず。これ或は有部波羅延經の序偈に存したるには非ざるやと思惟せらる。尤も有部等所傳の波羅延經は本文に於ても巴利のものと多少相違せる點もあれば、巴利になき右の三偈も有部の波羅延本文中のものなりしやも知れず。

次にこの偈序の説明を更に補足すべき因縁物語は、註書によるに概要左の如し。宿世に善根を植ゑたる婆和利婆羅門は、その功德によりて橋薩羅國波斯匿王の父王の帝師の子として生れ、彼は過去世より關係ある十六人の婆羅門を弟子とし、その十六人は各三千人の弟子を有したれば、婆和利は弟子と孫弟子とを合して一万六千餘人の徒弟を有したり。(この一万六千人といふは恐らく歴史的事實に非ずして傳説的説明ならん。事實は一〇二〇偈にある如く五百人の徒弟なりしが如し。この點、註書は本經に矛盾せり)。波斯匿王即位するや、婆和利も帝師となりて大いに王の尊信を受けたり。後に彼は出家せんと志し、王に願ひたるも容易に許されず、されど再三の懇願のため王は遂に朝夕會見し得らるゝ王園内に住して出家することを承諾せり。婆和利は一万六千の徒衆と共に出家して王園に住したるも民衆の間にありては十分なる修行を勵むこと能はざるがために、其後徒衆を率ゐて橋薩羅國を出でて南方案達羅地方に往き、

結髮苦行者として修行精進せり。以下序偈に續く。

③收獲を人民より施されてなり。

④本偈後半は U.d.A. p.10 に引用せらる。

⑤以下一〇〇八偈に至る二偈半は一一二四偈、一二五偈と同じ。

⑥瞿那墮(Gonaddha)とはゴーダ城(Goatha-pura)のことなり。

⑦卑地寫(Vedisa)は阿槃提(Avanti)國の城市なり。

⑧彼等十六人の者は世尊が舍衛城に住したまふと聞き居たれば、南方より西路を辿りて

北方なる舍衛城に達したるも世尊はその時既に王舍城に去りたまひし後なりしかば、

彼等は更に世尊の迹を追うて、舍衛城より東路を辿りて南方摩竭陀國に向ひたるなり。

⑨黃金色の光ある(pīta-rainsim)、底本には vita-rainisi (光なき)とし、 Culā-niddesa には vita-rainisim とせるも今は Trenckner の示唆に従ふ。

⑩本偈は些少の相違を以て D.A. I, p.155; MA. II, p.274; SaA. p.230 に引用せらる。

二 阿耆多學童所問

10111^②
尊者阿耆多曰く、

何によりて世間は蓋はれ居るや、
何によりて世間は輝やかざるや、

何がその世間の染著なりや、

何がその大怖畏なりやを語りたまへ。 (二)

(二)

一〇三、[●]世尊宣はく、阿耆多よ、

無明によりて世間は蓋はれ居れり、
慳惜と放逸の故に世間は輝やかず、
熱望が世間の染著なりと我は言ふ、
苦がその世間の大怖畏なり。

(三)

一〇四、[●]尊者阿耆多曰く、

一切處に煩惱の流れは流る、
何が其等の流れの遮障なりや。

流れの防護を語りたまへ。

(三)

一〇五、[●]世尊宣はく、阿耆多よ、

世間に於けるあらゆる煩惱の流れ、
其等の流れの遮障は念なり。

流れの防護を我は語らん。

慧によりて此等は閉塞せらるべし。 (四)

一〇三六、尊者阿耆多曰く、

我が尊よ、慧と念と、

名と色とはこれ

いかなる場合に湮滅するや。

そを我に問はれて語りたまへ。

一〇三七、^①阿耆多よ、汝が斯く質問せし所、

そを我は汝に語らん。

識の滅によりて、

名と色とが残りなく

湮滅する場合に、

此處にこの慧念・名色は湮滅す。

一〇三八、爰にあらゆる法の察悟者(阿羅漢)、

及びあらゆる有學と善凡夫、

(六)

(五)

彼等の動作(行道)をば我が尊よ、

智者(佛)は問はれて我に語りたまへ。

(七)

一〇三九、諸欲を貪求すべからず、

意の混濁あるべからず。

一切諸法に善巧にして、

念ありて比丘は普行すべし。

(八)

阿耆多學童所問畢れり。

註① 註書にては本經を阿耆多經 (Ajita-sutta) とせり。本經各偈の語句の逐字的解釋は(Cūla-niddeśa) (シャム本) pp.8-32 にあり。

② 本偈は Netti. p.10; p.70 に引用せらる。以下本經の八偈全部に相當する偈は瑜伽師地論卷一九(大正三〇・三八六 b 以下)に波羅延中因阿氏多所請問頌として引用せらる。而してかの引用に於ては一〇三七偈と一〇三八偈に相當する偈の間に一一〇偈、一一一偈に相當すべき二偈を挿めり。

尙ほ、阿耆多は本偈を質問する際には未だ佛教者に非ざりしが故に茲に尊者阿耆多曰くの如く尊者の稱を附するは不都合に見ゆれども、この彼岸道品が經典として成立し、佛教徒がこれを受誦するに至りたる時には、阿耆多は既に阿羅漢果を得たる長老なりしが故に尊者阿耆多となせるなり。以下の各經の場合にも同様に知るべし。

⑤ 本偈は Netti, p.11; p.70 に引用せらる。

④ 次の二偈は Netti, p.12f; p.71 に引用せらる。この二偈に相當する偈は大毘婆沙論卷七三(大正二・七・三)七九(b)、阿毘曇毘婆沙論卷三九(大正二・八・二八五b)、憲婆沙論卷六(大正二・八・四・五・四・〇)以下)に見ゆ。

⑤ 本偈は Vm, p.7; M.A. I, p.22; S.A. II, p.253; SnA, p.8; PtSA, I, p.14; DhsA, p.351 等に引用せらる。本偈に相當する偈は大毘婆沙論卷四四(大正二・一・七・二・三)〇(b)、阿毘曇毘婆沙論卷二四(大正二・八・一・七・七・〇)に見ゆ。

⑥ 次の二偈は Netti, p.14; p.71 に引用せらる。

⑦ 次の三偈は Netti, p.17 に引用せらる。

⑧ 本偈は S.II, p.47; p.49; 50; DhPA, III, p.228; JA, IV, p.260 等に引用せられ本偈前半は SnA, p.124 に引用せる。本偈に相當する偈は雜阿含三四五經(大正二・九五b)、大智度論卷三(大正二・五八・二・〇)に見え、大智度論にては波羅延經阿耆陀難よりの所引となせり。

⑨ 本偈は Netti, p.21 に引用せらる。

三 帝須彌勒學童所問^①

○○○、尊者帝須彌勒曰く、

誰がこの世間にて満足し居れるや、
誰に動(食)あることなきや、

誰が兩極端を知通して、

慧智もて〔端にも〕中にも著せざるや。

誰を大人と言ひたまふや、

誰が茲に縫(愛)を超えたりや。 (二)

一〇四一、世尊宣はく、彌勒よ、

諸欲中にて梵行を具し、

渴愛を離れて常に念あり、

〔法を〕察悟し寂滅せし比丘、

彼には動(貪)あることなし。

一〇四一、⁶彼は兩極端を知通して、

慧智もて〔端にも〕中にも著せず。

彼を大人と我は言ふ。

彼は茲に縫(愛)を超えたり。

(三)

帝須彌勒學童所問畢れり。

註① 註書にては本經を帝須彌勒經(Tissametteyya-sutta)となせり。本經各偈の語句の逐字的

解釋は Cūla-niddeśa (シャム本) PP.33-41 にあり。

- ② 以下四句は A.III.P. 399; P.401 に引用せられ、その相當偈は雜阿含一一六四經大正二·三一〇 b) に見ゆ。

- ③ 本偈に就ても前註に同じ。

四 富那迦學童所問

一〇四三、尊者富那迦曰く、

不動にして根本を見たる[佛]に

質問せんと欲して我は來れり。

何のために仙人や刹帝利や、

婆羅門[其他の]人々はこの世間にて

諸天神に廣く供養を營みしや、

世尊よ、我は尊師に問ひ奉る、

そを我に語りたまへ。

(二)

一〇四四、世尊宣はく、

あらゆる此等の仙人や刹帝利や

婆羅門[其他の人々がこの世間にて、
諸天神に廣く供養を營みしは、

富那迦よ、〔彼等は〕この〔人夫の〕狀態を希望しつゝ、
老死に依著して供養を營めるなり。 (三)

一〇四五、尊者富那迦曰く、

あらゆる此等の仙人や刹帝利や

婆羅門[其他の人々がこの世間にて、
諸天神に廣く供養を營みたるに、

世尊よ、彼等は供養路に於て不放逸にして
果して生や老を度れるや否や、我が尊よ、

世尊よ、我は尊師に問ふぞを我に語りたまへ。 (三)

一〇四六、世尊宣はく、富那迦よ、

〔彼等は〕希望し讚歎し熱望し獻供す。

利得に縁りて欲を熱望す。

彼等は供養を行ひて有貪に染せられ、

生や死を度りたらずと我は言ふ。

(四)

一〇四七、尊者富那迦曰く、

彼等は供養を行ひて若し[生老を]度らざりせば、
我が尊よ然らば果して天[界]・人界にて、

何人が供養によりて生や老をば、

我が尊よ度りたるや世尊よ、

我は尊師に問ふ、そを我に語りたまへ。

(五)

一〇四八、世尊宣はく、富那迦よ、

^④世間にて彼此の状態を察悟し、

世間にて何等の動(貪)あるなく、

寂靜無煙(忿)・無苦・無求なる人、

彼は生や老を度りたりと我は言ふ。

(六)

富那迦學童所問畢れり。

註① 註書には本經を富那迦經 (Punnaka-sutta) となせり。本經各偈の語句の逐字的解釋は Cūla-niddesa (シャム本) PP.42-66 にあり。

❷ 以下の三句は四五八偈の前半に同じ。

❸ 本偈は A.I, p.133; A.II, p.45f に引用せらる。本偈に相當する偈は雜阿含九八二經(大正二・二五五。)に見ゆ。

五 彌多求學童所問

一〇四九、尊者彌多求曰く、

世尊よ、尊師に問ふ、そを我に語りたまへ。

尊師を吠陀の達人・自己修習者なりと我は思ふ。

世間に於ける多種のあらゆる此等の苦は、
果して何處より生起せしものなりや。(二)

一〇五〇、世尊宣はく、彌多求よ、

苦の發生をば汝は我に問ふ。

知解に隨ひてそを汝に語らん。

世間に於けるあらゆる種々なる

苦は依^{ウタテ}を因縁として發生す。

(II)

「〇五、知らずして依を作る所の

愚鈍者は屢々苦に近づく。

故に苦の生起發生を隨觀する者は

〔如實に〕知りて依を作らざれ。

(三)

「〇五、我等が尊師に問ひし所を〔尊師は〕我等に告げたまへり。

〔更に〕他を尊師に我は問ふ冀はくばそを語りたまへ。

いかにして諸の賢者は暴流と生と老と、

愁と悲泣とをば超度するや。

牟尼よ、願はくばそを我に解説したまへ。

この法を尊師は如實に知りたまへばなり。

(四)

「〇五、世尊宣はく、彌多求よ、

現世に於て雜言なき

法を我は汝に告げん。

そを知り念ありて行じ、

世間の愛著を度るべし。

(五)

一〇四、大仙よ、その最上の法を

〔聞きて〕我は歡喜す。

そを知り念ありて行じ、

世間の愛著を度るべし。

一〇五、世尊宣はく、彌多求よ、

上下横及び中に於て

汝がよく知解するあらゆるもの、

此等に對する喜と執著と

識とを除棄し、有に住立せざれ。

一〇六、斯の如く〔無執著〕にして住し念あり、

不放逸にして行ずる比丘は我執を捨て、

生と老と愁と悲泣とを捨てて、

茲に知者は苦を捨斷すべし。

一〇七、大仙のこの語を我は歡喜す。

瞿曇よ、無依〔涅槃〕は善く告げられたり。

(八)

(七)

(六)

確かに世尊は苦を捨斷したまへり。

この法を尊師は如實に知りたまへばなり。 (九)

一〇六、牟尼よ、尊師が懇切に教誡したまふ所の

人々も苦を捨斷すべきや否や。

然らば龍象(佛)よ、近く至りて尊師を禮拜せん。

恐らく世尊は懇切に我を教誡したまふべし。 (一〇)

一〇七、^③婆羅門、吠陀の達人無所有者・

欲有への無著者と汝が知通する所の

彼は確かにこの暴流を度れり。

また彼岸に度り、〔心穀なく疑惑なし。〕

一〇八、またかの人は茲に知者にして吠陀に達し、

種々の有に對する著を遣去し、

彼は愛を離れ無苦無求なり。

彼は生や老を度れりと我は言ふ。

彌多求學童所問畢れり。

(一三)

註①註書にては本經を彌多求經(Mettagū-sutta)となせり。本經各偈の語句の逐字的解釋は

Cūla-niddesa(シャム本)pp.67-107にあり。

②この半偈及び次偈は七二八偈に同じ。

③本偈前半M.A.I, P.173に引用せらる。

④吠陀の達人とは須陀洹道等の四聖道の智を得たる人なり。

六 度多迦學童所問

〇六一、尊者度多迦曰く、

世尊よ我は尊師に問ふぞを我に語りたまへ。

大仙よ、尊師の語を我は期待す。

尊師の〔說法の〕音聲を聞きて、

自己の寂滅(涅槃)を學すべし。

(一)

〇六二、世尊宣はく、度多迦よ、

然らば茲(佛教)にて智あり、

念ありて熱心をなせ。

この我より音聲を聞きて、

自己の寂滅(涅槃)を學すべし。

(二)

一〇三、^②我は天と人の世界に於て

動作する無所有婆羅門(佛)を見る。

故に普眼者よ我は尊師を禮拜せん。

釋迦(佛)よ我を諸疑惑より度脱せしめたまへ。(三)

一〇四、^③度多迦よ我は世間にていかなる

疑惑者をも度脱せしむること能はず。

但だ汝自ら最勝の法を了知しつゝ

斯くして汝はこの暴流を度る。

一〇五、梵者よ悲愍して我が識知すべき所の

遠離法をば[我]に教授したまへ。

恰かも虛空の如く我は障礙なくして、

茲に寂靜無依にして行すべし。

一〇六、^④世尊宣はく、度多迦よ、

現世に於て雜言なき

(四)

(五)

寂靜を我は汝に告げん。

そを知り念ありて行じ、

世間の愛著を度るべし。

一〇六七、大仙よ、その最上の寂を

〔聞き〕我は歡喜す。

そを知り念ありて行じ、

世間の愛著を度るべし。

一〇六八、世尊宣はく、度多迦よ、

上下横及び中に於て、

汝がよく知解するあらゆるもの、

これ著なりと知り世間に於て、

種々の有への愛をなすこと勿れ。

度多迦學童所問畢れり。

(八)

註 ① 註書にては本經を度多迦經 (Dhotaka-sutta) となせり。本經各偈の語句の逐字的解釋は
Cūja-niddesa (シャム本) PP.108-125 にあり。

- ② 本偈及び次偈に相當する偈は大毘婆沙論卷七八(大正二七・四〇一b)、阿毘曇毘婆沙論卷四〇(大正二八・二九九b以下)、鞞婆沙論卷八(大正二八・四七二c)に見ゆ。
- ③ 本偈は MNd. p.32; KV.p.194 に引用せらる。成實論卷一(大正三二・一一四四b)には婆羅延經中佛言として本偈に相當する偈を引用す。
- ④ 能はず(na sahissami) 底本には na gamissāmi とあるも、今は異本に従ふ。 Cūla-nidessa にては na samissāmi とありて能はずと解釋せり。
- ⑤ 以下の三偈は Netti. p.166 に引用せらる。

七 優波私婆學童所問

1069、尊者優波私婆曰く、

「釋迦[佛]よ、我は獨り依止なくして、
大暴流を度ること能はず。」

普眼者よ、それに依止してこの暴流を
度るべき所縁を語りたまへ。」

(1)

1070、世尊宣はく、「優波私婆よ、

無所有[處]を観じつゝ念を具し、

「非有なり」とて〔無所有處に〕依り、
諸欲を捨断し、惑を離れ、愛の盡滅を
晝夜に觀察しつゝ、暴流を度れ。

一〇七一、尊者優波私婆曰く、

一切の諸欲を離貪し、

無所有處に依止して他を捨て、
第一の有想解脱を信解せし所の
彼は〔無所有處を〕退去せずして、
其處に住立すべきや否や。

(三)

一〇七二、世尊宣はく、優波私婆よ、

一切の諸欲を離貪し、

無所有處に依止して他を捨て、

第一の有想解脱を信解せし所の
彼は〔無所有處を〕退去せずして、
其處に住立すべし。

(四)

一〇七三、若し彼が無所有處を退去せずして、

其處に多年住立すべくんば、普眼者よ、

彼は解脱して其處にて清涼なるべきや。

〔又は斯の如き者の識は亡滅すべきや。〕（五）

一〇七四、世尊宣はく、優波私婆よ、

譬へば強風に吹き飛ばされたる火焔は、
滅沒に至りて〔火の〕數に入らざるが如く、

斯く牟尼は名身〔識〕を解脱して、

一〇七五、滅沒せる彼は或はこれ非有なりや、

或は常恆にして無病なりや。

牟尼よ、願はくばそを我に解説したまへ。

この法を尊師は如實に知りたまへばなり。〔七〕

一〇七六、世尊宣はく、優波私婆よ、

滅沒せる者には〔有非有の〕量あるなし。

それによりて彼を「有・非有と言ふべき所の

その煩惱は彼にあることなし。

一切の諸法が害破せられたる時、

一切の語路は害破せられ居れり。 (八)

優波私婆學童所問畢れり。

註① 註書にては本經を優波私婆經(Upasiva-sutta)とせり。本經各偈の語句の逐字的解釋は Cūla-niddesa (シヤム本) PP.126-141 にあり。

② 「滅すべきや」(cavetha) 底本及び Cūla-niddesa には bhavetha (存在すべきや)とあり。これにても意味通するも、今は一層明瞭ならしむる爲に異本に従ふ。

③ 本偈は D.A. II, p.514 に引用せらる。

④ 次の二偈に相當する偈は大智度論卷四(大正二五八五 b)に波羅延優波尸難よりの所引として出づ。

八 難陀學童所問

一〇七七、尊者難陀曰く、「世間に諸の牟尼あり」と、
このことをいかにして人々は言ふや。

智もて生起せる〔者〕を牟尼と言ふや、

或は活命もて生起せる〔牟尼と言ふや〕。(二)

一〇七八、難陀よ、茲に諸の善巧者は見によりても

聞によりても智によりても牟尼を説かず、

破煩惱軍して無苦無求にして

行する所の人々を牟尼と我は言ふ。

(三)

一〇七九、尊者難陀曰く、

あらゆる此等の〔外學婆羅門は、

見によりても聞によりても淨ありと説く、

戒や務めによりても淨ありと説く、

多種のものによりて淨ありと説く。

我が師、世尊よ、彼等は其處〔各自の見〕にて禁制して
行じつゝ、果して生や老を度りたるや否や。

世尊よ、我は尊師に問ふ。我にそを語りたまへ」。

(三)

一〇八〇、世尊宣はく、難陀よ、

あらゆる此等の沙門婆羅門は、

見によりても聞によりても淨ありと説く、

戒や務めによりても淨ありと説く、

多種のものによりて淨ありと説く。

假令彼等が其處各自の見にて禁制して

行ぜりとも彼等は生や老を度らざりきと我は言ふ。(四)

一〇八一、尊者難陀曰く、

あらゆる此等の沙門婆羅門は、

見によりても聞によりても淨ありと説く、

戒や務めによりても淨ありと説く、

多種のものによりても淨ありと説く。

若し牟尼よ、彼等は暴流を度り居らずと語りたまはゞ、

然らば我が尊よ、天界人界に於て、

果して誰が生や老を度りたるや。

世尊よ、我は尊師に問ふ。そを我に語りたまへ。(五)

一〇八二世尊宣はく、難陀よ。

私は「一切の沙門・婆羅門が生や老に
蓋はれ居れり」と言ふには非ず。

茲に見や聞や覺や戒や務めやを、
すべて捨て、多種のものをすべて捨て、
愛を遍知せる無漏の人々、

彼等を「暴流を度れる人々」と言ふ。

(六)

一〇八三、大仙のこの語を[聞きて]私は歡喜す。

瞿曇よ、無依[涅槃]は善く説かれたり。

茲に見や聞や覺や戒や務めをすべて
捨て、多種のものをすべて捨て、

愛を遍知せる無漏の人々、

彼等を「暴流を度れる者」と我も言ふ。

(七)

難陀學童所問畢れり。

註① 註にては本經を難陀經(Nanda-sutta)と呼べり。本經各偈の語句の逐字的解釋は Cula-

niddesa (シャム本) PP.142-160 に由る。

❷ 禁制しゃ (yatā)、底本には yathā あるが今は Cūla-niddesa に從ふ。

九 醍摩迦學童所問^①

1〇八四、尊者醯摩迦曰く、

瞿曇より前に人々が曾て我に、

「斯くありき斯くあるべし」と解説せしことは、

すべてこれ受け賣りの説なり、

すべてこれ思擇(妄想)を増すものなり。(II)

1〇八五、私はその彼等の説を喜ばざりき。

されど牟尼よ、尊師は我に

愛を害破する法を語りたまへ。

それを知りて念ありて行じ、

〔我等は〕世間の愛著を度るべし。 (III)

1〇八六、醯摩迦よ、茲に見聞覺識せし

諸の愛すべき色に對する

欲貪を除去する

不死なる涅槃の句あり。

(三)

一〇八七、これを了知し念ありて、

現世にてよく寂滅せし所の

人々は常に寂靜となり、

世間の愛著を度れるなり。』

(四)

醯摩迦學童所問畢れり。

註 ① 註書にては本經を醯摩迦經 (Hemaka-sutta) となせり。本經各偈の語句の逐字的解釋は Cula-niddesa (シャム本) PP.161-168 にあり。

② 本偈は一一三五偈に同じ。

一〇 刀提耶學童所問

一〇八八、尊者刀提耶曰く、

諸欲の住[在]することなく、

愛の存することなく、

且つ疑惑を度りたる所の人、

斯る人にはいかなる解脱ありや。 (二)

一〇八九、世尊宣はく、刀提耶よ、

諸欲の住(在)することなく、

愛の存することなく、

且つ疑惑を度りたる所の人、

斯る人には別に解脱あるなし。 (三)

一〇九〇、彼は無意樂者なりや、又は意樂者なりや、

彼は具慧者なりや、又は慧による計度者なりや。

釋迦(佛)よ、我は牟尼を如實に知らんと欲す。

普眼者よ、そを我に教説したまへ。 (三)

一〇九一、彼は無意樂者なり、彼は意樂者ならず。

彼は具慧者なり、慧による計度者に非ず。

刀提耶よ、無所有にして欲有に著せざる

牟尼をば斯の如しと識れ。

(四)

刀提耶學童所問畢れり。

註 ① 註書にては本經を刀提耶經(Todeyya-sutta)と呼べり。本經各偈の語句の逐字的解釋は Culā-niddesa(シャム本) pp.169-175 にある。

一一 劫波學童所問^①

10九二、尊者劫波曰く、

大怖畏ある暴流の生ぜし時、

湖沼(輪廻)の中に在りて、

老死に打勝たれたる人々の

洲渚(依止所)をば我が尊よ語りたまへ。

且つこの苦が更にあることなかるべき、

洲渚(依止所)をば尊師は我に説きたまへ。(1)

10九三、世尊宣はく、劫波よ、

大怖畏ある暴流の生ぜし時、

湖沼(輪廻)の中に在りて、

老死に打勝たれたる人々の

洲渚をば劫波よ、我は汝に語らん。

(二)

一〇四、所有なく取著なきは、

これ洲渚に他ならず。

我はこれを老と死の

滅盡せる涅槃と言ふ。

(三)

一〇五、これを了知し念ありて、

現世にて寂滅せし所の人々、

彼等は魔の力に隨ひ行かず。

彼等は魔の従者とならず」。

(四)

劫波學童所問畢れり

註① 註書には本經を劫波經(Kappa-sutta)と呼べり。本經各偈の語句の逐字的解釋は Cū=
ja-nidesa (シャム本) pp.176-186 にあり。

一二 閻都乾耳學童所問

一〇九六、尊者閻都乾耳曰く、

我は欲を欲せざる雄耆佛ありと聞きて、

暴流を越えたる佛に無欲を問ふべく來れり。

俱生眼者(佛)よ、寂靜の句を語りたまへ。

世尊よ、その如真を我に語りたまへ。

一〇九七、威光ある太陽が威光もて地に打勝つ如く、

世尊は諸欲に打勝ちて動作したまへばなり。

廣慧者よ少慧なる我に語りたまへ、

我が識知すべき所の法を、

——この世の生と老の捨斷を——。

(三)

一〇九八、世尊宣はく、閻都乾耳よ、

諸欲に對する貪求を調伏せよ。

出離をば安穩なりと見よ。

執取も捨離せらるべきものも

何物も汝に存せしむる勿れ。 (三)

一〇九九、前(過去)にある所のもの(煩惱)を涸渴せしめよ。

後(未來)なるは何物も汝にあらしめされ。

若し中(現在)なるを汝が執せざれば、

寂靜にして汝は行ずるならん。 (四)

一一〇〇、婆羅門よ、普く名と色とに對する

貪求を離れたる者には、

彼にはために死に左右せらるべき

所の諸漏あることなし。

(五)

闍都乾耳學童所問畢れり。

註①註書にては本經を闍都乾耳經 (Jatukāñci-sutta) と呼べり。本經各偈の語句の逐字的解説は Cūla-niddesa (シャム本) pp.187-195 にあり。

一三 跋陀羅浮陀學童所問

一一〇一、尊者跋陀羅浮陀曰く、

窟宅の捨渴愛の斷不動。

喜の捨暴流の度解脱。

計度の捨を善慧者に請問す。

龍象(佛)に聞きて「人々は茲より去らん。」(二)

二〇一、雄者よ、尊師の言説を期待しつゝ、

多くの人々が諸地方より來集せり。

尊師は願はくば彼等に解説したまへ。

尊師は法を如實に知りたまへばなり。」(三)

二〇三、世尊宣はく、「跋陀羅浮陀よ、

上下横及び中に於ける

一切の取愛を調伏せよ。

「人々が世間にて取するあらゆる

ものによりて魔は人に從へばなり。

二〇四、故に知解しつゝ比丘は念ありて、

一切世間にて何物をも取せざれ。

死の領域に愛著せるこの人々を

取ある有情なりと斯く觀じつゝ。

(四)

跋陀羅浮陀學童所問畢れり。

註①註書にては本經を跋陀羅浮陀經(Bhadravudha-sutta)と呼べり。本經各偈の語句の逐字的解釋は Culā-niddesa(シャム本) pp.197-206 に出づ。

一四 優陀耶學童所問^①

一一〇五尊者優陀耶曰く、

離塵し、靜慮して坐し所作已に辨じ、
無漏となり、一切諸法の

彼岸に達したまへる[世尊]に
問はんがために我は來れり。
無明の破壊(の状態)たる

了知解脫を語りたまへ。

一一〇六世尊宣はく、優陀耶よ、

(二)

愛欲と憂との

兩者の捨斷と、

昏沈の棄除と、

後悔の遮除と、

二〇七、捨と念との清淨と、

〔解脱の前行たる法思擇とを、

無明の破壊の状態たる

了知解脱なりと我は言ふ。

二〇八、^④何が世間を結縛するや。

何がこれを運行せしむるや。
何ものゝ捨斷によりて

涅槃ありと言はるゝや。

二〇九、喜が世間を結縛す。

尋がこれを運行せしむる。

渴愛の捨斷によりて、

(三)

(三)

(四)

涅槃ありと言はる。

(五)

一一〇、いかに念ありて行する者の
識が止滅するや。

世尊に問ふべく我等は來れり。
尊師のその語を聞かんと欲す。

(六)

一一一、内と外との受を

歡喜せざる者の

——斯の如く念ありて

行する者の——識は止滅す。

(七)

優陀耶學童所問畢れり。

註① 註書によるに本經は優陀耶經(Udaya-sutta)と呼ぶ。本經各偈の語句の逐字的解釋
は Cula-nidesa(シラム本) pp.207-220 にあり。

② 以下の二偈は A.I, p.134 に引用せらる。この二偈に相當する偈は雜阿含七八三經(大正
二・二五六 a)に見ゆ。

③ 以下の二偈は S.I, p.39 にも出づ。漢譯相當偈は雜阿含一〇一〇經(大正二・二六四 b)
別譯雜阿含二三七經(大正二・四五九 b)に見ゆ。

④以下の二偈に相當する偈は瑜伽師地論卷一九(大正三〇・三八六b以下)に見ゆ。

一五 布沙羅學童所問^①

二二三、尊者布沙羅曰く、

過去の出來事を說示し、

不動にして疑惑を斷じ、

一切諸法の彼岸の達人(佛)に、

問はんがために我は來れり。

二二三、^②色想有ることなく、

一切身をば捨斷し、

内にも外にも

何物もなしと見る者の

智を釋迦(佛)よ、我は問ひ奉る。

斯る人は〔更に〕いかに導かるべきや、

(二)

(二)

一切の識住をば

知通する如來は、

その〔有情の〕止住と

解脱と趣至とを知る。

(iii)

一一五、無所有處の發生を〔障礙なりと〕知り

喜〔無色食〕は結なりと〔知り〕、

斯の如く知通し已り、然して後、

其處〔無所有處〕を〔無常等と〕觀ず。

かの〔梵行に〕住したる婆羅門には、

この如實なる智あり。

(iv)

布沙羅學童所問畢れり。

註① 註書にては本經を布沙羅經 (Posāla sutta) と呼べり。本經各偈の語句の逐字的解釋は

Cūla-niddeśa (シャム本) pp.221-234 にあり。

② 本偈に相當する偈は大毘婆沙論卷四、卷一三七(大正二七·一七a、七〇六a)、阿毘曇毘婆沙論卷二(大正二八·一一c)、成實論卷一二(大正三二·三三九a)に見ゆ。

一六 莫伽羅闍學童所問

一一六 尊者莫伽羅闍曰く、

我先に二たび釋迦佛に問ひしに、
具眼者は我に解説したまはざりき。
されど第三回に及びて天仙は
解説したまふと我は聞けり。

一一七、この世界も他の世界も、

諸天を含めたる梵天界も、

名聲ある尊師瞿曇の

見を知通することなし。

一一八、斯の如く優れたる見者に、

問はんと欲して我は來れり。

いかに世間を觀察する者を

死王は見ることなきや。

(二)

(二)

(三)

一一九、^①莫伽羅闍よ常に念ありて

自我の見を害破し、

世間を空なりと觀察せよ。

斯くせば死を度るべし。

斯の如く世間を觀察する者を

死王は見ることなし。

(四)

莫伽羅闍學童所問畢れり。

註① 註書にては本經を莫伽羅闍經 (*Mogharāja-sutta*) と呼べり。本經各偈の語句の逐字的解

釋は *Cūla-niddesa* (シャム本) pp. 235-257 にあり。

② 知通することな^レ (*nābhijānati*) 底本には *nābhijānāni* であるも今は異本及び *Cūla-niddesa* に從ふ。

③ 本偈後半は *SnA*.P.588 に引用せらる。

④ 本偈は *KV*. P.64; *MNd*. P.438; *Netti*. P.7; *Vm*. P.656 に引用せらる。

一七 賓祇耶學童所問

一一〇、尊者賓祇耶曰く、

我は老いて力なく色衰へたり。

視力は明淨ならず聽力はよからず。

我をして中途にて蒙昧にして亡びしむる勿れ。

我が識知すべき法——此世に於ける

生と老との捨斷——をば語りたまへ。 (二)

一三二、世尊宣はく、賓祇耶よ、

色(肉體)あるが故に害を蒙るを見、

放逸なる人々は色(肉體)の故に病患あるを見る。

故に賓祇耶よ、汝は不放逸にして、

再有せざらんが爲に色を捨てよ。 (三)

一二三、四方と四維と上と下との

此等十方の[一切]世間に於て、

尊師に見られず、聞かれず、覺されず、

また識られざる何物もあるなし。

我が識知すべき法——此世に於ける

生と老との捨断——をば語りたまく。 (三)

一一三、世尊宣はく、賓祇耶よ、

渴愛に陥り、熱苦の生じ、老に

襲はれたる人々を汝は見つゝ(あり)。

故に賓祇耶よ、汝は不放逸にして、

再有せざらんが爲に渴愛を捨てよ。 (四)

賓祇耶學童所問畢れり。

註① 註にては本經は賓祇耶經 (piṇḍiya-sutta) とせらる。本經各偈の語句の逐字的解釋は Cūja-niddesa (シャム本) pp.258-266 なり。

一八 [十六學童所問の結語]

世尊は摩竭陀國の波沙那迦塔廟に住しつゝ、以上の諸偈を説きたまへり。〔婆和利の〕門弟十六人の婆羅門に請はれ問はれて質問に解説したまへり。若し一々の質問の義を知り法を知り已らば應に法隨法を行道すべし、應に老死の彼岸に到るべし。此等諸法は〔これを行道することによりて〕彼岸に到るべきものなるが故に、この法教

には彼岸道といふ名稱あり。

二三四、阿耆多と帝須彌勒と、

富那迦とまた彌多求と

度多迦と優波私婆と、

難陀とまた醯摩迦と、

二三五、刀提耶と劫波との兩人と、

賢者たる闍都乾耳と、

跋陀羅浮陀と優陀耶と、

及び布沙羅婆羅門と、

有慧者たる莫伽羅闍と、

及び賓祇耶大仙と、

二三六、彼等は行を具足せる

仙人たる佛に近づけり。

諸の微妙の質問をなして、

最勝なる佛に近づけり。

(三)

(二)

(一)

一二七 彼等に質問せられて、

佛は如實に解説したまへり。

諸問への解説によりて、牟尼は
諸婆羅門を満足せしめたまへり。

一二八、彼等は日種たる具眼の

佛によりて満足せしめられ、

優れたる慧者の許にて

「出家して梵行を行じたり。」

一二九、一々の間に對して、

佛によりて示されし如く、

その如くに行道せん者は、

此岸より彼岸に到るべし。

一二〇、最上の道を修習する者は、

此岸より彼岸に到るべし。

そは彼岸に到るべき道なり。

(四)

(五)

(六)

故に彼岸道と稱せらる。

(七)

一一三一、尊者賓祇耶婆和利に曰く、
彼岸道を我は隨誦せん。

離垢の廣智者世尊は、

所見の如く説きたまへり。

欲なく煩惱の藪なき主は、

何に因りてか虛妄を語りたまふべき。 (八)

一一三二、垢と癡とを捨斷したまひ、

慢と覆とを捨斷したまへる佛の、

讚歎を表はす言辭をば

いざ我は述べん。

一一三三、梵者よ、我は除闇者覺者

普眼者知世間邊者越度一切有者
無漏者捨斷一切苦者、佛といふ

(九)

切實なる名ある者に近坐せり。 (一〇)

(一)

一二三四、譬へば鳥が山林を捨てゝ、

果多き森林に止住するが如く、

斯く我も諸少見者を捨てゝ、

鵝鳥の如く大海洋に到達せり。

(一一)

一二三五、瞿曇より前に人々が曾て我に、

斯くありき斯くあるべしと解説せしことは、

すべてこれ受け賣りの説なり。

すべてこれ思擇(妄想)を増すものなり。 (一二)

一二三六、獨り煩惱の闇を除きて坐し、

彼[世尊]は[慧]光ありて光耀す。

瞿曇は廣慧者なり。

(一三)

一二三七、彼は現に見らるゝ即時に[果]ある、

渴愛を盡滅せしむる患惱なき

法を我に説示したまへり。

彼に譬ふべきもの決してなし。

(一四)

一三八、賓祇耶よ、汝は現に見らるゝ、

即時に[果]ある、渴愛を盡滅せしむる、
患惱なき法を汝に説示したまへる、

(一五)

一二三元、かの廣慧ある瞿曇より、

かの廣智ある瞿曇より、

須臾(の間)と雖も、

離れて住するや否や。

(一六)

一二四〇、婆羅門よ、我は現に見らるゝ、

即時に[果]ある、渴愛を盡滅せしむる、

患惱なき法を我に説示したまへる、

譬ふべきもの決してあることなき、

一二四一、かの廣慧ある瞿曇より、

(一七)

かの廣智ある瞿曇より、

須臾の間と雖も、

離れて住することなし。

(一八)

一一四二、婆羅門よ、不放逸にして晝夜に

我は意の眼もて彼世尊を見る。

〔彼を〕禮拜しつゝ夜を過す。

故に我是離れ住せずと思惟す。

(一九)

一一四三、〔我が〕信と喜と意と念との

此等四法は瞿曇の教より離れず。

廣慧者〔世尊〕が赴きたまふ方角に、

其處に必ずこの我是歸向し居れり。

(二〇)

一一四四、我が老いて力弱き身は、

それ故に彼處に至ることなし。

〔されど〕思惟をやりて常に赴く。

婆羅門よ、我が意は彼〔佛〕と結合し居ればなり。(二一)

一二四五、戰慄しつゝ汚泥中に臥し、

洲渚より洲渚へと我は漂流せり。

時に我は暴流を度りたる

無漏なる正覺者に見えたり。

一二五六、譬へば薄迦利や跋陀羅浮陀や

阿邏毘瞿曇が信解せし如く、

斯の如く賓祇耶よ汝も信解せよ。

〔然らば汝は死の領域の彼岸に至らん。〕

一二五七、〔右の〕牟尼の語を聞きてより、

この佛教を益々我は信樂す。

〔煩惱の蔽を開き、〔心裁なく、

應辯を具したまへる正覺者は、

一二五八、天を超えたる〔法〕を知通し、

彼此の〔超天となる〕一切を知りたまへり。
師〔世尊〕は疑問ある人々の諸質問に

(二三)

(二四)

(二五)

終りを告げしめ[彼等をして疑問なしと]公言せしめたまふ。(一五)

一一四九、譬ふべきもの決してあるなき

不搖木動(の涅槃)に

確かに我は至るならん。茲に我に疑あるなし。

心信解せる我を斯の如しと認受したまへ。

(二六)

彼岸道品畢れり。

八誦分の量の聖典たる經集畢れり。

註①この第十八經の經題は底本にも註書にも存せざるも、今は *Cūla-niddeśa* の表題たる *Sola=samāṇavakapāñha-nigama* (十六學童所問の結語)に從へり。以下各語句の逐字的解釋は *Cūla-niddeśa* (シヤム本) PP.268-316 にあり。

②門弟(*paricāraka*)、世尊の門弟の意味に解するも可なり。

③以下の二偈は一〇〇六偈の後半、一〇〇七偈、一〇〇八偈に同じ。

④以下の七偈は十六人の學童が佛の說法によりて佛教に出家し、久しからずして阿羅漢果を得たる後、十六人中の最年長者たる寶祇耶が十六人の代表として以前の師たる婆和利の居所たる南方に歸りて佛が出世したまひしことを婆和利に復命する言葉なり。

⑤本偈は一〇八四偈に同じ。M.A.I.P.35に引用せらる。

- ⑥薄迦利(Vakkali)が信解によりて得道せしことは、Dhp.A. IV, p.118; A.A.I,p.248ff 等参照。
跋陀羅浮陀に關しては前の第十三經參照。
- ⑦直譯は“八誦分の量の聖典によりて經集畢れり”。

天宮事經（ギマーナ・ワットウ）

彼の世尊、應供等正覺者に歸命し奉る。

第一 椅子品

一 椅子天宮

汝の椅子は黃金造りにして殊妙なり、意の如く速かに欲する處に行く。裝飾し、華鬘をつけ、美衣を纏へる者よ、汝は恰も雷光が雲の頂に輝くが如く、輝く。何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享け又可意なる財寶汝に生ずるや。

女神よ、大威神ある者よ我汝に問ふ汝人間たりし時、如何なる福業をか爲したるや、何によりてか汝是の如き光輝ありや、又汝の容色は十方に輝くや、と。目連に問はれたるその女神は悦びに満ち問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

- 五 我人中にありて人間たりし時見知らぬ人に小さき座を與へ問訊し合掌して與ふ限りの布施をなしたりき。
- 六 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け又可意なる財寶我に生ずるなり。
- 七 比丘よ大威神ある者よ我汝に告ぐ、我人間たりし時爲せるこの福業によりて、我是の如き光輝あり又我が容色は十方に輝くなりと。
- 二 椅子天宮
- 一 汝の椅子は琉璃造りにして殊妙なり、意の如く速かに欲する處に行く。裝飾し、華鬘をつけ、美衣を纏へる者よ、汝は恰も雷光が雲の頂に輝くが如く輝く。
- 二 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享け又可意なる財寶汝に生ずるや。
- 三 女神よ、大威神ある者よ我汝に問ふ、汝人間たりし時如何なる福業をか爲したるや、何によりてか汝是の如き光輝ありや又汝の容色は十方に輝くや、ど。
- 四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

五

我人中にありて人間たりし時、見知らぬ人に小さき座を與へ問訊し、合掌し、而して能ふ限りの布施をなしたりき。

六

それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け又可意なる財寶我に生ずるなり。

七

比丘よ大威神ある者よ我汝に告ぐ、我人間たりし時、爲せる此の福業によりて我の如き光輝あり又我が容色は十方に輝くなり、と。

三 椅子天宮

一

汝の椅子は黄金造りにして殊妙なり、意の如く速かに欲する處に行く。裝飾し、華鬘をつけ、美衣を纏へる者よ、汝は恰も雷光が雲の頂に輝くが如く輝く。何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。

三

女神よ大威神ある者よ我汝に問ふ、汝人間たりし時、如何なる福業をか爲したるや、何によりてか汝は是の如き光輝ありや、又汝の容色は十方に輝くや、と。四目連に問はれたるその女神は悦びに満ち問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

五 我是の如き光輝あるはごは我が僅少の〔善〕業の果なり。我前生に人界に於て、人中にありて人間たりし時、
六 無垢清淨無濁の比丘見たり我喜びて自らの手にて彼に椅子を布施したり。
七 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我此處に善果を享け又可意なる財寶我に生ずるなり。
八 比丘よ、大威神ある者よ我汝に告ぐ、我人間たりし時爲せる此の福業によりて我是の如き光輝あり、又我が容色は十方に輝くなり、と。

四 椅子天宮

一 汝の椅子は瑠璃造りにして殊妙なり、意の如く速かに欲する處に行く。裝飾し、華鬘をつけ、美衣を纏へる者よ、汝は恰も雷光が雲の頂に輝くが如く、輝く。
二 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。
三 女神よ、大威神ある者よ我汝に問ふ汝人間たりし時、如何なる福業をか爲したるや、何によりてか汝は是の如き光輝ありや、又汝の容色は十方に輝くや、と。
四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち問を問はれて説明せり、こは如何な

る業の果なるやを。

五 我是の如き光輝あるは、こは我が僅少の〔善〕業の果なり。我前生に人界に於て、人中にありて人間たりし時、

六 無垢清淨無濁の比丘見たり、我喜びて自らの手にて彼に椅子を布施したり。
七 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又可意なる財寶我に生ずるなり。

八 比丘よ、大威神ある者よ我汝に告ぐ、我人間たりし時、爲せる此の〔福業〕によりて我是の如き光輝あり、又我が容色は十方に輝くなり、と。

五 象天宮

一 汝の象犬象は種々の寶石にて飾られ、美しく、力強く、迅速にして虛空を行く。

二 蓮華の色をなし蓮葉の眼をなし、紅蓮華、青蓮華の華鬘に輝き、全身に蓮葉、花瓣をつけ、金色の蓮華の華鬘をつけ、

三 蓮華の撤かれたる道、蓮華の葉にて裝飾されたる道を力強く、快き音を立てつづ、搖ぐことなく、一定の歩調にて象は行く。

四 象の歩むや、金の鈴は快き響をたて其の音、五支樂器の音の如く聞ゆ。

五 其の象の體には美しき布をかけて飾り、其の容色は多くの若き天女の群に優れて輝く。

六 こは汝の布施の果なりや、或は戒の果なりや、將た合掌業の果なりや。問はれてそを我に語れ。

七 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

八 德を具足し、靜慮し、靜慮を樂しみ、寂靜なる人を見て衣を以て飾れる、布にて被へる椅子を布施したり。

九 我喜びて自らの手にて遍ねく座を半蓮華にて飾り、葉を以て被へり。

一〇 我〔今〕是の如くなるは此の善業の果なり。我諸天に恭敬、尊重、供養せらる。

一一 誰にても正解脱せる人、寂靜なる人、梵行を修する人、彼に喜びて座を布施せる者は、恰も我的如く、歡喜せん。

一二 それ故に己の〔利益〕を望みて大なる果報を願ふ者は、最後身を持する〔應供者〕に座を布施すべしと。

六 船天宮

- 一 女人よ汝は黄金にて被はれたる船に乗りて立つ。蓮池に漕ぎ出でて、蓮華を手もて折る。
- 二 汝の住居は重閣にして、室は鉤合よく區劃され、光り輝き、遍ねく四方を照す。
- 三 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。
- 四 女神よ、大威神ある者よ、我汝に問ふ、汝人間たりし時、如何なる福業をか爲したるや、何によりてか汝是の如き光輝ありや、又汝の容色は十方に輝くやと。
- 五 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。
- 六 我前生に人界に於て、人中において人間たりし時、渴き疲れたる比丘を見て、起ちて飲む水與へたり。
- 七 疲れ渴きたる人に起ちて飲む水與ふる者は誰にても彼に多くの華ある多くの蓮華ある、寒冷なる河あるべし、
- 八 彼に到る處に河流れ寒冷なる水、砂敷ける河、菴婆娑羅、チラカチャンプ、花咲けるウッダーラカバタリの樹木、

九 彼に是の如き種々の地域を具足せる、いと美しき最勝の天宮あり、是彼の業の果報なり。福業をなせる者は是の如きを得ん。

一〇 我が住居は重閣にして室は鈎合よく區劃され、光り輝き遍ねく四方を照す。

一一 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又可意なる財寶我に生ずるなり。

一二 比丘よ、大威神ある者よ我汝に告ぐ、我人間たりし時爲せる此の福業によりて我是の如き光輝あり、又我が容色は十方に輝くなり、と。

七 船天宮

一 女人よ、汝は黄金にて被はれたる船に乗りて立つ。汝は蓮池に漕ぎ出でて蓮華を手もて折る。

二 汝の住居は重閣にして室は鈎合よく區劃され、光り輝き遍ねく四方を照す。何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。

三 四 女神よ、大威神ある者よ、我汝に問ふ、汝人間たりし時、如何なる福業をか爲したるや、何によりてか汝は是の如き光輝ありや、又汝の容色は十分に輝くや、と。

五

目連に問はれたるその女神は悦びに満ち問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

六

我前生に人界に於て、人中において人間たりし時、渴き疲れたる比丘を見て、起ちて飲む水與へたり。

七

疲れ渴きたる人に起ちて飲む水與ふる者は誰にても彼に、多くの華ある、多くの蓮華ある、寒冷なる河あるべし、

八

彼に到る處に河流れ寒冷なる水、砂敷ける河、菴婆、娑羅、チラカ、チャンブ、花咲けるウッダラカ、バータリの樹木、

九

彼に是の如き種々の地域を具足せる、いと美しき最勝の天宮あり、是、彼の業の果報なり。福業を爲せるものは是の如き(果報)を得べし。

一〇

それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我此處に善果を享け、又可意なる財寶我に生ずるなり。

一一

比丘よ、大威神ある者よ、我汝に告ぐ、我人間たりし時、爲せる此の福業によりて是の如き光輝あり、又我が容色は十方に輝くなり、と。

八 船天宮

- 一 女人よ汝は黃金にて被はれたる船に乗りて立つ。汝は蓮池に漕ぎ出でて蓮華を手もて折る。
- 二 汝の住居は重閣にして室は鉤合よく區劃され光り輝き遍ねく四方を照す。
- 三 何によりてか汝に是の如き容色あり何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。
- 四 女神よ大威神ある者よ我汝に問ふ汝人たりし時、如何なる福業をか爲したるや、何によりてか汝是の如き光輝ありや、又汝の容色は十方に輝くや、と。
- 五 等正覺者に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こゝは如何なる業の果なるやを。
- 六 我前生に人界に於て人中にありて人間たりし時、渴き疲れたる比丘を見て起ちて飲む水與へたり。
- 七 疲れ渴きたる人に起ちて飲む水與ふる者は誰にても彼に、多くの華ある多くの蓮華ある寒冷なる河あるべし、
- 八 彼に到る處に河流れ寒冷なる水、砂敷ける河、菴婆、娑羅、チラカチャンブ、花咲けるウツダラカ、バーテリの樹木、

九

彼に是の如き種々の地域を具足せる、いと美しき最勝の天宮あり、是、彼の業の果報なり。福業を爲せるものは是の如き(果報)を得べし。

一〇

我が住居は重閣にして室は鉤合よく區劃され、光り輝き遍ねく四方を照す。

一一

それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又可意なる財寶我に生ずるなり。

一二

それによりて我是の如き光輝あり、我が容色は十方に輝くなり、と。是、此の業の果報なり、佛は起ちて水を飲みたまへり、と。

九 燐火天宮

一

女神よ、汝は勝れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ、恰も曉の明星の如く。何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享

け又可意なる財寶汝に生ずるや。

二

女神よ、何によりてか汝は無垢なる光輝ありて[他に]勝れて輝くや、何によりてか汝の全肢體を以て十方に輝くや。

三

女神よ、大威神ある者よ、我汝に問ふ汝人間たりし時、如何なる福業をか爲したるや、と。

五 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

六 我前生に人界に於て人中にありて人間たりし時、暗き闇夜燈火を要する時燈火を與へたり。

七 暗き闇夜燈火を要する時燈火を與ふる者は誰にても、彼はデヨーティラサといへる、多くの華あり多くの蓮華ある天宮に生ず。

八 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又可意なる財寶我に生ずるなり。

九 それによりて我は無垢なる光耀ありて〔他に〕勝れて輝くなり。それによりて我が全肢體を以て十方に輝くなり。

一〇 比丘よ、大威神ある者よ、我汝に告ぐ、我人間たりし時爲せる此の福業によりて是の如き光輝あり、又我が容色は十方に輝くなり、と。

一〇 胡麻供養天宮

一 女神よ、汝は勝れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ、恰も曉の明星の如く。

二 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享

け、又可意なる財寶汝に生ずるや。

三 女神よ、大威神ある者よ、我汝に問ふ、汝人間たりし時、如何なる福業をか爲したるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、又汝の容色は是の如く十方に輝くや、と。

四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

五 我前生に人界に於て、人中にありて人間たりし時、無垢、清淨、無濁の佛を見たり。六 我佛に近づきて應施者なる佛に喜びて自らの手にて、胡麻を供養したり。七 何らの欲望も抱かずして、

八 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又可意なる財寶我に生ずるなり。

比丘よ、大威神ある者よ、我汝に告ぐ、我人間たりし時、爲せる此の福業によりて我是の如き光輝あり、又我が容色は十方に輝くなり、と。

一一 貞淑女天宮

一天上の蒼鷺、天上の孔雀、又水鳥は快き聲もて鳴き、郭公は飛び舞ふ。此の天宮

は花にて飾られて美しく、種々に莊嚴され、男女侍せり。

二 女神よ、大威神ある者よ汝は其處に坐し、神通を行ひ、種々に身を現じ、而して此等汝の天女等は等しく舞ひ、歌ひ、愉しましむ。

三 大威神ある者よ、汝は神通を逮得せり。汝人間たりし時、如何なる福業をか爲したるや、何によりてか汝是の如き光輝ありや、又汝の容色は十方に輝くやど。四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

五 我人中にありて人間たりし時、他心なき貞淑なる妻なりき。母と子をば保護し我は怒れる時にも粗惡語をなさゞりき。

六 真理に住立し、妄語を捨て、布施を欣び、同情の念をもち、心喜び、恭敬して食物、飲物の大布施をなしたりき。

七 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又可意なる財寶我に生ずるなり。

八 比丘よ、大威神ある者よ我汝に告ぐ、我人間たりし時、爲せる此の福業によりて是の如き光輝あり、又我が容色は十方に輝くなり、と。

一一 第二貞淑女天宮

- 一 琉璃の柱ある、美しく輝ける、種々に莊嚴されたる天宮に上りて、女神よ、大神力者よ、汝は其處に坐し、種々に神通を行ふ。
- 二 而して汝の此等天女は等しく舞ひ歌ひ、愉しましむ。大威神ある者よ、汝は神通を逮得せり。汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝ありや、汝の容色は十方に輝くや、と。
- 三 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。
- 四 我人中にありて人間たりし時、具眼者(佛)の優婆夷なりき。殺生を離れ、世間に於て與へられざるものを取ることを避け、
- 五 飲酒せず、妄語をなさず、自己の妻を以て満足せり。心喜び、恭敬して食物、飲物の大布施をなしたりき。
- 六 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又可意なる財寶我に生ずるなり。
- 七 比丘よ、大威神ある者よ、我汝に告ぐ、我人間たりし時、爲せる此の福業によりて

是の如き光輝あり、又我が容色は十方に輝くなり、と。

一三 嫁婦天宮

一 女神よ汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も暁の明星の如し。

二 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處天宮に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。

三 女神よ、大威神ある者よ、汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、又汝の容色は十方に輝くや、と。

四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

五 我人中にありて人間たりし時、我嫁婦なりけるが、舅の家にて、無垢、清淨、無濁の比丘見たり。

六 我喜びて自らの手にて彼に菓子を與へたり。己が配前の半分を與へて歡喜園にて愉しむなり。

七 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又

可意なる財寶我に生ずるなり。

八 それによりて我是の如き光輝あり、我が容色は十方に輝くなり、と。

一四 嫁婦天宮

一 女神よ汝は優れたる容色によりて十方を照らしつゝ立つ。恰も曉の明星の如し。

二 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。

三 女神よ大威神ある者よ我汝に問ふ汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝は是の如き光輝あり、汝の容色は十方に輝くや、と。

四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

五 我人中にありて人間たりし時、我嫁婦なりけるが、舅の家にて、無垢、清淨、無濁なる比丘見たり。

六 我喜びて自らの手にて彼に飯團食の配前をば施したり。飯團食を施して歡喜園にて愉しむなり。

七 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け又可意なる財寶我に生ずるなり。

八 それによりて我是の如き光輝あり、我が容色は十方に輝くなりと。

一五 蔵多羅女天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も曉の明星の如し。

二 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處(天宮)に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。

三 女神よ、大威神ある者よ我汝に問ふ、汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、又、汝の容色は十方に輝くや、ど。

四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

五 我家に住める時、嫉妬なく、慳貪なく、惱害なかりき。怒ることなく、夫に從順にして布薩には常に不放逸なりき。

六 半月の第十四日と第十五日と第八日、又神變月に八支をよく具せる布薩に住

したり。

七

常に戒守り、自制をなし、食を頌ちて我天宮に住するなり。

八

殺生を離れ、妄語を制し、偷盜と邪行と飲酒を離れ、

九

五學處を喜び、聖諦に通じ、名聲ある具眼者瞿曇の優婆夷なりき。

一〇

その我自己的戒と名聲によりて聲望あり、自らの福業の果を享け、無病、安樂な

り。

一一

それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又可意なる財寶我に生ずるなり。

一二

比丘よ、大威神ある者よ我汝に告ぐ、我人間たりし時、爲せる此の福業によりて我是の如き光輝あり、我が容色は十方に輝くなり、と。

一三

尊者よ、汝は我が名に於て世尊の御足に頂禮せんことを、世尊よ、欝多羅と名づくる優婆夷は世尊の御足に頂禮すと言ひて。世尊は我に一沙門果を授記せらるべきは不思議ならず。——世尊は彼に一來果を授記したまへり、と。

一六 師利摩女天宮

一 最上に裝飾せる汝の馬は車を牽きて眞直に力強く速かに空中を行く。汝に

五百の車が作られ、馬は馭者に鞭たれて汝を運ぶ。

二 装飾せる汝は最勝の車に立ち、煌やく火の如く輝き照す。纖美の者よ、無上の麗容の者よ、我汝に問ふ、汝は如何なる天群より無上正等覺に近づきたるや。

三 最上の欲樂具足者中の無上にして、天神の化作しては楽しむかの化樂天群より、天女の望む容姿をなして無上正等覺者に歸命せんため此處に來れるなり。

四

汝は前生此の世に如何なる善業をかなしたるや、何によりてか汝は無量の名聲あり、樂增長せるや、又汝の神通力は最上にして空中を行き、汝の容色は十方に輝くや。

五

汝は諸天に圍繞せられ尊敬せらる、女神よ、汝は何處より死して善趣に來れるや、而して汝は誰の教に遵へるや、汝佛の弟子ならば、我に告げよ。

六

山間に建てられたる最勝の都城(王舍城)にて具祥者最勝の王(頻毘婆羅)の侍女にして舞踊、音樂に最も巧みにして師利摩(具祥)とて王舍城に知られたり。

七

諸仙中の牛王、調伏者なる佛は我に説きたまへり、無常なる集諦と苦諦と無爲にして常住なる苦の滅諦と邪曲なく端直、安穩なる此の道諦とを。

八

私は無爲にして不死の道、無上なる如來の教法を聞きて戒を守ること最も勝れたり。我人中の最勝なる佛の說きたまへる法に住立せり。

九

無上なる如來によりて說かれたる無爲にして無垢なる道を知るや、直ちに奢摩多定に入り、我にその最上決定性が得られたり。

一〇

我殊勝にして不死なる道を得、〔三寶に〕對して一向〔信〕あり、聖諦現觀によりて勝進を得、疑惑なく、多くの人に供養せられ、多大の歡喜を享けたり。

一一

我是の如く不死の味を味へる女神にして最勝者如來の弟子なり。法を見、初果に住立し、預流となり再び惡趣に行くことなし。

一二

その我は無上正等覺者を禮拜せんがために來れるなり。清淨にして美を樂しめる諸比丘、靜安なる沙門の集會に歸命せんがために〔來れるなり〕、彼等は具祥法王に尊敬せらる。

一三

牟尼を見て我慶喜し満足し、最勝の應調人御者、渴愛を斷じ、美を喜び、調伏者、最勝利益を以て〔有情を〕饒益する如來を我禮拜するなり、と。

註① 底本に *amatadasamhi* とあるも、註釋により *amataras' anhi* と讀む。

一七 髮結女天宮

一 この天宮は美しく、輝き琉璃の柱あり、常によく造られ、金色の樹木遍ねく被へり、此の所は我が業果の所生なり。

二 其處に此等百千の前生の天女生まる。汝は自己の業によりて此處に生まれ、名聲あり、汝前生の女神は輝きつゝ立つ。

三 怡も月が星に勝れて輝く如く、星王(月)が星群に勝れて輝くが如く、その如く汝は此の天女の群に勝れて輝く。

四 無上の麗容のものよ汝は何處より此處に來り、汝此の我が世界に生れたるや、梵天も帝釋と共になる三十三天も皆汝の出現を喜ばず。

五 帝釋よ、汝はこを我に問ふ、何處より死して汝は此の世に來れるやと。迦尸國に波羅奈と名づくる都あり、我前生、そこにて髪結の女なりき。

六 佛と法と僧伽とに心喜び、一向に歸依し、疑心なく、學處を破らず、果を得、等覺の法に決定し、退轉なし。

七 ^① 我等はその如き汝を隨喜し、汝のよく來れるを隨喜す。汝は法と名聲によりて輝く。汝は佛と法と僧伽とに心喜び、一向に歸依し、疑心なく、學處を破らず、果を得、等覺の法に決定し、退轉なし。

註❶この帝釋所説の一偈底本になし、註釋によりて補ふ。

五椅子三船、燈火胡麻供養、二夫二嫁婦、鬚多羅、師利摩、髮結、これをもつて品と稱せらる。

第一女人天宮品

第一チツタラター園品

一八 下婢天宮

一 恰も天主帝釋の如く汝は女人の群に扈從せられて美しきチツタラター園を遍ねく逍遙す、十方を照しつゝ恰も曉の明星の如し。

二 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。

三 女神よ、大威神ある者よ、我汝に問ふ汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、又汝の容色は十方に輝くやと。

四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

五 我人中にありて人間たりし時、或る良家の下婢なりけるが名聲ある具眼者瞿曇の優婆夷なりき。

六 身の壞するも厭はず、業處の修習に厭くことなく、かの如者(佛)の教に於てそ
の我精進せり。

七 五學處は吉祥、靜安なり、佛の宣示したまへる聖道は寂靜、無縛、正直なり。

八 見よ、精進の果を。女人にして是を逮得し、自在者帝釋天の仲間となれり。

九 六萬の樂器は我を愉しましめ、アーランバ、ガッガマ、ビーマ、サードウワー、ディン、
バサンサヤ、

一〇 ボッカラ、ズバツサ(等の樂器)、又箜篌を彈ずる女人、ナンダー、ズナンダー、ソーナ
ナデインナー、ズチンビカ！、

一一 アランブサー、ミッサケーシー、ブンダリーカー、エーニバツサー、ズバツサー、ズ
バツダー、ムドウカーヴディー等の女人、

一二 此等や又他の天女中の一層優れたる者、彼等は隨時に我に近づきて言ふ。

一三、一四　いざ我等は舞ひ歌ひ汝を愉しましめんと。

この無憂、歡喜、愉悦の三十三天の大園は、こゝは福業をなさゞりし者には得られず、福業をなせる者のみに得らる。福業をなさゞりし者には此世にも他世にも幸福ではなく、福業をなせる者には此世にも他世にも幸福あり。

一五 三十三天に共住せんと望む者は多くの善業をなすべきなり、福業をなせる者は財寶を得て天上に於て愉しむなりと。

一九 ラクマード女天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も暁の明星の如し。

二一五 何によりてか汝に是の如き容色あり〔一四二に同じ〕

六 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

七 我が住居はケーヴッタ門を出づる所にあり、其處に遊行せる大仙の弟子に
八 我飯粥、野菜、鹽粥を與へたり、彼等心正しき人に心喜びて。
九 半月の第十四日と第十五日と第八日、又神變月に八支をよく具足せる布薩に

住したり。

一〇 常に戒守り、自制をなし、食を頒ちて我天宮に住するなり。

一一 殺生を離れ、妄語を制し、偷盜と邪行と飲酒を離れ、

一二 五學處を喜び、聖諦に通じ、名聲ある具眼者瞿曇の優婆夷なりき。

一三、一四 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：又我が容色は十方に輝く
なり。

一五 尊者よ、我が名に於て世尊の御足に頂禮せんことを、世尊よ、ラクマードと名づく
る優婆夷は世尊の御足に頂禮す」と言ひて。世尊は我に一沙門果を授記せら
るべきことは不思議ならず。——世尊は彼に一來果を授記したまへりと。

二〇 飯泡施者天宮

一 汝受食のために遊行し、沈黙して立ちてありし時、貧窮、孤獨にして他人の家に
頼れる女人、

二 かの女人は喜びて自分の手にて汝に飯の泡汁を與へたり、かの女人は人身を
捨てゝ如何なる趣にか行きたるやと。

三 我受食のために遊行し、沈黙して立ちてありし時、貧窮、孤獨にして他人の家に

頼れる女人、

かの女人は喜びて自らの手にて飯の泡汁を與へたり。かの女人は人身を捨てゝ解脱し、此の世を去りぬ。

五化樂天と名づくる大神通力ある天あり、其處にて飯の泡汁の施者なるかの女人は幸福にして愉しめり。

六あゝ孤獨の女人によりて迦葉に對して布施はよくなされたり。げに他人より受けたる施物によりてなされたる布施の大果あることや。

七全肢美麗にして、夫にとりて無上の麗容の婦人が轉輪聖王の大妃とならんも、此の飯の泡汁の布施に對しては十六分の一にも價せず。

八百の金環、百の馬、百頭馬車、耳環をつけ、美衣を纏へる百千の乙女も此の飯汁の布施に對しては十六分の一にも價せず。

九轍の如き牙ある巨大なる百頭の雪山象、金の頸飾をつけたる象、黄金造りの住居も此の飯の泡汁の布施に對しては十六分の一にも價せず。

一〇此の世に於て四大洲を統治するも、この飯の泡汁の布施に對しては十六分の一にも價せずと。

二一 旃陀羅女天宮

一 旃陀羅の娘よ、汝名聲ある瞿曇の足に禮拜せよ、第七仙(瞿曇佛)は汝を哀愍して立てり。

二 應供、如者に對して心喜ばしめよ、速かに合掌禮拜せよ、汝の生命は短しと。

三 心を修習し、最後身を持せる人に促がされて旃陀羅の娘は名聲ある瞿曇の足に禮拜せり。

四 此の旃陀羅の娘が闇中に光を與ふる等覺者に歸命して合掌して立てるを牛が殺したり。

五 漏盡き、垢を離れ、欲なく獨り阿蘭若に閑居し坐せる(目連)に神通力を逮得せる女神は近づきて〔言へり〕、我等汝を禮拜す、雄者よ、大威神ある者よと。

六 美しく、輝き、大名聲あり、種々に嚴飾したる〔女神〕は天女の群に圍繞せられて天宮より降りて〔かく言へり〕、汝は誰なるや、美しき女神よ、汝我を禮拜す。

七 尊者よ、我は汝雄者によりて〔世尊に禮拜することを〕促がされたる旃陀羅の娘なり、我名聲ある應供瞿曇の御足に禮拜したり、その我足に禮拜して後、旃陀羅

の胎より去りて全て祥福なる天宮……歎喜園に生まれたり。

九

千人の天女は我に扈從して立てり、その彼女等より我容色と名聲によりて勝れたり。

一〇

尊者よ、我多善業をなし、正智正念なり、尊者よ、我此の世に於て大悲の牟尼(目連)に禮拜せんがために來れるなりと。

一一

かく言ひて、恩を知り、恩を想ふ旃陀羅の娘は阿羅漢の足に禮拜して其處に沒したりと。

二二 バツディツティカーリ天宮

一 汝は青色、黃色、黒色、深紅色、赤色、種々なる色の蓮華に取囲まれ、

一二

曼陀羅華の華鬘を頭につけたり。他の天女の群には此等のものなし、賢き者よ。

三

名聲あるものよ、汝は何によりてか三十三天群に生まれたるや、女神よ、問はれて汝は語れ、こは如何なる業の果なるやを。

四

バツディツティカーリ(幸運女)優婆夷とて我はキンビラーにて知られたり。信仰あり、戒を具足し、常に布施を喜び、

五 衣服、飲食、床座、燈具を心正しき人に心喜びて與へたり。

六 半月の第十四日と第十五日と第八日、又神變月に八支をよく具足せる布薩に住したり。

七 常に戒を守り、刹生を離れ、妄語を制し、

八 偷盜と邪行と飲酒を離れ、五學處を喜び、聖諦に通じ、
九 具眼者(佛)の優婆夷なりき。不放逸に住し、善行を表はし、善行をなし、此の世より死して自光者となり、歡喜園にて逍遙するなり。

一〇 比丘よ、最勝の利益を以て有情を哀愍する者、苦行せる大牟尼に對し、我は食を供養せり。善行を表はし、善行をなし、此の世より死して自光者となり、歡喜園にて逍遙するなり。

一一 限りなき幸福を齋す八支布薩に常に我住したり、善行を表はし、善行をなし、此の世より死して自光者となり、歡喜園にて逍遙するなりと。

二三 ソーナディンナ—女天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も曉の明星の如し。

二 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處に善果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。

三 女神よ、大威神ある者よ、我汝に問ふ、汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、又、汝の容色は十方に輝くやと。

四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、とは如何なる業の果なるやを。

五 我は那爛陀にてソーナディンナー優婆夷とて知られたり。信仰あり、戒を具足し、常に布施を喜び、

六 衣服、飲食、床座、燈具を心正しき人に心喜びて與へたり。

七 八月の第十四日と第十五日と第八日、又神變月に八支をよく具足せる布薩に住したり。

八 常に戒を守り、刹生を離れ、妄語を制し、

九 偷盜と邪行と飲酒を離れ、五學處を喜び、聖諦に通じ、名聲ある具眼者瞿曇の優婆夷なりき。

一〇、一一 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くな

りと。

二四 ウボーサターレ女天宮

一 女神よ汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も曉の明星の如し。

二一四 何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：

五 我は沙枳多^{サケタ}にてウボーサターレ優婆夷とて知られたり。信仰あり、戒を具足し、常に布施を喜び、

六 衣服、飲食、床座、燈具を心正しき人に心喜びて與へたり。

七 半月の第十四日と第十五日と第八日、又神變月に八支をよく具足せる布薩に住したり。

八 常に戒守り、殺生を離れ、妄語を制し、

九 偷盜と邪行と飲酒を離れ、五學處を喜び、聖諦に通じ名聲ある瞿曇の優婆夷なりき。

一〇、一一 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり。

一二 絶えず歡喜園のことを聞きて我に願望生じ、心をそこに向け、歡喜園に生まれたり。

一三 我は日種たる佛の言に遵はざりき。心を卑俗に向けて後に後悔せり。

一四 ウボーサターよ、汝は幾何の間、此處天宮に住するや女神よ、問はれて汝語れもし年壽を知るならば。

一五 三億六萬年、此處に住立したる後、大牟尼よ、此處より去りて人間の仲間となるべし。

一六 ウボーサターよ、汝恐るゝ勿れ、汝は等覺者によりて授記せられたり。汝は預流となりて勝進せり、汝に〔一切の〕惡趣は捨離せられたりと。

二五 スニッダ一女天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も曉の明星の如し。

二一四 何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：

五 我は王舍城にてスニッダ一優婆夷とて知られたり。信仰あり、戒を具足し、常に布施を喜び、

六 衣服飲食、床座燈具を心正しき人に心喜びて與へたり。

七 半月の第十四日と第十五日と第八日、又神變月に八支をよく具足せる布薩に住したり。

八 常に戒守り、殺生を離れ、妄語を制し、

九 偷盜と邪行と飲酒を離れ、五學處を喜び、聖諦に通じ、名聲ある具眼者瞿曇の優婆夷なりき。

一〇、一一 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなりと。

二六 スディンナーラ女天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も曉の明星の如し。

二一一四 何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：

五 我は王舍城にてスディンナーラ優婆夷とて知られたり。信仰あり、戒を具足し、常に布施を喜び、

六 衣服、飲食、床座、燈具を心正しき人に心喜びて與へたり。

七 半月の第十四日と第十五日と第八日、又神變月に八支をよく具足せる布薩に住したり。

八 常に戒守り、殺生を離れ妄語を制し、

九 偷盜と邪行と飲酒を離れ、五學處を喜び、聖諦に通じ、名聲ある具眼者瞿曇の優婆夷なりき。

一〇、一一 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなりと。

二七 食施女天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も曉の明星の如し。

二、三四 何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：

五 我前生、人界に於て人中にありて人間たりし時、無垢、清淨、無濁の佛を見たり。

六 我喜びて自らの手にて彼に施をなしたりき。

七、八 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなりと。

二八 第二食施女天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も暁の明星の如し。

二一四 何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：

五 我前生人界に於て人中にありて人間たりし時、

六 無垢、清淨、無濁の比丘見たり。我喜びて自らの手にて施をなしたりき。

七 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなりと。

攝頌

下婢とラクマードと飯泡施者、旃陀羅女とスニッダーと二食施者これをもつて品と稱せらる。

第二女人天宮品

第一誦品

第三 畫度樹品

二九 優天宮

一　二　三

汝の名聲は優れたり、汝の容色は十方を照し、天女、美飾せる天子等は舞ひ、歌ひ、女神よ、彼等は汝を尊敬して喜び、樂しむ、麗容のものよ、汝のこの天宮は美し。汝は此等一切の欲具足者の主となり、善き生を享け、天群の中に愉しむ。女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやを、と。

我人中にありて人間たりし時、無戒の家の嫁婦なりき。

無信仰にして慳貪なるものゝ中にありて信仰あり、戒を具足せり。受食のために遊行せる人に菓子を與へたり。

六　五　四　三

その時、我姑に告げぬ、沙門は此處に來れり、我喜びて自らの手にて彼に菓子を與へたりと。

七　六　五　四

姑はかく呵責せり、嫁よ、汝は從順ならず、我に問ふことを欲せざりき、沙門には我こそ施をなさんと。

八　七　六　五

それより姑は我を怒り、棒にて我を打ちたりき。我が肩を折り、我を傷けて、長く生きること能はざるべしと言へり。

九　八　七　六

その我是身壊して後、解脱し、此の世より死して三十三天の仲間に生まれたり。

一〇、一一　それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くな

り、と。

三〇 甘蔗天宮

一 汝は天と地とを照して、日月の如く(他に)勝れて輝く、吉祥を以て、容色を以て、名聲を以て、光輝を以て、恰も梵天が帝釋と俱なる三十三天に勝れて輝くが如し。

二 蓮華の華鬘をつけ、寶石の飾をつけ、黃金に似たる肌を有し、裝飾し、最上の衣をつけたるものよ、我汝に問ふ、輝く女神よ、我を禮拜する汝は誰なりや。

三 汝前生、人間たりし時、前世に於て如何なる業をか自らなしたるや、布施と戒と調御をよく行じたるや、名聲あるものよ、何によりてか汝は善趣に身を享けたるや、女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるをや、と。

四 尊者は此の村に於て受食のために我が家に近づきたり。それより我は卿に心喜び、無比の喜もて甘蔗の一片與へたり。

五 後に姑は我に訊ねぬ嫁よ、甘蔗を何處に捨てたるや、と。我捨てたるに非ず、又食べたるに非ず、寂靜なる比丘に我自ら與へたるなり、と。

六 姑は我を呵責せり、こは汝の所有なりや、或は我が所有なりや、と。椅子を取りて我を打ちたりき。其處より死して我は女神となれり。

七

かゝる善業が我によりてなされ、而して幸福なる業果を自ら享け、諸天と共に五種の欲を楽しみ、喜べり。

八
かゝる善業が我によりてなされ、而して幸福なる業果を自ら享け、帝釋天に守護せられ、三十三天に守護せられて五種の欲を満足せり。

九
是の如く福業の果は少からず、甘蔗の施によりて我に大果報あり、諸天と共に我五種の欲を楽しみ、喜べり。

一〇
是の如き福業の果は少からず、甘蔗の施によりて我に大光輝あり、帝釋天に守護せられ、三十三天に守護せられて歡喜園にあり、恰も千眼ある帝釋の如し。
一一
尊者よ、哀愍者、智者なる卿に近づきて我禮拜せり。而して善業を問ひ、それより卿に甘蔗の一片を與へたり、心喜び、無比の喜もて、と。

三一 臥臺天宮

一
摩尼と黃金を以て飾られたる最上の臥臺の上に、花を以て莊飾されたる臥具の上に、女神よ、大威神あるものよ、汝は種々に神通を行ひて其處に坐す。
二
而して汝の此等の天女は等しく舞ひ、歌ひ、愉しましむ。大威神ある者よ、汝は神通を逮得せり。汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりて

か汝是の如き光輝あり、又汝の容色は十方に輝くや、と。

三 我人中にありて人間たりし時、富貴の家の嫁婦なりき。怒ることなく、夫に從順にして布薩には不放逸なりき。

四 人間たりし時、若くして惡行なく、心喜び、夫を満足せしめ、夜晝欣喜して暮し、前生に於て持戒者なりき。

五 殺生を離れ、不盜にして清淨なる身體あり、清淨なる梵行をなし、飲酒せず、妄語をなさず、學處を圓滿せり。

六 半月の第十四日と第十五日と第八日、又神變月に我喜びて

七 八支具足の布薩に如法に行じて住し、此の勝れたる聖なる八支を具足せる、善にして樂果ある布薩を受持して住せり。

八 夫には善美、從順にして前生には善逝(佛)の弟子なりき。存命中にかゝる善業をなして殊勝なる天界の幸福を享けたり。

九 身壞して後、神通を逮得し、善趣に來れるなり。樂しき天宮の最勝高閣に於て天女の群に圍繞され、自光者となり、天群は天宮に來りたる長壽なる我を歡ぶと。

三二 ラター天女天宮

- 一 ラターとサッヂャーとバヅラーとアッチムティーとスターとの最勝の姉妹
女神は吉祥者、最勝王毘沙門天の娘なり。法の徳を以て輝き照らす。
- 二 此處に五人の女は水浴せんとて、寒冷なる水、睡蓮の咲く静安なる河に行けり。
其處にて彼等は浴し樂しみ舞ひ、歌ふ。スターはラターに言へり。
- 三 蓮華の華鬘をつけ、華飾をつけ、黄金に似たる肌を有し、紅の眼をし、大空の如く
美しく、長壽のものよ、我汝に問ふ、何によりてか汝の名聲は得られ、
- 四 祥福なるものよ、何によりてか汝は夫に寵愛せられ、容姿勝れて美しきや、歌舞
に巧なるものよ、問はれて汝我に語れと。
- 五 我人中にありて人間たりし時、富貴の家の嫁婦なりき。忿ることなく夫に從
順にして布薩には不放逸なりき。
- 六 我人間たりし時、若くして惡行なく、心喜び、夫を満足せしめ、夫の兄弟、舅、僕、婢を
も満足せしめたり。その家にて我が名聲は得られぬ。
- 七 かくて我はその善業によりて壽命と容色と幸福と力との四事に勝れたり。
我少からぬ遊戯と愉悦を享受するなりと。

八 「他の三妹曰く」このラターの語れる所を聞きたるに、彼女は我等が問ひたる所を説明せり。我等女人にとりては夫は優れたる歸趣なり、而して女神は更に優れたる歸趣なり。

九

我等は皆貞淑なる妻たるやう夫に對する務めをなさん、我等は皆夫に對する務めをなして此のラターの語れる果を得るなり。

一〇

恰も山林を逍遙する獅子が山に住して他の四足の小さき野獸を力もて殺し、嗜みてその肉を食ふが如く、

一一

その如く信ある聖女弟子は此の世に於て夫に信頼し、夫に従順にして、忿を殺し慳食を抑へて務めをなし、天上に於て愉しむなり、と。

一三 グツティラ天宮

一

私は七絃の甘美にして愉快なる^(樂技)を彼に教へたり。彼舞臺にて^{(競演せん}とて今我を招じたり。コーシヤ(帝釋)よ、我が助けとなれ、と。

二

我汝の助けとならん我は師を尊ぶもの弟子は^(師たる)汝に勝つことなからん、師よ、汝は弟子に勝つべし、と。

三

天神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も曉の明星の如

し。

四 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處に善果を享け、又、可意なる財寶汝に生ずるや。

五 女神よ、大威神あるものよ、我汝に問ふ、汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか是の如き光輝ありや、又、汝の容色は十方を照すや、と。目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

六 七 最上の衣服施したる女なる我は天子、天女の中で最も優れたり。かゝる悲愍施者なる我は樂しき天上に到りて女神となれり。

八 見よ、その如き我の天宮を。我は欲するゝがまゝの容色をなす天女なり、千人の天女中最勝なり。見よ、福業の果を。

九、一〇 それによりて我に是の如き容色あり；乃至；我が容色は十方に輝くなりと。

他の四天宮は衣服施者天宮と同様に廣説さるべきなり。（三一、一〇は最上
の華施者、最上の香施者、最上の果實施者、最上の味施者が衣服施者の代りに四度繰返さる）。

四三一四五 女神よ、汝は優れたる容色によりて：乃至：汝の容色は十方に輝くや、
と。

四六 目連に問はれたるかの女神は悦びに満ち：乃至：こは如何なる業の果なる
やを。

四七 我五指香印を迦葉佛の塔に捧げたり。

四八 見よ、その如き我の天宮を。我は欲するまゝの容色をなす女天なり、千人の天
女の中最も勝れたり。見よ福業の果報を。

四九、五〇 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くな
り、と。

他の四天宮は五指香印天宮と同様に廣説さるべきなり。（四三一五〇は五
度繰返さる四七偈の代りに次の偈あり）。

一 我は道行く比丘と比丘尼を見、彼等の〔説ける〕法を聞きて一日布薩に住したり。

五四

二 水中に立ち、比丘に喜びて水を與へたり。

三 我は強暴にして忿り易く、粗暴なる舅姑に怨むことなく仕へ、自己の戒に不放

逸にして、

五五、五六

四
他人の用をなし、家事に多忙なる婢なりき。忿なく、過慢なく、自己の所得を頒
ちたり。

六一

五
我は受食のために遊行する比丘に乳と飯とを與へたり。

六
次の二十五天宮は乳施者天宮と同様に廣説さるべきなり。

女神よ、汝は優れたる容色によりて：乃至：汝の容色は十方に輝く。目連に
問はれたるかの女神は悦びに満ち：乃至：そは如何なる業の果なるやをど。

九四

一
我は受食のために遊行する比丘に砂糖を與へたり……

二
……甘蕉の一片……

三
……鎮頭迦の實……

四
……カツカールの實……

五
……エーラールカ……

六
……ワッリーアの果實……

七
……バールサカの實……

一一〇	九	八	手を暖めるもの
一一一	〇	一	一握りの野菜
一一二	一	一	一握りの花
一一三	根	一	根
一一四	油菓子	一	一握りの紺婆
一一五	菴婆の汁	一	體を縛るもの
一一六	肩を縛るもの	一	肩を縛るもの
一一七	鐵の板	一	鐵の板
一一八	扇	一	扇
一一九	多羅葉	一	多羅葉
一一〇	孔雀の羽の扇	二	孔雀の羽の扇
一一一	傘	二	履

二三 ……菓子……

二四 ……甘い食物……

二五 ……糖菓……

見よ、その如き我の天宮を。我は欲するがまゝの容色をなす天女なり、千人の天女の中、最も勝れたり、見よ、福業の果報を。
それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり。

一八九、一九〇

我の所に善く來れり、今此處はよく照らされ、臥したるものも起き上れり、欲するがまゝの容色をなす天女を見たればなり。

一九一

私は彼等の説ける法を聞きて多くの善業をなしたり、布施により、寂靜行により、調御により、自制により、その我は、行きて悲しむことなき處に趣くべし、ど。

一九二

三四 光輝天宮

一名聲あるものよ、汝は容色と名聲によりて輝き、三十三天の一切の天に勝れて輝く。

二 我は汝を見たることなし。汝如何なる天群より來りたるや、名を以て我に語れと。

三 パッダ一よ、我はスパッダ一なり、前生人界にありて汝と夫を同じくせる者にして而も汝の妹なりき。

四 その我は身壞して後解脱し、其處より死して化樂天の仲間に生まれたりと。
多くの善業をなしたる有情は化樂天に行く。スパッダ一よ、汝は彼等に自己の生を告ぐるならん。

六 名聲あるものよ、汝は如何にして、如何なる理由によりて、何人に教へられて、如何なる種類の施により、戒禁により、

七 是の如き勝れたる廣大なる名聲を得たるや、女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやをと。

八 我前生に於て布施に價する僧伽のために喜びて自らの手にて八の團食與へたり。

九、一〇 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなりと。

- 一一 我は汝よりも更に多くの自制あり梵行を行ずる比丘に喜びて自らの手にて飲食を供養したり。
- 一二 汝よりも更に多くの比丘に與へて我は汝よりも更に卑き天に生まれたり。汝は如何にしてより少く與へて、而も勝れたる廣大なる名聲を得たるや、女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやをと。
- 一三 前生に於て意修習の比丘我が友人なりき。我はレーヴタと共に八人の比丘を食に招じたり。
- 一四 彼レーヴタは我が利益を念ひ、哀愍して、僧伽に布施せよと我に告げ、我は彼の言に従ひぬ。(彼は言へり)、
- 一五 僧伽に捧げられたるかの布施は無限の功德に住立するなり。人々に汝の施したるは汝に大果なしとて。
- 一六 今我は僧伽に與へられなば大果あるを知り、その我人界に行きて乞へる言に應じ易く、貪を離れ、再三不放逸に僧伽に布施したり、と。
- 一七 (帝釋の言く)バッダーよ此の女神は誰なるや、汝と談り、容色によりて三十三天の一切の天に勝れて輝く、と。

一八 天主帝釋よ、彼女は前生人界にありて人間たりし時我と夫を同じくせる者にして而も我が妹なりき。僧伽に布施をなして福業をなせる彼女は輝くなりと。

一九 尊者よ、僧伽に施されたる布施は無限の功德に住立するなり、この理によりて汝の前生の妹が汝に勝れて輝くなりと。

二〇 佛靈鷲山に在せる時我布施の果報を問へり、何處に施さば大果ありや。

二一 供犠をなし福を求め再生のための福を行ずる者は何處に施さば大果ありやと。

二二 佛は有情各自の業果を知りて何處に施さば大果ありやを我に説きたまへり。

二三 四向、四果に住立せる此の僧伽は心正しく慧と戒と定あり。

二四 供犠をなし福を求め再生のための福を行ずる者は此の僧伽に施さば大果あり。

二五 實に僧伽の功德は廣大にして無限なること大海の如く、大洋の如し。彼等は最勝にして人中の雄者たる聲聞なり、彼等法を説く處、其處に光明を與ふるなり。

二六

僧伽のために布施をなす人は正しく施し、正しく捧げ、正しく獻じたるなり、僧伽のために布施をなさば、其の布施は無限の功德に住立し大果あり、世間解(佛)によりて稱讚せらる。

二七

是の如き福業を隨念し感激して世に處する人は慳貪の垢を根より除き、非難さることなく天界に至るなり、と。

三五 セーサワティー女天宮

一 此の天宮は水精、金銀の網に被はれ、種々雜色の地面あり、快く、住むに願はしく、

巧に造られ門樓を具へ、金沙の敷かれたるを我見たり。

二 此の汝の天宮は空にある太陽の如く十方に輝き、闇を拂ふ秋の太陽の如く輝

く、夜空に火の輝くが如し。

三 空中に表はれたる稻妻の眼を眩ますが如く此の天宮は輝く。此の天宮は琵

琶、太鼓、饒、銅羅が響き殷盛なること、善見大王の部、インダ城の如くなりき。

四 此の汝の天宮は紅蓮、黄蓮、青蓮、睡蓮、ヨーティカーハ、バンディカーハ、アノーデ

ヤカーハあり、花咲ける娑羅樹あり、花咲ける無憂樹あり、種々廣大なる好き香ある樹木あり。

- 五 サララララブヂャは、花咲けるクサカ草、垂れ下れる蔓草と入り混る。名聲あるものよ、汝に摩尼の羅網に似たる快き蓮池造られたり。
- 六 水中に生じたるものは花咲き、陸上に生じたるものは樹となり、人的のもの、非人的のもの、天的のもの、汝の住居に生じたり。
- 七 こは如何なる調御の果報なるや、如何なる業の果によりて此處に生まれたるや、汝如何にして此の天宮に來りたるや、順次に汝語れ、濃き睫毛のものよ、と。
- 八 蒼鷺孔雀群居し、天の水鳥、白鳥戯れ、鴨、郭公鳥の鳥嬉戯し、
- 九 種々枝の繁茂せる、種々の花咲ける種々の木、バータリー、ヂャンブ、アソーカの樹木あるかゝる天宮に、我如何にして來れるやを汝に語らん、尊者よ聞け。
- 一〇 優れたる摩揭陀國の東方にナーラカと名づくる村あり、尊者よ、我前生、其處に嫁婦なりき。セーサヴァティーとて知られたり。
- 一一 我其處にて義と法と善を積める、人天に恭敬せられたる宏大寂滅無量なるウバティッサに喜びて花を以て被ひたり。
- 一二 最勝の趣に到れる最後身をもてる優れたる仙に供養して我は人身を捨てゝ此處三十三天に來り、此處に住するなりと。

三六 マツリカ一女天宮

- 一 金色の衣をつけ、金色の幢幡を立て、金色に嚴飾せるものよ美しき、最上の金色に飾られたる汝は輝く。
- 二 黄金の腕環をつけ、黄金の飾にて嚴飾し、黄金の羅網にて被はれ、種々の寶石の華鬟をつけたるものよ、汝は誰なるや。
- 三 華鬟は黄金造り、珊瑚造り、眞珠造り、琉璃造り、車渠造りにして珊瑚と摩尼にて飾られ、
- 四 あるものは孔雀の好聲の如く、あるものは白鳥の好聲の如く、あるものは迦陵頻伽鳥の好聲の如く、其等〔華鬟〕の音は快く響き、五支樂器の音の如し。
- 五 汝の美しき車は種々なる寶にて飾られ、種々の色ある部分にて釣合よく造られて輝く。
- 六 金色のものよ、その車の中に汝立ちて其の場所を輝かす。女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやを。
- 七 摩尼、黄金にて飾られたる黄金の羅網、黄金の羅網にて被ひたる眞珠を積重ねたるを、我圓寂せる、無量〔功德〕の瞿曇に喜びて供養せり。

八 佛の稱讚したまへる善業を我^{アタマ}なして無憂、幸福、無病にして愉しむなり、と。

註●底本の *kakambukāyura* を註釋により *kā kambukāyura* と讀む。

三七 廣目天宮

一 汝は誰なりや廣目のものよ、汝は女群に扈從せられて美しきチッタラター園を遍ねく逍遙す。

二 三十三天の諸天が此の園に入り來り、車駕と共に一切の美しきものが其處に來れる時、

三 汝の其處に到り、園に逍遙せる時、汝の身は美しく見ゆ。汝の是の如き姿は何によるや、女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやをと。

四 天主帝釋よ、如何なる業によりて我が姿と歸趣と神通と威神とあるやをブリンダダよ聞け。

五 我は美しき王舍城にスナンダーと名づくる優婆夷なりき。信仰あり、戒を具足し、常に布施を喜び、

六 衣服、飲食、床座、燈具を心正しき人に心喜びて與へたり。

七 半月の第十四日と第十五日と第八日、又、神變月に八支をよく具足せる布薩に

住したり、常に戒守り、

殺生を離れ、妄語を制し、偷盜と邪行と飲酒を離れ、

五學處を喜び、聖諦に通じ、名聲ある具眼者瞿曇の優婆夷なりき。

一〇 その我に親族あり、常に華鬘を持來れり、そを我悉く世尊の塔に常に捧げたり。

一一 我布薩に行きては喜びて自らの手にて華鬘、香、塗香を塔に捧げたり。

一二 我が姿と歸趣と神通と威神とは華鬘を捧げたるその業によるなり、天主帝釋よ。

一三 持戒者たりしこともこれ程の果を結ばず、天主帝釋よ、我が望む所は一來とならんことなり、と。

三八 畫度樹天宮

一 畫度樹、コーギラーラ樹の華鬘をつけたる、愛すべく、可意なる者よ、汝は天の華鬘を結びつゝ歌ひ愉しむ。

二 その汝の舞ふ時、全肢躰より耳に快く、可意なる天音響く。

三 その汝の舞ふ時、全肢躰より香好く、可意なる天香漾ふ。

四 躯にて旋回する時、辯髪の飾はその音五支樂器の音の如く響く。

五 裝飾は風に搖れ風によりて振動し、その音は五支樂器の言の如く響く。
 六 その汝の頭にある華鬘は香好く、可意なり。香は十方に漾ひ、曼珠沙華の如し。
 七 此の好香を嗅ぎ、人界のものにあらざる色を汝は見る。女神よ、問はれて汝語
 れ、こは如何なる業の果なるやを、と。

八 輝ける、色と香ある無憂樹の華鬘をば我佛に捧げたり。

九 佛の稱讚したまへる善業を我なして無憂、幸福、無病にして愉しむなり、と。

攝頌

優、甘蕉、臥臺、ラター、グッティラ、光輝、セーサヅティー、マッリカー、廣目、畫度樹、こ
 れをもつて品と稱せらる。

第三畫度樹品

第四 深紅品

三九 深紅天宮

一 金砂を敷きたる深紅の天宮に、巧に奏せられたる五支樂器を汝は楽しむ。
 二 巧に造られたる寶石造りの此の天宮より降りて汝は四季花咲くサーラの園

に入来る。

三 女神よ、汝サーラの樹下に立たばそれゝのサーラの大樹は花を垂れて汝に捧ぐ。

四 サーラの園は風に搖れ、緩やかに搖れ、香は十方に漾ふ、曼樹沙華の如し。

五 汝は其の好香を嗅ぎ、人界のものにあらざる色を見る、女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやを、ど。

六 我人中にあるて人間たりし時、貴族の家の下婢なりしが、佛の坐したまへるを見て、サーラの花にて被へり。

七 我は此のサーラの花の、巧になされたる裝飾を喜びて自らの手にて佛に捧げたり。

八 佛の稱讚したまへる善業を我なして無憂、幸福、無病にして愈しむなりと。

四〇 極光天宮

一 輝ける最勝の容色あり、美しき衣をつけ、大神通あり、月の如く美しき肢體あるものよ、美しき女神よ、我を禮拜する汝は誰なるや。

二 汝の臥臺は高價にして種々なる寶石を鏤められて輝き、汝の坐せる處を照ら

す。恰も歡喜園に於ける天主帝釋の如し。

三 尊者よ、汝前生、如何なる善業をなしたるや。女神よ、如何なる業(をなしてそ)の果報を天界に於て享くるや。女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやを、ど。

四 尊者よ、汝受食のために遊行せる時、我華鬘と砂糖を與へたり。その業の果報を我天界に於て享くるなり。

五 尊者よ、我に悔あり、亡失あり、不幸あり、即ち我は法王の善説したまへる法を聞かざりき。

六 尊者よ、汝に告ぐ哀愍せらるべき人に法王の善説したまへる法を教示せよ、ど。

七 佛寶と法寶と僧寶とに信ある人は、彼等は壽命と名聲と吉祥と光輝と容色とを以て

八 我より勝れて輝かん。彼等他の諸天は我より勝れ、我より大なる神通を有するなり、ど。

四一 象天宮

一 裝飾したる汝は摩尼、黃金にて飾られ、黃金の羅網にて被はれたる雄大にして

美裝せる象に乗りて空中を此處に來れり。

二 象の二本の牙には、清水あり、花咲ける蓮池が巧に造作され、蓮華の間には樂團が奏樂し、此等美女は舞へり。

三 大威神ある者よ、汝は神通を逮得せり。汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、汝の容色は十方に輝くや、ど。

四 波羅奈に於て我佛に近づき、一雙の衣を捧げたり、御足に頂禮して地に坐し、喜びて合掌したり。

五 黄金に似たる肌の佛は我に説きたまへり。無常なる集諦と苦諦と無爲にして常住なる苦滅諦と道諦とを説きたまへり。それによりて我四諦を解了せり。

六 我短命にして死し、そこより去りて、三十三天に生まれ、名聲あり、帝釋の妃の隨一となり、ヤスツタラ（最上名聲）とて四方に聞えたり、と。

四二 アローマー女天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も暁の明星の如し。

二二三 何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：汝の容色は十方に輝くや、ど。
四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち：乃至：こは如何なる業の果なる
やを。

五 波羅奈に於て日種なる佛に我喜びて自らの手にて乾飯を捧げたりき。
六 見よ、無鹽の乾飯布施の果を。幸福なるアローマーを見ば誰か福業なさぐら
ん。

七、八 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、ど。

四三 酸粥施者天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて：乃至：恰も曉の明星の如し。
二、三 何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：汝の容色は十方に輝くや、ど。
四 目連に問はれたるその女神は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。
五 我はアンダカギンダに於て日種なる佛に棗の汁にて煮油を加へ、
六 胡椒と蒜と草根とを混じたる酸粥を心正しき人に心喜びて與へたり。
七 全肢美麗にして、夫にとりても無上の麗容の婦人が轉輪聖王の大妃とならん
も、此の酸粥の布施に對しては十六分の一にも價せず。

八

百の金環、百の馬、百頭馬車、耳環をつけ、美衣を纏へる百千の乙女も此の酸粥の布施に對しては十六分の一にも價せず。

九

轍の如き牙ある巨大なる百頭の雪山象、金の頸環をつけたる象、黄金造りの住居も此の酸粥の布施に對しては十六分の一にも價せず。

一〇

此の世に於て四大州を統治するも、此の酸粥の布施に對しては十六分の一にも價せずと。

四四 精舍天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて：乃至：恰も曉の明星の如し。

二 その汝の舞ふ時、全肢體より耳に快く、可意なる天音響く。

三 その汝の舞ふ時、全肢體より香好く、可意なる天香漾ふ。

四 體にて旋回する時、辯髪の飾はその音は五支樂器の音の如く響く。

五 裝飾は風に搖れ、風によりて振動し、その音は五支樂器の音の如く響く。

六 その汝の頭にある華鬘は香好く、可意なり、香は十方に漾ひ、曼珠沙華の如し。

七 此の好香を鳴ぎ、人界のものにあらざる色を汝は見る。女神よ、問はれて汝は語れ、こは如何なる業の果なるやをど。

八

尊者よ、舍衛城の我が友人は僧伽のために大なる精舍を建立せり。其處にて
私はその家と可意なる僧伽を見て、喜びて隨喜せり。

九

その我の清淨なる隨喜によりて未曾有の美しき天宮は得られたり。そは遍
ねく十六由旬あり。我が福業の神通によりて空を行く。

一〇

我が住居は重閣にして室は釣合よく區劃され、輝きつゝ遍ねく百由旬を照す。
其處にある我が蓮池は魚棲み、清水あり、清淨にして金沙敷かれ、

一一

種々の紅蓮充ち、白蓮滿ち、微風に搖られて好香を漾はせり。

一二

チャンブ、バナサ、ターラ、ナーリケーラの園林あり、住居の中に種々の樹木生じ、
延び、

一四

種々の樂音響き、天女の群さまめく。我を夢に見るも樂しからん。

一五

是の如く遍ねく照らす未曾有の美しき天宮は我が業によりて生じたるなり、
げに福業をなすぞよし。

一六

その汝の清淨なる隨喜によりて未曾有の美しき天宮は得られたり。布施を
なしたる女人は何處に生まるゝや、その歸趣を汝語れと。

七

尊者よ、我が友人は僧伽のために大なる精舍を建立せり。法を了得したる彼

女は施をなして化樂天に生まれ、

一八 かの〔化樂天主〕スニンミタの妃となれり。彼女の業の果報は不可思議なり。

尊者よ、彼女が何處に生れたるやを汝の問へるをば、我異なく答へたり。

一九 然らば他の人にも教示せよ受けがたき人身を受けたる者は僧伽のために喜びて布施をなし、又心喜びて法を聞け。

二〇 黃金に似たる肌ある、梵音を有せる、道の主は道を説きたまへり。僧伽のため

に喜びて布施をなせ、供養のなさるゝ處には大果ありど。

二一 善人の稱讚する此等八輩四雙の人は、彼等善逝の弟子は布施に價ひす。此等の人々に施さば大果あり。

二二 四向四果に住せる人、此の僧伽は心正しく、慧と戒と定とあり、

二三 供犠をなし、福業を求める、再生のための福をなす者は僧伽に施さば大果あり。

二四 實に僧伽の功德は廣大にして無限なること大海の如く、大洋の如し。彼等は最勝にして人中の雄者たる聲聞なり、彼等法を説く處、其處に光明を與ふるなり。

二五 僧伽のために布施をなす人は正しく施し、正しく捧げ、正しく獻じたるなり、僧

伽のため布施をなさば其の布施は無限の功德に住立し大果あり世間解(佛)によりて稱讚せらる。

二六⁴² 是の如き福業を隨念し感激して世に處する人は慳貪の垢を根より除き非難

されることなく天界に至るなり、ど。

第二誦品

四五 四女人天宮

一一三 女神よ汝は優れたる容色によりて：乃至：汝の容色は十方に輝くや、ど。
四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち：乃至：こは如何なる業の果なる
やをと。

五 我一束の青きインディーヴラ華を受食のために遊行する比丘に與へたり。

エーシカ國の高樓ある優れたる美しきベンナカタの町にて。

六、七 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、ど。

八一一 女神よ汝は優れたる容色によりて：乃至：こは如何なる業の果なるや
を。

一二 我一束の青蓮を受食のために遊行する比丘に與へたり。エーシカ國の高樓

ある優れたる美しきベンナカタの町にて。

一三、一四 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、ど。

一五、一八 女神よ、汝は優れたる容色によりて：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

一九 湖水に生じたる白き根の葉繁れる紅蓮を我受食のために遊行する比丘に與へたり。エーシカ國の高樓ある、優れたる、美しきベンナカタの町にて。

二〇、二一 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、ど。

二二、二五 女神よ、汝は優れたる容色によりて：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

二六 我スマナーと名づけらる。象牙色の美しき薺を受食のために遊行する比丘に與へたり。エーシカ國の高樓ある、優れたる、美しきベンナカタの町にて。

二七、二八 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、ど。

四六 菩婆天宮

一 汝の天の菴婆園は美しく、其處にある宮殿は宏壯にして種々の樂音響き、天女の群さゞめく。

二 其處には黄金の大燈は恆に輝き、衣の果實をつけたる樹を以て遍ねく掩はる。何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：汝の容色は十方に輝くや、と。
三 四 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、：乃至：こは如何なる業の果なるやを、と。

五 六 我人中にありて人間たりし時、前生、人界にありし時、僧伽のために菴婆樹を以て圍繞せられたる精舍を建立せり。

七 八 宏大なる精舍の竣工せられ完成せられたる時、衣の果實ある菴婆樹を以て掩はせ、
九 其處に燈を燃して伽那の最上者（佛の弟子僧伽）に用ひしめ、喜びて自らの手にて僧伽に與へたり。

それによりて我が菴婆園は美しく、其處にある宮殿は宏壯にして種々の樂音響き、天女の群さゞめく。

一〇 其處には黄金の大燈は恆に輝き、衣の果實ある樹を以て遍ねく掩はる。

一一、一二 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、ど。

四七 金色天宮

一 金色の衣をつけ、金色の幢幡を立て、金色に嚴飾し、身に金色の栴檀香を塗り、金色の蓮華の華鬘をつけ、

二 金色の宮殿、金色の臥具、金色の座具、金色の食物、金色の傘蓋、金色の馬、金色の扇をもつものよ、

三 尊者よ、汝前生に於て人間たりし時、如何なる業をかなしたるや、女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやを。

四 尊者よ、コーサーティキーといふ蔓草あり、我求められざるに其の花四つを塔に捧げんとて持ち來れり。

五 我心喜びて師の舍利に向ひて、牛の道を來れるを顧みず、それに氣づかざりき。その時、我未だ塔に對して信樂せざるに、牛は我を殺したり。若しその善業を積まば今より一層よき[果]を得たるべし。

七 諸天の主天の司、マガヴンよ、その業によりて人身を捨てゝ汝の仲間になれりと。

八 これを聞きて三十三天の主天の司、マガバーは三十三天にありて喜び、摩兜麗にかく語れり。

九 見よ、摩兜麗よ、この業の果の不可思議、善美なるを。施物は少量なりとも福業は大果あり。

一〇 如來等正覺或はその弟子に對して心喜ばんには布施に少量と名づくべきものなし。

一一 摩兜麗よ、いざ我等も如來の駄都に更にく供養せん、福業の積聚は安樂なり。
一二 生存せる時も死せる時も心寂靜ならば果も寂靜なり。有情は心の誓願によりて善趣に行くなり。

一三 如來は實に多くのものゝ利益のために世に現はれたまへり、施者はそこに施行をなして天上に行くなり、ど。

四八 甘蕉天宮

一 汝は地と天とを照して日月の如く、他に勝れて輝く、吉祥により、容色により、名

聲により、威光によりて、恰も梵天が帝釋と俱なる三十三天に勝れて輝くが如し。

二 蓮華の華鬘をつけ、寶石の飾をつけ、黄金に似たる肌を有し、嚴飾し、最上の衣をつけたるものよ、我汝に問ふ、輝く女神よ、我を禮拜する汝は誰なりや。

三 清淨なる布施行をなしたるや。又は戒調御を行じたるや、名聲あるものよ、何によりてか善趣に生れたるや。女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやを、ど。

四 尊者よ、卿は此の村に於て受食のために我が家に近づきたり。それより我は卿に心喜び、無比の喜もて甘蔗の一片與へたり。

五 後に姑は我に訊ねぬ、嫁よ、甘蔗を何處に捨てたるや、ど。我捨てたるに非ず、又食べたるに非ず、寂靜なる比丘に我自ら與へたるなり、ど。

六 姑は我を呵責せり、こは汝の所有なるや、或は我が所有なるや、ど。土塊を取りて我に投げたりき。其處より死して我は女神となれり。

七 かかる善業が我によりてなされ、而して幸福なる業果を自ら享け、諸天と共に五種の欲を楽しみ、喜べり。

八 かかる善業が我によりてなされ、而して幸福なる業(果)を自ら享け、帝釋天に守護せられ、三十三天に守護せられて五種の欲を満足せり。

一〇

是の如く福業の果は少からず、甘蔗の施によりて我に大光輝あり、帝釋天に守護せられ、三十三天に守護せられて歡喜園にあり、恰も千眼(ある帝釋)の如し。

一一 尊者よ、哀愍者、知者なる卿に近づきて我禮拜せり。而して善業を問ひ、それより卿に甘蔗の一片を與へたり、心喜び、無比の喜もて、と。

四九 禮拜天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を照しつゝ立つ。恰も曉の明星の如し。

一二三

何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：汝の容色は十方に輝くやど。

三四

目連に問はれたるその女神は悦に満ち：乃至：こは如何なる業の果なるや。

五六

我人中にありて人間たりし時、戒具足せる沙門を見て、その足に禮拜して心喜

び、歡喜して合掌せり。

六

それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、と。

五〇 ラツデュマーラー女天宮

一 女神よ、汝は優れたる容色によりて十方を輝しつゝ立ち、快き奏樂につれて手足を振りて舞ふ。

二 その汝の舞ふ時、全肢體より耳に快く可意なる天音響く。

三 その汝の舞ふ時、全肢體より香好く可意なる天香漾ふ。

四 袖にて旋回する時辯鬟の飾はその音五支樂器の音の如く響く。

五 裝飾は風に搖れ、風によりて振動し、その音は五支樂器の音の如く響く。

六 その汝の頭にある華鬟は香好く、可意なり、香は十方に漾ひ、曼珠沙華の如し。此の好香を嗅ぎ、人界のものにあらざる色を汝は見る。女神よ、問はれて汝語れ、こは如何なる業の果なるやをど。

七 我前生にて伽耶の町の或る婆羅門家の下婢なりき。福なき、不幸なるラツヂュマーラーとて知られたり。

八 我譴責、毆打威嚇を受けて水掬まんとて水瓶を取りて出で行けり。

九 我は水瓶を側に置きて森に近づきたり。こゝにて我死せん、生きて我何かせんと。

一〇 堅く身を縛り、バーダバ樹下に身を投げて、それより四方を觀望せり、この森に

住める者は誰なりや、と。

一二 其處に一切世間を饒益する正覺者、牟尼が樹下に坐して怖畏なく、靜慮せるを我見たり。

一三 その我に悚懼、未曾有の身毛堅立生じたり。この森に住めるは人なりや、將た神なるや。

一四 心喜ばすべく、信樂すべき(かの佛)、欲林より出でゝ無欲林(涅槃)に至れるかの人を見て我が意喜べり、こはたゞ人にあらず。

一五 こは五根を防護し、靜慮を樂しみ、心を外に散亂せしめず、一切世間を饒益する佛ならんと。

一六 畏怖すべく近づき難きこと、恰も巖窟に住する獅子の如く、見るを得難きこと恰も優曇華の如し。

一七 彼の如來は柔和なる語もて呼かけたまひて、ラッヂュマーラーよ、如來に歸命せよと宣へり。

一八 我その慈愛、有益、美麗、優雅、柔和、快適にして一切の愛を拂ひたる言を聞きて淨信を起したり。

一九 我の堪任心淨信、清淨心^(を起せる)を知りて一切世間を饒益する如來は説きたまへり。

二〇 是は苦なり、是は苦の生起なり、是は苦の滅なり、こは直き涅槃に至る道なりと我に語りたまへり。

二一 哀愍者、善行者の教に我住立し、不死、寂靜死なき處、涅槃に到達しぬ。

二二 その我は三寶に對する敬愛確立し、正見に住して不動なり、根本信によりて佛の娘となり嗣子となれり。

二三 その我は喜び娛しみ、何らの恐なく愉しむ。天の華鬘をつけ、甘き蜜を飲む。

二四 六萬の樂器は我を愉しましめ、アーランバ、ガツガラ、ビーマ、サードウブーディン、サンサヤ、

二五 ボツカラ、スバツサ等の樂器、又箜篌を彈ずる女人、ナンダー、スナンダー、ソーナデインナー、スチンヒタ、

二六 アランブサー、ミツサケーシー、ブンダリーカー、エニバツサー、スバツサー、ズバッダー、ムドウカーヴディー等の女人、

二七 此等や又他の一層優れたる天女等、彼等は隨時に我に近づきて言ふ。

二八、二九　いざ我等は舞ひ歌ひ汝を愉しましめんと。

この無憂歡喜愉悦の三十三天の大園は、こは福業をなさりし者には得られず、福業をなせる者のみに得らる。福業をなさりし者には此世にも他世にも幸福はなく、福業をなせる者には此世にも他世にも幸福あり。

三〇　三十三天に共住せんと望む者は多くの善業をなすべきなり、福業をなせる者は財寶を得て天上に於て愉しむなり。

三一　實に如來は多くの人の利益のために世に現はれたまへり、如來は應供養者なり、人々の福田の基なり、施者は其處に施行をなして天上に於て愉しむなり、ど。

攝頌

深紅、極光、象、アローマ、酸粥施者、精舍、四女人、菴婆、金色、甘蔗、禮拜、ラッヂュマーラーこれを以て品と稱せらる。

第四女人天宮品

五　大事品 五一　蛙天宮

一 我が足に頂禮し神通により、名聲によりて輝き優れたる容色によりて十方を照らすは誰なりや、と。

二 戒前生、水中にあり、水を棲家とせる蛙なりき。我卿の法を開きてありし時、牧牛士我を殺したり。

三 見よ、一瞬心喜べる我の神通を、名聲を。見よ威神を、見よ容色を、光輝を。
四 長時卿の法を開きたる者は瞿曇よ不動處(涅槃)に到り、其處に行きて悲しむことなし、と。

五二 レーヴティー女天宮

一 長く異郷に住し、遠方の地より無事に還り來れる人を、親戚朋友知己は歓び迎ふ。

二 その如く福德を積める者、此の世界より彼の世に行かば、恰も愛好する歸來者を親戚の迎ふる如く、福德は彼を迎ふ。

三 立て、レーヴティーよ、惡行者よ、戸の開きたるに布施をなさざる貪欲者よ、惡趣に墮せる者が呻き、墮獄者が苦によりて惱まさるゝ所へ我連れ行かん、と。

四 斯く言ひて閻魔の使者、赤き目をなせる巨大なる二人の夜叉は各の腕にてレ

一ヅティーを捕へて天群の所に行きぬ。

五 太陽の如き光あり、輝き、光れる、美しき、金銀をもて掩へる人々の群があり、太陽の光線の如く輝ける此の天宮は誰のものなりや。

六 女人の群は栴檀香を塗り、「内外」兩方より天宮を輝かし、天宮は太陽に擬ふ光見ゆ。天上に到り、天宮に愉しむ者は誰なりや、と。

七 波羅奈にナンディヤと名づくる優婆塞ありき、慳貪ならず、乞へる言に應じ易き檀越なりき。人々の群がり、太陽の光線の如く輝ける此の天宮は此の人のものなり。

八 女人の群は栴檀香を塗り、「内外」兩方より天宮を輝かし、天宮は太陽に擬ふ光見ゆ。天上に到り、天宮に愉しむは此の人なり、と。

九 我はナンディヤの妻にして、主婦、全家の主、夫の主なりき。今我天宮にて愉しまん。地獄を見ることを我欲せず、と。

一〇 こは汝の地獄なり、惡行者よ、汝存命中に福德を行ぜざりき。實に慳貪にして怒易き惡行者は天に生まるゝものゝ侶となるを得ず、と。

一一 糞と尿との不淨の見ゆるは何なりや、此の惡臭は何なりや、此の排泄物の嗅が

るゝは何なりや、と。

一二 此はサンサヴカと名づくる百人の〔丈けある〕深坑なり。レーヴティーよ、汝は其處にて千年の間苦しめらるゝなり。

一三 身口意にて如何なる悪業のなされたるや、何によりてか百人の〔丈けある〕サンサヴカ深坑に墮したるや、と。

一四 汝は沙門婆羅門、或は又他の乞者に妄語をなしたり。その惡を汝なせり。

一五 それによりて百人の丈けある〔サンヴカ深坑に墮せり。レーヴティーよ、汝は其處にて千年の間苦しめらるゝなり。

一六 彼等は手を切り、足を切り、耳を切り、鼻を切り、而して鶴の群が集り來りて、争ひつゝ喰ふなり、と。

一七 汝等我を連れ歸らば幸福なり。布施により、正しき行により、制御により、調伏により、我多くの善を行ぜん、そをなして幸福となりて後悔することなからん、と。

一八 汝前生不放逸にして今に及びて悲しめり、自らなしたる業の果報を汝享くるなり。

一九

天界より人界に行きて我に問はれて、次の如く言ふは誰なるや、罰杖を捨てたるものに對して布施、即ちヨキ衣服飲食を與へよ。

二〇

慳貪にして怒易く惡行者は天に生まるゝ者の侶となるを得ず、と。

二一

その我今此處より行きて人身を享け、乞へる言の義を知り、戒具足し、布施により正しき行により制御により、調伏により多くの善を行せん。

二二

我喜べる心もて公園を造り、難處に道を開き、水、飲料を供せん。

二三

半月の第十四日と第十五日と第八日父神變月に八支をよく具足せる布薩に住せん。

二四

常に戒守り、布施に放逸ならざらん。こは我自らによりて見知せられたり、と。

二五

斯く嘆じつゝ震へつゝあるをそれより凄惨なる地獄へ倒さかさまに投げ入れぬ。

二六

我前生慳貪なりき。沙門婆羅門を罵り、虛構を以て夫を欺きて今凄惨なる地獄に於て苦しめらるゝと。

五三 チヤツタ青年天宮

一人中の最勝者、釋迦牟尼世尊所作已に成じ、彼岸に到り、力と精進を具せるかの善逝に歸命せよ。

二 離貪、無欲、無憂、無爲、無違逆の法、甘美にして分明、よく分別せられたる此の法に歸命せよ。

三 其處に布施せば大果ある清淨なる四雙の人と法を見る八輩の人と、此の僧伽に歸命せよ。

四 天空の太陽も月もブッサ星も此の天宮の儕なき大極光の如くには輝かず、三十三天に來りたる汝はそも誰なりや。

五 清淨、無垢の美しき天宮は太陽の光線を遮し、二十由旬以上も輝き、夜をも晝の如くなすなり。

六 多くの紅蓮、雜色の白蓮は他の花と咲き交り、無垢、無塵の黄金の羅網にて掩はれ、恰も太陽の天空に輝くが如し。

七 赤色の衣、金色の衣を以て、沈香、ピヤングの華鬘、栴檀香を以て、黄金に似たる肌を以て満ち充てり。恰も空が星を以て充满せるが如し。

八 多くの男女が種々の容姿をなして其處にあり、花にて嚴飾し、美しく、風に搖られて好香を漾はせ、黄金に掩はれ輝けり。

九 こは如何なる業の果報なりや、如何なる業果によりて此處に生まれたるや、如

何にして汝此の天宮に來りたるや問はれて汝直ちに語れと。

一〇 大師(佛自身此の道にて青年に遭ひて哀愍をたれて教へたまへり。卿の勝れたる法寶を聞きて我そを行ぜんとチャッタ(青年)は言へり。

一一 最勝の勝者と法と比丘僧伽に我歸依す。世尊よ、始めは否と我言へり、されど後には卿の言の如くに行じたり。

一二 又、種々不淨の殺生をなす勿れ、智者は生類に對して無制御なるを稱讚せず。

一三 世尊よ、始めは否と我言へり、されど後には卿の言の如くに行じたり。

一四 又、他人の保護せるもの、己に與へられざるものを取りべしと思ふ勿れ。世尊よ、始めは否と我言へりされど後には卿の言の如くに行じたり。

一五 又、他人の保護せる、他人の妻と通ずること勿れ、こは賤しきことなり。世尊よ、始めは否と我言へりされど後には卿の言の如くに行じたり。

一六 又、塵妄を語り異りて語る勿れ、智者は妄語を稱讚せず。世尊よ、始めは否と我言へりされど後には卿の言の如くに行じたり。

一七 又、人の想念を失はしむる酒は一切避くべし。世尊よ、始めは否と我言へりされど後には卿の言の如くに行じたり。

一七

その我は此の世にて五學處を行じ、如來の法に趣向して後、盜人に圍まれたる中間の道を行きたり。彼等は財を奪る爲に我を其處にて殺害せり。

一八

我はこれだけの此の善業を隨念す、これ以外は我になし。このよく爲されたる善業によりて我は三十三天に生まれ欲するがまゝに望むなり。

一九

見よ、一瞬だけ守れる戒と隨法行の果を。名聲を以て輝ける我を見て卑賤の望ある多くの者は自らもかくあらんと望む。

二〇

見よ、僅少の教示によりて我善趣に到り、幸福を得たり。思ふに何人にとって絶えず法を聞かば安穩なる不死に到らん。

二一

假令僅少にても如來の法に住立して爲されたる善業は大なる果報あり、廣大なる果あり。見よ、チャッタは福業をなしたるによりて地上を照らすこと恰も太陽の如し。

二二

或るものは、その善業は何なりや、我等何をか爲すべきやとかく集まりて熟議せり、我等は再び人間たることを得て、戒を具足して住せん。

二三

大師は我が助成者哀愍者なりとて、我未だ世にありし時、晝の間に行きたり。その我は眞實名に近づきたり。哀愍を垂れたまへ、我等再び法を聞かんと。

54

二二四 此の世にて欲貪を捨て、有貪隨眠と癡を捨つるものは再び胎を受くることなく、涅槃に到り、清冷となるなり、ど。

五四 蟹味施者天宮

一 此の天宮は高く、摩尼の柱あり、方十二由旬なり、重閣は高く七百由旬ある、琉璃柱あり、地には黄金の板を敷きて美し。

二 汝は其處に坐し、飲み食し、美妙なる天の箜篌奏せられ天の味、五種の欲は満たされ、黄金の飾りをつけたる天女は舞へり。

三 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處に大果を享け、又可意なる財寶汝に生ずるや。

四 女神よ、大威神ある者よ、我汝に問ふ、汝人間たりし時如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、又汝の容色は十方に輝くや、ど。

五 目連に問はれたるその女神は悦びに満ち、問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

六 記憶を起さしむるは戸口に立てる蟹なり、蟹は黄金所成にして輝けり。

七 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、ど。

五五 守門者天宮

以下五天宮は蟹味施者天宮と同様に廣説さるべきなり^{五四}が五度繰返され、第六偈は各次の如し。

我が天壽は千年なり、其處にては言を以て迎えられ、歡喜を以て遇さる。福業をなせる人はそれだけの間久住すべし、天の欲望を成就して。

五六 所應作天宮

正行の諸佛に對して福業のなさるべきは賢者によりて認められたり。そこに布施せられなば大果あり。げに我がために佛は阿蘭若より村に來りたまへり。そこにて我は心喜びて三十三天に生まれたるなり。

五七 第二所應作天宮

正行の比丘に對して福業のなさるべきは賢者によりて認められたり。そこに布施せられなば大果あり。げに我がために比丘は阿蘭若より村に來れり。そこにて我は心喜びて三十三天に生まれたるなり。

五八 針天宮

與ふべきものなし、されど何物にても與ふる物こそ勝れたり、我針を與へたり、

針こそ勝れたり、と。

五九 第二針天宮

我人中にありて人間たりし時前生人界にありし時、無垢清淨、無濁の比丘を見たり、我喜びて自らの手にて彼に針を與へたり。

六〇 象天宮

一 軀幹白く無垢にして大牙あり、力強く、神速なる、よく飾られたる象に乗りて汝は空中を此處に來れり。

二 象の二本の牙には、清水あり花咲ける蓮池が巧に造作され、蓮華の間には樂團が奏樂し此等美女は舞へり。

三 汝は大威神あり、神通を逮得せり。汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、汝の容色は十方に輝くや、と。

四 目連に問はれたるその天子は悦びに満ち：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

五 我喜びて八種の眞珠の華鬘を迦葉世尊のために自らの手にて塔の中へ捧げたり。

六 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、と。

六一 第二象天宮

一 全身白き最上の大象に乗りて女人の群に扈從されて汝は十方を照しつゝ林より林へと逍遙す。恰も曉の明星の如し。

二三 何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：汝の容色は十方に輝くや、と。四 目連に問はれたるその天子は悦びに満ち：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

五 我人中にありて人間たりし時、具眼者瞿曇の優婆塞なりき。殺生を離れ、世間に於て與へられざるもの取ることを避け。

六 飲酒せず妄語をなさず、自己の妻にて満足せり。心喜び恭敬して飲食、多くの布施を與へたり。

七 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、と。

六二 第三象天宮

一 天界の乗物、全身白き象に乗り、樂を奏し空中にて尊敬を受くるは誰なりや。二 天神よ、汝乾闥婆なりや、或は帝釋ブリンダダなりや。知らざれば汝に問ふ、如

何に我等汝を知るべきや。

三 我は天にあらず乾闥婆にあらず帝釋プリンダダにもあらず。善法^{スダンヤ}と名づくる天中の一なりと。

四 善法天よ幾度も合掌をなして我等問ふ人間にて何をなしてか汝は善法天に生まれたるや、と。

五 高層の家と草葺の家と住家と此等の三つの中一を與ふるものは善法天に生まれるゝなり、と。

六三 小車天宮

一 強木の弓を杖に汝立てり。汝は刹帝利王なるや或は森を彷徨ふ獵夫なりや、と。

二 尊者よ、我はアッサカ王の子にして森を彷徨ふものなり。比丘よ、我が名を汝に告げん、スヂャーダとて我知らる。

三 我鹿を追ひつゝ大なる林に入り來れり。鹿を殺して其の聲と眼を見て我ここに立つなり。

四 汝よく來れり、大福者よ汝近くに來れり。此處にて水を取りて汝の足を洗へ。

五

山の岩間より流れ来る寒冷なるこの水を飲みて王子よ、この座に坐せよと。
大牟尼よ、汝の言は實に美しく快く慈愛あり、有益、美麗なり了解して義を語る。
林に住する汝に何の欣ありや諸仙中の牛王よ問はれて語れ。汝の言路を守
りて我等は有益なる言の如くに行ぜんと。

八

王子よ、我等の欣とするは是なり即ち、一切の生物に對して無傷害なる、偷盜と
邪行と飲酒を離れ、

九

寂靜に住し博學にして恩を知る、此等の現法に於て賞讃せらるべき法なり。

一〇

王子よ、汝の死する前五ヶ月以内に輪廻の苦より脱するを知れ。

一一

我は如何なる國に行きて如何なる業、如何なる人、如何なる智によりて不老不
死とならんや。

一二

實にその國は業も智も人も存せず其處に行きて人は不老不死とならん、王子
よ、

一三

大財者も大富者も國を持つ刹帝利も多くの穀を持つ幸福なる人も彼等すら
老死なきにあらず。

一四

アンダカエーンフの子等は剛勇勇猛にして英雄的殺戮をなすも、彼等と雖も

壽命の滅盡に到り壞滅す。

一五 利帝利も婆羅門も毘舍も首陀羅も旃陀羅も補羯婆もその他のものも、その生によりては不老不死にあらず。

一六 婆羅門の思量せる六支の吠陀を誦するものも、その他のものも智によりては不老不死はあらず。

一七 寂靜なる仙已を制せる苦行者すらも、時來れば彼等その肉體を捨つ。

一八 己を修め、なすべきをなし、無漏の阿羅漢も罪福を滅盡して此の肉體を置き去る、と。

一九 大牟尼よ、汝によりて有益なる偈はよく說れたり。よく說かれたることに満足し、汝に我歸依せん、と。

二〇 汝我に歸依する勿れ、我の歸依せるかの釋子大雄にこそ歸依せよ、と。

二一 汝のその師は何處にあるや、我も亦勝者無等の人を見に行かん、と。

二二 かの師は東方の國甘蔗族オッカ・カに生まれたる高貴の人、已に般涅槃せり、と。

二三 もし汝の師佛在さば隨侍せんがために我千由旬なりとも行かんに。

二四 されど汝の師は已に般涅槃したれば、般涅槃せる大雄に我歸依せん。

二五

無上なる佛と法と人天の僧伽とに我歸依す。

二六

我速かに殺生を離れ世間に於て與へくれざるもの⁵⁹を取ることを避け、飲酒せず、妄語をなさず、自己の妻にて満足せんと。

二七

恰も大光明を放つ太陽が廻り行きて虛空にて四方に輝くが如く、その如く汝の此の大なる車は^はその光遍く百由旬にも及ぶ。

二八

遍ねく金色の布を以て掩はれ、車の底は摩尼を以て飾られ、金銀の線輝き、琉璃造りなり。

二九

棒の先は琉璃にて造られ、その輦は赤色の摩尼にて裝飾され、金銀の裝具は輝く。此等の馬も亦意の如く神速なり。

三〇

汝はこの金色の車に立ち、恰も千頭馬車の諸天の主^{帝釋}の如し。名聲あるものよ、汝賢者に問ふ、如何にしてか此の廣大なる名聲汝に得られたるや、と。

三一

尊者よ、我前生スヂャータと名づくる王子なりき。汝は我を哀愍して自制に住せしめたり。

三二

我が壽の盡くるを知りて、汝は師の舍利を與へたり、スヂャータよ、是を供養せよ、そは汝の利益とならんとて。

三三 我は香、華鬘を以てそれを供養して、人身を捨てゝ歡喜園に生まれたり。

三四 美しき歡喜園にて私は天女に扈從されて歌舞を愉しむなり、ど。

六四 大車天宮

一 此の美しく種々に飾られたる千頭馬車に乗りて御苑の地域近くに來れり。恰も有情の主、プリンダダ、ザーヴの如く。

二 汝の二本の車棒は黄金造り棒の先はよく結ばれ、準備された草秣は積まれ、優秀なる工匠によりて整備され、十五夜の満月の如くに輝く。

三 此の車は黄金の羅網を以て被はれ、多くの種々なる寶石を以て飾られ、快き響を立て、音よく駕したる多くの牛象を以て輝く。

四 此等の轂はよく考量して造られ、車脚の中間は裝飾され、此等の轂は百本の線にて彩られ、恰も雷光の如く輝く。

五 此の車は種々に莊嚴され、裝飾られ廣き幅は千本もありて、此等の響は快く聞え、五支樂器の音の如く響く。

六 車の頂は飾られて摩尼の月輪が置かれ、常に清淨に美しく輝き、美しき線、摩尼の線にて甚だ輝く。

七 此等の馬は摩尼の月輪が置かれ、高さと周りは充分にして速きこと梵天の如く、大きくして力あり、神速にして汝の意を知りて意の如く走る。

八 此等總ての馬は四足にて進み、歩調整然たり、汝の意を知りて意の如く走る。神速柔軟にして驕ることなく愉快にして最上なり。

九 空中を一步一步と飛びて進み、つけたる裝飾の美しき響聞え、恰も五支樂器の音の如く響く。

一〇 裝飾の響、馬蹄の高き響、馬の嘶、此等の快き響は一つになりて聞え、恰も乾闥婆の樂音の如し。

一一 車に立てる彼女等は鹿の如き優しき眼、厚き眼瞼をもち、微笑し、愛語し、體は琉璃の羅網にて被はれ、柔密なる肌をもち、乾闥婆神や他の最高神に恭敬さる。

一二 彼女等は美しき金色の衣をつけ、瞳大きく、眼美しく、良家に生まれ、麗姿あり、清淨なり、車に立ちて合掌して隨侍せり。

一三 黃金の環裝飾をつけ、美衣を著、細腰、美しき面、美しき姿をなし、車に立ちて合掌して隨侍せり。

一四 ある者は美しき辯髪をなし、幼年の中には種々に結髪し、等分に分たれ〔青色の

摩尼の如く輝く。彼女等は汝の意に快く、車に立ちて合掌して隨侍せり。

一五 頭飾をつけ、紅蓮、青蓮にて掩はれ、栴檀香を塗り、彼女等は汝の意に快く、車に立ちて合掌して隨侍せり。

一六 彼女等は華鬘をつけ、紅蓮、青蓮に掩はれ、嚴飾し、栴檀香を塗り、汝の意に快く、車に立ちて合掌して隨侍せり。

一七 汝の頸、手、足、頭には飾をつけ、到る處十方を輝やかすこと恰も昇りつゝある秋の太陽の如し。

一八 腕に飾られたる華鬘は風に搖られて美しく、快く、清淨なる音を出し、一切の智者に快き最上の音を出す。

一九 御苑には二頭の象住し、車と象とより音樂が起り、天子よ、それをば愉しむ。恰も多くの蓮葉によりて樂を奏する如し。

二〇 此の多くの美妙にして愉しき笠篋に心魅せられ喜べり、天女等は樂を奏し、よく修得して蓮華の上を舞ふ。

二一 歌謡、音樂、舞蹈を此等のものは一つに合はせ、此處彼處に舞ひ、兩側より輝く。

二二 その汝は樂團に興じ、愉しめり、恰も帝釋の如く恭敬されつゝ、此等多くの快き、

愉しき笠篋に心魅せられ喜べり。

二三 汝前生人間たりし時、如何なる業をかなしたるや、如何なる布薩に汝住したるや、如何なる法行をなして汝は勝れて輝くや。

二四 かく汝が廣大なる神通力をもち、天群に勝れて美しく輝くは、こは少量の業の果なるや、或は曾て布薩をよく行じたる果なるや、そを聞かしめよ。
二五 こは布施の果なるや、又戒の果なるや、或は合掌業の果なるや、問はれたる汝はそを我に語れ、と。

二六 目連に問はれたるその天子は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

二七 根を制御せる無比の精進者、人中の最上者、最勝の人、不死の門を開きたる天中の天、百の福相ある迦葉佛、

二八 大象、暴流を渡りたるもの、黄金像に等しき〔迦葉佛〕を我見たり。その清淨なる法幢を見るや、直ちに我は意清淨となり、

二九 彼に飲食、衣服、清淨殊妙なる美味を與へたり。花を裝飾したる己が住居にて無執取心にして與へたり。

三〇 飲食、衣服、嚼食、噉食、臥具を以てかの兩足尊を供養して、その我は天の都(善見大城)にて楽しむなり。

三一 かかる方法にて三種の清淨なる無遮會を營みて、我人身を捨てゝ帝釋と等しく天の都にて楽しむなり。

三二 壽命と容色と幸福と力と勝れたる容姿を願求する者は牟尼よ多くの飲食を無執取心にして與ふべきなり。

三三 此の世に於ても彼の世に於ても、佛より勝れたる者なく、佛に等しきもなし。功德を求め、廣大なる果を願求する者にとりて、〔佛は〕供養さるべきものゝ中の最高の供養に價ひする者なり、と。

攝頌

蛙、レーヴティー、チャツタ蟹、守門者、一所應作、二針、象、二車、人々に第五品と稱せらる。

第六 パーヤーシ品

六五 在家天宮

一 恰も三十三天の最上にして勝れたる園、チッタラター園の輝くが如く、その如く汝の此の天宮は輝きつゝ空中に立つ。

二 汝は神通を逮得し、大威神あり、汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝ありや、又汝の容色は十方に輝くやと。

三 目連に問はれたるその天子は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

四 人界にありし時、我と妻とは給水者として家に住したり。恭敬して飲食の大布施をなしたりき。

五 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、ど。

六六 第二在家天宮

一 恰も三十三天の最上にして勝れたる園、チッタラター園の輝くが如く、その如く汝の此の天宮は輝きつゝ空中に立つ。

二 汝は神通を逮得し大威神あり、汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、又汝の容色は十方に輝くや、と。

三 目連に問はれたるその天子は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

四 人界にありし時我と妻とは給水者として家に住したり。心喜び恭敬して飲食の大布施をなしたりき。

五 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、と。

六七 果實施者天宮

一 此の天宮は高く摩尼の柱あり、方十六由旬あり、重閣は高く七百由旬あり、琉璃の柱あり、地には黄金の板を敷きて美し。

二 汝は其處に住し、飲み食し美妙なる天の箜篌奏せられ、六十四人の藝を修得せる美女三十人の勝れたる天女は舞ひ、歌ひ、愉しましむ。

三 汝は神通を具足し大威神あり、汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如く光輝ありや、又汝の容色は十方に輝くや、と。

四 目連に問はれたるその天子は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何な

る業の果なるやを。

五 果實を施す者は大果を得るなり、心喜びて心正しき人に施す者は天上に生まれ、三十三天に於て愉しみ廣大なる福業の果を享くるなり。大牟尼よ、恰も我四つの果實を施したるが如し。

六 それ故に人間の幸福を求め天の樂を願ひ、人間の富裕を欲するものは常に果實を施すべきなり。

七 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は十方に輝くなり、と。

六八 住家施者天宮

一 恰も月が雲晴れたる空に輝きつゝ空中を行くが如く、その如く汝の此の天宮は空中に輝きつゝ立つ。

二 汝は神通を逮得し大威神あり、汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、又汝の容色は一切諸方に輝くや、と。

三 目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

四 人界にありし時、我と妻とは阿羅漢に住家を施したり。

五 心喜び恭敬して飲食の大布施をなしたりき。

六 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は一切諸方に輝くなり、と。

六九 第二住家施者天宮

一一五 恰も太陽が雲晴れたる空に輝きつゝ：乃至：前の天宮の如く廣說さるべし我が容色は一切諸方に輝くなり、と。

七〇 食施者天宮

一 此の天宮は高く摩尼の柱あり方十二由旬なり重閣は高く七百由旬あり、琉璃の柱あり、地に黄金の板を敷きて美し。

二 汝は神通を逮得し、大威神あり：乃至：汝の容色は一切諸方に輝くや、と。

三 目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

四 我人中にありて人間たりし時、渴き疲れたる比丘を見て一食を施したり。

五 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は一切諸方に輝くなり、と。

七一 麦番天宮

一、二 此の天宮は高く摩尼の柱あり：乃至：汝の容色は一切諸方に輝くや、と。

三 目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

四 我人中にありて人間たりし時、麥の番人なりき。無垢、清淨、無濁の比丘を見たり。

五 我喜び自らの手にて彼に飯團食の配前をば施したり。飯團食を施して我は歡喜園にて愉しむなり。

六 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は一切諸方に輝くなり、と。

七二 耳環天宮

一 汝は裝飾し、華鬟をつけ、美衣を纏ひ、美しき耳環をつけ、髪を整へ、腕環をつけ、名聲ありて、天の天宮にあり、恰も月の如し。

二 美妙なる天の箜篌奏せられ、六十四人の藝を修得せる美女、三十人の優れたる天女は舞ひ、歌ひ、愉しましむ。

三、四 汝は神通を逮得し、大威神あり：乃至：汝の容色は一切諸方に輝くや、と。

五 我人中にありて人間たりし時、持戒明行具足、多聞、名聲ある愛滅盡に達したる沙門を見て、

六

心喜び恭敬して飲食の大布施をなしたりき。

七、八

それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は一切諸方に輝くな
りと。

七三 第二耳環天宮

一

汝は裝飾し、華鬘をつけ美衣を纏ひ、美しき耳環をつけ、髪を整へ、腕環をつけ名
聲ありて天の天宮にあり、恰も月の如し。

二

美妙なる天の笠篋奏せられ、六十四人の藝を修得せる美女、三十人の優れたる
天女は舞ひ、歌ひ、愉しましむ。

三

汝は神通を逮得し大威神あり：乃至：汝の容色は一切諸方に輝くや、と。

四

目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

五

我人中にありて人間たりし時、容姿優れ、明行具足、多聞、持戒、淨信ある沙門を見

て

六

心喜び恭敬して飲食の大布施をなしたりき。

七、八

それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は一切諸方に輝くな
りと。

七四 爪多羅天宮

一 恰も天衆の集まれる天主〔帝釋〕の善法堂の如く、汝の此の天宮は輝きつゝ空中に立つ。

二 汝は神通を具足し、大威神あり：乃至：一切諸方に輝くや、と。

三 「鳩摩羅童子迦葉に問はれたる天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。我人中にありて人間たりし時〔爪多羅とて〕バーヤーシ王〔に仕ふる〕青年なりき。財を得るや、是を頒てり。持戒者を我敬愛せり。

五 心喜び恭敬して飲食の大布施をなしたりき。

六 それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は一切諸方に輝くなり、と。

攝頌

二 在家果實施者、二住家施者、食施者、麥番、二耳環、バーヤーシ。

第六品

七五 チツタラター天宮

一 恰も三十三天の最上にして勝れたる園、チツタラター園の輝くが如く、その如く汝の此の天宮は輝きつゝ空中に立つ。

二 汝は神通を逮得し、大威神あり；乃至；汝の容色は一切諸方に輝くや、と。

三 目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

四 我人中にありて人間たりし時、貧窮孤獨、哀れなる下僕なりき。老年の父母を扶養せり。持戒者を我敬愛せり。

五 心喜び恭敬して飲食の大布施をなしたりき。

六、七 それによりて我に是の如き容色あり；乃至；我が容色は一切諸方に輝くなり、と。

七六 歡喜園天宮

一一五 恰も三十三天の最上にして勝れたる園、歡喜園、チツタラター園；乃至：

〔七五に同じ〕

七七 摩尼柱天宮

一 此の天宮は高く、摩尼の柱あり、方十二由旬なり、重閣は高く七百由旬あり、琉璃

の柱あり、地に黄金の板を敷きて美し。

汝は其處に坐し、飲み、食し、美妙なる天の箜篌奏せられ、天の味、五種の欲は満たされ、黄金の飾りをつけたる天女は舞へり。

何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：汝の容色は一切諸方に輝くや、と。

目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

我人中にありて人間たりし時、難處に道を開き、園樹を植えたり。持戒者を我敬愛せり。

心喜び恭敬して飲食の大布施をなしたりき。

それによりて我に是の如き容色あり：乃至：我が容色は一切諸方に輝くなり、と。

七八 黄金天宮

此の天宮は黄金所成の山にあり、一面に輝く、黄金の羅網にて掩はれ、鈴網具備せらる。

琉璃造りの八角柱は巧に造られ、一々の角面に七寶設置せらる。

即ち琉璃、金、水精銀、車渠、眞珠、珊瑚なり。

地は美しく可意にして塵埃起たず、柵の群は金色にして屋根は整備せり。

五 四の楷段が四方に造られ種々なる寶石造りの室によりて太陽の如く照らす。
六 其處に四の勾欄は鈎合よく區割され遍く四方を輝き照らす。

汝大極光ある天子は此の勝れたる天宮にありて容色によりて[他に]勝れて輝く。恰も昇りつゝある太陽の如し。

八 こは布施の果なりや、或は戒の果なりや、又は合掌業の果なりや、問はれて汝我に語れど。

目連に問はれたるその天子は：乃至：とは如何なる業の果なるやを。

一〇 我アンダカギンダにて日種なる佛飾のために自らの手にて喜びて精舍を建立したり。

其處に香、華、鬘、資、具、香油を師の精舍に喜べる心もて與へたり。

二 それによりて我に此の天宮得られ、我歡喜園にて自在なり種々の鳥ゐる樂しき歡喜園にて歌舞の天女に扈從されて我楽しむ、と。

一 此の天宮は高く、摩尼の柱あり、方十二由旬なり、重閣は高く七百由旬あり、琉璃の柱あり、地に黄金の板を敷きて美し。

二 汝は其處に坐し、飲み食し、美妙なる天の箜篌奏せられ、天の味、五種の欲は満たされ、黄金の飾りをつけたる天女は舞へり。

三 四 何によりてか汝に是の如き容色あり：乃至：汝の容色は十分に輝くや、と。目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

五 我は夏の最後の月、太陽の焼照らす時、他人の雇傭者にして、庵婆園に撒水をなせり。

六 時に舍利弗とて高名の比丘來れり。彼は身も心も疲れたり。

七 彼の來れるを見て、庵婆園の撒水者（我）は言へり、尊者よ、願はくは、我に幸福を齋するものに水をかけしめば幸なり、と。

八 その我を哀愍して、彼は衣鉢を側に置き、樹下の日蔭に一衣となりて坐せり。

九 心喜べる人（我）は樹下の日蔭に一衣となれる彼に清淨なる水をかけたり。

一〇 菴婆は撒水され、沙門は水浴せしめられたり、我が福業は清淨にして少からず。とて彼（我）は喜もて己の全身を満たしたり。

一一 其の生に於て是丈の業をなせるのみにして我人身を捨てゝ歡喜園に生まれたるなり。

一二 種々の鳥ゐる、樂しき歡喜園にて歌舞の天女に扈從されて我樂しむと。

八〇 牧牛天宮

一 「牧牛」天子を見て比丘問へり、汝は腕環をつけ名聲あり久住の高き天宮にありて恰も月の如し。

二 汝は裝飾し、華鬘をつけ、美衣を纏ひ、耳環をつけ、髪を整へ、腕環をつけ、名聲あり、恰も月の如し。

三 美妙なる天の箜篌奏せられ、六十四人の藝を修得せる美女、勝れたる三十人の天女は舞ひ、歌ひ、愉しましむ。

四 汝は神通を逮得し、犬威神あり：乃至：一切諸方に輝くや、と。

五 目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

六 我人中にありて人間たりし時、他人の犢を集め牧したりき。その時沙門、我の近くに來り、牛は豆を喰はんとて來れり。

七 今や二つの所應作あり、二つともなさざるべからず。尊者よ、かくて其の時、我

思案せり、それより如理の想得られ、尊者よ、我與へんとて〔飯を包みて〕布片を投げ與へたり。

八 我は牛が豆畠所有者の穀を喰ふ前に豆畠に急ぎて行きたり。その時大毒ある黒蛇急ぎ行く我が足を噛みぬ。

九 その我は苦痛に苦しみ悩みたり。比丘は我を哀愍してその布片を解きて、飯を食せり。それより死して我天神となれり。

一〇 此の善業我によりてなされ、我幸福なる業果を自ら享けぬ。尊者よ、汝によりて哀愍されたる者多し。知恩の故に我汝に禮す。

一一 天界、魔界を併せたる世界に於て汝の如き哀愍者なる牟尼は他になし。知恩の故に我汝に禮す。

一二 此の世に於ても他世に於ても汝の如き哀愍者なる牟尼は他になし。尊者よ、汝に哀愍せられたる者多し。知恩の故に我汝に禮す、ど。

八一 檀陟天宮

一 怡も満月の夜の月が星に圍繞されて星王月が遍く巡り行く如く、
二 天の都にある此の天宮は光を以て〔他に〕勝れて輝く。怡も昇りつゝある太陽

の如し。

三 琉璃、金、水精、銀、車渠、眞珠、珊瑚によりて[他に勝れて輝く]。

四 地は美しく、可意にして琉璃を敷き重閣は淨妙、快適なり、我の宮殿は巧に造られたり。

五 汝の蓮池は快適にして多くの魚住み、水清く、清淨にして金沙敷かる。

六 種々の蓮華に掩はれ白蓮満ち、風に搖られて快き好香漾へり。

七 その蓮池の兩側に林叢巧に造られ、花咲く木、果實なる木あり。

八 黃金の脚、毛織の被ひある臥臺に坐せる汝に天女は隨侍す。恰も天王に對するが如し。

九 あらゆる飾にて被はれ、種々の華鬘にて嚴飾せるものは其の大神通を楽しむ、恰も自在天王の如く汝は愉しむ。

一〇 歌舞の演ぜられる時太鼓、螺貝、鼓、箜篌、小鼓によりて心に欣喜充てり。

一一 汝の種々なる天の色、聲、香味所觸は好ましく、可意なり。

一二 天子よ、汝大極光あり、此の勝れたる天宮にありて容色によりて[他に勝れて輝く]。恰も昇りつゝある太陽の如し。

一三

こは汝の布施の果なりや、戒の果なりや、又は合掌業の果なりや問はれたる汝はそを我に語れ。

一四
一五

目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。
我釋迦族の首都なる迦維羅衛にて淨飯王の王子と同時に生れたる犍陟カシタカなりき。

一六
一七

かの王子が夜半菩提を求めて踰城せる時、彼は柔き手と光彩ある爪にて
我が脚を拍ちて、いざ我を連れ行けよ、我最上菩提に達して世を度さんと言へり。

一八

その言を聞ける時我が欣びは大なりき。我踊躍歡喜して願ひたり。

一九

大名聲ある釋子の我に跨りたるを知りて踊躍歡喜し人中の最上者を運びたり。

二〇

太陽の昇りたる時、他國の領土に著きて我と車匿チャナンとを残して彼は眷戀なく去り行けり。

二一

私は彼の足の銅色の爪を舌を以て嘗め、大雄の去り行くを涙して見送れり。

二二

私は彼の吉祥者釋子を失ひたるにより重き病を得て、速に我死せり。

二三 彼の威神力によりて天の都の一切の欲を具足せる此の天宮に我住するなり。
二四 菩提といへる言を聞きて我に欣び生じたるその善根によりて我は愛の滅盡に達したり。

二五 尊者よ、もし汝は師佛の所に行かば我が名に於て頭面もて禮拜したまへ。

二六 我も無比の人、勝者に見えんがため行くべし。世間導師、如者に見ゆるは難しこと。

二七 恩を知り、恩を思ふ彼は師に近づけり。具眼者の言を聞きて法眼を清淨ならしめたり。

二八 成見と疑と戒禁取を淨化して師の足に禮拜して其の場に没したりど。

八二 種々色天宮

一 種々の色の恐怖、憂なき多彩なる天宮に昇りて、汝は天女の群に圍繞せらる。恰も巧に化作せる有類の主の如く汝愉しむ。

二 名聲、福業、神通に於て等しき者なく勝れたる者なし。一切の天、三十三天群は集まりて汝を禮拜す。恰も月に對する如し。

三 而して此等の汝の天女は遍ねく舞ひ歌ひ、愉しましむ。汝は天の神通を逮得

し大威神あり、汝人間たりし時如何なる福業をかなしたるや。

何によりてか是の如き光輝あり、汝の容色は十方に輝くや、と。

四 目連に問はれたるその天子は：乃至：こは如何なる業の果なるやを。

五 尊者よ、我前生スマーダ勝者の弟子なりき。我覺慧なき凡夫なりき。我七年間出家せり。

六 七 その我は師般涅槃し、暴流を渡りたる如者、スマーダ勝者の黄金の羅網もて掩ひたる寶塔を禮拜し塔に對して心喜べり。

八 我に布施なく、施すべきものなし。されど他人を其處にて教へたり、かの應供養者の駄都に供養せよ、是の如くして此處より天上に行かんと。

九 この善業が我によりてなされ、我天の幸福を自ら享くるなり。三十三天群の眞中に於て我愉しみ、その福業の盡くることなし、と。

八三 煙輝耳環天宮

一 裝飾し、輝ける耳環をつけ、華鬘をつけ、黃栴檀香を塗れる汝は腕を延べて林中

に泣く。汝は何をか惱めるや。

二 黃金所成にして輝ける、車體は我に在れどその兩輪見つからず、この苦により

私は命を捨てんとす。

三 吉祥の青年よ、黄金所成か摩尼所成か珊瑚所成か銀所造のものを我に語れ、我汝に兩輪を與へんと。

四 かの青年は彼に言へり、こゝに月と日の二つ見ゆ、我が黄金所成の車はかの兩輪によりてぞ輝く、と。

五 青年よ、汝愚かなり、汝は望むべからざるものを見めり、思ふに汝死せんも餘儀なし、汝は月と日を得ることなればなり。

六 「月と日との二が彼處の軌道を往來するが見らる。「されど已に死したるもの

は見らるゝことなし。泣くものゝ中何れか愚なりや。

七 青年よ、汝は眞實を語れり、我こそ泣くものゝ中、更に愚なるものなり。恰も幼童の月を求めて泣く如く、已に死したるもの求めたり。

八 蘇油を注ぎたる火の如く、實に憂の火に焼かれたる我を、水を以て注ぐ如く彼は一切の苦を消したり。

九 よく彼は我が心臓に入りたる憂の矢を抜きたり。我憂に沈める時、子ゆゑの憂を取り除けり。

一〇 矢の拔かれたるその我は清冷となり、涅槃せり、青年よ、汝の言を聞きて我悲しまず、我泣かずと。

一一 天神よ、汝は乾闥婆なりや、又帝釋ブリンダダなりや、汝は何人なりや、誰の子なりや、如何にしてかこの我を知れるや、と。

一二 汝は子を葬場に於て自ら荼毘し、且つ泣き且つ嘆く、「我は汝の其の子なり」、その我は善業を作して三十三天の侶となれり。

一三 我は己の家にて多く又少しの布施を見ず、又その如き布薩をも見ず。汝は如何なる業によりて天界に行きたるや。

一四 我は己が家にて病み苦しみ、患ひ、病みたるが、無垢にして疑を度したる佛、無比の慧ある善逝を見たり。

一五 その我は歡喜し、心喜び、如來に合掌せり。我はこの善業をなして三十三天の侶となれり。

一六 げに希有なり、未曾有なり。合掌に此の如き果報あることや。我も亦歡喜し、心喜びて即刻佛に歸依せん。

一七 汝心喜びて即刻佛に歸依せよ、法と僧に歸依せよ。直ちに無缺の五學處を修

學して受持せよ。

一八 速かに殺生を離れ世間に於て與へられざるもの〔取ること〕を避け飲酒せず、妄語をなさず自己の妻にて満足せよ。

一九 夜叉よ汝は我が利益を思ひ天神よ汝は我が饒益を思ふ。我は汝の言に従はん汝は我が師なり。

二〇 無上なる佛と法と人天の僧とに我歸依す。

二一 我速かに殺生を離れ世間に於て與へられざるもの〔取ること〕を避け飲酒せず、妄語をなさず自己の妻にて満足せん。

八四 セーリツサカ天宮

一 その時夜叉と商人との會合が何處にありしや又彼等は互に如何に話をなしたるやそを悉く聞け。

二 バーヤーシと名づくる王の名聲あり地居天の仲間となりたるあり彼は喜びて己が天宮にて人間にあらずして人間と談れりと。

三 疑はしき森非人處難路水なき食物なき甚難道砂道の眞中に於て鳥を恐れ人々道に迷ひたり。

四

此處には果實なく、根をつけたるものなし、身の養ひとなるものなく、何ぞ食物あらん。塵埃と砂と赫熱の暑さ以外に「何物もなし」。

五

こは沙漠にして、熱せられたる錫の如く、慘たること奈落の如し。古くより兇漢の住せる地域にして、淒愴たり。

六

汝等は如何なる理由によりて、何を望みて此の地に共に入り來りたるや。利得のため、或は恐怖のためなりや、又は道に迷ひたるやと。

七 我等は摩揭陀、鷲伽に於ける隊商主達にして多くの財寶を載積せり。その我

等は財を望み、巨利を求めて辛頭、ゾーギーラ地方に行きたり。

八 日中は渴に堪えず、牛の同情を求め、夜は非時に道を行き迅速に皆は進みぬ。

九 道に迷ひ、道を失ひ、暗に迷ひ、道に混迷し、森、難道、砂道の眞中にて方角分らず、心錯亂せり。

一〇 而して、夜又よ、此の曾て見たることなき勝れたる天宮と汝とを見て、それより

勝れたる生命を求めつゝある我等は見已りて慶喜し歡喜し踊躍せり、と。

一一 海を超えて此の砂道、杖や杭によりて行く險路、川や山の難處を汝は財を求めて諸方に行け。

一二 異邦の人を見つゝ他國の領土に行き見聞したる珍奇なることを汝等より我等聞かんと。

一三 若者よ、これより更に珍らしきことは我等聞きたることなし、見たることなし。一切の過去せる人々の無比の容色あるを見て我等満足せり。

一四 空中に蓮池が流れ、多くの花、多くの白蓮あり、樹々は常に果實をつけ、好香は香よく漾ふ。

一五 琉璃の柱は百本あり、高く建てられ又水精、珊瑚の廣き柱頭あり、車渠と眞珠のものあり、此等の柱はデヨーティラサ寶石造りなり。

一六 無比の强大なる千本の柱あり其の上方に此の天宮あり。寶石の間は黃金の蛇腹を鏤め、輝く板を以て巧に掩はる。

一七 こは最上の閻浮檀金にして、輝ける宮殿は階段あり、堅固、美麗にして巧に結合せられ、甚だ楽しく、可意なり。

一八 寶石の間には多くの飲食あり、汝は天女の群に圍繞され、小鼓、太鼓等の樂器響き、汝は禮拜せられ、稱讚恭敬せらる。

一九 その汝は天女の群に興じ、可意なる天宮の宮殿の入口にて愉しむ。一切の徳

を具し、不可思儀の威神あり。恰も毘沙門天王がナリンニー(戯場)に於ける如し。

二〇

汝は天なりや、夜叉なりや、又人間となれる天王なりや。商人、隊商主等は彼に問へり、語れ、汝夜叉は何と名づくるやを、と。

二一

我はセーリッサカと名づくる夜叉なり、險路、砂道にある守護者、毘沙門天王の僕にして此の地方を守護するなり、と。

二二

こは汝に自然に得られたるや、機熟せるより生じたるや、自ら作りたるや、或は天によりて與へられたるや。商人、隊商主等は彼に問へり、如何にしてか此の美しき天宮は汝に得られたるや、と。

二三

こは我に自然に得られたるに非ず、機熟したるより生じたるに非ず、自ら作りたるに非ず、天によりて與へられたるに非ず、自己の非惡業、福業によりて此の美しき天宮は我に得られたるなり、と。

二四

汝に如何なる作務、如何なる梵行ありや、こは如何なる善行の果報なりや。商人、隊商主等は彼に問へり、如何にしてか此の天宮は汝に得られたるや、と。

二五

我にバーヤーシといふ名ありき。拘薩羅國を統治せる時、虛無の見あり、吝に

して邪惡斷滅論者なりき。

二六 その時沙門鳩摩羅迦葉あり、多聞能辯にして勝れたり。彼はその時我に法談をなし、我が見の亂を除去したり。

二七 我は彼のその法談を聞いて優婆塞たることを宣したり。殺生を離れ世間に於て與へられざるもの_を取ることを避け、飲酒せず、妄語をなさず、自己の妻にて満足せり。

二八 我にこの作務あり、この梵行あり、こはこの善行の果報なり。此等の非惡業、福業によりて我に此の天宮得られたりと。

二九 有慧の人はげに眞實を語れり。賢者の言は異ならず。福業者は何處にてもその行く處に於て欲を満足して愉しむ。

三〇 何處にても憂悲と殺傷と縛と雜染のある處、其處へ惡業者は行き惡趣より脱るゝことなしと。

三一 混迷し、此の一瞬に濁亂せる人あり。若者よ、此の人と汝との懊惱は何によりてかあるや、と。

三二 汝等よ、此等はシリーサ樹林なり、天香は香好く漾ひ、それらは晝も夜も黒闇を

破しつゝ此の天宮に漾ふ、

三三 百年過ぎて此等の樹の一々の實の莢^{さや}破る。人間に百年過ぎてそれより此の

天群に生まるなり。

三四 我は五百年の間、此の天宮に住し已りて壽命盡き、福業盡きたるにより死沒せん。此の憂によりて惱亂せるなり、と。

三五 長き間無比の天宮を得て、その如き彼は如何にしてか悲しむべきや。短壽に生れたる少福の者こそ悲しむべし、と。

三六 汝等が我に愛語を語れるそは我に適當なる誠告せらるべきことなり、汝等よ、汝等は我に守護せられ、欲するがまゝに安穩に行くべし、と。

三七 我等は財を望み、巨利を求めて辛頭、ソーギーラ地方に行きて商ひたるに應じ充分なる施捨をなし、セーリッサ大祭をなさん、と。

三八 セーリッサ大^{供養}のみをなすなかれ。汝等の言へることは一切その如くな
るべし。惡業を避け、施等の善法を行することを修學せよ、と。

三九 此の僧伽に一優婆塞あり、多聞にして戒禁を具足し、信あり、施捨し、善美、聰明、知足、有知なり。

四〇

故意に妄語をなさず他を殺傷することを思はず、他を毀傷する兩舌をなさず、柔軟語、親愛の語をなすべし。

四一

彼は恭敬謙讓、習練あり、非惡にして增上戒に於て清淨なり淨行にして父母を正しく扶養せり。

四二

彼は父母のために財を求めて自らのためにせざる如し。父母の死後は涅槃に心を傾け、梵行を行すべし。

四三

端直、無曲、無欺、無瞞にして奸策を以て語らざるべし。是の如く善行をなし、法に住立せる彼は如何にしてか惡を得んや。

四四

彼優婆塞のために我は自ら現はれたり。商人よ、それによりて汝等は法を見よ、彼なかりせば汝等は森の中にて闇に混迷し、道に迷ひ灰となるべし。——彼を輕蔑する他の人と交はるは容易なり、善人と交はるは幸福なり、と。

四五

彼は如何なる名なりや、又如何なる業をなしたるや、如何なる名をつけられ、その姓は何なりや。夜叉よ、我等も彼に見えんと思ふ。汝の哀愍して此處に來り、汝の愛好するものには利なればなり。

四六

理髪師サンバワといふ名をつけられ、櫛をもちて生活せるかの優婆塞は汝等

に仕役する者なりと知れ、されど彼を輕侮する勿れ、彼は善人なりと。

四七 夜叉よ、汝が話したる所を我等は知る。されど彼は斯々なりとは知らず。夜又よ、我等も亦彼を供養せん、汝の勝れたる言を聞きて、と。

四八 此の隊商の人々は若きも老ひたるも中年のものも總て彼等は天宮に昇れ、客なるものよ、福業の果を見よ、と。

四九 其處にある彼等總ては我先にと其處にゐる理髮師を尊敬して彼等總ては恰もワーサワ(帝釋)のマサッカサーラの如き天宮に昇りぬ。

五〇 其處にある彼等總ては我先にと優婆塞たることを宣したり。彼等は殺生を離れ、世間に於て與へられざるもの〔取ること〕を避け、飲酒せず、妄語をなさず、自己の妻にて満足せり。

五一 其處にある彼等總ては我先にと優婆塞たることを宣し已りて隊商は夜叉の神通を再三認め隨喜しつゝ去れり。

五二 彼等は財を望み、巨利を求めて辛頭、ソーギーラ地方へ行きて商ひたるに感じて充分なる利を得、巴蓮弗に恙なく歸れり。

五三 彼等は安全に自己の家に行きて妻子を具し、歡喜愉悦せり。セーリッサ大

供養をなし、セーリツサカ樓閣を構築せり。

五四 善人との交りは斯くの如し、法功德者との交りは大利益あり。一人の優婆塞によりて總ての人々は幸福となれりと。

八五 整備天宮

一 此の天宮は高く、琉璃の柱あり、方十二由旬あり、重閣は高さ七百由旬あり、地には黃金の板を敷きて美し。

二 汝は其處に坐し、飲み食し、美妙なる天の箜篌奏せられ、天味、五種の欲は満たされ、黃金の飾りをつけたる天女は舞へり。

三 何によりてか汝に是の如き容色あり、何によりてか汝は此處に善果を享け、又可意なる財寶汝に生するや。

四 天神よ、大威神ある者よ、我汝に問ふ、汝人間たりし時、如何なる福業をかなしたるや、何によりてか汝是の如き光輝あり、又汝の容色は十方に輝くや、と。

五 目連に問はれたるその天子は悦びに満ち、問を問はれて説明せり、こは如何なる業の果なるやを。

六 亂雜なる華鬘をよく整へて善逝の塔に立てゝ、我、天の欲を満足し、大神通あり、

大威神ある者となり、

七 それによりて我に是の如き容色あり、それによりて我は此處に善果を享け、又可意なる財寶生ずるなり。

八 それによりて我に是の如き光輝あり、我が容色は十方に輝くなり、と。

攝頌

二貪窮、二精舍、雇傭者、牧牛、健陟、煌輝耳環、セーリツサカ、整備、人々に第七品なり。

第四誦品

補正表

補正表

三六四	〃	三六一	三五九	三五八	三五七	三五〇	三七七
4	13 ~ 14	6	13 ~ 15	13 5 14	2	2 ~ 3	1 5
結縛ある多くの此等の者	我は所間に對して語り曰ふ。	不動搖者にこの「四」功德ありと、我は所間に對して語り曰ふ。	我は「鉤引者を」貪求と曰ひ大暴流と「曰ひ」、⑥吸引と曰ひ熱望と「曰ひ」、遍計「と所縁」と「曰ひ」、遍計「と曰ひ」、老いす。	私は「鉤引者を」貪求と曰ひ大暴流と「曰ひ」、⑥吸引と曰ひ熱望と「曰ひ」、遍計「と所縁」と「曰ひ」、老いす。	我は貪求を大暴流と曰ふ、吸引を熱望と曰ふ、所縁と遍計とをば	彼は一切諸法に於て、あらゆる見も聞も覺も破軍し居れり。見も聞も覺も破軍し居れり。	彼等にはいかなる眞理説ありや。
彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。	彼は見・聞・覺せし一切諸法に於て、破〔煩惱〕軍し居れり。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。				

補正表

三六四	〃	三六一	三五九	三五八	三五七	三五〇	三七七
4	13 ~ 14	6	13 ~ 15	13 5 14	2	2 ~ 3	1 5
結縛ある多くの此等の者	我は所間に對して語り曰ふ。	不動搖者にこの「四」功德ありと、我は所間に對して語り曰ふ。	我は「鉤引者を」貪求と曰ひ大暴流と「曰ひ」、⑥吸引と曰ひ熱望と「曰ひ」、遍計「と所縁」と「曰ひ」、老いす。	我は貪求を大暴流と曰ふ、吸引を熱望と曰ふ、所縁と遍計とをば	彼は一切諸法に於て、あらゆる見も聞も覺も破軍し居れり。見も聞も覺も破軍し居れり。	彼等にはいかなる眞理説ありや。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。
彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。	彼は見・聞・覺せし一切諸法に於て、破〔煩惱〕軍し居れり。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。

三六四	〃	三六三	三六二	三五〇	三五八	三五〇	三六六
4	14 ~ 15						4
結縛ある多くの此等の者	「四」功徳ありと、我は所間に對して語り曰ふ。	不動搖者に問はれて、この「四」功徳ありと、我は所間に對して語り曰ふ。	我は「鉤引者を」貪求と曰ひ大暴流と「曰ひ」、⑥吸引と曰ひ熱望と「曰ひ」、遍計「と所縁」と「曰ひ」、老いす。	我は貪求を大暴流と曰ふ、吸引を熱望と曰ふ、所縁と遍計とをば	彼は一切諸法に於て、あらゆる見も聞も覺も破軍し居れり。見も聞も覺も破軍し居れり。	彼等にはいかなる眞理説ありや。	彼等の中のいづれが果し世間に染せず、自ら呵すべきなし。
「⑧愛にあらゆる法の察悟者（阿羅漢）、及びあらゆる有學と〔善〕及び爰に一般の有學、凡夫、現世に於て雜言なき度る。	「⑧愛にあらゆる法の察悟者（阿羅漢）、及び爰に一般の有學、凡夫、現世に於て雜言なき度る。	「⑧愛にあらゆる法の察悟者（阿羅漢）、及び爰に一般の有學、凡夫、現世に於て雜言なき度る。	「⑧愛にあらゆる法の察悟者（阿羅漢）、及び爰に一般の有學、凡夫、現世に於て雜言なき度る。	「⑧愛にあらゆる法の察悟者（阿羅漢）、及び爰に一般の有學、凡夫、現世に於て雜言なき度る。	「⑧愛にあらゆる法の察悟者（阿羅漢）、及び爰に一般の有學、凡夫、現世に於て雜言なき度る。	「⑧愛にあらゆる法の察悟者（阿羅漢）、及び爰に一般の有學、凡夫、現世に於て雜言なき度る。	「⑧愛にあらゆる法の察悟者（阿羅漢）、及び爰に一般の有學、凡夫、現世に於て雜言なき度る。

三六四	〃	三六三	三六二	三五〇	三五八	三五〇	三六六
4	14 ~ 15						4
結縛ある多くの此等の者	「我は欲を欲せざる雄者（佛）ありと聞きて	雄者よ、我は欲を欲せざる者ありと聞きて	沙門・婆羅門は渴愛を	沙門・婆羅門は渴愛を	沙門・婆羅門は渴愛を	沙門・婆羅門は渴愛を	沙門・婆羅門は渴愛を
「我は欲を欲せざる雄者（佛）ありと聞きて	雄者よ、我は欲を欲せざる者ありと聞きて	沙門・婆羅門は渴愛を	沙門・婆羅門は渴愛を	沙門・婆羅門は渴愛を	沙門・婆羅門は渴愛を	沙門・婆羅門は渴愛を	沙門・婆羅門は渴愛を

のために、
△註②に追加▽ために、
南傳四四・一七頁追記參照。

「⑧愛にあらゆる法の察悟者（阿羅漢）、及び爰に一般の有學、凡夫、現世に於て雜言なき度る。

補正表

經集對照表

Sn. 740	cf. Ud. Trṣṇā 12	Sn. 803	六度集 8. 51a, b
Sn. 741	Ud. Trṣṇā 18 cf. Ud. Satkāra 16 ; Peṭaka. 47	Sn. 804	Peṭaka. 9
Sn. 744	MNdA. 408	Sn. 807	Peṭaka. 9
Sn. 746	Netti 43	Sn. 818	Peṭaka. 8
Sn. 759	cf. GDhp. 37	Sn. 909	智度 27. 259b
Sn. 767	Peṭaka. 9	Sn. 950	cf. Dhp. 367
Sn. 768	Peṭaka. 46 cf. Ud. Prakīrṇaka 6	Sn. 962	cf. Dhp. 239
Sn. 771	cf. Dhp. 369	Sn. 1033	Peṭaka. 13
Sn. 774	Peṭaka. 7f.	Sn. 1035	Peṭaka. 84
Sn. 777	Peṭaka. 7	Sn. 1037	Peṭaka. 84
Sn. 796	六度集 8. 51a, b	Sn. 1038	Peṭaka. 85
Sn. 797	六度集 8. 51a, b	Sn. 1042	cf. GDhp. 183
Sn. 798	六度集 8. 51a, b	Sn. 1051	Thag. 152
Sn. 799	六度集 8. 51a, b	Sn. 1106	集異門 7. 396a
Sn. 800	六度集 8. 51a, b	Sn. 1107	集異門 7. 396a
Sn. 801	六度集 8. 51a, b	Sn. 1117	Ap. 487
Sn. 802	六度集 8. 51a, b	Sn. 1118	Ap. 488
		Sn. 1119	Ap. 488 ; Peṭaka. 45

略名表

Ud. Bhikṣu=Udānavarga Bhikṣuvarga ; Ud. Puṣpa=Udānavarga Puṣpavarga 以下準知； GDhp.=Gān=dhārī Dharmapada ; Peṭaka.=Peṭakopadesa ; Mahāpari.=Mahāparinirvāṇa-sūtra Teil I (Waldschmidt)

偈對照表追加

Sn. 1	GDhp. 82 cf. Ud. Bhikṣu 62~80	Sn. 424	cf. GDhp. 344
Sn. 2	Ud. Puṣpa 21 cf. GDhp. 83 ; Ud. Bhikṣu 56~61, 68, 69	Sn. 432	cf. GDhp. 260
Sn. 3	GDhp. 84 cf. Ud. Bhikṣu 73	Sn. 450	Ud. Vācā 11 ; Peṭaka. 69 ; Khp A. 135
Sn. 4	GDhp. 85 cf. GDhp. 83 ; Ud. Bhikṣu 71	Sn. 451	cf. Ud. Vācā 12 ; 法句上 562a
Sn. 5	GDhp. 81 ; Ud. Bhikṣu 21	Sn. 453	cf. Ud. Vācā 13 ; 法句上 562a
Sn. 8	GDhp. 86 cf. Ud. Bhikṣu 55	Sn. 454	Ud. Vācā 14 ; 法句上 562a
Sn. 9	GDhp. 87	Sn. 471	Ud. 74 ; Peṭaka. 24
Sn. 14	cf. GDhp. 88	Sn. 514	婆須蜜所集 6. 769b
Sn. 15	GDhp. 88	Sn. 531	CNd. 187, 201, 355
Sn. 16	GDhp. 89	Sn. 550	Peṭaka. 50
Sn. 17	GDhp. 90	Sn. 558	M. II, 143
Sn. 33	cf. Peṭaka. 55	Sn. 568	Mvu. III, 426
Sn. 34	Peṭaka. 55	Sn. 569	Mvu. III, 426
Sn. 45	cf. Ud. Droha 13	Sn. 574	cf. Ud. Anitya 16
Sn. 46	cf. Ud. Droha 14	Sn. 576	GDhp. 147 ; Ud. Anitya 11
Sn. 50	Peṭaka. 47	Sn. 577	Ud. Anitya 12
Sn. 83	cf. Mahāpari. 258	Sn. 589	cf. Ud. Anitya 30
Sn. 84	cf. Mahāpari. 258	Sn. 621	Ud. Brāhmaṇa 49
Sn. 87	cf. Mahāpari. 260	Sn. 622	Ud. Brāhmaṇa 58
Sn. 88	cf. Mahāpari. 260	Sn. 628	出曜 30. 771 b ; 法集 4. 798b
Sn. 89	cf. Mahāpari. 260	Sn. 635	Ud. Brāhmaṇa 54
Sn. 90	cf. Mahāpari. 262	Sn. 641	Ud. Brāhmaṇa 45
Sn. 165	cf. GDhp. 39	Sn. 642	Ud. Brāhmaṇa 44
Sn. 171	Kv. 367	Sn. 643	Ud. Brāhmaṇa 48
Sn. 182	Ud. Śraddhā 3 cf. 法句上 560b ; 出曜 12. 672b	Sn. 647	Ud. Brāhmaṇa 47
Sn. 184	Ud. Śraddhā 5 ; 毘婆沙 20. 149a ; 訚婆沙 4. 442c cf. 法句上 560 bf.	Sn. 655	GDhp. 8
Sn. 186	Ud. Śraddhā 4 ; 法句上 560b	Sn. 656	cf. GDhp. 7
Sn. 211	M. I, 171 ; Mvu. III, 118, 326 cf. Dhp. 353 ; V. I, 8 ; Ud. Tathāgata 1	Sn. 657	Ud. Vācā 2 ; 長阿 19. 126a, b ; 櫻炭 2. 286a ; 起世 4. 329c ; 起世因本 4. 384c ; 入大乘上 59c
Sn. 257	Dhp. 205 ; 出曜 25. 742c ; 法集 3. 792a	Sn. 658	Ud. Vācā 3 ; 長阿 19. 126a, b ; 櫻炭 2. 286a ; 起世 4. 329c ; 起世因本 4. 384c
Sn. 329	Ud. Śruta 18 ; 出曜 21. 722b	Sn. 659	Ud. Vācā 4 ; 長阿 19. 126a, b ; 櫻炭 2. 286a ; 起世 4. 329c ; 起世因本 4. 384c
Sn. 330	Ud. Śruta 19 ; 出曜 21. 722b		Ud. Vācā 5 ; 長阿 19. 126a, b ; 櫻炭 2. 286a ; 起世 4. 329c ; 起世因本 4. 384c
Sn. 332	cf. Ud. Apramāda 33	Sn. 660	Ud. Vācā 6 ; 長阿 19. 126a, b ; 櫻炭 2. 286a ; 起世 4. 329c ; 起世因本 4. 384c
Sn. 333	Ud. Trīṣṇā 14		Ud. Vācā 7 ; 長阿 19. 126a, b ; 櫻炭 2. 286a ; 起世 4. 329c ; 起世因本 4. 384c
Sn. 340	cf. GDhp. 326	Sn. 661	Ud. Vācā 1
Sn. 365	Peṭaka. 53	Sn. 728	Thag. 152
Sn. 420	cf. GDhp. 180		

經集對照表

Sn. 1137	Sn. 1141; CNd. 294; 296	Sn. 1144	CNd. 304; 305
Sn. 1138	CNd. 296; 297	Sn. 1145	CNd. 305; 308
Sn. 1139	CNd. 297; 298	Sn. 1146	CNd. 308; 309
Sn. 1140	CNd. 298f; 299	Sn. 1147	CNd. 309f; 312
Sn. 1141	Sn. 1137; CNd. 299f; 301	Sn. 1148	CNd. 312; 315
Sn. 1142	CNd. 301; 302	Sn. 1149	CNd. 315; 316
Sn. 1143	CNd. 302f; 304		

本表に掲げたる書名は略名にして具名は次の如し。

- (1) 巴利文の具名は凡例参照。
- (2) 梵文, Bodhis.=Bodhisattvabhūmi (Wogihara), Divy.=Divyāvadāna (Cowell), Lal.=Lalitavistara (Lefmann), Mvu.=Mahāvastu (Senart)
- (3) 漢文, 具名の次に(大正.....)とせるはその書の大正藏經に於ける所在を示す。有部雜事=有部毘奈耶雜事(大正24), 有部尼律=有部苾芻尼毘奈耶(大正23), 有部破僧事=有部毘奈耶破僧事(大正24), 有部藥事=有部毘奈耶藥事(大正24), 有部律=有部毘奈耶(大正23), 義足=義足經(大正4), 俱舍=俱舍論(大正29), 俱舍釋=俱舍釋論(大正29), 過去現在=過去現在因果經(大正3), 五分=五分律(大正22), 五分戒本(大正22), 五分尼戒本=五分比丘尼戒本(大正22), 金色王=金色王經(大正3), 金色童子=金色童子因緣經(大正14), 三法度=三法度論(大正25), 四分=四分律(大正22), 舍利弗毘曇=舍利弗阿毘曇論(大正28), 十誦=十誦律(大正23), 十誦戒本=十誦比丘戒本(大正23), 十誦尼戒本=十誦比丘尼戒本(大正23), 出曜=出曜經(大正4), 順正理=順正理論(大正29), 諸法集要=諸法集要經(大正17), 正法念處=正法念處經(大正17), 成實=成實論(大正32), 雜阿=雜阿含經(大正2), 增一含=增一阿含經(大正2), 大莊嚴=方廣大莊嚴經(大正3), 大婆沙=大毘婆沙論(大正27), 智度=大智度論(大正25), 中阿=中阿含經(大正1), 中本起=中本起經(大正4), 長阿=長阿含經(大正1), 長爪梵志=長爪梵志請問經(大正14), 八犍度=八犍度論(大正26), 般泥洹=般泥洹經(大正1), 鼻奈耶(大正24), 毘婆沙=阿毘曇毘婆沙論(大正28), 稽婆沙=稽婆沙論(大正28), 菩支佛因緣=菩支佛因緣論(大正32), 頻毘娑羅=頻毘娑羅王諸佛供養經(大正2), 佛性=佛性論(大正31), 別雜=別譯雜阿含經(大正2), 發智=發智論(大正26), 法句=法句經(大正4), 法句喻=法句譬喻經(大正4), 法集=法集要頌經(大正4), 本行集=佛本行集經(大正3), 瑜伽=瑜伽師地論(大正30), 立世毘曇=立世阿毘曇論(大正32)。

表中の略名の次にある数字は

- (1) 巴利文, 梵文にありては Sn. Dhp. Thag. Thīg. は偈の番號を示し, 其他は巻數及び頁數を示す。
- (2) 漢文にありては中含, 雜含, 別雜は大正藏經の經番號及び頁數を示し, 其他は巻數及び大正藏經の頁數を示す。

經集對照表

Sn. 1061	CNd. 102; 110	Sn. 1101	CNd. 197; 200
Sn. 1062	CNd. 110; 111	Sn. 1102	CNd. 200; 201f
Sn. 1063	CNd. 111f; 115; 大婆沙 78. 401b; 毘婆沙 40. 299bf; 離婆沙 8. 472c	Sn. 1103	CNd. 202; 203
Sn. 1064	MNd. 32; CNd. 115; 117; Kv. 194; 大婆沙 78. 401b; 毘婆沙 40. 299c; 離婆沙 8. 473a; 成實 1. 244b	Sn. 1104	CNd. 204; 205f
Sn. 1065		Sn. 1105	CNd. 207; 211
Sn. 1066	CNd. 120; 122; Netti. 166	Sn. 1106	A. I, 134; CNd. 211; 214; 雜含 783. 256a
Sn. 1067	CNd. 122; 123f; Netti. 166	Sn. 1107	A. I, 134; CNd. 214; 215; 雜含 783. 256a
Sn. 1068	CNd. 124; 125; Netti. 166	Sn. 1108	S. I, 39; CNd. 215; 216; 雜含 1010. 264b
Sn. 1069	CNd. 126; 128	Sn. 1109	S. I, 39; CNd. 216; 217; 雜含 1010. 264b
Sn. 1070	CNd. 128; 130f	Sn. 1110	CNd. 217; 218; 瑜伽 19. 386b
Sn. 1071	CNd. 131; 132	Sn. 1111	CNd. 218; 220; 瑜伽 19. 386bf
Sn. 1072	CNd. 133; 134	Sn. 1112	CNd. 221; 224
Sn. 1073	CNd. 134f; 136	Sn. 1113	CNd. 224f; 226; 大婆沙 4. 17a; 同 137. 706a; 毘婆沙 2. 11c; 成 實 12. 339a
Sn. 1074	CNd. 136; 138; DA. II, 514	Sn. 1114	CNd. 226; 232
Sn. 1075	CNd. 138; 139; 智度 4. 85b	Sn. 1115	CNd. 232; 234
Sn. 1076	CNd. 139; 141; 智度 4. 85b	Sn. 1116	CNd. 235; 244
Sn. 1077	CNd. 142; 143	Sn. 1117	CNd. 244; 245
Sn. 1078	CNd. 143; 145f	Sn. 1118	CNd. 245; SnA. 588
Sn. 1079	CNd. 146; 148	Sn. 1119	MNd. 438; CNd. 245; 257; Kv. 64; Netti. 7; Vm. 656
Sn. 1080	CNd. 148f; 151	Sn. 1120	CNd. 258; 259f
Sn. 1081	CNd. 151; 153f	Sn. 1121	CNd. 260; 263
Sn. 1082	CNd. 154; 157	Sn. 1122	CNd. 263; 264
Sn. 1083	CNd. 157; 160	Sn. 1123	CNd. 264f; 266
Sn. 1084	Sn. 1135; CNd. 161; 162	Sn. 1124	Sn. 1006—1007; CNd. 271
Sn. 1085	CNd. 162f; 164	Sn. 1125	Sn. 1007—1008; CNd. 271
Sn. 1086	CNd. 164; 166	Sn. 1126	CNd. 271; 273
Sn. 1087	CNd. 166; 168	Sn. 1127	CNd. 273; 274
Sn. 1088	CNd. 169; 170	Sn. 1128	CNd. 274; 275
Sn. 1089	CNd. 170; 171	Sn. 1129	CNd. 275f; 276
Sn. 1090	CNd. 171; 173	Sn. 1130	CNd. 276f; 278
Sn. 1091	CNd. 173; 175	Sn. 1131	CNd. 278; 281
Sn. 1092	CNd. 176; 181f	Sn. 1132	CNd. 281f; 284
Sn. 1093	CNd. 182; 183	Sn. 1133	CNd. 284; 286; MA. I, 35
Sn. 1094	CNd. 183f; 185	Sn. 1134	CNd. 286; 288
Sn. 1095	CNd. 185; 186	Sn. 1135	Sn. 1084; CNd. 288; 289f
Sn. 1096	CNd. 187; 189f	Sn. 1136	CNd. 290; 294
Sn. 1097	CNd. 190; 192		
Sn. 1098	CNd. 192; 193f		
Sn. 1099	CNd. 194; 195		
Sn. 1100	CNd. 195; 196		

經 集 對 照 表

Sn. 992	CNd. 3		19. 386b
Sn. 993	CNd. 3	Sn. 1034	CNd. 15; 16; Netti. 12; 71; 大婆 沙 73. 379b; 毘婆沙 39. 285b;
Sn. 994	CNd. 3		鞞婆沙 6. 454c; 瑜伽 19. 386b
Sn. 995	CNd. 3		
Sn. 996	CNd. 3f	Sn. 1035	CNd. 16f; 20; Netti. 13; 71; MA. 1, 22; SA. II, 253; PtśA. I, 14;
Sn. 997	CNd. 4		DhsA. 351; 大婆沙 44. 230b;
Sn. 998	CNd. 4		同 73. 379b; 毘婆沙 39. 285b;
Sn. 999	CNd. 4		鞞婆沙 6. 455a; 瑜伽 19. 386b
Sn. 1000	CNd. 4	Sn. 1036	CNd. 20; 21; Netti. 14; 71; 瑜伽 19. 386b
Sn. 1001	CNd. 4		
Sn. 1002	CNd. 4	Sn. 1037	CNd. 21; 23; Netti. 14; 17; 71; 瑜伽 19. 386b
Sn. 1003	CNd. 4		
Sn. 1004	CNd. 4	Sn. 1038	S. II, 47; 49; J. IV, 260; CNd. 23; 26; Netti. 17; DhpA. III, 228;
Sn. 1005	CNd. 4		雜含 345. 95b; 智度 3. 82c; 喪 伽 19. 386c
Sn. 1006	Sn. 1124; CNd. 5		CNd. 26; 32; Netti. 17; 瑜伽 19. 386c
Sn. 1007	Sn. 1124—1125; CNd. 5		
Sn. 1008	Sn. 1125; CNd. 5	Sn. 1039	A. III, 399; 401; CNd. 33; 34f; 雜含 1164. 310b
Sn. 1009	CNd. 5		
Sn. 1010	CNd. 5	Sn. 1040	CNd. 35; 41
Sn. 1011	CNd. 5		A. III, 399; 401; CNd. 35; 41; 雜含 1164. 310b
Sn. 1012	CNd. 5	Sn. 1041	
Sn. 1013	CNd. 5		
Sn. 1014	CNd. 5	Sn. 1042	
Sn. 1015	CNd. 5		
Sn. 1016	CNd. 6	Sn. 1043	Sn. 458; CNd. 42; 50
Sn. 1017	CNd. 6	Sn. 1044	CNd. 50; 53
Sn. 1018	CNd. 6	Sn. 1045	CNd. 53f; 55f
Sn. 1019	CNd. 6	Sn. 1046	CNd. 56; 59
Sn. 1020	CNd. 6	Sn. 1047	CNd. 59; 61
Sn. 1021	CNd. 6	Sn. 1048	A. I, 133; II, 45f. CNd. 61; 66; 雜含 982. 255c
Sn. 1022	CNd. 6	Sn. 1049	CNd. 62; 76
Sn. 1023	CNd. 6	Sn. 1050	Sn. 728; CNd. 76; 78
Sn. 1024	CNd. 6	Sn. 1051	Sn. 728; CNd. 78; 80f
Sn. 1025	CNd. 6	Sn. 1052	CNd. 81; 85
Sn. 1026	CNd. 7	Sn. 1053	CNd. 85; 88
Sn. 1027	CNd. 7	Sn. 1054	CNd. 88; 90
Sn. 1028	CNd. 7	Sn. 1055	CNd. 90; 92
Sn. 1029	CNd. 7	Sn. 1056	CNd. 92f; 95
Sn. 1030	CNd. 7; DA. I, 155; MA. II, 274	Sn. 1057	CNd. 96; 97
Sn. 1031	CNd. 7	Sn. 1058	CNd. 97; 99f
Sn. 1032	CNd. 8; 9; Netti. 10; 70; 瑜伽 19. 386b	Sn. 1059	CNd. 100; 104; MA. I, 173
1033	CNd. 9; 15; Netti. 11; 70; 瑜伽	Sn. 1060	CNd. 104; 107

經集對照表

Sn. 911	MNd. 327; 328; 義足下 183b	Sn. 951	MNd. 437; 440; 義足下 189c
Sn. 912	MNd. 329; 330; 義足下 183b	Sn. 952	MNd. 440; 441; 義足下 189c
Sn. 913	MNd. 330; 333; 義足下 183b	Sn. 953	MNd. 442; 443; 義足下 189c
Sn. 914	MNd. 333; 338; 義足下 183b	Sn. 954	MNd. 443; 444; 義足下 189c
Sn. 915	MNd. 339; 344; 義足下 184b	Sn. 955	MNd. 445; 447; DhpA. III, 226; 義足下 186b
Sn. 916	MNd. 344; 349; 義足下 184b	Sn. 956	MNd. 447; 457; 義足下 186b
Sn. 917	MNd. 349; 350; 義足下 184b	Sn. 957	MNd. 457; 465; 義足下 186b
Sn. 918	MNd. 350; 351; 義足下 184b	Sn. 958	MNd. 465; 466; 義足下 186b
Sn. 919	MNd. 351; 352; 義足下 184b	Sn. 959	MNd. 466; 467; 義足下 186b
Sn. 920	MNd. 353; 354; 義足下 184b	Sn. 960	MNd. 467; 472; 義足下 186b
Sn. 921	MNd. 354; 365; 義足下 184b	Sn. 961	MNd. 472; 478; 義足下 186b
Sn. 922	MNd. 365; 369; 義足下 184b	Sn. 962	MNd. 478; 479; 義足下 186b; 佛性論 2. 800c
Sn. 923	MNd. 369; 371; 義足下 184b	Sn. 963	MNd. 479; 482
Sn. 924	MNd. 371; 373; SA. II, 108; 義足下 184c	Sn. 964	MNd. 482; 485; 義足下 186c
Sn. 925	MNd. 373; 377; 義足下 184c	Sn. 965	MNd. 485; 486; 義足下 186c
Sn. 926	MNd. 377; 380; 義足下 184c	Sn. 966	MNd. 486; 487; 義足下 186c
Sn. 927	MNd. 381; 383; 義足下 184c	Sn. 967	MNd. 487; 489; 義足下 186c
Sn. 928	MNd. 384; 385; 義足下 184c	Sn. 968	MNd. 489; 491; 義足下 186c
Sn. 929	MNd. 385; 389; 義足下 184c	Sn. 969	MNd. 491; 492; 義足下 186c
Sn. 930	MNd. 389; 394; 義足下 184c	Sn. 970	MNd. 492; 495; 義足下 186c
Sn. 931	MNd. 394; 396; 義足下 184c	Sn. 971	MNd. 495; 498; 義足下 186c
Sn. 932	MNd. 396; 398; 義足下 184c	Sn. 972	MNd. 498; 502; 義足下 186c
Sn. 933	MNd. 398; 399; 義足下 184c	Sn. 973	MNd. 503; 505; 義足下 186c
Sn. 934	MNd. 400; 401; 義足下 184c	Sn. 974	MNd. 505; 506; 義足下 186c
Sn. 935	MNd. 402; 406; 義足下 189b	Sn. 975	MNd. 506f; 510; 義足下 186c
Sn. 936	MNd. 406; 409; 義足下 189b	Sn. 976	CNd. 1
Sn. 937	MNd. 409; 411; 義足下 189b	Sn. 977	CNd. 1
Sn. 938	MNd. 412; 413; 義足下 189b	Sn. 978	CNd. 1
Sn. 939	MNd. 413; 420; 義足下 189b	Sn. 979	CNd. 1; UdA. 10
Sn. 940	MNd. 420; 421; 義足下 189b	Sn. 980	CNd. 1f
Sn. 941	MNd. 421; 423; 義足下 189b	Sn. 981	CNd. 2
Sn. 942	MNd. 423; 425; 義足下 189b	Sn. 982	CNd. 2
Sn. 943	MNd. 425; 427; 義足下 189b	Sn. 983	CNd. 2
Sn. 944	MNd. 427; 429; 義足下 189c	Sn. 984	CNd. 2
Sn. 945	MNd. 429; 430; 義足下 189c	Sn. 985	CNd. 2
Sn. 946	MNd. 430; 431; 義足下 189c	Sn. 986	CNd. 2
Sn. 947	MNd. 431; 432; 義足下 189c	Sn. 987	CNd. 2
Sn. 948	MNd. 432; 433; 義足下 189c	Sn. 988	CNd. 2
Sn. 949	MNd. 433; 435; DA. III, 746; MA. I, 232; DhpA. III, 80; 義足下 189c	Sn. 989	CNd. 2
Sn. 950	MNd. 435; 437; 義足下 189c	Sn. 990	CNd. 3
		Sn. 991	CNd. 3

—(14)—

經集對照表

	度 1. 64a	Sn. 877	MNd. 283; 284; 義足上 181c
Sn. 842	S. I, 12; MNd. 194; 195; 雜含 1078. 282a; 別雜 17. 379b; 義足 上 180b, 瑜伽 17. 370c	Sn. 878	MNd. 285; 286; 義足下 182a; 智 度 1. 60c
Sn. 843	MNd. 195; 196; 義足上 180b	Sn. 879	MNd. 286; 287; 義足下 182af
Sn. 844	S. III, 9; 12; MNd. 196; 197; 200; 201; 雜含 551. 144b; c; 義 足上 180b	Sn. 880	MNd. 287; 288; 義足下 182b; 智 度 1. 60c
Sn. 845	MNd. 201; 204; 義足上 180b	Sn. 881	MNd. 288; 289; 義足下 182b; 智 度 1. 61a
Sn. 846	MNd. 204; 207; 義足上 180b	Sn. 882	MNd. 289; 290; 義足下 182b
Sn. 847	MNd. 207; 209; 義足上 180c	Sn. 883	MNd. 291; 292; 義足下 182b
Sn. 848	MNd. 210; 211; 義足下 187c	Sn. 884	MNd. 292; 293; Vm. 497; 義足 下 182b; 三法度中 25a; 大婆沙 77. 399b; 昆婆沙 40. 298a; 韶婆 沙 8. 471c
Sn. 849	MNd. 211; 215; 義足下 187c		
Sn. 850	MNd. 215; 221; 義足下 187c		
Sn. 851	MNd. 221; 224; 義足下 187c	Sn. 885	MNd. 293; 294; Vm. 497; SA. I, 329; 義足下 182b
Sn. 852	MNd. 224; 233; 義足下 187c	Sn. 886	MNd. 294; 295; 義足下 182b
Sn. 853	MNd. 233; 237; 義足下 187c	Sn. 887	MNd. 295; 296; 義足下 182b
Sn. 854	MNd. 237; 241; 義足下 187c	Sn. 888	MNd. 296; 297; 義足下 182b
Sn. 855	MNd. 241; 244; 義足下 187c	Sn. 889	MNd. 297; 298; 義足下 182b
Sn. 856	MNd. 244; 246; 義足下 187c	Sn. 890	MNd. 298; 299; 義足下 182b
Sn. 857	MNd. 246; 247; 義足下 187c	Sn. 891	MNd. 299; 350; 義足下 182b
Sn. 858	MNd. 247; 248; 義足下 188a	Sn. 892	MNd. 300; 301; 義足下 182b
Sn. 859	MNd. 248; 250; 義足下 188a	Sn. 893	MNd. 301; 302; 義足下 182b
Sn. 860	MNd. 250 251; 義足下 188a	Sn. 894	MNd. 302; 304; 義足下 182c
Sn. 861	MNd. 251; 254; 義足下 188a	Sn. 895	MNd. 305; 306; 義足下 183a
Sn. 862	MNd. 255; 258; 義足上 181b	Sn. 896	MNd. 306; 308; 義足下 183a
Sn. 863	MNd. 258; 260; UdA. 429; 義足 上 181b	Sn. 897	MNd. 308; 309; Bodhis. 48f; 義 足下 183a; 瑜伽 36. 489a
Sn. 864	MNd. 261; 262; 義足上 181b	Sn. 898	MNd. 309; 311; 義足下 183a
Sn. 865	MNd. 262; 264; 義足上 181b	Sn. 899	MNd. 311; 313; 義足下 183a
Sn. 866	MNd. 264; 265; 義足上 181b	Sn. 900	MNd. 313; 314; 義足下 183a
Sn. 867	MNd. 265; 267; 義足上 181b	Sn. 901	MNd. 314; 316; 義足下 183a
Sn. 868	MNd. 267; 272; 義足上 181c	Sn. 902	MNd. 316; 317; MA. I, 41; 義足 下 183a
Sn. 869	MNd. 272; 273; 義足上 181c		
Sn. 870	MNd. 273; 274; 義足上 181c	Sn. 903	MNd. 317; 318; 義足下 183a
Sn. 871	MNd. 275; 義足上 181c	Sn. 904	MNd. 318; 319; 義足下 183a
Sn. 872	MNd. 275; 278; 義足上 181c	Sn. 905	MNd. 319; 320; 義足下 183a
Sn. 873	MNd. 278; 279; 義足上 181c	Sn. 906	MNd. 320; 321; 義足下 183a
Sn. 874	MNd. 279; 280; 義足上 181c; 大 婆沙 4. 17a; 同 137. 706a; 昆婆 沙 2. 11c	Sn. 907	MNd. 321; 323; 義足下 183a
Sn. 875	MNd. 281; 282; 義足上 181c	Sn. 908	MNd. 323; 324; 義足下 183b
Sn. 876	MNd. 282; 283; 義足上 181c	Sn. 909	MNd. 324; 325; 義足下 183b
		Sn. 910	MNd. 326; 327; 義足下 183b

經集對照表

Sn. 771	175c; 義足 19. 387b MNd. 18; 22; Netti. 6; 義足上 175c	Sn. 809 Sn. 810	MNd. 128; 130; 義足上 179a MNd. 130; 132; Vm. 666; 義足 上 179a
Sn. 772	MNd. 23; 29; 義足上 176a	Sn. 811	MNd. 133; 135; 義足上 179a
Sn. 773	MNd. 29; 35; 義足上 176a	Sn. 812	MNd. 135; 136; 義足上 179a
Sn. 774	MNd. 35; 39; 義足上 176a	Sn. 813	MNd. 136; 138; 義足上 179a
Sn. 775	MNd. 39; 45; 義足上 176a	Sn. 814	MNd. 139; 141; 義足上 179b
Sn. 776	MNd. 45; 49; 義足上 176b	Sn. 815	MNd. 142; 144; 義足上 179b
Sn. 777	MNd. 49; 51; 義足上 176b	Sn. 816	MNd. 144; 147; 義足上 179b
Sn. 778	MNd. 51; 55; 義足上 176b	Sn. 817	MNd. 147; 149; 義足上 179b
Sn. 779	MNd. 56; 61; 義足上 176b	Sn. 818	MNd. 149; 151; 義足上 179b
Sn. 780	MNd. 62; 63; 義足上 177b	Sn. 819	MNd. 151; 153; 義足上 179b
Sn. 781	MNd. 63; 66; 義足上 177c	Sn. 820	MNd. 153; 156; 義足上 179b
Sn. 782	MNd. 66; 70; 義足上 177c	Sn. 821	MNd. 156; 157; 義足上 179b
Sn. 783	MNd. 70; 72; 義足上 177c	Sn. 822	MNd. 157; 158; 義足上 179b
Sn. 784	MNd. 72; 75; 義足上 177c	Sn. 823	MNd. 158; 160; 義足上 179bf
Sn. 785	MNd. 75; 77; 義足上 177c	Sn. 824	MNd. 161; 162; 義足上 179c; 智 度 18. 193b
Sn. 786	MNd. 77; 81; 義足上 177c	Sn. 825	MNd. 163; 164; 義足上 179c
Sn. 787	MNd. 81; 83; 義足上 177c; 智度 1. 61a	Sn. 826	MNd. 164; 165; 義足上 179c; 智 度 18. 193b
Sn. 788	MNd. 84; 85; 義足上 178a	Sn. 827	MNd. 166; 167; 義足上 179c
Sn. 789	MNd. 85; 86; 義足上 178a	Sn. 828	MNd. 167; 169; 義足上 179c
Sn. 790	MNd. 86; 91; 義足上 178a	Sn. 829	MNd. 169; 170; 義足上 179cf
Sn. 791	MNd. 91; 92; 義足上 178a	Sn. 830	MNd. 170; 171; 義足上 180a
Sn. 792	MNd. 92; 95; 義足上 178a	Sn. 831	MNd. 171; 172; 義足上 180a; 智 度 18. 193b
Sn. 793	MNd. 95; 97; 義足上 178a	Sn. 832	MNd. 172; 174; 義足上 180a
Sn. 794	MNd. 97; 99; 義足上 178a	Sn. 833	MNd. 174; 175; 義足上 180a
Sn. 795	MNd. 99; 101; 義足上 178a	Sn. 834	MNd. 175; 180; 義足上 180a; 智 度 18. 193b
Sn. 796	MNd. 102; 103; 義足上 178b	Sn. 835	MNd. 181; 182; AA. I, 437; DhpA. III, 199; UdA. 383; 義 足上 180b; 有部律 47. 886c
Sn. 797	MNd. 104; 105; 義足上 178bf	Sn. 836	MNd. 182; 184; 義足上 180b
Sn. 798	MNd. 105; 106; 義足上 178c	Sn. 837	MNd. 182; 184; 義足上 180b
Sn. 799	MNd. 106; 107; 義足上 178c	Sn. 838	MNd. 184; 187; 義足上 180b; 智 度 1. 63c
Sn. 800	MNd. 107; 108; 義足上 178c	Sn. 839	MNd. 187; 190; 義足上 180b; 智 度 1. 63cf
Sn. 801	MNd. 109; 110; 義足上 178c	Sn. 840	MNd. 191; 192; 義足上 180b; 智 度 1. 64a
Sn. 802	MNd. 110; 112; 義足上 178c	Sn. 841	MNd. 193; 194; 義足上 180b; 智
Sn. 803	MNd. 112; 116; 義足上 178c		
Sn. 804	MNd. 117; 121; DhpA. III, 320; 義足上 179a		
Sn. 805	MNd. 121; 123; 義足上 179a		
Sn. 806	MNd. 123; 125; 義足上 179a		
Sn. 807	MNd. 126; 義足上 179a; 大婆沙 37. 193b; 眇婆沙 20. 144c		
Sn. 808	MNd. 127; 義足上 179a		

經集對照表

Sn. 661	Dhp. 306; Ud. 45; It. 42f; J. II. 416f; 義足上 177a; 法句下 570a; 法集 1. 781b; 十誦 4. 23a; 同 49. 355c	Sn. 728	Sn. 1050—1051
Sn. 662	S. I, 13; 164; Dhp. 125; J. III, 203; Pv. 124; Vm. 301f; 雜含 1154. 307bf; 同 1275. 350c; 別雜 77. 401a; 同 273. 469b; 義足上 177b; 法句上 565a	Sn. 738	S. IV, 205
Sn. 664	Netti. 133	Sn. 739	S. IV, 205
Sn. 665	Netti. 133	Sn. 740	A. II, 10; It. 9; 109; MNd. 455; CND. 291; 363; 320; DhsA. 364;
Sn. 688	DA. II, 438; MA. IV, 185	Sn. 741	SnA. 17; 64; MNdA. 39
Sn. 699	Mvu. III, 386; 本行集 38. 830a	Sn. 746	A. II, 10; It. 9; 109; J. IV, 354;
Sn. 700	Mvu. III, 387; 本行集 38. 830a	Sn. 747	MNd. 455; CND. 291; 320;
Sn. 701	Mvu. III, 387; 本行集 38. 830a	Sn. 748	DhsA. 364; SnA. 64; 出曜 5.
Sn. 702	Mvu. III, 387; 本行集 38. 830af	Sn. 754	636b; 法集 1. 778c
Sn. 703	Mvu. III, 387; 本行集 38. 830b		It. 93; 95; 108f; 大婆沙 56. 288b;
Sn. 704	Mvu. III, 387; 本行集 38. 830b		同 196. 980b; 毘婆沙 31. 223a
Sn. 705	Mvu. III, 387; 本行集 38. 830b		Ud. 46
Sn. 706	Mvu. III, 387; 本行集 38. 830b		舍利弗毘曇 13. 613b; 同 15. 625c
Sn. 707	Mvu. III, 388; 本行集 38. 830b		舍利弗毘曇 13. 613b; 同 15. 625c
Sn. 708	Mvu. III, 388; 本行集 38. 830b		S. I, 133; It. 62; 雜含 462. 118a;
Sn. 709	Mvu. III, 388; 本行集 38. 830b		集異門 3. 378c
Sn. 710	Mvu. III, 387; 本行集 38. 830b		It. 45f; 62; 雜含 462. 118a; 集異
Sn. 711	Mvu. III, 387f		門 3. 378c
Sn. 712	Mvu. III, 388; 本行集 830b		It. 35
Sn. 713	SA. II, 109; Mvu. III, 388; 本行 集 38. 830b		S. VI, 127; 雜含 308. 88c
Sn. 714	Kv. 89; Mvu. III, 389		S. IV, 127; 雜含 308. 88c
Sn. 715	CND. 209; Mvu. III, 388		S. IV, 127; 雜含 308. 88c
Sn. 716	Mvu. III, 388; 本行集 38. 830b		S. IV, 127; 雜含 308. 88c
Sn. 717	本行集 38. 830b	Sn. 767	MNd. 3; 5; Netti. 5; 69; Vm.
Sn. 718	Mvu. III, 388; 本行集 38. 830c		576; SA. I, 32; 義足上 175c;
Sn. 719	Mvu. III, 388f		大婆沙 34. 176b; 俱舍 1. 3b; 俱
Sn. 720	Mvu. III, 389; 本行集 38. 830c		舍釋 1. 164a; 順正理 2. 337b;
Sn. 721	Mil. 414; Mvu. III, 389; 本行集 38. 830c	Sn. 768	瑜伽 19. 387b
Sn. 722	Mvu. III, 389; 本行集 38. 830c		Thag. 457; MNd. 6; 10; Netti.
Sn. 723	Mvu. III, 389; 本行集 38. 830c	Sn. 769	5; 69; 義足上 175c; 瑜伽 19. 387b
Sn. 724	S. V, 433; It. 106; 雜含 392. 106a		MNd. 10; 12; Netti. 6; UdA.
Sn. 725	S. V, 433; It. 106; 雜含 392. 106a		120; 義足上 175c; 大婆沙 56.
Sn. 726	S. V, 433; It. 106; 雜含 392. 106a		288b; 同 196. 980c; 毘婆沙 31.
Sn. 727	S. V, 433; It. 106; 雜含 392. 106a	Sn. 770	223a; 瑜伽 19. 387b
			MNd. 12; 18; Netti. 6; 義足上

經集對照表

	798c	Sn. 655	Thag. 631
Sn. 632	Dhp. 408; AA. I, 277; 法句下 572cf; 法句喻 4. 605a; 出曜 30. 774a; 法集 4. 799a	Sn. 657	S. I, 149; 152; A. V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470af; 增一含 12. 603c; 義足上 177a; 法句上 561c; 法句喻 1. 582b; 出曜 10. 664a; 665a; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 正法念處 1. 5b; 同 8. 46b; 諸法集要 5. 484a; 五分 25. 165cf; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 633	Dhp. 409; 法句下 573a; 出曜 30. 770c; 法集 4. 798b	Sn. 658	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665a; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 634	Dhp. 410; 法句下 573a; 出曜 30. 772c; 法集 4. 798c	Sn. 659	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665a; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 635	Dhp. 411; 法句下 573a; 出曜 30. 774a; 法集 4. 799a	Sn. 660	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665a; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 636	Dhp. 412; DhpA. II, 200; 法句下 573a; 出曜 30. 771b; 法集 4. 798b	Sn. 661	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665a; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 637	Dhp. 413; 法句下 573a; 出曜 30. 771c; 法集 4. 798c	Sn. 662	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665a; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 638	Dhp. 414; AA. I, 247; 法句下 573a; 出曜 30. 772bf; 法集 4. 798c	Sn. 663	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665a; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 639	Dhp. 415; 出曜 30. 772a; 法集 4. 798c	Sn. 664	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665a; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 640	Dhp. 416; 法句下 573a; 法句喻 4. 605a; 出曜 30. 771a; 法集 4. 798b	Sn. 665	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665a; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 641	Dhp. 417; 法句下 573a; 法句喻 4. 605a	Sn. 666	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665b; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355a; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 發智 20. 1031c; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 642	Dhp. 418; 法句下 573a	Sn. 667	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665b; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 643	Dhp. 419; AA. I, 268; 法句下 573a	Sn. 668	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665b; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 644	Dhp. 420; AA. I, 269; 法句下 573a; 出曜 30. 772c; 法集 4. 799a	Sn. 669	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665b; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355c; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 6c; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 645	Dhp. 421; AA. I, 363; 法句下 573a; 出曜 30. 772b; 法集 4. 798c	Sn. 670	S. I, 149; 152; A. II, 3; V, 171; 174; Netti. 132; 雜含 1194. 324a; 同 1278. 351c; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 義足上 177a; 法句上 561c; 出曜 10. 665b; 法集 1. 781b; 金色童子 12. 893a; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355a; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 7a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 646	Dhp. 422; DhpA. III, 187; 法句下 573a; 出曜 30. 773b; 法集 4. 799a	Sn. 671	S. I, 149; 152f; A. II, 3f; V, 171; 174; Netti. 132f; 雜含 1194. 324a; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 增一含 12. 603c; 義足上 177a; 出曜 10. 665c; 法集 1. 781b; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355a; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 7a; 立世毘婆 1. 173c
Sn. 647	M. II, 144; S. I, 167; 175; A. I, 165; 167; Dhp. 423; It. 100; Thig. 63—64; 中含 161. 689a; 雜含 1161. 309c; 同 1181. 319c; 別雜 84. 403a; 同 95. 407c; 法句下 573a; 法句喻 4. 605a; 出曜 30. 773a; 法集 4. 799a	Sn. 672	S. I, 149; 152f; A. II, 3f; V, 171; 174; Netti. 132f; 雜含 1194. 324a; 別雜 106. 411c; 同 276. 470b; 增一含 12. 603c; 義足上 177a; 出曜 10. 665c; 法集 1. 781b; 五分 25. 166a; + 諦 4. 23a; 同 49. 355a; 有部律 14. 697b; 有部藥事 2. 7a; 三法度下 27b; 智度 13. 158a; 立世毘婆 1. 173c; 成實 7. 291b
Sn. 654	Kv. 546; DhsA. 66		

經集對照表

Sn. 556	Thag. 826		Vm. 231; 增一含 26. 690c; 中本 起下 160c; 法句下 574a; 法句喻 4. 606a; 出曜 1. 614a; 法集 1. 777a
Sn. 557	Thag. 827		D. II, 120; MNd. 121; Vm. 231; 法句上 559a; 法句喻 1. 575c; 出曜 1. 614a; 法集 1. 777b
Sn. 558	Thag. 828; Vm. 201; UdA. 84; MNdA. 186	Sn. 577	D. II, 120; J. IV, 127; MNd. 121
Sn. 559	Thag. 829		MNd. 121
Sn. 560	Thag. 830		MNd. 121
Sn. 561	Thag. 831		MNd. 121
Sn. 562	Thag. 832	Sn. 578	MNd. 121
Sn. 563	Thag. 833	Sn. 579	J. IV, 127
Sn. 564	Thag. 834	Sn. 580	J. IV, 127
Sn. 565	Thag. 835	Sn. 581	M. II, 196
Sn. 566	Thag. 836	Sn. 583	MA. III, 39; SA. I, 149; UdA. 332
Sn. 567	Thag. 837	Sn. 585	Dhp. 396; 出曜 29. 770b; 法集 4. 798b
Sn. 568	V I, 246; 中含 161. 689c; 雜含 110. 37b; 別雜 52. 391b; 同 259. 465a; 增一含 9. 589b; 同 18. 637c; 同 25. 684a; 同 26. 694c; 同 30. 717a; 同 40. 768b; 同 41. 775b; 頻毘 856c; 過去現在 4. 647b; 647c; 648a; 648b; 本行集 33. 835b; 同 55. 909a; 中本起下 163b; 五分 1. 2b; 十誦 14. 100b; 同 26. 188cf; 189cf; 192b; 有部 破僧事 11. 158b; 有部雜事 35. 380a; 鼻奈耶 4. 867a	Sn. 591	Dhp. 397; 法句下 572c; 出曜 30. 773b; 法集 4. 799a
Sn. 569	V. I, 246; 中含 161. 689c; 雜含 110. 37b; 別雜 52. 391b; 同 259. 465b; 增一含 9. 589b; 同 18. 637c; 同 25. 684a; 同 26. 694c; 同 30. 717a; 同 40. 768b; 同 41. 775b; 頻毘 856c; 過去現 在 4. 647b; 647c; 648a; 648b; 本行集 33. 835b; 同 55. 909a; 中本起下 163b; 五分 1. 2b; 十 誦 14. 100b; 同 26. 189a; 190a; 192b; 有部破僧事 11. 158b; 有部 雜事 35. 380a; 鼻奈耶 4. 867af	Sn. 624	Dhp. 398; 法句下 572c; 出曜 30. 774bf; 法集 4. 799b
Sn. 570	Thag. 838	Sn. 625	Dhp. 399; Vm. 295; 法句下 572c; 出曜 30. 770bf; 法集 4. 798b
Sn. 571	Sn. 545; Thag. 839	Sn. 626	Dhp. 400; 法句下 572c; 出曜 30. 770c; 法集 4. 798b
Sn. 572	Sn. 546; Thag. 840	Sn. 627	Dhp. 401; VA. 273; DhpA. II, 51; 法句下 572c; 出曜 30. 771c; 法集 4. 798bf
Sn. 573	Thag. 841	Sn. 628	Dhp. 402; 法句下 572c; 出曜 30. 771b; 法集 4. 798b
Sn. 574	J. IV, 113	Sn. 629	Dhp. 403; 法句下 572c; 出曜 30. 772a; 法集 4. 798c
Sn. 576	J. IV, 127; J. VI, 28; MNd. 121;	Sn. 630	Dhp. 404; Mil. 386; 法句下 572c
		Sn. 631	Dhp. 405; 法句下 572c; 出曜 30. 772a; 法集 4. 798c
			Dhp. 406; 法句下 572c; 出曜 30. 771c; 法集 4. 798c; 五分戒本 200a; 206b; 五分尼戒本 214a; 十誦戒本 478c; 十誦尼戒本 488b
			Dhp. 407; 法句下 572c; 法句喻 4. 605a; 出曜 30. 772b; 法集 4.

經集對照表

Sn. 452	S. I, 189; Thag. 1228; 雜含 1218. 332a; 別雜 253. 462c; 出曜 11. 667b; 法集 1. 781c; 四分 52. 952b		III, 396; 本行集 39. 834b Mvu. III, 396f; 本行集 39. 834b Mvu. III, 397; 本行集 39. 834b MNd. 202; CNd. 98; 373; MA. I. 153; SA. I, 77; Mvu. III, 397; 本行集 39. 834b
Sn. 453	S. I, 189; Thag. 1229; 雜含 1218. 332a; 別雜 253. 462c; 出曜 11. 667b; 法集 1. 781c; 四分 52. 952b	Sn. 520 Sn. 521 Sn. 522	Mvu. III, 398; 本行集 39. 834b Mvu. III, 398f; 本行集 39. 834b Mvu. III, 399; 本行集 39. 834b Mvu. III, 399; 本行集 39. 834b MNd. 58; 336; CNd. 84f; Mvu.
Sn. 454	S. I, 189; Thag. 1230; 雜含 1218. 332a; 別雜 253. 462c; 出曜 11. 667c; 法集 1. 781c; 四分 52. 952b	Sn. 523 Sn. 524 Sn. 525 Sn. 526 Sn. 527	III, 399; 本行集 39. 834b Mvu. III, 399f; 本行集 39. 834b Mvu. III, 399; 本行集 39. 834b Mvu. III, 399; 本行集 39. 834b MNd. 58; 336; CNd. 84f; Mvu.
Sn. 458	Sn. 1043	Sn. 528	III, 399; 本行集 39. 834b Mvu. III, 397; 本行集 39. 834c
Sn. 459	S. I, 168; 雜含 1184. 320c; 別雜 99. 409a	Sn. 529	MNd. 93; 205; CNd. 70; Mvu. III, 397; 本行集 39. 834c
Sn. 462	S. I, 168; 雜含 1184. 320c; 別雜 99. 409a	Sn. 530	Mvu. III, 398; 本行集 39. 834c
Sn. 463	S. I, 168; 雜含 1184. 320c; 別雜 99. 409a	Sn. 531	本行集 39. 834c
Sn. 464	Sn. 497	Sn. 532	本行集 39. 834c
Sn. 465	Sn. 498	Sn. 533	Mvu. III, 399; 本行集 39. 834c
Sn. 480	S. I, 167; 168; Sn. 81; Mil. 228; 別雜 99. 409a	Sn. 534	Mvu. III, 399f; 本行集 39. 834c
Sn. 481	S. I, 167; 168; Sn. 82; 別雜 99. 409af	Sn. 535	Mvu. III, 400; 本行集 39. 834c
Sn. 487	雜含 1159. 309b; 別雜 82. 402b	Sn. 536	Mvu. III, 400; 本行集 39. 834c
Sn. 488	雜含 1159. 309b; 別雜 82. 402b	Sn. 537	Mvu. III, 400f
Sn. 494	Sn. 469	Sn. 538	Mvu. III, 401
Sn. 497	Sn. 464	Sn. 539	Mvu. III, 401; 本行集 39. 835a
Sn. 498	Sn. 465	Sn. 540	Mvu. III, 401; 本行集 39. 835a
Sn. 503	Sn. 463	Sn. 541	Mvu. III, 401; 本行集 39. 835a
Sn. 510	Mvu. III, 394; 本行集 39. 833c	Sn. 542	Mvu. III, 401; 本行集 39. 835a
Sn. 511	Mvu. III, 395; 本行集 39. 834a	Sn. 543	Mvu. III, 401; 本行集 39. 835a
Sn. 512	DA. I, 155; MA. II, 274; 本行集 39. 834a	Sn. 544	本行集 39. 835b
Sn. 513	Mvu. III, 395; 本行集 39. 834a	Sn. 545	Sn. 571; Thag. 839; 本行集 39. 835a
Sn. 514	MNd. 71; CNd. 31; Mvu. III, 395; 本行集 39. 834a	Sn. 546	Sn. 572; Thag. 840
Sn. 515	Mvu. III, 395; 本行集 39. 834a	Sn. 547	Mvu. III, 401; 本行集 39. 835a
Sn. 516	MNd. 244; CNd. 74; Netti 170; Mvu. III, 365f; 本行集 39. 834a	Sn. 548	Thag. 818
Sn. 517	Mvu. III, 396; 本行集 39. 834af	Sn. 549	M. II, 146
Sn. 518	Mvu. III, 396; 本行集 39. 834b	Sn. 550	Thag. 819
Sn. 519	MNd. 87; CNd. 100; 113; Mvu.	Sn. 551	Thag. 820
		Sn. 552	Thag. 821
		Sn. 553	Thag. 822
		Sn. 554	Thag. 823
		Sn. 555	Thag. 824; Mil. 183
			Thag. 825

經集對照表

Sn. 408	Mvu. II, 198; 有部破僧事 4. 118bf	Sn. 434	Mvu. II, 239; Lal. 262; 本行集 25. 769b
Sn. 409	Mvu. II, 198; 有部破僧事 4. 118c		
Sn. 410	Mvu. II, 198; 四分 31. 779c; 有 部破僧事 4. 118c	Sn. 435	Mvu. II, 239; Lal. 262
Sn. 411	Mvu. II, 198; 四分 31. 779c; 有 部破僧事 4. 118c	Sn. 436	MNd. 96; 174; 333; CNd. 144; Mvu. II, 240; Lal. 262; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769c; 智度 5. 99b; 同 15. 169a
Sn. 412	Mvu. II, 198; 四分 31. 780a; 有 部破僧事 4. 118c	Sn. 437	MNd. 96; 174; 333; CNd. 144; Mvu. II, 240; Lal. 262; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769c; 智度 5. 99b; 同 15. 169a
Sn. 413	四分 31. 780a; 有部破僧事 4. 118c		
Sn. 414	Mvu. II, 198; 四分 31. 780a; 有 部破僧事 4. 118c		
Sn. 415	Mvu. II, 198; 四分 31. 780a; 有 部破僧事 4. 118c	Sn. 438	MNd. 96; 174; 334; CNd. 144f; Mvu. II, 240; Lal. 262; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769c; 智度 5. 99b; 同 15. 169a
Sn. 416	Mvu. II, 198; 四分 31. 780a; 有 部破僧事 4. 118c		
Sn. 417	四分 31. 780a; 有部破僧事 4. 118c	Sn. 439	MNd. 96; 174; 334; CNd. 145; Mvu. II, 240; Lal. 262; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769c
Sn. 418	有部破僧事 4. 118c		
Sn. 419	四分 31. 780a; 有部破僧事 4. 118c		
Sn. 420	四分 31. 780a; 有部破僧事 4. 118c	Sn. 440	Lal. 262; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769c
Sn. 421	Mvu. II, 199; 四分 31. 780a; 有 部破僧事 4. 118c	Sn. 441	Mvu. II, 240; Lal. 262
Sn. 422	Mvu. II, 199; 四分 31. 780a; 有 部破僧事 4. 118cf; 智度 3. 77a	Sn. 443	Mvu. II, 240; Lal. 262; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769c; 智度 5. 99c
Sn. 423	Mvu. II, 199; 四分 31. 780a; 有 部破僧事 4. 119a; 智度 3. 77a	Sn. 444	Mvu. II, 240; Lal. 263
Sn. 424	四分 31. 780a; 有部破僧事 4. 119a	Sn. 445	智度 5. 99c
Sn. 425	本行集 25. 769b	Sn. 446	DA. III, 994; MA. III, 373
Sn. 426	Mvu. II, 238; Lal. 261; 大莊嚴 7. 582b; 本行集 25. 769b	Sn. 447	S. I, 124; 雜含 246. 59b; 同 1092. 286c; 別雜 31. 383b
Sn. 427	Mvu. II, 238; Lal. 261; 本行集 25. 769b	Sn. 448	S. I, 124; 雜含 246. 59b; 同 1092. 286c; 別雜 31. 383b
Sn. 428	Mvu. II, 238; Lal. 261; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769b	Sn. 449	S. I, 122; DhpA. I, 433; Mvu. II, 240; 雜含 246. 59b; 同 1091. 286b; 智度 5. 99c
Sn. 429	Mvu. II, 238; Lal. 261; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769b	Sn. 450	S. I, 189; 雜含 1218. 332a; 別雜 253. 462b; 出曜 11. 667a; 法集 1. 781b; 四分 52. 952b; 大婆沙 6. 28c; 小婆沙 3. 20c; 喻伽 17. 381b
Sn. 430	Mvu. II, 238; Lal. 261; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769b		
Sn. 431	Mvu. II, 238; Lal. 261; 大莊嚴 7. 582c; 本行集 25. 769b		
Sn. 432	Mvu. II, 238; Lal. 262; 大莊嚴 7. 582c	Sn. 451	S. I, 189; Thag. 1227; 雜含 1218. 332a; 別雜 253. 462c; 出曜 11. 667a; 法集 1. 781c; 四分 52. 952b
Sn. 433	Mvu. II, 239; Lal. 262; 本行集 25. 769b		

經集對照表

Sn. 266	Khp. 3; 法句下 575a; 法句喻 4. 609a	Sn. 342	別雜 230. 458b; 瑜伽 17. 372a
Sn. 267	Khp. 3; 法句喻 4. 609b		S. I, 188; Thag. 1226; 雜含 1214. 331b; 別雜 230. 458b; 瑜伽 17. 372af
Sn. 268	Khp. 3		
Sn. 269	Khp. 3	Sn. 343	Thag. 1263; 雜含 1221. 333a
Sn. 270	S. I, 207; 雜含 1314. 361af; 同 1324. 363c; 別雜 313. 479b; 同 323. 482a; 瑜伽 18. 376c	Sn. 344	Thag. 1264; 雜含 1221. 333a
Sn. 271	S. I, 207; MNd. 16; 364; 471; CNd. 352; 瑜伽 18. 376c	Sn. 345	Thag. 1265; 雜含 1221. 333a
Sn. 272	S. I, 207; 雜含 1314. 361b; 同 1324. 363c; 別雜 313. 479b; 同 323. 482a; 瑜伽 18. 376c	Sn. 346	Thag. 1266
Sn. 273	S. I, 208; 雜含 1314. 361b; 同 1324. 363c; 別雜 313. 479bf; 同 323. 482a; 瑜伽 18. 376c	Sn. 347	Thag. 1267; 雜含 1221. 333a
Sn. 274	DhpA. IV, 42	Sn. 348	Thag. 1268; 雜含 1221. 333af
Sn. 281	A. IV, 172; Mil. 414; MA. II, 119; SA. II, 49; 四分 60. 1010a	Sn. 349	Thag. 1269; 雜含 1221. 333b
Sn. 282	A. IV, 172; Mil. 414; MA. II, 119; SA. II, 49; 四分 60. 1010a	Sn. 350	Thag. 1270; 雜含 1221. 333b
Sn. 283	A. IV, 172; Mil. 411; 414; MA. II, 119; SA. II, 49; 四分 60. 1010a	Sn. 351	Thag. 1271
Sn. 324	本行集 38. 828c	Sn. 352	Thag. 1272
Sn. 325	本行集 38. 828c	Sn. 353	Thag. 1273; 雜含 1221. 333b
Sn. 326	本行集 38. 829a	Sn. 354	Thag. 1274
Sn. 327	本行集 38. 829a	Sn. 355	Thag. 1275
Sn. 328	本行集 38. 829a	Sn. 356	Thag. 1276; 雜含 1221. 333b
Sn. 329	本行集 38. 829a	Sn. 357	Thag. 1277; 雜含 1221. 333b
Sn. 330	本行集 38. 829a	Sn. 358	Thag. 1278; 雜含 1221. 333b
Sn. 331	S. I, 198; 雜含 1332. 367c; 別雜 352. 489c; 智度 17. 182b	Sn. 359	DA. II, 684
Sn. 333	Thag. 403; 出曜 5. 634cf; 法集 1. 778c	Sn. 360	Mvu. III, 328
Sn. 334	Thag. 404	Sn. 391	Vm. 45
Sn. 337	Thag. 195	Sn. 392	Vm. 45
Sn. 338	MA. II, 380	Sn. 394	舍利弗 6. 574a
Sn. 339	MA. II, 380	Sn. 395	舍利弗 6. 574b
Sn. 340	S. I, 188; Thag. 1225; Vm. 38; 雜含 1214. 331b; 別雜 230. 458b; 瑜伽 17. 372b	Sn. 396	舍利弗 6. 574b
Sn. 341	S.I,188;Thag.1224;雜含1214. 331b;	Sn. 397	舍利弗 6. 574c
		Sn. 398	舍利弗 6. 574c
		Sn. 399	舍利弗 6. 574c
		Sn. 400	舍利弗 6. 574c
		Sn. 401	A. I, 214f; IV, 254; 257; 261f; 增 一含 16. 625c; 長爪梵志 968c; 舍利弗 6. 574c
		Sn. 402	A. I, 215; IV, 254; 257; 262; 增 一含 16. 625c; 長爪梵志 968c; 舍利弗 6. 574c
		Sn. 403	A. I, 144; 145; 雜含 1117. 296a; 別雜 46. 389af
		Sn. 404	舍利弗 6. 574c
		Sn. 405	舍利弗 6. 574c
		Sn. 406	有部破僧事 4. 118b
		Sn. 407	有部破僧事 4. 118b
			有部破僧事 4. 118b

經集對照表

	325; 483a; 出曜 12. 673a; 法集 1. 782a	Sn. 221	別雜 1. 374b; 三法度上 17b; 智度 3. 84b
Sn. 183	S. I, 214; 雜含 603. 161a; 同 1326. 365a; 同 1329. 367a; 別雜 325. 483a; 同 328. 485a; 瑜伽 18. 375c	Sn. 222 Sn. 223 Sn. 224 Sn. 225 Sn. 226 Sn. 227 Sn. 228 Sn. 229 Sn. 230 Sn. 231	Khp. 3; Mvu. I, 290; 294 Khp. 3; Mvu. I, 294 Khp. 3f; Mvu. I, 290f Khp. 4; Mvu. I, 291 Khp. 4; Mvu. I, 291 Khp. 4; Mvu. I, 291 Khp. 4; Mvu. I, 293 Khp. 4; Mvu. I, 292 Khp. 4; Mvu. I, 292f Khp. 5; Kv. 109; 179; 185f; 193; Mvu. I, 291f
Sn. 184	S. I, 214; Mil. 36; 雜含 603. 162af; 同 1326. 365a; 同 1329. 367a; 別雜 325. 483a; 同 328. 485a; 大婆沙 142. 731c; 小婆沙 27. 273c; 瑜伽 18. 375cf	Sn. 232 Sn. 233 Sn. 234 Sn. 235 Sn. 236 Sn. 237 Sn. 238 Sn. 239	Khp. 5; Mvu. I, 292 Khp. 5; Mvu. I, 294 Khp. 5
Sn. 185	S. I, 214; 雜含 1282. 353a; 別雜 280. 471b; 同 325. 483a; 瑜伽 18. 375b	Sn. 240	Khp. 5; Mvu. I, 293
Sn. 186	S. I, 214; 出曜 12. 673b; 法集 1. 782af	Sn. 241	Mvu. I, 291f
Sn. 187	S. I, 214f; 雜含 1282. 353a; 別雜 280. 471b; 同 325. 483a; 瑜伽 18. 375b	Sn. 242 Sn. 243 Sn. 244 Sn. 245 Sn. 246 Sn. 247 Sn. 248 Sn. 249	Khp. 5; Mvu. I, 292 Khp. 5; Mvu. I, 294 Khp. 5
Sn. 188	S. I, 215	Sn. 250	Khp. 5; Mvu. I, 293
Sn. 189	S. I, 215; SA. I, 26; 雜含 1326. 365a; 同 1329. 367a; 別雜 325. 483a; 同 328. 485a	Sn. 251 Sn. 252	Khp. 5; Mvu. I, 295 Khp. 5f; Uda. A. 153
Sn. 190	S. I, 215; 雜含 1326. 365a; 同 1329. 367a; 別雜 325. 483a; 同 328. 485a	Sn. 253 Sn. 254 Sn. 255	J. III, 196; 雜含 978. 253c; 別雜 212. 453a J. III, 196; 雜含 978. 253c; 別雜 212. 453b
Sn. 191	S. I, 215; 別雜 325. 483a	Sn. 256	J. III, 196; 雜含 978. 253c; 別雜 212. 453b
Sn. 192	S. I, 215; Sn. 180; DA. I, 232; MA. I, 133; AA. II, 110; 雜含 1325. 365a; 別雜 325. 483a	Sn. 257	J. III, 196; 雜含 978. 253c; 別雜 212. 453b
Sn. 194	J. I, 146	Sn. 258	Khp. 3
Sn. 195	J. I, 146	Sn. 259	Khp. 3; 成實 1. 247b
Sn. 196	J. I, 146	Sn. 260	Khp. 3; 法句下 575a; 法句喻 4. 609a
Sn. 197	J. I, 146	Sn. 261	Khp. 3; J. III, 369; 法句下 575a; 法句喻 4. 609a
Sn. 198	J. I, 146	Sn. 262	Khp. 3; 法句下 575a; 法句喻 4. 609a
Sn. 199	J. I, 146	Sn. 263	Khp. 3; 法句下 575a; 法句喻 4. 609a
Sn. 205	Thag. 453	Sn. 264	Khp. 3; 法句下 575a; 法句喻 4. 609a
Sn. 207	Mil. 211; 385	Sn. 265	Khp. 3
Sn. 211	S. II, 284; 雜含 1071. 278b; 別雜 10. 376b	Sn. 266	Khp. 3; 法句下 575a; 法句喻 4. 609a
Sn. 213	Sn. 71; Mvu. III, 110; 四分 16. 673c	Sn. 267	Khp. 3; 法句下 575a; 法句喻 4. 609a
Sn. 217	DhpA. IV, 99		

經集對照表

Sn. 147	Khp. 8			立世毘婆 1. 178a; 有部律 47.884c
Sn. 148	Khp. 8	Sn. 169	S. I, 41; 雜含 1008. 264a; 同 1326.	
Sn. 149	Khp. 8		364c; 同 1329. 366c; 別雜 235.	
Sn. 150	Khp. 8		459b; 同 328. 484c; 義足下 184a;	
Sn. 151	Khp. 8		立世毘婆 1. 178a	
Sn. 152	Khp. 9	Sn. 170	雜含 602. 161a; 同 1329. 366c; 別	
Sn. 153	AA. I, 239; 雜含 1329. 365c; 別雜 328. 484a; 義足下 183b; 立世毘 婆 1. 177b		雜 177. 438a; 同 328. 484c; 義 足下 184a; 立世毘婆 1. 178a	
Sn. 154	AA. I, 239; 雜含 1329. 366a; 別雜 328. 484a; 義足下 183c; 立世毘 婆 1. 177b	Sn. 171	S. I, 16; Mvu. III, 47; 雜含 602.	
Sn. 155	雜含 1329. 366a; 別雜 328. 484a; 義足下 183c; 立世毘婆 1. 177b	Sn. 172	161a; 同 1329. 366c; 別雜 177.	
Sn. 156	雜含 1329. 366a; 別雜 328. 484a; 義足下 183c; 立世毘婆 1. 177c	Sn. 173	438a; 同 328. 484c; 義足下 184a;	
Sn. 157	雜含 1329. 366a; 別雜 328. 484a; 義足下 183c; 立世毘婆 1. 177c		立世毘婆 1. 178a; 四分 32. 792cf	
Sn. 158	雜含 1329. 366b; 義足下 183c; 立 世毘婆 1. 177b	Sn. 174	雜含 602. 161a; 同 1329. 366c; 別	
Sn. 159	雜含 1329. 366b; 義足下 183c; 立 世毘婆 1. 177bf		雜 177. 438b; 同 328. 484c; 立	
Sn. 160	雜含 1329. 366a; 別雜 328. 484a; 義足下 183c; 立世毘婆 1. 177c	Sn. 175	世毘婆 1. 178a	
Sn. 161	雜含 1329. 366a; 別雜 328. 484b; 立世毘婆 1. 177c		S. I, 53; 雜含 1269. 348c; 同 1315.	
Sn. 162	雜含 1329. 366a; 366b; 別雜 328. 484b; 義足下 183c; 立世毘婆 1. 177c	Sn. 177	361b; 同 1326. 365a; 同 1329.	
Sn. 163	雜含 1329. 366a; 366b; 別雜 328. 484b; 義足下 183c; 立世毘婆 1. 177c	Sn. 179	367a; 別雜 178. 438b; 同 315. 479c;	
Sn. 163A	雜含 1329. 366a; 366b; 別雜 328. 484b; 立世毘婆 1. 177c		同 328. 484cf; 義足下 184a; 立	
Sn. 164	立世毘婆 1. 177c	Sn. 180	世毘婆 1. 178a; 瑜伽 18. 376b	
Sn. 165	S. I, 16; 雜含 602. 161a; 同 1329. 366b; 366c; 別雜 177. 438a; 同 328. 484b; 義足下 183c	Sn. 181	S. I, 53; 雜含 1269. 348c; 同 1315.	
Sn. 166	S. I, 16; 雜含 1329. 366c; 義足下 183c; 立世毘婆 1. 178a		361c; 同 1326. 365a; 同 1329.	
Sn. 168	S. I, 41; 雜含 1008. 264a; 同 1326. 364c; 同 1329. 366c; 別雜 235. 459a; 同 328. 484c; 義足下 184a;	Sn. 182	367a; 別雜 178. 438b; 同 315. 479c;	
			同 328. 485a; 義足下 184b	
			S. I, 42; 214; 雜含 1013. 265a; 同 1326. 364c; 別雜 240. 460a; 同 325. 482cf; 出曜 12. 673a; 法集 1. 782a	
			S. I, 42; 214; 雜含 1013. 265a; 同 1326. 364c; 別雜 240. 460a; 同	

經集對照表

Sn. 71	Ap. 12; CNd. 421; 423; Sn. 213	Sn. 116	Pts. I, 160; 雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 72	Ap. 12; CNd. 423; 424	Sn. 117	雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 73	Ap. 12; CNd. 424; 425f; Mvu. I, 357	Sn. 118	雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 74	Ap. 12; CNd. 426; 427	Sn. 119	雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 75	Ap. 13; CNd. 427; 427; 429	Sn. 120	雜含 102. 28c
Sn. 76	S. I, 172; 雜含 98. 27a; 別雜 261. 466b	Sn. 121	雜含 102. 28c
Sn. 77	S. I, 172; 雜含 98. 27a; 別雜 264. 466bf	Sn. 122	雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 78	S. I, 172; 雜含 98. 27af; 別雜 264. 466c	Sn. 123	雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 79	S. I, 173; 雜含 98. 27b; 別雜 264. 466c	Sn. 124	Sn. 98; J. IV, 184; 雜含 102. 29a; 同 1279. 352b; 別雜 268. 467cf; 同 277. 470c
Sn. 80	S. I, 173; 雜含 98. 27b; 別雜 264. 466c	Sn. 125	雜含 102. 29a; 同 1279. 352b; 別 雜 268. 468a; 同 277. 470c
Sn. 81	S. I, 167; 168; 173; Sn. 480; Mil. 228; 別雜 99. 409a	Sn. 126	雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 82	S. I, 167; 168; 173; Sn. 481 別雜 99. 409af	Sn. 127	雜含 102. 28c
Sn. 83	長含 3. 18b; 般泥洹上, 183b; 有部 雜事 37, 390b	Sn. 128	雜含 102. 29a; 同 1279. 352b; 別 雜 268. 468a; 同 277. 471a
Sn. 84	長含 3. 18b; 有部雜事 37. 390b	Sn. 129	Sn. 100; 雜含 1279. 352b; 別雜 268. 468a; 同 277. 471a
Sn. 85	長含 3. 18b; 有部雜事 37. 390c	Sn. 130	雜含 102. 29a; 同 1279. 352b; 別 雜 268. 468a; 同 277. 471a
Sn. 86	長含 3. 18b; 有部雜事 37. 390c	Sn. 131	雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 87	長含 3. 18b; 有部雜事 37. 390c	Sn. 132	雜含 102. 29a; 別雜 268. 467c
Sn. 88	長含 3. 18b; 有部雜事 37. 390c	Sn. 133	雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 89	長含 3. 18b; 有部雜事 37. 390c	Sn. 134	別雜 268. 468a; 同 277. 471a
Sn. 90	長含 3. 18c; 有部雜事 37. 390c	Sn. 135	雜含 102. 29a; 同 1279. 352b; 別 雜 268. 468a; 同 277. 471a
Sn. 91	雜含 1279. 352a; 別雜 277. 470b	Sn. 136	雜含 102. 28c; 別雜 268. 467c
Sn. 92	雜含 1279. 352a; 別雜 277. 470bf	Sn. 137	雜含 102. 29a; 別雜 268. 468a
Sn. 94	雜含 1279. 352a	Sn. 138	雜含 102. 29a
Sn. 96	雜含 1279. 352b; 別雜 277. 470c	Sn. 139	雜含 102. 29a; 別雜 268. 468a
Sn. 98	Sn. 124; J. IV, 184; 雜含 102. 29a; 同 1279. 352b; 別雜 268. 767cf; 同 277. 470c	Sn. 140	雜含 102. 29a; 別雜 268. 468a
Sn. 100	Sn. 100; 雜含 1279. 352b; 別雜 277. 471a	Sn. 141	雜含 102. 29a; 別雜 268. 468a
Sn. 106	雜含 1279. 352a; 別雜 277. 470c	Sn. 142	Sn. 136; Sna. 192; 雜含 102. 29a; 別雜 268. 468a
Sn. 108	雜含 102. 28c; 同 1279. 352b; 別 雜 268. 467c	Sn. 143	Khp. 8
Sn. 110	雜含 1279. 352b	Sn. 144	Khp. 8
Sn. 114	雜含 1279. 352b; 別雜 277. 470c	Sn. 145	Khp. 8; Vm. 297
		Sn. 146	Khp. 8

2. 偶對照表

本表の右側に掲げたるものは、各左側の本經偶と次の如き意味に於て關係あることを示す。即ち(1)本經の偶と全同にして、他の巴利聖典又は本經に存する場合。(2)本經の偶と全同にして、本經又は他の巴利聖典より引用せられたる場合。(3)本經の偶と半偶以上一致せるものにして上の二つの場合。(4)梵文又は漢譯文に於ける上の三つの場合。(5)梵文又は漢譯文に於て本經の偶と餘り一致せざるが如くに見ゆるも、明かに本經の偶と同源に屬すと見做さる場合。

Sn. 1	Sn A. 2; 14; 法句上 559c; 法集 4. 797c	Sn. 45	Ap. 9; CNd. 356; 357f; V. I, 350; M. III, 154; Dhp. 328; J. III, 488; 中含 72. 525c; 四分 43. 882c; 法句下 570b
Sn. 2	八犍度 2. 776c; 發智 1. 922c; 大婆 沙 28. 145b; 同 93. 480a; 昆婆 沙 15. 112c; 同 46. 352cf	Sn. 46	Ap. 9; CNd. 358; 359; V. I, 350; M. III, 154; Dhp. 329; J. III, 488; 中含 72. 525c; 四分 43. 882c; 法句下 570b
Sn. 3	出曜 29. 768; 法集 4. 797a	Sn. 47	Ap. 9; CNd. 359; 361f
Sn. 6	V. II, 84; Ud. 20	Sn. 48	Ap. 9; CNd. 362; 363; 有部律 2. 915b
Sn. 7ab	Ud. 6; 7; 瑜伽 19. 384c	Sn. 49	Ap. 9; CNd. 363; 364f
Sn. 9	出曜 29. 767c; 法集 4. 797a	Sn. 50	Ap. 10; CNd. 365; 369; SnA. 509
Sn. 14	出曜 29. 768b; 法集 4. 797b	Sn. 51	Ap. 10; CNd. 369; 371
Sn. 17	出曜 29. 768a; 法集 4. 797a	Sn. 52	Ap. 10; CNd. 371; 372
Sn. 19a	Mil. 186	Sn. 53	Ap. 10; CNd. 372; 375
Sn. 29	Mil. 369	Sn. 54	Ap. 10; CNd. 375; 377
Sn. 33	S. I, 6; 107f; Netti. 34; Mvu. III, 417; 雜阿 1004. 263a; 別雜 142. 428a	Sn. 55	Ap. 10; CNd. 377; 379
Sn. 34	S. I, 6; 108; Netti. 34; Mvu. III, 417f; 雜阿 1004. 263a; 別雜 142. 428a	Sn. 56	Ap. 10; CNd. 379; 384
Sn. 35	Ap. 8; CNd. 317; 324; UdA. 3; Mvu. I, 358	Sn. 57	Ap. 10; CNd. 384f; 387
Sn. 36	Ap. 8; CNd. 324; 331f; Mvu. I, 358; Divy. 294; 金色王 389b; 大婆沙 126. 660a	Sn. 58	Ap. 10f; CNd. 387; 389
Sn. 37	Ap. 8; CNd. 332; 335; Mvu. I, 359	Sn. 59	Ap. 11; CNd. 389; 391
Sn. 38	Ap. 8; CNd. 335; 338	Sn. 60	Ap. 11; CNd. 391; 393; 胖支因緣 下 478b
Sn. 39	Ap. 8; CNd. 338; 341; UdA. 163	Sn. 61	Ap. 11; CNd. 393; 395
Sn. 40	Ap. 8; CNd. 341; 342	Sn. 62	Ap. 11; CNd. 395; 396f
Sn. 41	Ap. 8f; CNd. 342f; 344	Sn. 63	Ap. 11; CNd. 397; 405
Sn. 42	Ap. 9; CNd. 345; 353; DA. 207; MA. II, 213	Sn. 64	Ap. 11; CNd. 405; 406; Mvu. I, 358
Sn. 43	Ap. 9; CNd. 353; 354	Sn. 65	Ap. 11; CNd. 406; 410
Sn. 44	Ap. 9; CNd. 354; 356	Sn. 66	Ap. 11; CNd. 410; 412
		Sn. 67	Ap. 12; CNd. 412; 413
		Sn. 68	Ap. 12; CNd. 413; 416; Mvu. I, 357.
		Sn. 69	Ap. 12; CNd. 416f; 418
		Sn. 70	Ap. 12; CNd. 418; 421

1. 經對照表

本表の左側は Suttanipāta の第何品第何經の經名を示し、右側はそれに相當する經典を擧ぐ。而して相當經中に於て括弧中にあるは一部分等しきか類似せるかの何れかなることを示し、然らざるものは全く或は殆んど一致せるか、極めて類似せるか、又は同源にして大體一致せるものなることを示す。

Suttanipāta	相當經	
I, 1, Uraga-s.	(出曜 29) (法集 4)	III, 4, Sundarikabhā- (S. VII, 9, Sundarika) radvāja-s.
I, 3, Khaggavisāna-s.	Ap. p. 8 ff.	III, 5, Māgha-s. (雜阿 1159) (別雜 82)
I, 4, Kasibhāradvāja-s.	(S. VII, 2, 1. Kāsi) (雜阿 98) (別雜 264)	III, 6, Sabhiya-s. Mvu. III, p. 394 ff.; 本行集 39
I, 5, Cunda-s.	長阿遊行; 佛般泥洹; 般泥洹; 有部雜事 37	III, 7, Sela-s. M. 92, Sela-s. (V. I, p. 245 f.) (Thag. 819-841) (增一含 46-47)
I, 6, Parābhava-s.	雜阿 1279; 別雜 277	III, 9, Vāsetṭha-s. M. 98, Vāsetṭha-s. (D. I, p. 235 f.) (Dhp. 396-423) (出曜 29-30) (法集 4)
I, 7, Vasala-s.	雜阿 102; 別雜 268	III, 10, Kokāliya-s. (S. VI, 1, 7, Kokālika) (雜阿 1278) (別雜 276) (增一含 12)
I, 8, Metta-s.	Khp. 9, Metta-s.	III, 11, Nālaka-s. Mvu. III, p. 386 ff.; 本行集 38
I, 9, Hemavata-s.	雜阿 1329; 別雜 328 經; 義足下; 立世毘曇 1	III, 12, Dvayatānu- (S. XXXV, 136, Agayha) passana-s.
I, 10, Ājavaka-s.	S. X, 12, Ājavāra; 雜阿 1326; 別雜 325; 有部律 47	IV, 1, Kāma-s. 義足上, 桀貪王; 瑜伽 19
I, 11, Vijaya-s.	(中阿 139 息止道)	IV, 2, Guhaṭṭhaka-s. 義足上, 優填王
II, 1, Ratana-s.	Khp. 6, Ratana-s.; Mvu. I, p. 290 ff.	IV, 3, Dutṭhaṭṭhaka-s. 義足上, 須陀利
II, 3, Hiri-s.	J. III, p. 196; (雜阿 978) (別雜 212)	IV, 4, Sudhaṭṭhaka-s. 義足上, 摩竭梵志
II, 4, Mahāmaṅgalas.	Khp. 5, Maṅgala-s.; (法句下, 吉祥品) (法句喻 4 吉祥品)	IV, 5, Paramaṭṭhaka-s. 義足上, 鏡面王
II, 5, Sūciroma-s.	S. X, 3, Sūciromo; 雜阿 1324	IV, 6, Jarā-s. 義足上, 老少俱死
II, 7, Brāhmaṇadhamika-s.	(中阿 156 梵波羅延)	IV, 7, Tissametteyya-s. 義足上, 彌勒難
II, 9, Kīthīla-s.	本行集 38	IV, 8, Pasūra-s. 義足上, 勇駒梵志; (智度 18)
II, 12, VaṅgaIsa-s.	(Thag. 1263-1278) 雜阿 1221	IV, 9, Māgandiyā-s. 義足上, 麻因提女
II, 14, Dhammadika-s.	(舍利弗毘曇 6)	IV, 10, Purābheda-s. 義足下, 子父共會
III, 1, Pabbajjā-s.	Mvu. II, p. 198 f; 四分 31; 有部破僧事 4	IV, 11, Kalahavivā- (S. XXXV, 136, Agayha) das.
III, 2, Padhāna-s.	Mvu. II, p. 238 ff; Lal. p. 261 ff.; 本行集 25; 大莊嚴 7; (智度 5)	IV, 12, Cūḍaviyūha-s. 義足下, 猛觀梵志
III, 3, Subhāsita-s.	S. VIII, 5, Subhāsita; (Thag. 1227-	IV, 13, Mahāviyūha-s. 義足下, 法觀梵志
		IV, 14, Tuvaṭṭaka-s. 義足下, 宮勒梵志
		IV, 15, Attadaṇḍa-s. 義足下, 維摩勒王
		IV, 16, Sāriputta-s. 義足下, 蓮花色比丘尼
		V, 2, Ajitamāpanavapucchā

經集對照表

漢字索隸(羅一論)

			龍象	nāga	191, 199
			靈鷲山	Gijjhakūṭa	177, 486
			吝；吝嗇者	kadariya	134 ; 48
			輪迴	samsāra	190, 275, 281
					レ
羅喉	Rāhu	(阿修羅) 168, 181	令愚	mohana	301
羅喉羅	Rāhula	(比丘) 126	冷酷	dāruṇa	91
羅喉羅經	Rāhula-sutta	124	劣者	maga	340
羅刹	rakkha	115			
樂	rati ; sukha	101 ; 22, 279			
藍毘尼	Lumbineyya	(園) 259	老	jarā ; jaras 115, 220, 275, 398 ; 313, 427	
離愛者	vitatañha	32	老經	Jarā-sutta	313
離垢者	vimala	140	六重置	cha abbiñhānāni	85
離貪	virāga	82	論客	vādin	140
了知解說	aññāvimokkha	420			
兩舌	pesuṇa ; pesuṇiya	134 ; 354			
兩足尊	dipada	530			

漢字索引(摩—欲)

摩騰	Mātaṅga	(旃陀羅子)	49	無著者	asatta	400
摩醯沙底	Māhissati	(呂)	380	無詔者	amāya	358
魔法	āṭhabbaṇa		354	無等精勤者	asamadhuṇa	262
末伽梨瞿舍羅	Makkhali-Gosāla	(外道)	186	無明	avijjā	275, 293, 384, 389, 420
曼殊沙；曼樹沙	mañjussaka	(華)	492; 493	無餘依	anupādisesa	338
慢	māna	2, 121, 126, 197, 306, 322, 430		無欲林	nibbana	508
滿足	santuṭhi		98	無兩舌者	rittapesuṇa	358
蔓果	gavipphala		89	無漏者	anāsava	376, 430
ニ				ヌ		
味	rasa		290	滅盡	khaya	82
微法	anudhamma		115	滅諦	nirodha	456
彌多求	Mettagū	(比丘)	379, 397, 428	滅沒	attha	406
彌勒	Metteyya	(比丘)	316	モ		
名	nāma		289, 337, 390	妄語	musā ; mosavajja ; musāvāda	57 ; 335, 355 ; 455, 462
名色	nāmarūpa		131, 195, 197	莫伽羅闍	Mogharājan	(比丘) 379, 424, 428
名身	nāmakāya		406	網	jāla	194
明	vijjā		59, 384	目連；目犍連	Moggallāna	437—440, 442, 443, 445, 448—454, 459, 467, 480, 481, 496, 500, 502, 506, 518, 538 ; 247
明眼者	vivāṭacakku		352	沐浴者	nhātaka	191
ム				文那	muñja	(草) 10, 158 303, 342, 410
牟尼	muni		32	聞	suta	
牟尼經	Muni-sutta		76	聞解者	sottiya	196
牟尼行	moneyya-pada		264	ヤ		
牟尼性	moneyya		174	軀	yoga	240
務	vata		324, 342	瑜伽	yogakkhemā	28, 154
無意樂者	nirāsaya		413	優者	vara	86
無有	vibhava		336	優的將來者	varāhara	86
無有想者	vibhūtasaññin		337	ニ		
無憂	asoka	(樹)	487	葉果	pattapphala	89
無憂者	asoka		225	欲	kāma ; chanda	61, 295 ; 335, 384
無依	asita		402	欲阿賴耶	kāmālāya	63
無依〔涅槃〕	anūpadhika		410	欲有	kāmabhava	400
無煙〔忿〕者	vidhuma		167	欲求	icchā	115, 337
無愧者	anottapin		48	欲經	Kāma-sutta	295
無疑者	akatharhākathin		196	欲泥	kāmapañka	360
無苦者	anigha		167	欲林	vana	508
無求者	nirāsa		167			
無間定	ānantarika-samādhi		82			
無傲慢者	appagabbha		358			
無遮會	niraggala		112, 530			
無所有〔處〕	ākiñcañña		405			
無所有者	ākiñcana		400			
無上者	anuttara		129			
無相〔三昧〕	animitta		126			
無思想者	visaññasaññin		337			
無諍論地	avivādabhūmi		345			

ヒ、ビ		覆	makkha	430
火への供養	aggihutta	92	Pokharasāti	(婆羅門) 226, 227
彼岸道品	Pārāyana-vagga	370	vibhāvin	118
彼此の聖法	Parovara-ariyadhamma	130	kodha	1, 43, 134, 197, 335, 354
非有	vibhava	332	忿なき	akkodhana
非我	niratta	332	佛寶	buddha-ratana
非家者	anāgāra	237		82, 494
非時食	vikālabhojana	144		
非想者	asaññin	337	ヘ、ベ	
卑地寫	Vedisa (地方)	380	過計	pakappana
悲	karunā; parideva	24; 314	過取	pariggaha
悲泣	parideva	121, 398	吠陀の達人	vedagū
誦誦	parūpavāda	142	別解説	pāṭimokkha
賓祇耶	Piṅgiya (比丘)	379, 425, 428		125, 352
鞞瑟	bhakti	174	ホ、ボ	
毘沙門	Vessavaṇa (天)	139, 553	補羯婆	pukkusa
毘舍	vessa; vessika; vessāyana		法	dhamma
		(種姓) 524; 116; 165	法行	dhammacariya
毘舍離	Vesāli (市)	381	法行經	Dhammacariya-sutta
白毫	unṇa	383	法句	dhamma-pada
白睡蓮地獄	Kumuda-niraya	250	法決定	dhamma-vinicchaya
白蓮地獄	Puṇḍarīka-niraya	250	法主	dhammassāmin
頻毘娑羅	Bimbisāra (王)	148	法隨法	dhammānudhamma
			法の察悟者	sahkhāta-dhamma
			法寶	dhamma-ratana
			放逸; 放逸者	82, 494
			寶經	pamāda
不可意	asāta	335, 336		389, 20
不審	avihīrṣā	109	鷲耆舍	Ratana-sutta
不機縫	appaccaya	187		81
不苦不樂	adukkhamasukha	280	鷲耆舍經	Vaṇgīsa (比丘)
不違	anāgāmitā	272		127, 162
不虛妄法	amosadhamma	289	菩伽	Vaṇgīsa-sutta
不近著者	anūpaya	345	坊主	Bhoga (市)
不正〔業〕者	visama	90	暴言	munḍaka
不淨〔想〕	asubha	126	暴流	kakkassa
不善根	akusala-mūla	5	凡俗	ogha
不動; 不動者	aneja	418; 242	梵行	puthujjana
不動搖者	avikampin	361	梵住	brahmacariya
不樂	arati	101, 157	梵天	brahma-vihāra
不蘭迦葉	Pūraṇa-Kassap (外道)	186	梵天界	Brahmā
不和	bheda	94		184, 244, 458
布沙羅	Posāla (婆羅門)	379, 422, 428	摩伽	Brahma-loka
怖畏	ābhīru	157	摩伽經	(學童) 184, 424
怖勸者	tasa	53	摩竭陀	Māgha-sutta
普行者	paribbājaka	186, 196	摩企	(經) 177
普眼者	samantacakku	128, 402, 430	摩健地耶	Magadha (國) 26, 148, 381, 427
富那迦	Puṇṇaka (婆羅門)	379, 394, 428	摩健地耶經	Mahi (河) 7
			摩闍利	Māgandiya (婆羅門) 325
			摩闍利	Māgandiya-sutta
			摩闍利	Mātali (天) 324
			摩闍利	504

兜羅〔綿〕	tūla	224	鶴舌	jappa	121
塗塵	jalla	92	忍辱; 忍	khanti	69, 98, 109, 345
刀提耶	Todeyya (婆羅門) 226, 379, 412, 428				
東園鹿母高堂	Pubbārāma-Migāramātu	272			
等正覺者	sammāsambuddha	198			
等持	samāhita	82	怒	kopa	187
闡淨經	Kalahavivāda-sutta	334			
貪, 貪欲	rāga	1, 24; 101, 180			
貪, 貪欲	lobha	197; 4, 354			
貪愛	sineha	22	涅槃	nibbāna	289
貪求	giddhi, gedha	121; 359	涅槃句	nibbāna-pada	74
貪染	rāga	4	熱望	jappanā	359
貪路	rāgapatha	136	脅憤(ねむたさ)	tandi	354
度多迦	Dhotaka (比丘) 379, 401, 428		念	sati	28, 384, 390, 420, 433
勤轉	iñjita	285, 293			
勤貪ならず	alola	8			
勤煩	calita; phandita	286; 293			
道跡	magga	456, 495			
彙彌迦	Dhammadika (優婆塞)	138	惱害	vyārosana	53
彙彌迦經	Dhammadika-sutta	138	惱害者	rasaka	48

ナ

那羅迦	Nālaka	(仙人)	263
那羅迦經	Nālaka-sutta		258
那羅陀	Nārada-Pabbata	(天)	199
那羅陀	Nālandā	(邑)	467
南山	Dakkhinā-giri	(國)	26
南路	Dakkhinā-patha		370
軟食	bhojanīya		214
難陀	Nanda	(比丘) 379, 407, 428	

ニ

二種隨觀經	Dvayatānupassanā-sutta	272			
二生	dija	43	八輩四雙	atṭha puggalā cattāri yugāni	499
尼犍若提子	Nigaṇṭha-Nātaputta (外道)	186	鉢婆多	Pabbata (天)	199
尼拘盧陀劫波	Nigrodhakappa (比丘)	127	反抗心	paccutṭhāpana	91
尼拘盧陀劫波經	Nigrodhakappa-sutta	132	馬勒	anukkama	235
尼羅部陀	Nirabbuda (地獄)	249, 251	婆私吒	Vāsetṭha (學童)	226
尼連禪	Nerañjara (河)	154	婆私吒經	Vāsetṭha-sutta	226
日種	Ādicca-bandhu	19, 152, 198, 351, 496	婆那	Vana (市)	380
柔軟	maddava	92, 109	婆羅闍闍	Bhāradvāja (學童)	226
柔和	soracca; sovacassatā	28, 109; 98	婆羅門	brāhmaṇa	191, 349, 400, 529
柔軟者	sorata	189	婆羅門法經	Brāhmaṇapadhammika-sutta	106
如者	tādin	546	婆和利	Bāvari (婆羅門)	372
如真	tathiyā	340	跋陀羅浮陀	Bhadravudha (比丘)	379, 417, 428, 434
如來	tathāgata	212	薄迦利	Vakkali (比丘)	434

— (9) —

漢字索隱(善—兜)

善逝	sugata	476, 499	大桑流	mahogha	2, 359
善淨慧者	sahsuddhapañña	340	大品	Mahā-vagga	147
善法	Suddhamma	(天)	大雄	mahāvīra	199, 213
善法堂	Suddhamma	(帝釋宮)	第一義	paramattha	22
善務者	subbata		第一眼	cakkhuñ paramañ	129
禪	jhāna		第一八偈經	Paramañthaka-sutta	310
			第八の有	bhava atthama	84
			第七の仙人; 第七仙	isi-sattama	131; 464
			斷食	anāsakatta	92
ヲ					
祖神	pitar	114	チ, チ		
粗皮	Khara	(夜叉)	知恩	kataññutā	93
粗暴	lūkhasa		知解者	pajāna	341
相	lakkhaṇa		知者	vidvant	360
相形	liṅga		知覺者	varaññu	86
相好	lakkhaṇa		治療	tikicchā	354
想	saññā		癡	moha	24, 430
想想者	saññasaññin		偷盜	theyya	455, 462
僧寶	sarṇgha-ratana	83, 494	蓋度	pārichatta; pāricchattaka	21; 491
聽慧者	nipuna; vicakkhaṇa	118; 222	畫度樹品	Pārichattaka-vagga	472
悚懼	saññvega		頂	muddha	373, 378
觸	phassa	278, 290, 293, 302, 336, 337	頂墮	muddhapāta	373, 378
孫陀利迦	Sundarikā	(河)	頂墮	muddhādhipātini	384
孫陀利迦婆羅墮闇	Sundarika-bhāradhvāja	(婆羅門)	頭迴の實	timbarūsaka	481
ゾーマ祭	vājapeyya		地居天	bhummā	550
增盛	ussada		著	sañga	194
			調御	dama	69, 244
			調御者	danta	189, 190
タ, タ					
他法者	paradhammika	366	ツ		
多聞	bāhusacca	97	通曉者	kovida	236
多聞者	bahussuta	117			
多梨車	Tārakkha	(婆羅門)	テ		
帝釋	Inda	115, 129, 244, 258, 458, 549	定立者	thāvara	53
帝須	Tissa	(比丘)	適順	anurodha	134
帝須彌勒	Tissametteyya	(比丘)	擲捧祭	sammāpāsa	112
帝須彌勒經	Tissametteyya-sutta		天界	sagga; devaloka	500; 543
帝柱	indakhila		天宮事經	Vimāna-vatthu	437
蹄	sacca	28, 68, 293	天變地異判斷	uppāda	133
蛇經	Urāga-sutta	1	詔; 詔曲	māyā	91, 197, 306; 121
陀尼耶	Dhaniya	(牧牛者)	轉輪聖王	cakkavatti rājā	207, 210, 496
陀尼耶經	Dhaniya-sutta	7	顛倒〔想〕	vipallāsa	111
蛇品	Urāga-vagga	1			
駄都	dhātu	504			
墮處	vinipāta	104			
大吉祥經	Mahāmañgala-sutta	96			
大車品	Mahāratha-vagga	510			
大集積經	Mahāvīñūha-sutta	344			
大藏	mahāmoha	275			
大人相	mahāpurisa-lakkhaṇa	206, 209	兜率	Tusita	(天)
					363

漢字索彙(信一書)

信	saddhā	27, 125, 384, 433	尊	vitakka	367, 368, 420
針毛	Sūcīloma	(夜叉)	苦者	dukkhasea	198
針毛〔夜叉〕經	Sūcīloma-sutta		不樂者	antakara	
深紅品	Mañjeshṭaka-vagga				
眞慧	mantā	351			
眞言	manta	370, 378	須闍	Sujā	(天女) 384
眞理	sacca	293	隨觀	anupassanā	272
親近沙門	samaṇḍopāsana	269	隨知者	anuvidita	194
親願	santhava	76	隨貪	anugiddha	302
瞋; 罣恚	dosa	24; 4, 22, 101, 180	隨法	yathānudhamma	365
瞋恚の想	paṭīgha-saññā	53	隨煩惱	upakkilesa	22
瞋怒	dosa; duṭṭha	121; 304	隨眠	anusaya	5, 126, 135, 200
瞋怒八偈經	Duṭṭhaṭṭhaka-sutta (經)	304			
自光	Sayaṇhpabha	(天)			
自光者	Sayaṇhpabha				
自在天王	Vasavattin	544	世間解	lokavidū	500
自道	sakāyana	347	世間導師; 世主	lokanātha	546; 376
自內證の法	sakkhi-dhamma	352	世俗	sammuti	345
事火婆羅門	Aggikabhāradvāja (婆羅門)	43	施主	dānapati	178
慈	mettā	24	施優者	varada	86
慈經	Metta-Sutta	52	施羅	Sela	(婆羅門) 206
慈無量心	Metta-cittāḥ appamāṇaḥ	184	施羅經	Sela-sutta	203
食	āhāra	283, 284, 293	制多毘耶	Setavyā	(邑) 380
食不足	anasana	115	征勝經	Vijaya-sutta	71
實語者	saccavādin	20	征勝者	abhibhu	196
邪曲	kujja	90	星辰	nakkhatta	215
邪行	aticāra	455, 462	雪山	Hemavata	(夜叉) 55
邪命〔外學〕	ājivika	139	雪山〔夜叉〕經	Hemavata-sutta	55
寂句; 寂靜〔涅槃〕句	santipada	351; 76	殺生	pāṇātipāta	451, 455, 462
寂定	nibbuti	83	刺帝利	khattiya	151, 210, 524
寂靜句	santa-pada	52	占聲	viruta	354
寂靜者	santa; upasanta	167; 332	占星	nakkhatta	354
寂滅者	nibbuta	225	占相	lakkhaṇa	133, 354
闍都乾耳	Jatukapñi (比丘)	379, 416, 428	占夢; 梦判斷	supina	354; 133
受	vedanā; vedaniyā	279; 293	洗浴者	nahātaka	242
獸皮	kharājina	92	宣說者	akkhātar	60
淳陀	Cunda (鍛工師)	32	旃陀羅	cāṇḍāla	(種姓) 524
淳陀經	Cunda-sutta	32	船經	Nāvā-sutta	117
順世論	lokāyata	206	箇經	Salla-sutta	219
定	samādhi; samāhita	384; 499	箭〔毒〕の治癒者	sallakatta	213
除遣者	dhona	305	踐民	vasalaka	43
除闇者	tamonuda	430	踐民經	Vasala-sutta	42
淨觀者	suddhānupassīn	307	踐劣慧者	parihīṇapaññī	340
淨說者	suddhihīhvada	349	前行たる法思擇	dhammatakka-purejava	420
淨八偈經	Suddhaṭṭhaka-sutta	307	善慧者	sumedha	167, 418
淨飯	Suddhodana (王)	260	善巧者	kusala	408
神變行	iddhābhisaṅkhāra	208	善者	kusala	340
神變月	pāṭīhāriya-pakkha	145, 461	善趣	sugati	474
迅速經	Tuvaṭaka-sutta	351	善說經	Subhāsita-sutta (經)	161

—(7)—

漢字索隱（薩——身）

薩尼耶	Sabhiya	(普行者)	186	耆摩多定	samatha-samādhi	457
薩尼耶經	Sabhiya-sutta		186	釋迦	Sākiya (族、國)	152
三十三天	devā tidasā	458, 461, 495, 504		釋迦牟尼	Sakyā-muni	82
三十三天衆	tidasagapā	258		取	upādāna	132, 134, 281, 282, 293
三十二大人相	dvattīrha-mahāpurisa-lakkhaṇa	207		取愛	ādāna-taṇhā	418
三吠陀	ti-veda	206		首陀	sudda (種姓)	116
三吠陀學者	tevijja	227		趣至	parāyana	423
數若耶毘羅弗多	Sañjaya-Belatthiputta (外道)	186		宗祖	tittikara	186
在家者	gabattha; gihin	144, 178, 237; 146		洲渚	dīpa	414
罪惡	āgu	192		臭穢經	Āmagandha-sutta	89
憇忍	ludda	91		臭蔓草	pūtilata	11
慚	hirī	27, 94		執著	sarhga; nivesana	360; 399
慚經	Hiri-sutta	94		執著論者	nivissavādin	349
慚慎者	hirinisedha	168		執取	upādāna; ugghita	61; 416
シ、ジ						
止	samatha	22		執杖經	Attadaṇḍa-sutta	357
支那豆	cinaka	89		習誦	ajjhena	90
四恩趣	cattāro apāyā	85		終燒者	antakara	188
四果	cattāro phalā	486, 499		集蹄	samudaya	456, 495
四向	cattāro patippannā	486, 499		愁	soka	314, 398
四雙	cattāri yugāni	83		出家經	Pabbajā-sutta (經)	147
四大州	cattāro dipā	497		出離	nekhamma	152, 416
司祭者	porohicca	234		諸行	sathkhārā	293
死	maraṇa	220		小品	Cūla-vagga	81
死前經	Purābheda-sutta	329		小集積經	Cūlaviyūha-sutta	339
思擇	takka	411, 431		正覺	sambodhi	365
師利摩	Sirimā (侍女)	456		正覺者	sambuddha	159
斯尼耶頻毘婆羅	Seniya-Bimbisāra (王)	206		正行	samācāra	120
色	rūpa	289, 290, 337, 390, 426		正普行經	Sammāparibbājaniya-sutta	133
識	vīññāna	277, 278, 293, 399, 406, 421		生	jāti	275, 398
識者	vīññū	118		生聞	Jāṇussoṇi (婆羅門)	226
識住	vīññāṇatthiti	423		姓	gotta	39, 378
七岳	Sātāgira (夜叉)	55		青睡蓮地獄	Sogandhika-niraya	250
七寶	satta-ratanāni	207		青蓮地獄	Uppalaka-niraya	250
質直	ajjava	92, 109		笑喜	hassa	121
嫉妬	usuyyā	91		商伽	Cakī (婆羅門)	226
沙枳多	Sāketa (市)	380, 468		勝存者	bhavant	35
沙門	samapa	191		聖偈	chandas	215
車匿	Channa (御者)	545		聖者	ariya	196
舍衛	Sāvatthī (市)			精勤	padhāna	153
	35, 42, 96, 106, 138, 161, 247, 272, 376, 380, 498			精勤經	Padhāna-sutta (經)	153
舍利弗	Sāriputta (比丘)	212, 247, 363		精進	viriya	28, 384
舍利弗經	Sāriputta-sutta	363		障解脫	Namuci (惡魔)	154
娑婆〔世界〕主	Sahampati	248		障礙	papafica	3, 195, 337, 351
娑毘底	Savittī (吠陀の讚歌)	116, 215		饜	sadda	290
捨	cāga	68		心解脫	cetovimutti	273
捨	upekkhā	22, 24, 368, 420		辛頭	Sindhu (地方)	551
捨斷一切苦者	sabbadukkhapahina	430		身見	sakkāya-diṭṭhi	84
				身至念	kāyagatā sati	125
				身毛堅立	lomaharhsa	101

窟宅	oka	327, 418	古傳說	itihāsa	206
窟八偈經	Guhatthaka-sutta	301	香	gandha	290
求生者	sambhāvesin	53	虛僞	tuccha	341
具慧者	paññāvānt; mutimant	413; 340	虛妄	musā	341
具行者	caraṇavānt	196	誇大	katthitar	355
具眼者	cakhhumant	198, 216, 363, 451	行為	kamma	243
具精進者	viriyavānt	194	劫波	Kappa	(比丘) 379, 414, 428
紅蓮地獄	Paduma-niraya	248, 250, 255	劫波師	Kappāyana	131
愚者	bāla	340	後悔	kukkucciya; kukkucca	368; 420
愚癡	moha	4, 180	高慧者	anomapañña	130
ヶ					
化樂	Nimmāna-ratin (天)	463, 484	高貴者	ājāniya	168
假俗	sammuti	349	高精進者	anomavirya	130
戲	khiḍḍā	354	耕田婆羅陀闍經	Kasibhāradvāja (婆羅門)	26
醜摩迦	Hemaka (婆羅門)	379, 411, 428	耕田婆羅陀闍經	Kasibhāradvāja-sutta	26
繫縛	gantha; gathita	349; 358	硬食	khādaniya	214
計度	kappa	418	鉤引者	ākāsa	359
計度者	kappin	413	廣慧者	bhūripañña	129
敬重	gārava	98	廣言者	puthuvacana	355
難厄耶	Kepiya (結髮苦行者)	204	廣長舌〔相〕	pahūta-jivhatā	208
瞽瘡	jāgarīyā	354	廣博の慧	pahūtapañña	133
決定	vinicchaya	335	瞑野	Ājavī (國)	65
缺點	randha	94	瞑野	Ājavaka (夜叉)	65
結	saṃhyojanā	24, 171, 279	瞑野〔夜叉〕經	Ājavaka-sutta	65
結, 結縛	bandhana	11, 192	黑妙	Kaṇhasiri (仙)	261
結髮	jaṭa	92	近著者	upaya	306
結髮〔苦行者〕	jaṭila	204	昏沈	thina	420
結髮仙人	jaṭin	261	根	indriya	21
結縛の縁	saṃhyojanīya	134	根果	mūla-phala	89
見	diṭṭha; diṭṭhigata	303, 342, 410; 324	惛眠	thina-middha	157
見〔涅槃〕句者	diṭṭha-pada	85	牛王	usabha	242
乾闥婆	gandhabba	241, 549	五蓋	pañcāvaraṇāni	5, 22
慳	macchara; macchariya	314; 354	五指香印	gandha-pañcaṅgulika	480
慳貪	macchera	500	五者の最勝	pañca-setṭha	131
慳吝	veviccha	358, 389	悟達者	pāragū	60
貞善者	bhadanta	352	語彙	nigaṇḍu	206
謙虛の意	nicamanas	93	語路	vādapatha	407
謙讓	nivāta	98	剛情	thambha	91
獻供者	yājaka; yajamāna	115; 178	傲慢	pāgabbhiya	355
獻人祭	purisamedha	112	業	kamma	120, 243
獻馬祭	assamedha	112	嚴飾	savibhūsana	354
外學	titthiya	139			
解說者	pavattar	60	サ, ザ		
解說	vimutti	24	祭官	yājaka	234
解脫者	vimutta	131, 196	祭祀	āhuti	92
激情	sārambha	121	犀角經	Khaggavisāṇa-sutta	13
			最勝者	pavara	242
			最上決定性	paramaniyāmatā	457
			最上者	mukha	215
コ, ゴ					

漢字索引 (應——龜)

應施者	dakkhiṇeyya	83, 173	飢渴	khuppipāsā	157	
音韻語源	akkhara	206	耆宿	mahallaka	187	
飲酒	majjapāna	462, 455	喜	muditā : nandi ; pīti	24 ; 63, 399, 418, 420 ; 433	
飲酒者	majjapa	144	詭詐；詭詐者	kuhana ; kuhuka	121 ; 373	
陰馬藏〔相〕	kosohita vatthaguyha	208	毀譽	nindā	345	
遠離	viveka	301, 351	毀傷〔語〕	vebhūtiya	57	
遠離法	vivekadhamma	402	棄除	panūdanana	420	
力, ガ						
可意	sāta	335, 336	綺語	sampha	57	
加害	vihesa	91	吉凶判斷	mañgala	133	
荷葉	pokkhara	142	穢(きび)	sāmāka	89	
迦葉	Kassapa	(佛)	吸引	ācamā	359	
迦葉	Kassapa	(比丘)	經集	Sutta-Nipāta	1	
迦毘羅衛	Kapilavatthu	(市)	誰；誰者	saṭha	48 ; 355	
迦蘭陀竹林園	Vejuvana-Kalandakanivāpa	186	惱	mada	91	
迦陵頻伽	karavīka	(鳥)	憍薩羅	Kosala	(國)	152, 164
過患	ādInava	489	憍貧彌	Kosambi	(國)	380
過慢	atimāna	322	禁制	sañhyama	244	
戒	siṭṭa	109, 120, 324, 340, 499	紙樹給孤獨園	Jetavana Anāthapiṇḍikassa ārāma	35, 42, 96, 106, 138, 161, 247	
戒禁〔取〕	siṭabbata	84	義品	Āṭhaka-Vagga	295	
懷妊術	gabbhakarapa	354	疑	vicikicchā	157	
覺	muta	342, 410	疑惑	kathāñkatha	5, 135, 335	
覺慧者	muṭṭimant	21, 119, 141	儀軌	keṭubha	206	
覺者	buddha	430	犧牲	yañña	92	
活命	anujivita	324	議論者	vadāna	341	
渴愛	tañhā	2, 131, 157, 280, 281, 293, 418, 420	行	sañkhāra	276	
甘蔗	Okkāka	(族)	行	caraṇa	59	
甘蔗〔王〕	Okkāka	524	行處	gocara	104	
甘露	amata	112, 374	ヲ, グ			
完全智	aññā	272	拘迦利耶	Kokāliya	(比丘)	247
噉背肉	piṭṭhimāñsika	91	拘迦利耶經	Kokāliya-sutta	247	
歡喜	Nandana	(園)	拘尸那羅	Kusinārā	(市)	380
觀慧者	vipassin	130	垢	mala	430	
我	attan	332	苦	dukkha	22, 272, 293	
我執	mamāyita	399	苦行	tapas	27, 109, 244	
伽那	gana	502	苦諦	dukkha	456, 495	
伽耶	Gayā	(村)	苦滅諦	dukkhanirodha	495	
何戒經	Kirhīlla-sutta	120	俱生眼者	sahājanetta	416	
學處	sikkhāpada	462	恐怖	bherava	372	
學宣	māṇava	177	鳩槃羅	Kuvera	(天)	139
ヰ, オ						
危險調伏	parissayavinyaya	352	鳩摩羅迦葉	Kumārakassapa	(比丘)	554
季節の荒行	utūpasevana	92	瞿曇婆利	Godhāvari	(河)	371
起立經	Uttihāna-sutta	122	瞿曇	Gotama	(佛)	160, 204, 455
鬼神	bhūta	81	瞿那墮	Gonaddha	(邑)	330
			空無見者	natthikadiṭṭhi	90	
			窟	guhā	301	

漢字索隱

ア	阿訶訶地獄	Ahaha-niraya	250	異門	añña-pariyāya	274
	阿耆多	Ajita (婆羅門)	379, 381, 382, 388, 428	一生	ekaja	43
	阿耆多翅舍欽婆羅	Ajita-Kesakambali (外道)	186	一茅	Ekanālā	(村) 26
	阿私陀仙	Asita-isi	258, 260	蛭	methuna	317
	阿修羅	asura	115, 258	ウ		
	阿闍梨	acariya	227	有	bhava	63, 324, 332, 336
	阿攝迦	Assaka	(地名)	有依者	sopadhika	307
	阿吒吒地獄	Aṭṭa-niraya	250	有慧者	medhāvin	236
	阿波那	Āpaṇa	(町)	有學	sekha	367
	阿婆婆地獄	Ababa-niraya	249	有行者	carapavant	197
	阿浮陀地獄	Abbuda-niraya	249	有眼者	cakkhumant	147, 213
	阿羅漢	arahant	198, 204, 533	有想解脫	saññāvimokkha	405
	阿邏迦	Ajaka	(地名)	有念者	satimant	368
	阿邏毘毘曇	Ājavi-Gotama	(比丘)	有餘	saupādisesa	131
	阿賴耶	ālaya	196, 238	憂	dohanassa	420
	愛語	piya-vāca	94	優禪尼	Ujjenī	(國) 380
	愛潤	sineha; sneha	76; 359	優陀耶	Udaya	(比丘) 379, 419, 428
	愛欲	kāmacchanda	420	優婁華	udumbara	508
	惡戒	dussila	91	優波私箋	Upasiva	(丘比) 379, 404, 428
	惡口	khīpavyappatha	57	優婆夷	upāsikā	451
	惡作	kukkucca	29, 353	優多羅	Uttarā	(優婆夷) 455
	惡貪	lobhapāpa	358	受け賣りの説	itihihta	411
	惡欲者	pāpiccha	48	エ		
	離婬	ārambha	282, 293	依	upadhi	12, 134, 293
	壓制者	niggāhaka	44	依止	nissayatā	332
イ	已生者	bhūta	53	依著者	upanissata: pasuta	338; 20
	伊車能伽羅	Icchānāmkala	(村)	慧	paññā	27, 390, 499
	伊車能伽羅森	Icchānāmkala-vanasanḍa	(森)	慧解說	paññāvimutti	273
	伊羅婆那	Erāvaṇa	(龍王)	似而非沙門		43
	威儀	iriyāpatha	141	越度一切有者	sabbabhavātivatta	430
	椅子品	Pīṭha-vagga	437	厭離	nibbidā	125
	意	manas; mānasa	27, 61, 391, 433; 21	圓頭	muṇḍiya	92
	意樂	āśaya	368	聞浮林	Jambusaṇḍa	210
	意樂者	āśasāna	413	オ		
	異學徒	aññatitthiya	201	汚濁	kasāva	121
	異道	virodha	134	淤泥	pañka	196
	異熟	vipāka	243	王舍	Rājagaha	(市) 148, 177, 469
	異端說	osaranya	198	毒蠍多羅波	Anguttarāpa	(國) 203

發音索隱(タ—エ)

ターフ	tāla	(樹)	498				
タンキタ	Tan̄kita	(石床)	100				
チ, チ							
チャッタラー	Cittalatā	(國) 459, 490, 531, 538					
チャッタ	Chatta	(青年)	516				
ヂーアティラサ	jotirasa	(寶石)	552				
チャンブ	jambu	(樹) 443, 488, 498					
チ, テ							
ティラカ	tilaka	(樹)	443				
ティンバル	timbaru	(果樹)	40				
ディングラカ	dīngulaka		89				
ナ							
ナーリケーラ	nālikera	(樹)	498				
ナリニ	Nalini	(戲場)	553				
ナンダー	Nandā	(女)	460, 509				
ナンディヤ	Nandiya	(優婆塞)	512				
ヌ, バ							
バーヴリー	Bāvarī	(婆羅門)	372				
バッダ	Bhaddā	(女)	484				
バッディッティカ	Bhadditthikā	(優婆夷)	465				
バンディカ	bhaṇḍikā	(華)	487				
バーテリー	pāṭalī	(樹)	443, 488				
バーダバ	pāḍapa	(樹)	507				
バーナーシ	Pāyāsi	(王) 537, 550, 553					
バールサカ	Phārūsaka	(果實)	481				
バサンシヤ	pasarhiṣya	(樂器)	460				
バナサ	panasa	(樹)	498				
バヅラー	Pavarā	(天女)	477				
ビ, ビ							
ビーマ	bhīma	(樂器)	460, 509				
ビヤング	piyāṅgu	(植)	515				
ブ							
ブッサ	Phussa	(星)	515				
ブリングダ	Purindada	(=帝釋)	526, 549				
ブンダリーカ	Punḍarīkā	(女)	460, 509				
ベ							
				ベンナカタ	Peñṇakata	(町)	500
				ボッカラ	pokkhara	(樂器)	460, 509
ホ							
				マータンガ	Mātaṅga	(施陀羅子)	50
				マガブン	Maghavan	(天)	504
				マサカサーラ	Masakkasāra	(帝釋天宮)	557
ミ							
				ミッサケーシー	Missakesi	(女)	460, 509
ム							
				ムドゥカーブディー	Mudukāvadi	(女)	460, 509
ヤ							
				ヤスッタラー	Yasuttarā	(帝釋妃)	495
ヨ							
				ヨーティカ	Yothikā	(華)	487
ラ							
				ラクマー	Lakhumā	(優婆夷)	462
				ラター	Latā	(天女)	477
				ラッデュマーラー	Rajjumālā		507
				ラブヂャ	labuja	(果樹)	488
レ							
				レーブタ	Revata	(比丘)	485
				レーブティー	Revati	(天女)	511
ヴ							
				ヴーサブ	Vāsava	(=帝釋) 140, 526, 557	
				ヴリリー	valli	(草)	481
エ							
				エーディサ	Vedisa	卑地寫(市)	380

發音索隱

			コーシヤ	Kosiya	(=帝釋)	478	
アーランバ	ālamba	(樂器)	460, 509	サードゥーディン	sādhuvādin	(樂器)	460, 509
アソーカ	asoka	(樹)	488	サーラ	sāla	(樹)	492
アッガーラヴ	Aggājava	(廟)	127	サッティー	Sajjā	(天女)	477
アッサカ	Assaka	(王)	522	サララ	sala a	(樹)	488
アチムディー	Acchimuti	(天女)	477	サンサヤ	saṁsaya	(樂器)	509
アノーダガカ	anojakā	(華)	487	サンサブカ	Saṁsavaka	(深坑)	513
アローマー	Alomā	(天女)	496	サンババ	Sambhava	(理髮師)	556
アンダカギングダ	Andhakavinda	(村)	496, 540				
アンダカズーンフ	Andhakaveṇhu	(王)	523				
イ				シリーサ	sirIṣa	(樹)	554
インディーヴラ	indīvara	(樹)	500	シリマー	Sirimā	(侍女)	456
ウ				スター	Sutā	(天女)	477
ウダーラカ	uddälaka	(樹)	443	スチンヒター	Sucimhitā	(女)	509
ウボーサター	Upośathā	(優婆夷)	468	スチンビカ	Sucimbhikā	(女)	460
エーシカ	Esika	(國)	500	スチャータ	Sujāta	(王子)	522, 525
エニバッサー	Enipassā	(女)	460, 509	スディンナー	Sudinnā	(優婆夷)	470
エーラールカ	Ejäluka		481	スナンダー	Sunandā	(優婆夷)	460, 490, 509
ガッガマ	gaggama	(樂器)	460	スニッダー	Suniḍdā	(優婆夷)	469
ガッガラ	gaggara	(樂器)	509	スニンミタ	Sunimmita	(天)	499
ガ				スパッダー	Subhaddā	(女)	460, 484, 509
キンビラー	Kimbilā	(地名)	465	スパッサ	'uphassa	(樂器)	460, 509
ク				スマナー	Supassā	(女)	460, 509
クサカ	kusaka	(草)	488	スマーダ	Sumanā	(天女)	501
ケ				セーリッサ	Sumedha	(佛)	547
ケーヴタ	Kevaṭṭa	(?)	461	セーサブティー	Sesavatī	(嫁婦)	488
コーサーティー	kosätikī	(蔓草)	503	セーリッサ	serissa	(祭)	555
				セーリッサカ	Serissaka	(夜叉)	553
				セーリッサカ	Serissaka	(天宮)	558
				ソーナディンナー	Soḍadinnā	(女)	460, 467, 509
				ソーギーラ	Sovira	(國)	551

索

隱

南傳大藏經初刊關係者

高楠博士功績記念會纂譯

昭和十四年三月八日發行
昭和四十六年十月二十日再刊印刷
昭和四十六年十一月五日再刊發行

東京市本郷区本郷3丁目2
大藏出版株式會社

第二十四卷

代表者 文學博士 長井伯宇
文學士 池直四郎
博士 池直四郎

初版編輯者 小野玄妙

ドクターマスター

オブ

アーヴィング

ソラーラ

フ

イ

ロ

ソ

フ

イ

ツ

監修 高楠順次郎

文學博士 ドクターマスター
文學士 フィル・オブ・アーヴィング
博士 ローランド・ソラーラ

翻譯

再刊發行者 小野玄妙
再刊印刷所 株式會社 厚徳社
振替：東京一六〇五九〇番
東京都文京区目白台二丁目17番6号

初版編輯者 小野玄妙

再刊發行者 小野玄妙

再刊印刷所 株式會社 厚徳社
振替：東京一六〇五九〇番
東京都文京区目白台二丁目17番6号

初版編輯者 小野玄妙

再刊發行者 小野玄妙

再刊印刷所 株式會社 厚徳社
振替：東京一六〇五九〇番
東京都文京区目白台二丁目17番6号

發賣所 大藏出版株式會社

發行所 東京都文京区目白台二丁目17番6号
大藏出版株式會社内

振替：東京一六〇五九〇番
東京都文京区目白台二丁目17番6号

出版委員

編集委員

相談役

宮中小王松和望清長
本野野生本泉月水宗清
正義一泰得桓恭泰

主事
尊照郎舜明成匡順造
塙渡千辻結中城坂
入邊渴直城村戸本
良模龍四令芳純
道雄祥郎聞元彦造

--	--	--	--	--

